

國立文化資產保存研究中心 策劃
中央研究院中國文哲研究所 主辦

執行編輯／黃惠禎·陳若旻
責任編輯／林瑞明·林載爵
日文編輯／河原功·清水賢一郎
主編◎彭小妍

第四卷·小說卷(Ⅰ)

楊逵全集





楊逵全集

第四卷 小說卷(I)



主編◎彭小妍

日文編輯／河原功・清水賢一郎
責任編輯／林瑞明・林載爵
執行編輯／黃惠禎・陳若旻

楊逵全集 第四卷·小說卷(I)

- 發行人 林金梅
出版者 國立文化資產保存研究中心籌備處
臺北市羅斯福路二段 100 號之一 25 樓
電話：(02)23677922
- 主編 彭小妍
日文編輯 河原功·清水賢一郎
責任編輯 林瑞明·林載爵
執行編輯 黃惠禎·陳若旻
辦理單位 中央研究院中國文哲研究所籌備處
臺北市南港區研究院路二段 128 號
電話：(02)27883620
- 排版印刷 天翼電腦排版印刷股份有限公司
臺北市敦化南路一段 294 號 11 樓之 5
電話：(02)27054251 (代表號)
- 感謝協助 黃武忠·李麗芳·莫素微·孟慶華
本書完成 汪淑珍·馮曉庭·許維萍·林雅萍
吳佳靜·韓杰·劉又銘·劉春銀
楊逵家屬
- 定價 平裝新臺幣 280 元 精裝新臺幣 360 元
初版 中華民國 87 年 6 月

ISBN 957-02-1630-1 (全套精裝) ISBN 957-02-1638-7 (第四卷精裝)

ISBN 957-02-1631-X (全套平裝) ISBN 957-02-1639-5 (第四卷平裝)

楊遠全集編譯委員會

召集人 彭小妍、李豐楙

顧問 塚本照和

鍾肇政

葉石濤

楊翠

編輯委員

黃英哲 (戲劇卷、翻譯卷責任編輯；翻譯校訂)

林瑞明 (小說卷責任編輯)

林載爵 (小說卷責任編輯)

陳萬益 (詩文卷、謠諺卷責任編輯)

陳芳明 (詩文卷、書信卷責任編輯)

河原功 (未定稿卷、資料卷責任編輯；日文編輯)

日文編輯 清水賢一郎 (翻譯校訂；翻譯)

譯者 葉笛

涂翠花

邱振瑞

助理編輯 黃惠禎 (資料卷責任編輯)

張季琳

陳若旻



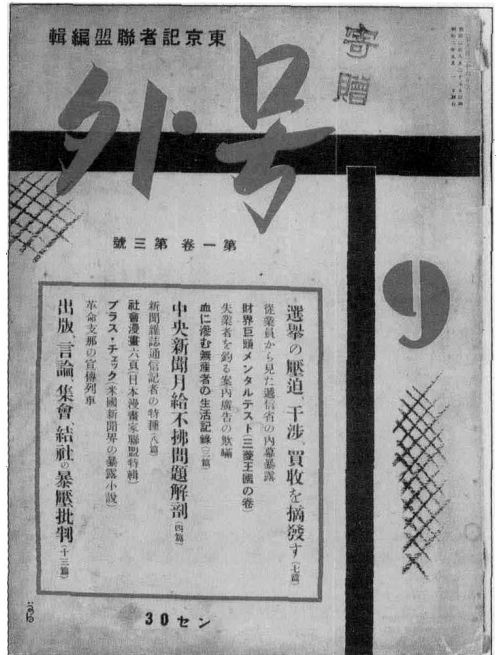
楊達於一九八三年八月廿四日移居鶯歌整理回憶錄，其間由孫女楊翠照顧其生活起居。一九八四年年底攝於鶯歌。



(右) 東京記者聯盟機關雜誌《號外》封面。楊達的處女作《自由勞動者的生活剖面——怎麼辦才不會餓死呢?》即發表於該雜誌於一九二七年九月出版之第一卷第三號，其中已展現鮮明的階級意識。

(上) 楊達(中間左三，一九二三年攝)於東京留學時接受馬克思主義的洗禮，並結識了秋田雨雀、島木健作、窪川稻子、葉山嘉樹、前田河廣一郎、德永直、貴司山治……等普羅文學家，其社會運動與文學創作亦由此時展開。

(左) 楊達於一九二七年放棄在日本大學的課業，返臺投身臺灣文化協會與農民組合的行列，領導臺灣人對抗日本殖民政府的壓榨。攝於自日返臺時。





入選小説

「新聞配達夫」

について

術化が必要であることも分るが、作者の力で今それ不可能であり、これはこのまゝ、よいところを買つてよまれ、これでは十分読者の心をとらへる力をもつてゐると思ふ。

武田麟太郎

この小説は、決して上手でない。むしろまだ小説にはなつてゐないが、それにも拘らず、非常にひきつける力をもつてゐる。アメリカ資本主義が、インヂアンを征服した當時の血なまぐさい匂ひがこゝでもハッキリわかる。

しかし、この小説が大衆のものとなるには、もつとたかい意味での藝術化、形象化が必要なければならぬのでなからうか。

中條百合子

私が採選をうけもつた十数篇の中でも、この位正確にあつたのはなかつた。感水のまつてゐるとは、もつと高い藝術化が必要であることと分るが、作者の力で今それ不可能であり、これはこのまゝ、よいところを買つてよまれ、これでは十分読者の心をとらへる力をもつてゐると思ふ。

龜井勝一郎

「新聞配達夫」は大變いいと思ひます。わるい意味での作爲がなく、やむをえなくなつて逝いたといふ直情がにじみ出てをりま

す。僕のよんだ十四篇のうちでやはり一番いいです。文章のきこちなみや、構成の未熟さもありませうが、この作品に限る限り、かき改めさせる必要なく、この未完成の美しさをそのまゝに露出した方がいいと思ひます。十分読者をひきつけるでせう。

藤森成吉

「新聞配達夫」見すこすべからざる事實とそれを裏づける情念の強み、形象化の不足の弱み。労働者農民の作品に寛大でなければならぬなら、殖民地のそれらには更に寛大でなければならぬ。

窪川 稲子

「新聞配達夫」この一篇に對する各選者の意見に私も賛成である。これはまだ充分小説になつてゐるとはいへない。たゞ作者のひたむきなものが讀者にせまつてくる。新聞屋の生活、郷里物語りに心を引かれた。最後の方幾分感情が軽くなつてゐる。

(左上) 一九三五年攝於「臺灣文藝聯盟」嘉義支部林文樹宅。「臺灣文藝聯盟」創始於一九三四年五月六日、是臺灣

籍作家の大團結、其機關雜誌《臺灣文藝》於同年十一月

開始發行、一九三六年八月廢刊。楊遠在賴和的促成下、

擔任該雜誌日文欄編輯、並有小說作品《難產》於此發表。

(左下) 《送報伙》為臺灣新文學發展史上的里程碑、

其手稿「前篇」已佚、此為僅存之手稿「後篇」首頁。

楊遠的《送報伙》首刊於

《臺灣新民報》(一九三二

年五月十九日至廿七日)、

然只刊前半部、後半部被

查禁、一九三四年十月

全文入選東京《文學評

論》第一卷第八號、榮獲

第二獎(第一獎從缺)、

為臺灣人首度進攻日本

文壇的代表作、刊載時

前頁附有六位日本作家的

評論。

序

臺灣新文學研究近年來蔚為風潮，相關文獻的整理與出版、作家遺族的訪談成爲重要課題。由於光復初期學界對臺灣文學研究的漠視，相關資料散佚過多，保存臺灣文學史料已是刻不容緩的事情。國立文化資產保存研究中心籌備處目前正積極推動文學館的籌備工作，多方蒐集文學史料，並委託學者專家進行研究與出版工作。在相關的研究文獻中，楊逵被推崇爲其中的佼佼者，成爲最受矚目的文人之一。配合目前本土研究趨勢，楊逵手稿翻譯和全集編撰有助於我們進一步了解臺灣新文學發展的軌跡。

楊逵去世以後，其大批手稿從深鎖的鐵櫃、以及數位不知名人士手中發掘出來，包括劇本、相聲腳本、童話、詩歌、散文、小說以及詞曲的創作，呈現多樣風貌，所使用的文字包括日文、臺灣話文和北平話文三種，除了部分已發表作品的原稿之外，絕大多數遺作都未曾問世。戰後四十多年的今天，排除以往政治上的顧慮，對於光復前後各種不同的文學和文化現象，已經可以採取較客觀的態度來處理。楊逵手稿的適時出現，不僅可以彌補現有文獻之不足，有助於真相的了解，而且由第一手資料的掌握，可以重新評估作家本身及其文學之價值，楊逵的精神風貌將更清楚地呈現出來，此時《楊逵全集》之整理與出版，對於史料的保存與相關研究之進行，必定有極大的幫助。

本計畫透過楊達家屬的協助，順利取得全部手稿，並承中央研究院中國文哲研究所彭小妍教授擔任召集人，組織「〈楊達全集〉編譯委員會」，策劃編譯事宜。此計劃之主要工作是中日文手稿之判讀、日文作品翻譯成中文以及各種版本之比對。在日文手稿方面，邀請河原功先生擔任判讀之工作；在翻譯方面，為確保翻譯之品質，由清水賢一郎、黃英哲先生進行多次之校訂工作，凡此種種使得編輯整理工作耗日費時，在此感謝參與本計畫的所有人員及楊達家屬的熱心支持，由於他們的付出及奉獻，才有〈楊達全集〉的問世出版。

〈楊達全集〉之出版，除了方便學者專家研究外，也是為文學普及化盡一份心力，藉由政府、學術單位和民間的共同合作，為後代子孫保存了珍貴的文化資產。

國立文化資產保存研究中心籌備處主任

林金悔

民國八十七年六月

編者序

楊逵（一九〇五—一九八五）的日文及中文手稿由其家屬交給中央研究院中國文哲所整理，自一九九七年一月起，文哲所接受國立文化資產保存研究中心籌備處委託，組織「楊逵全集」編譯委員會，進行翻譯及編輯工作，凡日文作品皆中日對照，中文作品則僅以中文排版，預計出版中日文對照十四冊，包括《戲劇卷》（上、下）、《翻譯卷》、《小說卷》五冊、《詩文卷》（上、下）、《謠諺卷》、《書信卷》、《未定稿卷》及《資料卷》。從未發表之作品列入《未定稿卷》。《資料卷》包括年譜、著作目錄、研究資料目錄、索引等。

爲了釐清楊逵作品複雜之版本問題，《楊逵全集》比對手稿資料及現存之各種版本，詳細作註，以供參考。由於熱心人士的協助，《全集》收錄了許多過去從未發表和從未結集的篇章，也有一些是亡佚多年的作品，例如一九四三年到一九四四年出版的《三國志物語》。《全集》盡量保留楊逵原作的面貌，例如《三國志物語》原書的插圖以原樣呈現；例如，日文作品中的臺灣話文和北京話文予以保留，以呈現日據時代創作語言的多樣性；例如，手稿中如有語句不通的地方，《全集》亦保留之；例如《謠諺卷》爲維持手稿橫排書寫的原貌，加上包括歌譜，所以採取西式編排，有別於《全集》其他各卷之中式排版。

楊逵享年八十歲，恰好日據時代和民國時期各四十年。在日據時代，他因參加文化協會、農民組合，

出入牢獄十次；國民政府時代，又因一九四九年一月起草〈和平宣言〉而繫獄十二年。許多作家因語文和政治風向等障礙，在戰後封筆，楊逵則堅持寫作不墜。在政局嬗遞中作家如何因應，以維持創作生命的延續？楊逵作品版本的研究，可以對這個問題提供一個珍貴的線索。此外，他不斷修改作品的習慣，也展現出作家追求完美的特性。楊逵和其同時代作家掙扎於多重政治、文化和語文環境中，〈楊逵全集〉之出版，是楊逵一生艱苦創作歷程的見證，也是向他們致最高的敬意。

彭小妍 謹誌

體例

- 一、所有篇章採用第一次發表之版本。楊逵去世後發表之作品，採用手稿；若無手稿則採用第一次發表之版本。
- 二、手稿如有完稿及殘稿，採用完稿。
- 三、手稿有類似之不同版本時，採用楊逵親筆之謄抄稿。
- 四、凡採用手稿者，保留作品原貌，其原有特殊用字保留，並做成「楊逵使用特殊用字對照表」。(此特殊用字主要就日文用法之特殊字而言，例如「圓」楊逵寫爲「円」、「預」寫爲「予」；等。) 錯別字亦保留，日文部份於錯別字右側以「(ママ)」標示，中文部份於錯別字右側以「△」標示。
- 五、凡未經校譯之原始稿件(例如列爲「附錄」之稿件)，亦保留作品原貌，其原有之簡體字、錯別字保留，錯別字之標示方式同上。
- 六、凡重新翻譯或校譯後之稿件，則簡體字改爲繁體字，錯字訂正。
- 七、無法辨認之文字以「□」在內文標示。
- 八、《全集》根據原日文版本更正者以「()」(中刮號)標示。

九、排印稿有誤，楊達手跡修訂於排印稿上者，以註釋方式說明之，楊達日文及中文作品或有文句不通之處，大多是手民之誤，《全集》以〈紳士軼話〉一篇爲例，詳細作註，供讀者參考。

十、楊達生前付梓印刷時被禁刊之篇章，採用印刷稿。

十一、楊達綠島時期有些作品第一次發表於《新生活》壁報，此類作品採用手稿。如有例外時，請參考該篇註釋。

十二、《全集》註釋分編者註及譯者註，前者以「註①」代表，後者以「註②」代表，置於篇末。非《全集》註釋之原「譯者註」或「編者按」，按其原有形式置於內文中。

十三、年代採用西曆，日據時代發表者另加註明，例如：一九三六年；昭和十一年。

十四、作品之排序按時間先後，〈模範村〉一篇例外，請參考該篇註釋。

勞動 醫 鬥 預 據 廣 鑷 願 悞 徵 萬 穀 正體字

勞働 医 斗 予 披 広 鎌 愿 怔 征 万 谷 楊逵用字

舉 會 證 後 瞞 蟲 乾 圓 絲 誕 職 殼 正體字

挙 会 証 后 瞞 虫 干 円 糸 誕 職 壳 楊逵用字

譯 餘 響 滿 劃 兩 邊 譽 榮 營 魚 第 正體字

訳 余 响 満 画 両 辺 誉 榮 營 魚 第 楊逵用字

楊逵使用特殊用字對照表

《小說卷》版本說明

一、楊達生前已發表之小說共二十六篇，其中日文二十二篇，中文四篇。

二、日文小說尙未有中文譯本者共八篇，包括〈靈籤〉（一九三四）、〈難產〉（一九三四～一九三五）、〈田園小景——摘自素描簿〉（一九三六）、〈紳士軼話〉（一九四二～一九四三）、〈三國志物語〉（一九四三～一九四四，共四卷）、〈不笑的小伙計〉（一九四四）、〈紅鼻子〉（年代不詳）、〈新神符〉（年代不詳）。〈全集〉根據第一次發表之日文版翻譯。

三、日文小說已有中文譯本者，若與第一次發表之日文版差異甚大，〈全集〉根據第一次發表之中文翻譯版校譯，其他重要之中文譯本則列爲附錄，包括〈模範村〉（一九三七）、〈無醫村〉（一九四二）、〈鵝媽媽出嫁〉（一九四二）、〈萌芽〉（一九四二）等。

四、日文小說已有中文譯本者，若與第一次發表之日文版差異不大，〈全集〉根據日文版校訂。

五、中文小說當中，〈死〉（一九三五）和〈貧農的變死〉（未發表之臺灣話文手稿，年代不詳）大同小異，〈貧農的變死〉做爲附錄。〈貧農的變死〉爲計劃中的長篇臺灣話文小說〈立志〉之第一章，其餘五章僅見標題，列入〈未定稿卷〉。

六、〈春光關不住〉(一九五七)於一九七六年改名爲〈壓不扁的玫瑰花〉。

目錄

圖片	iii
序	ix
編者序	xi
體例	xiii
楊逵使用特殊用字對照表	xv
《小說卷》版本說明	xvii
自由勞動者的生活斷面——どうすれあ餓死しねえんだ？	1
自由勞動者的生活剖面——怎麼辦才不會餓死呢？	11
新聞配達夫	19
送報伏	65

附錄·送報伙

靈籤

靈籤

難產

難產

死

附錄·貧農的變死

水牛

水牛

蕃仔雞

蕃仔雞

..... 105

..... 157

..... 165

..... 171

..... 221

..... 261

..... 317

..... 377

..... 385

..... 391

..... 401

自由労働者の生活断面

—どうすれあ餓死しねえんだ?—

蚊がブン／＼唸つて、所構はず嘴を込んで遠慮會釋なく血を吸ふ。ノミは所構はずくすぐる。僕は寝られぬ儘寝返りを打つた。屋根裏の八畳間である。其處には同僚十二人、仰向けに、俯伏して、或は横にと言ふやうに、寝ころんで居た。八人が横にならんで、その足先に四人が床を取つて居る。實は床を取つて居ると言ふほどに高尚な寝方でもなんでもない。二人に一枚の割で貸し與へられた煎餅フトンを抱へて、或は下敷にして、あんまり暑苦しいから足先に跳ね飛ばしたりして居る。まあこんな雑然たる寝方である。

大抵は眞裸になつて居る。あんまり暑いから裸になつたのは勿論ある。が殆んど皆と言つてもいい位、八割方は、只一枚の袴天と、ぼろスポンを、仕事場で汗に、泥に、セメントに汚されて、着て寝るに堪へないからである。その雑臭ブン／＼たるポロは、この部屋の内圍に掛けられて香つて居る。程度に差こそあれ、フトンも、鼠色のタ、ミも同じことだ。

北の方にある名ばかりの窓は、何の用をもなさない。今朝七時頃から一度晴れた空は、意地悪く又曇

り出したので、蒸暑いと言つたらない。立てば衝突するトタン屋根は、七月の陽光をすつかり吸収して、風通しの悪い箱のやうな部屋に貯へて居る。人蒸氣と、ポロ着、フトン、畳等から發散する雑臭とが、生ぬるい熱氣と混がらかつて、息は詰りさうである。咽んでならない。

電車の音はもう聞えない。時々ポー／＼と唸るのは自動車であらう。その圖太い音を除けば外は已に静かだ。もう可なり遅いらしいが部屋の中は先刻から大騒動である。足を、腹を、胸を、頭を、臂をガリ／＼掻く音、蚊をパタパタ打つ音、高いびきの音、蚊に刺されて、足を、手をトタンボタンさせる音、寝返りを打つた音、暑い暑いと唸る聲、溜息をつく音。

何時もの通りではあるが、特に今日は興奮して居るのか僕の神経を刺戟して寝つかれなかつた。何時か或る老人から聞いたことがある。——人間の肩箱——全くいゝ形容であると思ふ。

X X

僕は便所に行かうと立ち上つた。實の所小便がしたくもなんでもない。只落ち付かないから便所でも行つて來たら少しは落ち付くだらう位の動機である。

汚くよごれた五燭光の電球は臙に八畳の間を照らした。私は腰をかゞめて出る足場を求めた。目がふらく／＼して、危ふく誰かの頭を踏む所だつたので、僕ははつとして立ち止つた。腹はきゅ／＼く鳴つて仕様がな。頭はぼつとして、目まひはする。體はだるい。

四日間も續いて雨に降られた僕は、昨日から一錢も持ち合せなかつた。飯屋を通つた時みそ汁の香は、いやに高かつた。僕は今一度懷をはたいて見た。が、うんともすんともしなかつた。僕はふらふらし

て終に古本屋の前に立つた。

「これの一つお願ひしたいんですか。」

惜みく差し出したのは、昔の友人から贈られたレーニンの「帝國主義と民族問題」である。併し番頭はそれを取つて見やうともせず、私の體ばかりに注意して居るらしかった。後には私の頭から足さき迄見廻した。氣持の悪いたらないので、私は馬鹿！と心で叫んだ。まだ読んで居ないから惜しい。こんな馬鹿にされて迄賣るのはよさう！とも思つたが、腹のすいて居るのに氣付くと私は黙つて外を見た。其處には読んで見たい本がぶらりと並ばれて居た。

「今は一ぱいですから後でまた」

私は黙つて踵を換へるとその儘出た。出てから顧みたら、大きく「古本高價買入」と書かれた看板が立てられて居た。その右に「なんでも」と書いてある。私の胸はポカ／＼煮えくり返つた。

それから私は意地と餓とで古本屋を見つげ次第入り込んでやつた。十四回繰返して、やつと十五回目握らされた三十錢を見て、私は苦笑した。それで朝飯を抜いて、やつと晝と晩の二度にありついた。これが昨日である。今日はもうどうすることも出来なかつた。それでも今日は夜中になつた。何も食はないで一日が過ぎた。

けれども横になると又夜が明けてからのことが、頭に浮んでならなかつた。若し晴れたらどうしやう？ 二日間何も食はないで、そんな激しい労働に堪へ得るか？ 私は三十餘貫もする砂利を擔いで坂を上つて居る所を頭に畫いて見た。さうすると先日見た伊藤と言ふ男が頭に浮んで来て、覺えず

身震ひした。彼れは二十四五の若者である。がやつぱり餓には堪へられないと見えて(二日間食はなかつたさうだ)三十餘貫の砂利を擔いで坂を上つた。その時目まひがして、足がふらくする調子に、颯いて倒れてしまった。三十餘貫の砂利を入れた樽がいやが上に彼れの脊中を打つけた爲めに、生々しい心臓の血が其處等中に飛出しちやつたのだ。それから其の死屍は蓆に包まれて火葬場で煙と灰になつて消えたさうである。このやうに伊藤の肉體は簡單に片付けられたが、私の頭からは容易く伊藤と言ふ人を片付けることが出来なかつた。——伊藤の死——この印象は恐ろしいが、やつぱり晴れなければ飯にありつき得ない僕は、雨の晴れて呉れるやうに祈つた。

× ×

時計の三つを打つて居た迄は分つて居たが、それからは皆目分らない。何でもうとくして居る中に、つひ寝ついたらしい。

一夜明けて朝になつた。落膽した朝である。同僚は悲鳴を揚げた。餓の唸きである。目が醒めた時は四時半頃だ、夜は明けかゝつて居る。が晴れて呉れゝばな！と祈つた空からは雨が降つて居た。ポタリくくとトタン屋根を鳴らして居た。細い雨ではあるが雨に違ひはなかつた。それでも僕等は待つた。今に晴れるだらう。今に晴れるだらうと名ばかりの窓から首をつき出して、空を見た。時計のカチくは止まらなかつた。相變らずカチくくと進んで行く。それと合奏するかのやうに雨はポタリポタリ、トタンを打つ、それが氣になつてならなかつた。それでも時計は遠慮しない。雨も晴れない。邊りは段々明るくなつて来る。その中に五時が鳴る。六時が鳴る。それでも雨は相變らず香氣に細い糸を垂らして

居る。これが僕等に取つては最も恐ろしいものなのだ。強盗のピストルよりも、匕首よりも恐ろしいのだ。六時半となつても雨は相變らず降つて居た。

「あゝ——もう駄目だ——」

「又あぶれちやつた！ 畜生！」

「畜生！ 女に振られて、雨に降られて！ もう浮ばないや！」

人々は悲しみに襲はれた。餓の餘感に襲はれた。悲鳴は部屋の間隔から起つた。が、七時頃には皆沈まつた。何かを考へては溜息をついた。女に振られてと誰かが言つた時も、人々は苦笑さへし得なかつた。之に應ずる精力の有る者は一人もなかつた。目は憎々しく、雨を、空を、睨みつけた。

この騒ぎが下でも起つて居る。悲鳴が揚つて居た。時々唸聲が聞えた。瀕死の唸聲である。下の同僚は四十人ばかりだつた。

——兄弟諸君！——

皆が沈んで居る時に突然こんな聲がした。熱烈な、力強い聲であつた。低氣壓がその極に達した時暴風雨の襲ひ來るやうに必然的な、避け得ない、併も必死の叫び聲であつた。

これから暴風が起つて來るぞ！ 而も大暴風であるぞ！ と言ふ前ぶれのやうに、人々を動かした。人々は緊張した。目はさよらさよら聲の主を求めた。全精力を集めたやうな目付きである。

何時も沈み勝ちな金子君の口から出たのだつた。彼れは青い顔を少し赤らめて一歩前に出た。唇は噛みしめられ、手は堅く握りしめられて居た。

「兄弟諸君！」彼れは靜かに兩膝をついて座つてから今一度呼んだ。人々の目は彼れに集つた。彼れは頭を一寸垂れて考へる様子をした。靜かに落付いて上た彼の顔は青ざめて居た。それから口を切つた。

「兄弟！ 皆少し倚り合つて、相談しやうぢやありませんか。私共は今や餓死せんばかりになつて居るのだ。何かしなければ餓死する外ないのだ」

「おやかた！」微かな聲が此の沈黙を破つて皆を驚かした。聞き取れない程、それは力なく、微かではあつたが、人々を動かした力は大であつた。二十二の目は、壁に倚れて居るよばくくの爺さんに集つた。彼れはごつくと節の突出した、骨ばかりの指を振はして居た。「わつしやもう死さうだ！ もう三日だ！ 三日なにも食はねえんだ！ どうすれあ餓死しねえんだ？」爺さんは干乾びた全身からやつと搾り出したやうに、一息一息吹き出した。三本の指は目の前にブルク震へて居た。片手は腹を押へて居た。薄暮い隅に彫り出された彼れの青黒い顔は物すごかつた。——溺れた者は藁でもつかむ——彼れは破壊されゆく肉體をせき止めやうと務めた。彼れは生さんが爲めにもだえて居る様子だつた。

「若いの！ どうすれあ餓死しねえんだ？」

不思議に皆の行動は一致した。避け得ない死に瀕せる人達の間に起るやうな現象である。

目は金子君に集まつた。恰も彼が總ての問題を解決して呉れるやうに！ 金子君の返事は待たれた。彼れの顔は輝いた、孤獨に悩む孤子が仲間を得て喜ぶやうに、彼はやがて自分の同志になる、期待

に満ちた人達の顔を見て氣を強くしたのであらう。彼の大きな目は輝いた。皆餓えてやつれては居るがその顔は感激に輝いて居た。

「今爺さんは餓に苦しまれて居る。三日間何も食はなかつた。併しこれはお爺さん獨りの問題ではないのだ。皆餓えて居るのだ。僕も一昨日からは何も食つては居ないのだ！」金子君がかう言つてしまふ迄に人々は緊張し切つて次の爆發を暗示して居るやうに見えた。

終に爆發した。人々は聲を震はして言つた。餓を告白するのは恥辱である！と言ふこれまでの道徳は忘れられて居たかのやうに、

「さうだ！ 僕も三日食はねえんだ！ 親分！」
 「己あ二日だ！」
 「己もさうだ！」
 「わしは昨日から何も食はねえんだ！」

「さうだ皆餓えてるのだ！」僕も黙つて居れなくなつたのでかう叫んだ。それが稍靜つてから、金子君は冷靜な言葉でかう言つた。

「さうです！ 皆のことです。ですから皆で、とくと相談せねばならない。さうして何かする時は皆一緒にやらねばならない。一人でも仲間から離れてはならない。丸ビルを皆知つてるだらう？ あんな大きな建物はどうして出来たのか？ 今私達は議院建築の手傳に行つてるのが多いだらう？ それでよく分ると思ふ。誰の力でそれが建てられたか。誰の力で議院の建築がはかくしく進んで行くか？ 勿論金が今最も大きい力になつて居る。併し私達が働かなかつたらそれがどうして出来るか？ 一人の労働者の力は何んでもない。が、澤山の労働者の力になるとそんなに大きいものだ、と言ふこ

とは私達のよく知つてることなんだ。で私達は皆餓えて居る。ですから皆で、澤山の仲間を集めて政府や、資本家に向つて要求するのだ。食を與へろ！と。生かせる！と。かう要求するのだ！ 私達そんな大きな力を以て資本家によつつかつて見ろ！ 奴等は黙つて居れると思ふのか！」

飽く迄冷静に務めて居た金子君も終に熱情をどうすることも出来ないやうに見えた。

「併しそれは無理ぢやあないか？ 新聞ではこんな不景氣になつてお上もお困りだで」人々は或シヨツクを受けた。併し金子君は冷然として答へたのでした。

「さうです。何時か新聞にはさう書いてましたね！ 併しそれは皆出駄羅目ですよ。今其の譯を言ひますから聞いて下さい。私達が朝七時から夜の六時迄も働いて、やつと一兩ですぜ！ しかもその仕事は樂ぢやないだらう。」

「樂どころですか！ 三十餘貫の砂利を朝から夜迄擔がされて！ 夕方になるとへとくして、生きる氣がしないよ！」

私は賛意を表して喋々した。

「えらい仕事ぢや！」

「樂ぢやねえや！」

三四人賛成して呉れたので僕はやつと安心した。

「さうですよ。樂ぢやありませんよ。それで一兩だ！ 朝の七時から夜の六時迄働いて！ で資本家を御覽なさい！ 奴等何をしてると思ひますか。氣の向いた時、一時間なり三十分なり事務所へ出て、

茶を飲んで、上等な葉巻をくゆらして、他の時間は、皆妾宅だとか、待合で暮らして居るぢやないか。それが年々どの位儲けてると思ひますか。百萬、二百萬と、かう言ふ儲け方ですぜ。奴等の單位は百萬だぜ。すごい奴になると百萬や二百萬は月々に儲けて居りますぜ！ 百萬と言へばどの位だらう。私達では、飲まず食はずして、一ケ年三百六十五圓、皆働けるとして、さうして、働いた一圓を皆集めて、三千年位、いゝですか？ 三千年位が必要ですよ！ 三千年と言へば日本の國が始つてからでも未だ三千年にはならない。やつと二千五百餘年ですよ。驚くぢやありませんか。」皆は餓も忘れて目を丸くして驚いた。

「へえ！」

「で、どうして奴等はそんなに儲かるか？ それはかう言ふ譯なんだ。例へばこゝのおやぢが私達の工資をはねるやうな譯だ。こゝのおやぢは一日十錢とか二十錢はねて居るさうですが、併しこの資本家と言ふ奴は、なかくそれで満足する所ではないぞ。大抵私達の幾割もの工資をはねて居るんだ！ それが何萬人も、何十萬人も労働者を使つて居るんですからすごいぢやありませんか！ 奴等の儲けたのは皆私達の血と汗ですよ！ ですから要求する權利は十分あるぜ。私達の力が大きくなつたら奴等を××してやらねあならないぜ。さうして始めて私達は××されるのだ！ 搾られないで済むのだ。私達の力は大きなものだ、と言ふことはお分りになつたでせう？ 皆一緒になつてやればね！ 今迄私達の力を知らなかつたゞけた。併し今は黙死か？ 餓死か二つの一つだ！ かうなつて見ると私達のことでも分つて來るだらう。同志を澤山集めるのが一番大事だ！ さうして生命をかけて戦ふの

だ！新聞に何んとか書いとつたてね！それは資本家の犬が！

この時大きな男が澤山階段を駆け上つたやうだつた。それがぎしぎし唸つた。金子君は其處で話を止めてしまつたので、皆の目は入口を見た。其處にはサーベル君が一杯つまつて居た。すごい目をして入つて來た。やがて無理矢理に皆ひつぱり出された。

「下のおやぢの仕事だぞ！」と誰か叫んだが、直きに靜かになつた。私の振り返つた時、先のよほよほ爺さんは死人の顔をして、二人のサーベルに引きづられて來た。これも資本家の×だ。私は總てのからくりが今になつて始めて分つたやうな氣がした。私の目は熱くなつた。私の胸は火で燃え立つた。

——〈號外〉第二號（一九二七年九月・昭和二年，東京）

自由勞動者的生活剖面

——怎麼辦才不會餓死呢？——

蚊子嗡嗡叫著，尖嘴在人身上到處叮，毫不客氣地吸血。跳蚤也在身上到處咬，癢極了。我一直睡不著，翻了個身。這是閣樓的八疊房間，裡面有十二個同事，仰臥的、俯臥的、或側臥的，如此這般的睡著。八個人橫排躺著，腳尖還有四個人就寢。其實，說是就寢，他們的睡法並不是那麼高尚。借來的又薄又硬的被子，平均兩人一條，有的抱著睡，有的墊在下面，還有人因太悶熱而把被子踢到腳尖。說來，就是這般雜亂的睡法。

大部份都赤身裸體的。當然有人是爲了太熱而脫得精光，但是幾乎所有的人，也就是說八成的人，由於唯一的短上衣和破長褲在工地時已經被汗水、泥漿和水泥弄髒了，所以不能穿著入睡。房間四周掛著臭氣衝天的破衣服，連被褥和灰色的榻榻米也一樣發臭，雖然臭味程度不同。

北邊的窗戶雖說是窗戶，一點用處也沒有。早晨七點左右天空一度放晴，卻又惹人厭地陰沉起來，因此悶熱極了。一站起來就會碰到頭的白鐵皮屋頂，把七月的陽光全都吸收起來，貯存在通風不良的箱籠似的房間裡。人體的熱氣，從破衣服、被褥和榻榻米散發出來的臭氣，混和著悶熱的氣溫，令人窒息，嗆極

了。

電車的聲音已聽不見，時而叭——叭——響的是汽車吧。除了這個噪音以外，外頭已經寂靜，似乎夜深了。但房間裡打從先前就騷動得厲害；吱咯吱咯地搔著腳、肚子、胸脯、頭、屁股的聲音，叭叭叭叮叮蚊子的聲音，高昂的鼾聲，被蚊子叮時披披叭叭趕蚊子的聲音，翻身的聲音，熱哪——熱哪——的呻吟，還有嘆息聲。

雖然平常就是這樣的情形，但今天不知道是不是因為特別興奮的關係，我神經緊繃，無法入睡。忘記是什麼時候曾經聽一個老人家說過——人的垃圾箱——真是恰當的形容。

× ×

我站起來想去廁所，其實並不想小便，只是靜不下心，說不定去廁所就會安定一點，動機如此而已。髒兮兮的五燭光燈泡朦朧地照著八疊的房間，我彎腰尋找立足點。由於眼睛發黑差點兒踩上人家的頭，所以嚇一跳站住了。肚子咕嚕咕嚕響，真不知道該怎麼辦才好。頭暈目眩，身體懶洋洋的。

由於被接連四天的雨困住了，我從昨天起就一文不名。經過小飯館時，味噌湯的香味撲鼻。我又在懷中遍尋一次，但還是一無所有。我踉踉蹌蹌地終於站在舊書店面前。

「幫幫忙吧。」

我無限惋惜地交上老友餽贈的列寧著的《帝國主義和民族問題》，可是掌櫃根本不想接過來看，似乎盡在打量我的身體。接著他從我的頭頂直看到腳尖，令我心情不舒服透頂，所以在心裡叫了一聲混蛋東西！這本書還沒看過呢，所以覺得可惜。被這麼瞧不起，還賣它幹嘛？——我也這樣想，但一發覺肚子在餓，

就默默看著外頭，那兒排著一大堆我想看的書。

「現在太多了，所以請以後再來。」

我默默轉身就走了出去。出去後回頭一看，大字寫的「高價收購舊書」的招牌豎立著，右邊寫著「不拘任何書籍」。我氣得心裡直翻騰。

接下來由於賭氣和飢餓，我一看見舊書店就走進去。這樣反覆了十四次，眼看著好不容易第十五次才得到的三十錢，我苦笑了。於是，早上雖沒吃飯，總算吃了中午和晚上兩頓飯。昨天就是這樣過的，但今天再也沒辦法了。儘管如此，今天也已經到了夜半，什麼都沒吃也就過了一天。

不過一輪下去，我的腦子裡就再度浮現天亮以後會發生的情景。要是放晴了，該怎麼辦？兩天什麼都沒吃，受得了那樣激烈的勞動嗎？我在腦海裡描繪了一下自己挑著一百多公斤砂石上坡的景象。這麼一想，前些日子看見的叫伊藤的漢子便浮上腦海，我不覺顫慄起來。他才二十四、五歲，年紀輕輕的，但似乎還是受不了飢餓（據說已兩天沒吃飯），因此挑著一百多公斤的砂石上坡。正在此時，他頭一暈腳一軟就絆倒了。裝著一百多公斤砂石的木桶硬生生地撞在他背上，鮮熱的血從心臟噴出來，迸濺了一地。然後，據說他的屍體用草蓆裹著，在火葬場化為煙灰消失了。伊藤的肉體就這樣簡單地處理掉了，但我的腦海裡伊藤這個人是無法輕易抹煞的。——伊藤的死——這個印象是可怕的，但老天若是還不放晴我就吃不上飯了，所以我如此這般地禱告著：但願天能放晴。

× ×

一直到時鐘敲打三下我還有意識，但此後就不知人事了。可能在迷迷糊糊中睡著了。

已是清晨時分，是個令人氣餒的早晨。同事叫著苦，是飢餓的呻吟。醒來時是四點半左右，就要天亮了。但願能放晴！這樣禱告過後，天空卻下著雨，浙浙瀝瀝地敲著白鐵皮屋頂。雖然是毛毛細雨，下雨總是下雨。即使那樣，我們還是期待著，快放晴了吧，快放晴了吧。我從毫無作用的窗戶伸出脖子，望了望天空。時鐘滴滴答答個不停，一直滴滴答答地移動，雨好像合奏一般，浙浙瀝瀝地敲打著白鐵皮，叫我焦躁。可是時鐘還是毫不留情地移動著，雨也下個不停。周遭逐漸亮起來，不久鐘敲五點、六點。可是，雨還是滿不在乎地垂著細絲。這對我們來說是最可怕的，比強盜的手鎗、比匕首還可怕。到了六點半，雨仍然下個不停。

「啊——完了——完了——」

「又要沒事幹了！他媽的！」

「畜生！女人給我釘子碰，雨也給我釘子碰！這下子沒戲唱了！」

大家都擁上一層悲哀，一種飢餓感襲擊而來，叫苦聲從房間各個角落響起。但是到了七點左右，大家都安靜下來了。有的人想想就嘆息。不知誰說碰了女人的釘子時，大家連苦笑都笑不出來了。沒有人有精力回應，眼睛都憎恨地瞪著雨，盯著天空。

樓下也是這樣的騷動情形。叫苦聲不斷地迴盪著，有時聽見呻吟聲，是垂死的呻吟。樓下的同事約有四十人。

——弟兄們！——

大家正消沉的時候，突然聽到這樣的叫聲，聲音熱情而有力，是無法抑制的、拼命的叫喊聲，就像低

氣壓達到極限時，暴風雨必然來襲一樣。

風暴就快發生了！而且是大風暴！就像是暴風雨的前兆似的，這個叫聲驚動了所有的人，大家都緊張起來，東張西望地，用聚精會神的眼光尋找聲音的主人。

竟是金子君的叫聲，他平常總是鬱鬱不樂的。他本來蒼白的臉略為紅潤，向前走了一步，緊咬著嘴唇，握緊著手心。

「弟兄們！」他沉靜地跪坐在蓆上後，又叫了一次。大家的眼光都集中在他身上，他稍微低頭，好像在思索的樣子。他鎮靜地擡起頭時，臉色是蒼白的。接著他說話了。

「兄弟！大家靠緊過來商量吧。我們現在快要餓死了，不行動就得餓死。」

「頭兒啊！」一個微弱的聲音打破沉默，把大家嚇了一跳。雖然那聲音微弱沒力氣，卻深深地打動了所有的人，二十二道眼光會聚在一個老人家身上，牠老態龍鍾地倚在牆邊。他顫慄著骨節嶙峋、皮包骨的手指：「我快要死了！已經三天哪！三天什麼都沒吃哪怎麼辦才不會餓死呢？」老人家一句一句吐出來，好像好不容易才從枯瘦的軀體擠出來似的。他伸出三根手指在眼前哆哆嗦嗦地顫抖著，另一隻手壓著肚子。他那鐵黑的臉浮現在暗淡的角落裡，可怕極了——溺水之人攀草求生——他勉強撐著日益腐壞的肉體，彷彿爲了活下去而掙扎著。

「小夥子！怎麼辦才不會餓死呢？」

不可思議的，大家竟不約而同的動作一致，就像人們面臨死亡命運時的反應。

大家的眼光都集中在金子君身上，好像他會解決一切問題似的。大家等待著金子君的回答。

他的臉閃耀著光輝，像苦於孤獨、孑然一身的人獲得了伙伴一般歡喜，他看著不久即將成爲自己同志的人們，他們臉上充滿期待，使他更加勇氣十足。他的大眼睛閃爍著。大家都餓得憔悴不堪，但臉上卻都閃耀著感激的光輝。「現在老人家苦於飢餓，三天什麼都沒吃了。可是這並不是老人家一個人的問題，大家都在餓著。我也從前天起就什麼也沒吃！」直到金子君說完，大家都屏息靜氣的，像是風暴之前的預兆。

終於爆發了。大家都顫抖著聲音說出來了，彷彿忘了：坦承肚子餓是丟人的！他們似乎忘了這種傳統的道德：「對，我也三天沒吃呢，老大！」「我是兩天哪！」「我也是呀！」「我從昨天就什麼也沒吃哪！」「對，大家都在餓哪！」我再也沉默不住，這樣叫喊起來。稍稍靜下來後，金子君冷靜地說了：

「是的，是大家的事，所以非得大家好好商量不可。而且無論幹什麼，非大家一起幹不可。任何人都不能脫隊。大家都知道丸之內大樓吧？那樣的大樓是怎麼蓋成的？現在我們當中有很多人在幫忙蓋議會吧？所以，我想大家都很清楚，議會的建築是靠了誰的力量才能順利進行的？當然，現在金錢成了最大的力量。可是，如果我們不幹活，又怎能蓋好呢？一個勞動者的力量是微不足道的，可是，許多勞動者的力量就有那麼大了。這點是我們都一清二楚的。可是我們都在挨餓，所以大家要多集合伙伴，向政府和資本家要求：給我們吃的！讓我們活下去！一定得這樣要求啊！用我們集體的力量的衝擊資本家看看！你想那些傢伙會悶聲不響嗎！」

金子君一直勉強維持冷靜，如今似乎也抑制不住熱情了。

「可是那不是行不通嗎？報紙上說目前這麼不景氣，政府也正爲難呀！」大家多少受到衝擊。但是金子君冷然回答道：「是啊，不知什麼時候，報上是那麼寫的！可是那都是胡說八道呀！現在我把道理說出

來，請聽聽。我們從早上七點工作到晚上六點，才得到一圓哪！而且工作並不輕鬆吧！」

「怎麼會輕鬆！從早到晚，要我們挑一百多公斤的砂石呀！一到傍晚就精疲力竭，叫人懷疑自己是不是還活著！」我表示贊同，喋喋不休地講開了。

「這工作真辛苦啊！」

「一點也不輕鬆哪！」由於有三四個人贊成我，我這才放了心。

「是呀，一點也不輕鬆哪，這樣才得到一圓！從早上七點一直工作到晚上六點！那麼，請看看資本家吧！你想那些傢伙在幹什麼呢？想去的時候，到辦公室混個一小時、半小時的，喝喝茶，抽抽上等雪茄。其餘時間，不是在姨太太家裡混，就是在茶室泡妓女。想想看，他們那樣子每年賺多少錢？一百萬、兩百萬這樣的賺呢！那些傢伙是用百萬來算的呀！厲害的，甚至是每個月賺百萬或兩百萬！大家想想看，一百萬到底是多大的一筆數目？換了我們呢，如果不吃不喝，一年賺三百六十五圓，假定每天都能工作，把賺到的一圓都集起來，大約要三千年，想想看，非要三千年不可！說到三千年，日本開國以來還不到三千年，才兩千五百多年哩！不是很驚人嗎？」大家都嚇了一跳，眼睛瞪得大大的，忘了肚子餓。

「哇！」

「那麼，那些傢伙怎能賺那麼多錢呢？道理是這樣的。譬如據說這兒的老闆一天揩油十錢或二十錢，可是這些叫資本家的傢伙卻不是那樣輕易就能滿足的。多半揩了我們好幾成的工資！而他們使用的工人有好幾萬人，甚至幾十萬人，不是太厲害了嗎？那些傢伙賺的都是我們的血汗錢哪！所以我們有充分的理由來要求權利。等到我們的力量夠大了，就非把這些傢伙××不可。這樣我們才能××呀！才不會被剝削。」

我們的力量是巨大的，這點大家都明白了吧？只要大家一起幹！只不過我們一直都不知道我們的力量有多大罷了。現在只有兩條路可走，是要像野獸一樣的死呢，還是要餓死？這麼說來，我們到底要怎麼做，也就一清二楚了。最重要的是要多集合同志！然後要拼命去戰鬥！報上寫東寫西的，都是資本家的走狗！」

正在這時，似乎有許多彪形大漢跑上樓來，樓梯咯吱咯吱作響。金子君就此停止說話，於是大家的眼光都朝向入口。那兒擠了一群戴佩劍的巡查，目光猙獰地走進來，旋即大家就被硬拖了出去。

「樓下老闆幹的好事！」有人喊道，但馬上又安靜下來。我回頭時，剛才老態龍鍾的老人家露出死人似的臉，被兩個戴佩劍的拖過來。這也是資本家的×呢！我彷彿到現在才明白一切的詭計，我的眼睛熱了起來，我的心胸燃起熊熊的火。

——清水賢一郎、彭小妍根據《文學台灣》第十三期（一九九五年一月）葉笛之譯文校譯

——黃英哲校訂

新聞配達夫

「はっ！ 助かった！……」

と私は思った。私は重いく荷物を擔はされて、もうべちやんこになりさうだと言ふ時に、重荷を下された時のやうな、スーとした晴々しさを感じたのである。

何故と言ふに、私は東京に来てから、かれこれ一ヶ月にならうとしてゐるのである。この約一ヶ月の間、私は毎日々々朝早くから晩遅く迄、東京市のあらゆる職業紹介所に立つたし、市内から郊外を幾つもの區劃に分けて、職を探して歩いたのに、今日に至つても未だ働かして呉れる所を見つけることが出来ないからである。おまけに持金の二十圓はたつた六圓二十錢になつたし、三人の弟妹を抱へた母親に置いて來た十圓も、もう一ヶ月位経つたのだから切れさうな時である。

この心細い時に、更に新聞で、全國失業者三百萬と言ふ報道を見て驚いて居る時に、ひよつと××新聞舗のガラス戸に、新聞配達夫募集のハリ紙を見たのだから、私は飛び立つ位に喜んだ。

「これで立志のいとぐちは見つかつたのだ」

と私が地獄から天國に昇つた程に嬉しがるのも驚くには當らないのである。

私は胸を轟かせて××新聞舗の戸口に駈け寄り、その戸を開けて、

「今日は……………」と叮嚀に頭を下げた。

午後の三時である。丁度夕刊が來たと見えて、部屋一杯に、皆は「ピューピューサツ」と忙しく新聞を疊んで居た。

頭を綺麗に分けて、半纏姿の中に、只一人、上等の洋服を着込んで椅子に腰掛けて、机に向つて居る主人らしい男が口から葉巻を手に移して、ぶつきら棒に、

「何か?……………」と煙と共に吐き出した。

「あの…………新聞配達が……………」

私は言ひかけてガラス戸のハリ紙を指さした。

「お前…………やつて見たいと言ふのか?……………」

主人の聲は嚴かだつた。私は押へつけられさうで聲が出なかつた。

「は…………はい、働かして貰ひたいので……………」

「お前…………この規定を読み給へ。承知だつたら直ぐ來給へ」

と、彼は裏の壁に大きな紙に書いて張つてある個條書きの規定を指さした。

第一條、第二條、第三條と讀んで行く中に、私は、はつと驚きの目を見張つた。

第三條に保證金拾圓を要すと書いてあるのである。私は次ぎが讀めなくなつた。目暈がするのだ…………。暫くして振返つた主人は、私のポカンとしてゐるのを見て、

「どうだね？……承知か？……」と聞いた。

「は……はい。どれもこれも承知しましたが、四圓ばかり保證金が足らるので……」

私のこの返事を聞いて、主人は、暫く私の顔から身なりを見つめてゐたが、

「お前のこの身なりを見て居ると可哀さうになつてならぬから、不可んとも言へぬ。その代り、お前は、人より倍も眞^(マコト)面目に働かなくちやならぬぞ！ いゝか？……」

「はい！ 承知しまして御座います。有難う御座います」

私は、もう一度、彼の足先迄頭を下げてお禮を言つた。それから別にとつて置いて大事にシャツのポケットに入れて止め針で止めて置いた五圓札一枚と懐中の一圓二十錢を出して恭々しく主人の前に捧げ、

「どうも有難う御座います」と更にもう一度繰返した。主人は金を無造作に抽出に入れると、

「上つて待ちなさい。お前は田中と言ふ人に世話して貰ふから、よく話を聞かなくちやいかぬぞ」

「はい」私は頭をペコ／＼下げて、其處に腰掛けた。心の底から嬉しかつた。

——田中さんて人、どんな人だらうかしら？ ……あの温さうな、學生服を着てゐた人だといゝがな

あ……—

と私は思つたりした。

×

電氣がついて外は眞暗になつてゐた。

主人は机の抽出にすつかり錠をかけて、さつきから出て行つて、店の中はがらんどうで、誰も居らなかつた。主人の邸は別にあるらしかつた。

その中に半纏が一人歸つて來、二人歸つて來て、一時森とした家の中は騒々しくなつて來た。私は田中と言ふ人が氣になるので、早速或る一人をつかまへて聞いて見た。

「田中クイン」と、その男は私に答へる代りに、二階に向つて田中を呼んで呉れた。

「なんだ……誰が呼んで居るのだ?……」

と答へながら二階から飛び降りて來た男はと見ると、さう悪い男ではないやうだつた。矢張學生服を着てゐた。

「はあ……田中さんで御座いますか?……私は今度入りましたんですが、さつき主人の話では、あなたのお世話になれと言はれましたので……宜しく御願申します」

と私が叮嚀に頭を下げて、心からの御願を述べると、この男、顔を紅らめて、そつぽ向いて、

「あゝさうか。お互さまだ」と言つた。

多分こんな叮嚀に頭を下げられたことがないので、持てあましてゐるのだらう。

「さあ……二階に上り給へ」と言つて、彼はトシト梯子段を駆け上つた。

私も彼に續いて二階に上つた。二階と言つても普通の二階ではなくて、立つと屋根にぶつかる屋根裏だ。

私はこれ迄本所の××木賃宿に宿泊してゐた。或る晩何處かの大學生の見學だと言つて、我々の宿つ

てゐる所を見て廻つたが、皆「ヒドイ所だ！ この狭い所にこんな多人數寝てゐる！」と言ひながら通つた。

一所がこの××新聞舗の二階と來ては、それより十倍もヒドイ所だつた。

疊の表はすつかりとれてしまつて、藁だ。藁の上にぢかに寝ることになつてゐる。しかも眞黒だ。

二三人づゝ一緒になつて喋つてゐる人も居るが、大半はもうフトンの中にもぐり込んでゐた。見ると三人で一枚の割でフトンを被て、向ふの壁から順にギツシリ詰められてゐた。

私が茫然と部屋の中を見廻してゐる時、一寸人の泣聲を聞いたので私はハツとした。

見ると一人の十四五位の男が、私の後の隅つこで「フンく」鼻を鳴らしてゐるのである。彼の隣りの男が小さな聲で何とか言つて慰めてゐるやうだつたが聞えなかつた。私は始めて來たので、こんな事に迄出しやばる元氣はなかつたが、それでも不安だつた。

——僕が職にありついて喜んでゐるのに、あの少年は一體何で今頃フンく泣いて居るのだらう

……
で、結局、私は、あの少年が泣くのは年の若いせいで、親でも戀しくなつたんだらうと一人で定めた。こうして自分を落ちつかせた。

×

こうして、ボヤ／＼してゐる中に八時が鳴ると「リン、リン、リン、リン」と呼び鈴が鳴り響いた。私は又ハツとした。

「もう寝るんだ。君、朝早いからな……二時から三時の間に新聞が来るので、その頃には皆起きるんだから……」

と、田中が教へて呉れた。

見ると、先つき向ふの壁際に列べられた人間の頭が、一列一列と殖えて、部屋はもう一杯である。田中がフトンを出したので、私は彼とそれからもう一人佐藤といふ男と一緒に寝た。ギツシリ詰つて身動きが出来ない。

陶器を箱に詰めた時のやうに、一分の隙もあつたものではない。否、スシ詰と言ふ方がよつぽど正しい。

田舎では、廣い所に寝慣れた私だ。田舎の家は貧弱ではあつたが、私は何時も綺麗に掃除する癖があつた。ノミには私は閉口するからである。

所がこの新聞舗と來ては眞實のノミの巢で、脚から、腰から、股から、腹から、胸から一齊に攻撃して來るので痒くて我慢が出来ない。本所の木賃宿もノミの巢である點に於て變りはないが、それでもこんなギツシリ詰つた譯ではないので、私は時々起きてノミ退治をやる事が出來た。

此の屋根裏と來ては、かくことも身動きも出來ないスシ詰だから、私は神経を殺して我慢するより外はなかつた。

それでもやつと職にありついたのでと考へると、これ位……なんでもなかつた。

「人の倍も働いて、人の倍の勉強をしよう」と私は考へて興奮した。この興奮とノミの襲撃で、私は

九時が鳴つても十時が鳴つても、未だ寝つくことが出来なかつた。

私は考へることもなくなつたので、人の頭を勘定したりした。私も入れると二十九人である。翌日の晝敷へた所ではこの部屋は十二疊敷かれてあつた。疊一枚につき、約二人半の割合だ。

こうしてゐる中に、私は小便がしたくなつた。生憎、田中と佐藤の間にはさまつて寝たので起きることに苦勞した。

何故なら、皆がぐつすり眠つてゐるのに、フトン動かして、目でも醒させるといかぬと思つたからだ。頭の方へスーと抜けようとする頭の上一寸ばかり離れて、向ふの列の頭が控へて居るのだ。

私は身體を斜にして、手をついて、注意深く（五分間もかゝつたであらう）身體を出さうとしたが、それでも佐藤君に一つぶつかつて、彼が腰返りを打つた。幸ひ目が醒めなくてよかつたが……

こうして起きたには起きたが、梯段迄行くのが又一苦勞であつた。頭の方は一寸より離れて居ないから足場なんかありはしない。只、足は身體に比べて面積が小さいので、多少の隙はあつた。けれども足が皆フトンの中にあるのだから一體何處が足で、何處が隙だか一寸も見當がつかぬ。私は探りく／＼しては足場を見つけて、一步踏み出すと言ふやうにして、やつと梯子段迄歩いたが、その間一人の足を踏みつけて吃驚して跳び上つた。

小便が済んで歸つて來た時に、私は又大きな困難を経験した。自分の寢床に辿りつく迄の困難は出る時と變りはなかつたが、寢床に辿りついて見ると、先つき私が起きる時に、一寸ぶつかつた爲めに寢返りを打つた佐藤君は私の分迄占領してしまつてゐたのである。

未だ一緒になつたばかりで、彼の性質が知れないので、私は彼を起すことを躊躇し、暫く其處に坐つた儘でどうすることも出来なかつた。それから目を醒さない程度で、私は少しづつ佐藤の身體を押しやり、半時間位もかゝつてやつと腰を入れるだけの隙を抜いたので、私は早速彼等の頭の所に腰を下して、兩足をフトンの中に突込み、寒い十二月の夜中に、汗迄かいて、やつと自分の寝る所を取返すことが出来たのである。

十二時が鳴つた時も、私は目がさえて未だ寝つかれなかつた。

×

ひどく肩をゆすられて目を醒すと、部屋の中はまるで戦場のやうに騒々しかつた。

昨晚八時、就寝の知らせをやつた呼鈴が喧しく鳴り響いてゐた。それが止むと下の時計が二時を報じた。私は二時間も眠らなかつたやうだつた。頭はボーとして重かつた。

皆は、フトンを片付けると、トンく階下に駆け下りて行つた。私も重いまぶたを擦り擦り後からついて下りた。

階下では新聞を畳み始めてゐる人もあり、濡れ手ぬぐひで、顔をこすつてゐる人もあり、指で齒を磨いてゐる人もある。洗面器も齒磨粉もなかつた。勿論こんな文化的なものは、私にも持合せはなかつた。その上、手ぬぐひ迄も私には持ち合せがなかつたので、私は冷い水道の水をざあーと顔にぶつけて、袖で顔を擦つた。それから私は大急ぎで田中君が疊んでゐる傍に寄つて、彼から少し分けて貰つて新聞疊みの稽古を始めた。十部ばかりは少し不慣であつたが、それからは皆に大して遅れることなしに、皆

と調子を合せて疊むことが出来た。

「ピューピューサツ！ ピューピューサツ！」と自分の氣持迄が調子に乗つて、如何にも朗かになつて、眠い重い頭も晴々とした。

早く終つた人から一人消え、二人消えして配達に出て行つた。私と田中は第三番目だつた。

外は二三日來降つた雪が膝位の所迄積つてゐて、未だ消えてはしまはないので、未だ朝の三時前ではあるが、そんなに暗くはなかつた。

冷い風がピューピューと顔を刺した。あはせ一枚と單衣三枚にメリヤス一枚を重ねて（私の着物はこれ全部だつたのだ）出たのだが、私は寒さに齒をガタ／＼震はした。殊に苦しかったのは、雪が解けかゝつて、雪の下が氷水のたまりになつて居るのに、私の足袋はこの一と月來歩き續けたので、底は殆んど穴だらけになつて居た爲めに、跣で氷の上を歩いてゐる以上に苦しかった。幾歩も行かない中に私の足は凍えてしまつて、堅くなつてしまつた。

それでも、一ヶ月間職探しに無駄足を運んで來たこと、三人の弟妹を抱へて途方に暮れてゐるであらう母のこと、全國の失業者三百萬人のことを考へると……これ位何でもなかつた。私は自分を鞭打つて、元氣を出して歩いた。特に足に力を入れて踏み付けたりした。

田中は私の前から、これも特に足に力を入れて、滑稽な歩き方で、兩戸から新聞を入れる度毎に其處の名前を教へてくれた。

こうして我々は路から路へ、小路や横町を抜けて、二百五十ばかりの新聞をすつかり配達してしまつ

た時には、空は已に明るくなつてゐた。

我々は大急ぎで歸途についた。腹は空つぽになつて居て、ピリツと痛みを覺えた。昨夜は六圓二十錢をすつかり主人に保證金として取上げられて、終に飯を食ふことが出来なかつたし、昨日の朝、晝、否……この數日間は減つて行く金を見ると、心細くなつて、終、一度も満腹に食つたことはなかつたのであつた。

私は、今歸つたら香しいミソ汁付の御飯が待つて居て、直ぐ腹一杯食へるのだと考へると、宛も、それが目前に並べられてゐるやうに、唾を呑み込んだりした。

——今度こそ……安心して腹一杯食へるのだ——と考へると、足を冷さも、身體の震へも、腹の痛みも、一時に忘れたやうに、からりとして爽やかだつた。

所が田中は私を店の方へは連れて行かないで、少し手前の横町に入つて、その角にある飯屋の前に立つた。

私は夢心地で、何が何だかさつぱり分らなくなつてしまつた。私は店の方で食はしてくることに自分で定めてゐたのであつた。所が、今田中君は私を飯屋の前につれて來たのである。而も、私は今無一文である……

「田中さん……」戸を開けようと手をかけた田中君を呼び止めて、「田中さん……私お金がないですが……昨日あつた六圓二十錢は、皆保證金として、主人に預けてしまつたので……」と言つた。

田中は戸に手を下して、暫くポカンと私を見て居たが、やがて思ひ切つたやうに、

「まあ……入らう。私が立替へてやるから……」と又戸に手をかけて、ガラリと開けてから私を促がした。

私の元氣は一時に何處へやら……

やつと安心して腹一杯食へると思つて居たら、又こんな始末だ。私は悲しかった。

——併し、こうして働いてゐるのだから、立替へて貰つた所が、返せぬことはない筈だ——と考へなほして、無理に元氣をつけたので、私はやつと半腹の飯をつめ込むことが出来た。

「君……それでいゝのかい？……大丈夫だから腹一杯食へよ……」

田中は考へた以上に優しい氣のきく男だつた。私がこんな大きな身體をしてゐるのに、彼の半分も食はないで箸を置いたのを見ると、こう言つて私を勵したのであつた。

けれども、私は田中君が氣の毒になつて、それ以上食ふ氣にはなれなかつた。腹は未だくへつてゐるのだが、

「もう澤山です。有難う御座います」と言つて、私は彼から目をそらした。

彼の顔を見ると、氣の毒になつて、恥しいやうで堪らないからだ。

同僚達も、皆、此處で飯を食ふらしかつた。今數人來て食つて居るし、食つて出て行く人も居るし、又後から後からやつて來る顔を見ると、一度見たやうなのが多かつた。

田中君が勘定を拂つた後、私は彼に跟いて出た。彼は十二錢食べて、私は八錢食べた。

出てから、私は又お禮を言はうと思つて寄つて行つたが、彼のその態度（一寸も傲慢ではないが、お

禮を言はれるのが嫌で、もぢく(困惑する)を見ると私は黙つてしまつた。彼も黙々と歩いた。

店に歸つて、二階に上つて見ると、早い人は、己(こゝろ)に七八人歸つて來てゐた。學校へ行く人もあり、本を讀んでゐる人もあつて、お喋りをしてゐる人もあるが、二三人は再びフトンを出して、その中に潜り込んでゐた。

學校へ行く人を見ると、私も早く行き度い心で一杯だつた。併し給料を貰ふ迄の飯代を考へると、私は憂鬱だつた。何時迄田中君に立替へて貰ふことも出来ないだらうからである。田中も學校に出てゐるさうで、費用も相當かゝるのだから、どの位立替へて貰へるかは疑問である。

こうして私が考へ悩んで、壁にもたれて、窓から往來を見てゐると、學校へ行く用意を整へた田中君が、五十錢玉一つを二本の指ではさんで、

「君、これを貸してやるから、持つてて午飯でも喰へよ。その中に何とか心配しやうよ」と言つた。私は辭はることも出来なかつたが、直ぐ手を出す勇氣もなかつた。私はぢつとそれを見つめて、

「大丈……夫？」と言ひかゝると、

「大丈夫だ。取つて置き給へ」と彼はその銀貨を私の膝の上に落して、トントンと梯子段を飛び降りて行つた。

私は急いでそれを拾ひ上げると、しつかと握りしめて、又目を外に向けた。

田中の思ひやりに私は感激してしまつて、涙が出さうだつたのである。

——生活がどうにかなつたら、少しお禮をせばならぬ——

私はこんなことを考へたりした。と、私は又「フンく」泣く聲を耳にしてハツと振り向いた。見ると昨夜泣いてゐた十四五歳位の少年である。

彼は名残り惜しさうに包を片付けてゐたが、相變らず「フンく」鼻をすゝり上げて、梯子段を下りて行つた。

——親でも戀しくなつて來たのだらう——と夜のやうに一人で定めて、その儘、再び窓外に顔を向けた。暫くすると私は、彼が往來の向へ向へと、段々に小さくなつて、振り返り振り返りして歩いて行く姿を見た。

私はなんだか悲しくなつてならなかつた。

X

こうして、この日の夕刊配達に私は又田中君について歩き、翌日の朝刊からは、私が新聞を抱へて配達して歩いた。田中は私の後に跟いて間違ふ度に注意してくれた。

この日は非常に寒かつた。路上の水が凍つてしまつて刺々しかつたので底なしの足袋をはいた私には殊のほかこたへた。手は昨日のやうに何時も懷に入れて置くことが出来ないで、凍えて堅くなつてしまつた、^{（ツマ）}兩戸の隙から新聞を差し込むことはなかなか難儀だつた。

それでも、私は半時間も遅れないで、新聞を配達してしまふことが出來た。

「君の頭はとつてもいゝな！ たつた二度跟いて歩いたゞけで、二百五十の所を殆んど間違はなかつた……」

歸途、田中君はこう言つて私をほめたほど、自分でもうまく行つたな……と考へる位だつた。注意されたのは二つか三つ廻る所の十字路で一寸迷つただけであつた。

この日は丁度日曜だつたので、田中の學校も休みだつた。朝飯が済むと、新讀者勧誘に出るんだと言つて私を誘つたので、私も一緒に出た。我々二人はいゝ友達になつて、色んなことを喋りながら方々を歩き廻つた。私は田中君の如きいゝ友達が出來たことを喜んだ。

「私が彼に學校のことを色々聞いた上、

「私も早く何處かの學校に行きたいと思ひますが……」と言つた時、彼は、

「さうか……それはいゝ！ 僕等二人で助け合つて一生懸命にやつて行かう」と言つた。

こうして毎日田中は自分の飯迄減らして、私に飯代を立替へてくれ、足袋代を貸してくれたりした。

X

「お前配るところをすっかり覺えたかね？」

三日目の朝刊を配達して歸つて來ると、主人はこう言つて私に聞いた。

「はい！ すっかり覺えました」

こう答へる私は、心から朗かになつて、何だか自慢したいやうな浮きくした氣持になつてゐた。

「では、今日からお前は新讀者の勧誘に出給へ。配達は當分田中がやればいゝのだから。だが、何か事故のある場合にはお前が配達に行かなくちやならぬから、忘れてはいけないぞ」と、こう言ふ命令である。田中と一緒に歩けないことに、私は多少の淋しさを感じないでもなかつたが、そんなに自分の好

都合ばかりがあり得る譯もない筈だから、私は何でもやる決心で、

「はい！」ときつぱり答へた。田中君には、どうせ、朝晩、一緒になれるんだから。又配達にしたところが、何時も二人で歩ける譯もないから、私は何をやらされてもいゝのである。食ふことが出来て、多少でも親に送ることが出来ればいゝのだから。それに讀者勧誘にしたところが、夜は暇だから、學校に通ふことも出来ぬ筈はない——と私は考へた。

こうして、その日から私は配達に出ないで新讀者勧誘に廻つた。朝八時に出て、お午は途中の飯屋で飯を食つて、夜の六時頃店に歸りついたので、勧誘した新讀者はやつと六人であつた。

その翌日は八人で、又次の日が十人、それから十人と七人の間を繰返した。

「お前は、何時も成績が悪いぞ！ 十五人位勧誘し給へ。十五人出来なかつたら駄目だ！」

勧誘から歸つて來ると、何時も成績が悪いぞと言つてにらまれるのだが、入つてから十日目に、彼はより猛烈に私にこう言つたのである。

十五人！ 考へて見ると今の二倍である。今だつて、私は休みなしの一生懸命だ。何處から一體その二倍を勧誘することが出来やう？

私は心配になつてきた。

その翌日、私は夜の明けない中に出たが、勧誘は配達と違つて、人に會はなければならぬので、結局、こんなに早く出ても、役には立たなかつた。夜迄「今晚は……」と言つて、押賣り同様に、手當り次第戸を開けては哀願したが、あんまりいゝ効果も見えなかつた。それに寒いこの頃の夜は、九時頃にもな

ると、大抵閉め切つてしまつて、どうすることも出来なかつた。

それでもこの日とつて來たのはやつと十一人である。十五人には未だ四人不足なのだ。だがこれ以上の努力は、やらうと思つた處が、どうにもならないことである。

この日、私は疲れ切つて歸つて來ると、時計は己(マユ)に十時十分前であつた。八時に寝る配達の同僚は、もう一寝入りした時だし、主人ももう寝てしまつてゐた。翌朝を待つて主人に報告すると、

「十一人? ……未だ未だ……もつとく努力せねばいかぬ。これぢや駄目だ!」との權幕だ。

事實、私は、今日こそほめられるだらうと期待してゐたのに、この權幕だから、私は怖けつてしまつた。それでも私には文句がなかつた。奴隸より一體何處がいゝと言ふのだらう!?

「はあ……はあ……」と私は引き下るより外なかつたのだ。勿論私は直ぐ又勧誘に出た。この日はとても慘めであつた。私は泣きたい位に悲しかつた。私は同じく夜の十時頃になつて歸つて來たのだが、それでやつと六人だつた。十一人でさへ「いかぬ」の連發だ。六人ではどうして報告することが出来やう? ……(後で聞いた話ですが、こんな場合、同僚はよく幽靈讀者を拵へて、一時を糊塗するさうだ。

ところが拵へただけの幽靈讀者の新聞代は自腹を切らねばならぬので、稼ぎ高の半分を幽靈讀者にとられるのさへ居たさうである。勿論主人は幽靈讀者に反對する理由はなかつた)

翌日私は怖るゝ主人の前に出たが、彼は、六人と聞いて顔色一變、偉い權幕だつた。顔を眞紅にして、右手で机を叩きながら、

「六人? ……お前は一體何處でぶらついて來たんだい? 保證金が足らぬにも拘らず、同情して入れ

たんぢやないか？ その時、人の倍働くことを約束したのを忘れたのかい！ やめろ！ お前のやうな人間は役に立たぬ男だ！ 直ぐ出て行け！」と、保證金の不足を楯に呶鳴られた。

私は何時ものやうに、弟妹三人を抱えた母、三百萬の失業者、一ヶ月無駄足を運んで職にありつけ得なかつたことを思ひ返して、ぢつと忍んだ。

「だつて……町から町へ、一軒も漏れなく勧誘して、一日五百戸もの家を訪ねたが、不要の所は不要だし、買った所は己(マイ)に買つてゐるので、自分に與へられた区域内では殆んどシラミつぶしに當つて見たんだから……」

と私は答へたかつたし、又こう答へるのが當然ではあるが、私はこれだけを言ふ元氣がなかつた。又事實、こう答へることは、失職を意味してゐた。そこで私は、

「明日からもつともつと精を出しますから、どうか御勘辨下さい……」と哀願するより外なかつた。だが實の所、これ以上精の出し所を私は知らなかつた。これがその日の勧誘成績で直ぐ裏書された。

この日から以後、毎日勧誘した數といへば、三人四人、多くて六人を上ることがなかつた。これは決して私が意地で怠けたとか言ふやうな理由からではなく、指定された区域内では、買ひさうな人は皆んな讀者になつてしまつてゐたので、毎日拾つて來る三四人は大抵新移住者に限られてゐたからである。

「お前に同情して、お前の働いた分は勘定して置いたから、それを持つて直ぐ何處かへ行き給へ。當店は嚴格にやる主義で居るから、何時もは、月に滿たないものは、給與しない規定になつて居る。これは特別だから誰にも言はないで、とつて置いて、何處へでも好きなどころへ行け。可哀さうだが、お前

のやうな役に立たぬ男は仕方がない！」

二十日目である。主人が私を前近く呼びつけて、こんな説諭をした上、左記の如き勘定書と共に四圓二十五錢を私の前に押しやるなり、私の存在を忘れたかのやうに、机に向いてしまった。

私はポカンとして読んで見た。

讀者勧誘一人に付	五錢
勧誘人總計	八十五人
合計	金四圓貳拾五錢

私は今追つぱり出されたらどうしやうか……と驚いた。殊に、金四圓貳拾五錢也を見た時、私は啞然として、暫く口が開かなかつた。朝の六時頃から夜の九時頃迄歩き廻つて、それが二十日間も續いて、たつたの四圓貳拾五錢！

——こうして金を出された以上、何と言つても駄目だ。止むを得ない。併し只の四圓貳拾五錢は間違ひだらう——と私は考へたので、

「この金は間違ひではないでせうか？……」と聞いて見た。と主人は突然癡猛な顔を私に向けて、

「何が間違ひだ？ へえ？ 何處が間違ひだ？……」とつめよつた。

「二十日間も……」

「二十日間がどうした！ 一年間でも十年間でも同じことだ！ 働かぬ奴に何處から金が降るものか！」

「私一寸も休みなしに……」

「何？ 休みなし？ その反対だらう？ 働きなしと言へ！」

「……………」私は言ふべき言葉を知らなかつた。私は諦めて、

「——これでも保証金の六圓貳拾錢と合せたら十圓二十五圓(十圓)になるから、この二十日間田中君から借りた八圓を返しても、後貳圓貳拾五錢(十圓)残りがあるから、喧嘩してもしやうがない——と言ふ考へから、

——もうかれこれ言ふまい！ 保証金を返して貰つて出て行かうと思つて、

「仕方がない！ では保証金を返して下さい」と言ふと、彼は、如何にも私を馬鹿にしたやうにせゝらと嘲り笑つて、

「保証金だつて？ お前規定を讀んで、どれもこれも承知だ、只保証金が足らんと言つたことを覚えてゐるかね？ 忘れたのかい？ 或は規定を忘れたのか？ 忘れたのならもう一度讀んで見い！」と言つた。

私は、もう一度驚かされた。當時は保証金の不足にばかり氣をとられて、終り迄讀まなかつたが、一體どんなものだらう……と私は胸を轟かせて、もう一度規定を讀んで見た。私は第三條迄を省いて直ぐ第四條を讀んだ。

其處には、明らかに、こう書いてあつた。

第四條、四ヶ月以上勤續者に限り、保證金の還付をなす。

私の心臓が破裂して、血液が怒濤のやうに全身を荒れ狂つたやうな感じを覺えた。

私の睨みつけてゐる主人の顔は、相變らず皮肉の微笑を帯びて、

「どうだね？　それでも未だ保證金を返せと言ふのか？　さつさと出ろ！　愚圖くしてゐたら一錢もやらぬぞ！　今讀んだから分つたらうが第七條勤續一ヶ月未滿の者には給料の給與をなさずとあるのだぞ！」

私は第四條に氣をとられて、又も次を讀まなかつたが、顔を向けて見ると、確かに、一字も違はず彼の言ふ通りに書いてあつた。

確かに特別の優待である！

私は目に涙を浮べて、あやしげな步調で其處を出た。ガラス戸には憎らしい程鮮明に「配達人募集」の貼紙が私の心を捉へて又貼つてあつた。

私は其處を出ると、直ぐ電車で、田中に出てゐる學校の前迄行つて、彼にこの經過を話し「借りた金は先づ三圓位お返して、殘額は次になんとかしてお返します。自分に一圓二十錢ごちだけ當分の費用として持たして下さい……」

と頼んだところ、田中は僕から一錢も返して貰ふ考へのないことを言明した。

「君にまでこう出るとは思はなかつた。君が入つた當日、十四五の子供を見たか知らぬが、あれも君と同じ餌に釣られたものだよ。あれは讀者勧誘なんて全然駄目だつたんで、六日間で、保證金拾圓を捲

きあげられて、一錢も貰はずに出たのだ。

實にけしからぬ奴だ。

我々はこれから何とか對抗する方法を講じなくちやならぬ！」と堅い決心を見せて言つた。

つまり、我々餓え切つた失業者は、あの鬼テグス以上の牽引力を持つた貼紙に依つて、うまうまと釣られて行つたのであつた。

私は田中の人格にひどく感激して、彼と別れた。そして、二人の極端なる人間を、まざまざと見せつけられて、今更ながら驚いた。

飯を減して迄、私に飯代、足袋代を立替へてくれ、私が追ひ出されたのだと聞くと、返さうと言ふ金を「いゝ！ いい」とつき返す田中が居る反面には、只でさへ失業で困り切つて居る私から、持金を奪つて抛り出す、自分の腹を肥す爲めには人を殺しても厭はん人面獸心の新聞舗主人が居る。

私はこの鬼畜のやうな新聞舗主人を考へると、怖けつてしまつて、田舎に逃げ歸らうかとさへ考へた位であつた。併し、三十五圓もする汽車汽船賃は、首を賣つたところで、出来さうもない大金であつた。私は人通りを避けて歩いて上野公園のベンチに腰掛けた時、一時にがっかりしてしまつて、どんなに心の中で泣いたことか！

その中に私は田中を考へることに依つて、幾何かの心強さを覺えた。と、終には、別れ難い氣持にさへなつた。

こうして、あれは、これほど考へに耽つてゐる中に、私は故郷に残して來た、三人の弟妹を抱へて、

もう餓に攻められてゐるであらう母親を考へて、再び、心臓をエグられるやうな心細さを覺えた。

と同時に、私は、故郷も大して變つては居ないことを、始めて發見したかのやうに身顛ひした。それが、新聞舗主人のやうにぢり／＼と迫つて來て、吾々の血を吸ひ、肉を搾り、骨迄しやぶらうとして、吾々をこのどん底にたゞきこんだことに變りはなかつた。

でなかつたら、私は、今頃、此處をこうしてウロツク必要もなく、今でも母や弟妹と一緒に、靜かな百姓生活を樂しんでゐる筈である。

父の代迄の我が家には、二反歩ばかりの田と五反の畑を所有してゐた自作農であつた。従つて、生活に困るやうなことはなかつたのである。

ところが、數年前、私の村の××製糖會社が農場を開設すると言ふので、盛んに土地の買収をしようと活動した。勿論、始めの中は、誰も應じようとはしなかつた。自分の生命のやうに、大事にして來た耕地だからである。

併し、彼等が一旦やると定めたことだ。會社としてもウヤムヤに引込む筈はなかつた。其處で、二三日する中に、警察の方から、家長會議を開催する由の通達が、保申(まもり)を通じて村の各戸に漏れなく傳へられた。おまけに「印章を携帯せよ」と書き加へられてあつたのだ。

當時、私は十五歳で、公學校の五年生であり、今より五、六年ばかりも前の出來事ではあつたが、あまりに印象深かつたので、今でも、當時の様子は明瞭に思ひ出すことが出来る。村は大恐怖に襲はれたのだ。

その時、父は保証をしてゐたが、管内の爺さん婆さんは、この通達以前からの緊張した空氣の中で、ビク／＼して、泣き面をさげてはひつきりなしに、私の家にやつて来て、顫聲で、

「どうしませう？……」

「どうなるでせうか？……」

「どんなことでせうか？……」

などと聞いたものだ。同じこの時に、私の父が隠れて泣いてゐたのを、三度も私が發見した位である。こうした空氣の中に、會場(マヤ)は通達された日の翌日午後一時に開かれた。會場は村の中央にあつた媽祖廟である。集まらないものは嚴罰すると言ふ前フレがあつたので、各戸の家長が集つた。四五百人もあつたらう。可なりに廣い廟は、ギツシリと詰められた。私は學校が午後から休みなので、隅の方に隠れて、様子を見た。何故なら、幾度も發見した父の泣き顔が氣にかゝつてならないからである。

鈴が鳴ると、太鼓腹のハゲ頭が机の上に立ち上つて、氣どつた態度で、こう話した。

「私の會社は、この村の爲めに、今度この村の北の方一帯に農場を開設することに決めた。そこで、お前達の土地を買ふ話になつたのだが、先日にも地圖迄公示して、その區域内に土地を所有して居るものは、印章を持つて、會社に出頭せよと掲示したのに、今になつて、一人も出頭しない。わざ／＼原料委員迄煩はして、所有者の家を一々廻つたにも拘らず、皆が陰謀して居る様子に見受けられ、承諾すると言ふ人が一人もなかつた。この事實は、共謀と見なければならぬのだが、會社としては、さう言ふ意味に解釋し度くない。それで、只今、皆に集つて貰つたのだが、後から皆が了解出来るやうに大人に

も、村長さんにもお話しをして貰ふことにしたから、話しが濟めば、皆、この紙に印章を押しなさい。會社としては普通よりいゝ値を出すつもりだ……エヘン」この雄辯は當時私達五年生の受持教師陳訓導が通譯したが、彼は「共謀」と「陰謀」の文句には、特に力を入れたので、村の衆は皆吃驚してしまつて、顔を見合せた程だつた。

その次ぎに出たのが……補大人で、當村の……分室主任、机の上に立つや凄い目でギロリと皆を一つ見廻してから、

「今、山村さんも話されたやうに、會社の今度の計畫は徹頭徹尾、村の爲めに考へたことである。吾人はこの會社の計畫に有難く感謝するのが當然であるのである！考へて見い！今お前達が會社に土地を賣る……而も高い値で賣る、さうして會社がこの村に模範的な農場を建設する。さうすると、この村は段々に發展して行く。吾人は會社がこの村を選んだことを光榮とせねばならぬのである……然るに、一部には「陰謀」をして居る様子があると聞く。そんな「非國民」には斷じて容シやしない考へである……」

と呶鳴つた。彼の通譯は林巡查であつたが、陳訓導と同じく「陰謀」と「非國民」と「容シやしない」に力を入れたので、皆は又も顔を見合せた。

皆の記憶には、陰謀をした余清風、林少猫等に對する征伐の血醒い有様が生々しく残つてゐるからだ。最後に立つた村長は、老年の溫和さで、猫撫聲を出して、

「兎に角、大人方の希望に即して、皆さんは會社の好意を喜んで受けたがいと思ひます」と言つた

ゞけで皆の名前を呼び出した。と皆は動搖した。

始めて呼ばれた人々は、自分を陰謀の首魁と見られたのではないかと言ふ狼狽が、ありありと顔に表はれぶるぶる顫へながら出て行つたが、

「お前は歸つてもいゝ！」と言はれた時も、ポカンとしてゐて、もう一度「歸れ！」と呶鳴られて、始めて我に歸つて逃げ出すと言ふ始末！

走つて歸る途中も、聞き違ひぢやないか？ とか、又呼び戻らされはしないか？ と言ふやうな不安で、氣が氣でないらしく、王振玉の如きは、家に着く迄に百五十回も振返つて見たと言ふ、ナンセンスもあつたとのことだ。

こうして八十人ばかり呼び出されて、歸された。

こうなると、今度は残された者の驚く番となつた。私の父も残された一人だつた。皆は、不安の爲めにどよめき立つた。首を伸ばして、耳をそば立てゝ、又呼びはしないか？ 自分の名前を呼びはしないか？……の期待で、大多數の者はそはくしてゐた。

この時、

「皆印章を出しなさい。今度名前を呼ばれた人は、印章を持つて來て押せば、歸つて宜しい」と村長が説明してから呼んだのが、私の父だつた。

「楊明……」と言ふ父の名前を聞いた時、

——どうなるだらう？……—— と私は氣が氣でなくなつて、カタツを呑んで思はず拳を握つて立ち

迄の六日間は、殆んど泣き通しで、三度も卒倒し、見違へるほどに痩せてしまった。

六日目に父は歸つて来たが、彼も又、非常な變り方で、均整のとれた父の顔は、ゆがんでしまつて、片方の頬はひどく腫れ上り、目はつき出てしまつて、額はコブだらけであつた。着物はボロ／＼になつてしまつて、それを着換へる時私は父の身體を見て吃驚してしまつて、大きな聲でこう叫んだほどであつた。

「おゝ！ 父ちゃんの身體は鹿のやうになつてゐる……」

事實、父の身體には鹿のやうなハン點が身體中に一杯出来てゐたのであつた。

それからの父は、一變してしまつて、ムツツリと、何一つ口を聞かなくなつた。

飯も三碗づゝ食つて居たのが、一碗も食べ切れないやうになつて、寝ついてから五十日目に、とう／＼永眠してしまつた。

同じ頃に母も寝ついてしまつたので、私は一つと三つと四つの三人の弟妹を抱へて、どんなに途方に暮れたことか！

叔父と叔母が、少しでも閑があると、直ぐやつて来て世話して呉れたからよかつたものゝ、さうでなかつたら、恐らく我々の一家は全滅してしまつたであらうと思はれる。

こうして、父が……分室から歸つて來ると、机の上に叩きつけた六百圓（話しに依ると、時價二千圓位だつたさうだが、會社は六百圓を以つてゝ値だとした）は、父の病氣、母の病氣、それから、父の葬式等で、殆んど消えてしまつて、母の工合が少しよくなつた頃には、牛や農具を賣つて食はねばなら

なくなつてゐた。

私が志を立て、東京に出て来る頃には、牛も、農具も、家の庭園も、皆賣つてしまつて、その食ひ残りが只の七拾餘圓であつた。

「しつかり勉強して……ね!」と母が涙聲で、戸口に立つて私を見送り、勵まして呉れた、その様子が、目の前に見えるやうだ。

この慘狀は、私一家だけではなかつた。

父と一緒に……分室に引張られた五人は、皆、同じこの運命に會つたし、黙々と印章を押してやつた人達も、耕す田を失つて、月に三日乃至五日間位、製糖會社農場の苦力として、一日十二時間働いて、四十錢位にありつくのがせいぜいで、皆が皆、土地を賣つた金で食つて行く外なく、その金が消える頃には、村の有力者達が言つた「村の發展」とは反對に、今頃では「村の離散」になつてしまつてゐるのであつた。

×

こんな思ひ出に耽つてゐる間に、何時の間にか、太陽が没してしまつて、上野の森は暗闇に隠れ、山下では電氣が賑やかに輝き出した。私も寒さが身にしみて、居堪らなくなつて來た。私は晝飯を食はなかつたので、空腹を感じた。

私は大きなあくびと共に、身伸びをしてから、阪を下りて、とある裏通りの小さな飯屋に入つて飯を食つた。しほれかゝつてゐる身體に、幾分かでも元氣を呼び醒さうと思つて、思ひ切つて私は腹一杯に

飯をつめ、その上、焼酒をコップ二杯ばかり飲んで見た。

それから、今迄よく世話になつて来た、木所の××木賃宿(マツ)に足を向けた。

私が家の中に一步踏み込むと、主人は直ちに私を見つけて、

「おや！……臺灣さんぢやないか！ 暫くだつたね。この間、何處さ行つて居たの……」と聞いた。

私は、新聞配達になつて、保証金を奪はれて、酷き使はれて、今追出されたのだとは言へなかつたので、

「ち……ちよつと友達のところへ……」と言ふと、

「友達の……ふむ大分老けたね！」と不審がつて、

「ラオオでもやつて、お上に厄介になつたで——ねえか？……ワツハハハ……」と笑つた。

「ラオオ？……ラオオつてなんのことですか？」と私は理解出来ずに聞いたら、老爺は可笑がつて、

「ラオオ知らぬのかい？……ワツハハハ……やつぱり田舎者はウトイな……」

と冗談に言ひながらも、大分氣の毒がつてゐる様子が見え、

「さあくお上りなさい。何だか大變疲れてゐるやうぢやないか……上つてゆつくりと休めよ」など

言つて呉れた。

私が上ると、

「楊さん！ ではこれでもやつたのかい？」

と言つて、彼は手をコツソリ懐中に入れる振りをして見せた。明らかに、私が警察の厄介になつて來

たと思つてゐるらしい。當時、ラヂオのことを私は知らなかつたが、手眞似を見せられると、今度言つてゐるのがスリをやつたんぢやないかと聞いてゐるのがよく理解出來た。私は怒る元氣もなかつたが、それでも顔を紅らめて、狼狽氣味で、

「いゝや！ そんな事やるもんか！」とキツパリ打消した。老爺は、それでも信ぜられ^{イヤ}ないと言つた様子で、氣の毒さうにしてゐたが、併し無理に聞かうともしないらしく、直ぐ笑顔になつてニコく笑つてゐた。

事實、私の様子が警察の豚箱から出たばかりに見えたであらう。

私が足袋をとつて、上りかけると、

「やあ、忘れてゐたことがあつた。お前さんに書留が來てゐたぜ！ お前さん何處さ行つたか、一寸も分らないもんだから、その儘とつて置いたが……待つてらつしやい……」と言ふなり、奥の方に入つた。

私は何處から書留なんか來るのだらう？ と不審に思つた。

暫くすると、一枚の書留郵便を持つて、老爺が再び現はれた。私はそれを見て、ハツとした。

母からである！

——一體何の用で書留なんかにしたんだらう？……——

私は不審でならなかつた。

私は手を顫はして開封した。と……何と中から現はれたのは、百貳拾圓の爲替ではないか！ 私のも

う一度驚いた。私の頭を疑つた位である。私は胸を轟かして、讀み憎い母の筆跡を一字一字拾つて行つた。と、私はひどい衝撃を受けて狂はんばかりだつた。知らず知らずに、私は爺さんの前で、涙を落したのであつた。

「どうかしましたか?……」

爺さんが不可解の顔で、私を見つめて、こう聞いたが、私は何とも答へることが出来なかつた。金を貰つて泣くのを爺さんとしては見たことがなかつた爲めであらう。

私は自分の寢場所に入るとフトンの中に潜り込んで、どんなに泣いたことか……

手紙の意味は大體こうである。

——東京は不景氣で、直ちに仕事を見つけることが出来ない、と言ふ手紙は受取つた。お前が持つて行つた金はもうなくなつてゐるだらうと考へると、心配でならぬ。一人も知合のない、そんな遠い所に、只一人、仕事を見付けることも出来ないで、困つてゐるお前を考へると、胸をエグられるやうです。併し、故郷も同じことです。農場が出来てからこんなになつてしまつて、どうすることも出来ません。ですから、弱氣を出して、歸つて来やうなんて考へを持つてはいけません。家屋を賣つて、百五十圓出来たから、百二十圓お送りします。何とか足にして、早く仕事を見つけて、成功するやうに、よくよく勉強してから御歸りなさい。私の身體は、もう長いこと持ちませんから、そんな場合、人の厄介になつても、厭ですから、三十圓残して置きました。阿蘭と阿鐵は、とうく死んでしまひました。お知せし度くありませんが、どうせ分ることですからと思つて、お知せすることに決心したのです。母は、唯々、

お前の成功を祈つてゐますから、成功しない間は、どんなことがあつても歸つて來なされる……

これは母の唯一つのお願ひですから、よく覚えて居て下さい。成功して歸つて來たら、叔父さんのところに預けて居る、お前の只一人になつた弟を、引とつて、世話して上げなさい。身體はくれぐれも大事にしなくてはなりませんよ。……さよなら——

まるで遺言のやうな書方です。私は氣が氣でなかつた。

——ひよつとすると、もう死んでゐるのではないだらうか……——等と言ふ考へが、私の頭にこびりついて離れなかつた。

——馬鹿な！ そんなことがあるもんか！——と、私は身返りを打つて、頭を振つて、こゝろに出して言ひながらその不吉な考へを打ち消さうと努めたが、どうすることも出来なかつた。

こうして、一晩中、私は一睡もし得なかつたが、ノミの襲撃も全然感じなかつた。

私の頭は母のことで一杯だつた。

母が自分で、こんな手紙を書いて來たからには、ひどく悪い筈だ。それに日付を見ると、この手紙は自分が新聞配達に行く前に出したもので、已に二十日以上も経つてゐるのだ。この間、一つも手紙を受取つてゐないので見ると……私は愈々不安になつて來た。

さうして歸る決心を堅めた。一旦、歸つたら、再び出て來られるかどうか！ 私には自信がなかつたが、それでも僕は（母の手紙を見てから）ちつとしては居られなかつた。

——歸る前に、田中君から借りた金を綺麗に返して置かう。で、序に、これ迄世話になつたお禮も言

ひ、一寸歸つて行く挨拶をもして置かう……

こう考へながら、私は翌朝の始發電車を待ち兼ねて、とう／＼一睡もしなかつた。

×

電車の窓から顔を出して、朝の冷い空氣に吹かれると、寝不足と興奮で、ポーとした頭は急に晴々しくなつた。

——これが東京の見おさめかも知れん——と考へると、××新聞舗主人のこと迄忘れて、なんだか、名残り惜しい氣がしてならなかつた。昨夜、故郷に懐れて、いら／＼したこの私ではあつたが、今は會ひたいと思ふ母及弟の面影が、窮乏と離散せる村の慘狀に遮ぎられて、歸ることが急に怖ろしくなつて來るのを覺えた。

斯る感情の變化は、今訪ねやうとする、別れ難い田中君の魅力に、或る程度の影響を受けてゐることは確かだつた。

その思ひやり深い、理智的な、お世辭を嫌惡する素朴さ……これは私の理想とする人間のタイプであつた。

私が××停留場を下りて、横町を二つ横ぎつて、例の飯屋に行きついた頃には、彼は已に配達を済まして、歸つて來る所だつた。

私は其處でひよつくり彼に會つた。

彼はもとよりのムツツリ屋だつたが、今朝は一層陰鬱に見えた。

併し、彼の陰鬱は毫も人に不快な感じを與へる性質のものではなく、却つて、親しみ安いものだった。彼はうつむき加減で、何か考へ深さうに、黙々として靜かに歩いて來るのだった。

「田中君！」

「やあ！ 早いですね！ 昨日は何處に泊つたの……」

「この前泊つた本所の木賃宿に……」

「さうか！ 昨日は終に君の行く所を聞き漏らしたが……早いね」

この「早いね！」は、私には「何か急用でも？……」と聞いてゐるやうに響いた。

其處で、私は直ちに切り出した。併し、別れると言ふのが淋しくて孤獨感がひしくと身に迫つてならなかつた。

「實は、昨日木賃宿に行つて見たら、家から金を送つて來てゐたので……」

と私はこんなところから言ひ出さうとすると、

「金？……それは何時でもいゝじゃないか！ 君には何時職につけるか見當がつかやぢやないか！ 持つて居るがいゝよ！」と彼は言ふのであつた。

「いゝえ……相當澤山送つて來たのだ。後ほど一緒に郵便局に行きませう」と私は言つてから、

「實は序に挨拶に來たのだが……」

と言ひかけて、何んだか、言ひ憎くなつて顔を紅らめた。

「挨拶だ？ 何時もの御世辭なら御免だよ……」と彼は苦笑して迷惑さうだつた。

「いゝえ！ 實は、金と一緒に母から手紙が来たが、何んだかお母さんの身體がひどく悪いやうだから、一度歸らうかと思つて……」と言ふと、彼は私を見上げて、

「歸れとでも言つて来たのかい？」と、淋しさうだった。

「いゝえ……歸つてはいけない……よく勉強して成功してから歸れと言ふけれど……」

「それなら、そんなに悪い譯でもないでせうが——」

「いゝえ……どうも悪いやうだよ。それに、その後、何んの消息もないので、どうも不安だから……」

「あつ！ 君、手紙なら来てゐたよ。昨日、君が出た後、一枚来たのだ。故郷かららしいのだ。僕、持つて来てやるから、飯屋で一寸待つて呉れ！」と言つて新聞舗の方へ走つて行つた。

私は直ぐ飯屋に入つて待つたが、家からの手紙と聞いて、幾分心が安らかになつて来たやうだった。併し、何と言つて来たんだらうと考へると、田中君の來るのが待ち遠しかつた。

飯屋のお内儀さんが、

「何にを上げませうか……」と聞いて煩さかつた。

×

やがて、田中は息を切らして走つて來た。

私の全神経は、彼が持つて來た手紙に集中した。彼が戸を開けた時から、私はその手紙が母の筆蹟でないことを、直ぐ見てとつて、不安に思つた。心が動揺した。

彼が入つて來るのを待たず、私は立ち上つて、急いで手を伸して手紙を受取つた。

署名も母のではなく、叔父のだった。

私の顔は曇つてしまつた。胸は高鳴り、手は顫へた。明らかに、私の豫想通りだったのだ。母は死んだのだ。半ヶ月も前に……併も自分の手で息の根を止めたのだ。

私の期待せる只一人の息子……

私が生き伸びることは非常な苦痛ですし、お前の爲めにもよくありません。私の體は、半分以上死んでしまひましたから……。

私の唯一つの願は、私達のやうに苦しんでゐる村の人達の爲めに働ける位、お前が成功することです。

村の人達の惨めさは、言ひ盡せません。お前が東京に行つてから、村はづれの池に身投げして死んだものが八人、阿添叔の如きは、阿添嬢と三人の幼子も道連れにして身投げされました。

ですから、歸る時は、村の人達を救ふと言ふつもりで御歸りなさい。自信のない間、決して歸つて來なざるな！

何をしていゝか、私は分りませんが、村の人達の役に立つやう、努めて下さい。

私は、お前が私の死に依つて、直ぐ歸つて來たりして、無駄な金を使はないやうにと思つて、私の死を、直ぐお前に知せないやうにと、叔父さんに書置きをしましたから……吳々も

母より

これが母の遺書だった。母は決断力の強い女だった。彼女は事毎にブツ／＼言ふ喧し屋ではなかつたが、自分の信ずる所、決心したことに向つては、何時も斷乎として、ときばきだつた。

兄が……となつて、村の人達をいぢめ、村の人達からつまはぢきにされた時、母は、キツパリと離縁を主張して、兄を追ひ出したが如き、その一つの例であつた。私が東京に出て來てから、彼女の苦勞は、察するに餘りあるが、それでも彼女は彼女の長男であり、私の兄である……の世話にならうとは思はず、こうして、とう／＼二人迄も私の弟と妹を失ひ残つた一人は叔父に預けて、自殺すると言ふ程の女である。

この點から言つて、母は、世間で言ふ女らしい心を持つてゐないとも言へやうが、併し、私は、母の氣持がよく理解出來た。と共に、私は、母の氣性が好きでもあり、尊敬もするのである。

今考へることだが、母に、若し………を讀ませる機會があつたら、ツエトキン婆さんのやうな働きをしたであらうし、父が田を賣ることを拒絶した爲めに捕へられた時も卒倒なんかしないで何かの行動を取つたであらうと思はれる。

が、母のこの遺書を見たばかりの時、私は非常に悲しかつた。一時歸郷の念が勃々として起つたほどであつた。

お前の母は×月×日夜明け頃、首を吊つて死なれました。直ぐ電報で御知らせするつもりであつたが、

母の手から遺書を發見し、母の氣持が分つたので、母の希望通りに、今迄御知らせを延ばしました。母は、私宛の遺書で、お前を期待し効のある唯一人の息子だと言つてゐます。お前の兄はさうなつてしまつたし、弟は未だ小さくて、どうなるか知れないので……

ですから、母の死が、直ぐお前に知れて、お前が歸つて来て、前途を臺なしにしては、自分の死が無意味になると言はれました。

弟は私が大事に育て、居ますから、心配せず、母の希望に反しないやう、よく勉強しなさい。歸つて来るなんてそんな考へを持つてはいけません。母はもうこの世の人ではないから…… 叔父より

——母の顔は、もう見られないのだ。彼女は、も早、この世の人ではないのだ——と考へて、私はきつぱりと母の註文通りに努めたがよいと覺悟を決めた。さうして、何とかして、惨めな村の爲めに、働ける迄は歸るまいと決心した。

こうして、私が手紙を讀みながら、ひどく興奮し、心の動搖をしてゐる間、田中はぢつと私を見てゐたが、私が手紙を疊んでポケットに入れるのを見ると、心配さうに、

「何と言つて來ましたか？」と聞いた。

「母は死んぢまひました！」

「死なれましたか？」と言つて感慨無量の様子。

「君、何時歸りますか？」

「歸らないつもりです！」

「……………」

「母は、死んでから半ヶ月も経つてゐるから……………それに、母は歸るな、と言つて來たから」

「半ヶ月の……………臺灣から……………そんなに日數がかかるツマユんですか？」

「いゝえ、母は叔父に頼んで、直ぐ僕に知らせないやうにしたいんです」

「ふむ！ 偉いお母さんだ！」と田中は感嘆した。

私達はこうして話しながら、飯を食べたが、飯は興奮した私の咽喉を通らなかつた。私は田中が食べてしまふ迄待つて金を拂ひ、一緒に郵便局に行つて爲替を現金に替へ、無理に、田中に、借りた金を返してから、所書を書いてやつて一人で本所の木賃宿に歸つた。

木賃宿に入ると、私は直ぐ横になつた。私は、くたくたに疲れ切つてしまつてゐたのであつた。さうして、ぼんやりした中にも、どうしたら、村の惨めな人達の爲めに働けるかと言ふことが考へられたが、妙案に思ひ當らなかつた。

……………金を蓄めて、村の人達に分けてやらう……………とも考へたが、新聞配達をやつて見た今は、一ヶ月以上も無駄足を運んで今猶失職してゐる今は、金を蓄へることはおろか、自分の衣食住の爲めに働くことさへ自分には自信がなかつた。

と、私は一時に倦怠を覺えて來て、二ヶ月來の疲れが、一時に來たやうに、私は何時の間にかぐつすりと寢入つてしまつた。

時々四圍の喧騒で、深海から浅い海邊に押し寄せられたやうに、意識がモーロウとして来る時もあつたが、目を開けることが出来ずに、私は再び深い睡りに落ちて行くのだつた。

「楊君！ 楊君！」

この呼び聲を聞いた時も、私はやはり浅い海邊に押し寄せられた時のやうな意識状態にあつて、うすうす感づいてはゐるのだつたが、眼が開けられないので、又深い睡りに落ちようとした。

「楊君！」

この時、もう一聲がして、私の足を揺つたので、私はハツとして、やつとのことで眼を開けた。けれども未だ醒めきつては居なかつた。モーロウとした意識状態から普通の意識状態に歸つて来る様子は、立て込めた霧の中に立つて、それが晴れてゆくのを見る時のやうな氣持だつた。こうして意識状態に歸ると、私は私の傍に田中が坐つて待つてゐるのを見た。私は急いでフトンをはねとばして、起きなほつた。私はきよとく部屋の中を見廻した。と障子の傍に立つてニコニコしてゐた宿の親爺が、私の狼狽した様子を見て、

「お前、まるで催眠術にかゝつたやうだね……何時間眠つたと思ふ？……」と言つた。

私はきまりが悪くなつて、

「もう夕方だね……」と聞いたたら、

「いゝえ……晝が過ぎたばかりですよ……ハツハツハ……併し日にちが變つたぜ」と言つて笑つた。

私は昨日の十二時過ぎに寝て、今は午后の一時頃である……と言ふのだつた。正味二十五時間眠つた

と言ふのだ。私は自分でも驚いてしまった。

爺が行つてしまふと、私は田中に向いた。

彼は大分緊張してゐる様子だった。

「どうも失禮しました。随分待たれたでせう……」

と言ふ挨拶に對して、彼は、

「いゝえ」と答へて、

「實は大事な話があつて來たのだが……」と興奮して續けた。

「昨日君と同じあの貼紙で、又一人釣られたんだ。君が追ひ出されてから、私は何時も對抗手段はないかと考へ悩んだのだが、皆目見當のない今時に、又一人入つて來たものだから、僕は心配になつて、昨夜コツソリ誘ひ出して、注意してやつたのだ。所が、彼は只、

「ふむ、さうか！ 怪しからぬ奴だ……」

等言つて、私に相槌を打つばかりで、一寸も驚かないのだ。

私はぢれて來て、

「だから……君、別の仕事でも探して置いたが、いゝと思ふぜ……でないと、又酷い目に會はされるから。……保證金を沒收されて、無一文で追ひ出されては……」と言つてやつたのだ。

所が、彼は相變らず、落付いたもので、手を伸して私の手を握つてから、

「有難う！ 併し、さう言ふ目に會つてゐる同僚を見て、君等は黙つて居られるのかい？」と聞くも

のだから、私は少しムツとして、

「黙つて居られないからこそ、今注意してやつてゐるのぢやないか！ その外に、どうしていゝか、私には分らないのだ。近日、私は、そのことで考へ悩んでゐるのだが、どうしていゝのか、さつぱり分らないのだ」と答へた。

すると、彼は非常に喜んで、

「どうしていゝか……と言ふことなら、僕は知つてゐるよ。只、君等が手傳つて呉れるかどうか？」と、言はれたもんだ。

そこで、私は彼に協力を誓ひ「吾々廿八人の同僚は、このことについてなら、大抵賛成する筈だ。皆、主人を蛇蝎のやうに嫌つてゐるから……」と言つてやつたのだ。

それから、彼は色々耳新しいことを話して呉れた。要約すればこうだ。

「私達があんな悪い主人に對抗する爲めの、一番いゝ方法は團結だ、つまり、皆が、一つになつてストライ……（何んと言つたか忘れたが）ストライ……何んとかをやると言つたよ。「勞働者は、一人バラバラになつてゐるから馬鹿にされるのであつて、一緒になつて、皆が一つ心になつて、主人に當り、聞かれない場合は一致の行動をとる……と言ふやうにやれば、いくら悪い奴でもグウの音が出ないやうに、取つちめてやる事が出来る……」と、こう言ふんだよ。で、その人がね……君に會ひたいと言ふんだよ。僕が君のことを話してやつたら。

「さうか……臺灣人にも、さう言ふ目に會つた人があつたのか……」と言つて、

「是非會ひたい。直ぐ紹介して呉れ！」と、田中はその男の希望迄私に話して呉れた。

吾々に囁りついて、生血を吸ひ盡して、追つぱり出した鬼畜生を、叩きつぶさうと言ふ彼等の計畫に對して、私はどんなに喜んだことか！更に、この男が、私に會ひたがつてゐると言ふのを聞くと、私はより以上の好奇心から、早く會ひたいと思つた。

苦しめられてゐる新聞配達夫、失業者達に、鬼畜のやうな主人に對抗する方法を教へることを心得てゐる人なら、製糖會社、不都合なる……、村長等の爲めに慘酷な目に會されてゐる私の故郷の人達に對しても、何らかの助言をして呉れるであらうと私は考へた。

その人（伊藤とか言つた）が、特に私に會ひたがつてゐると言ふ田中の話に、私は非常に喜んだ。

故郷に居た當時、私は、總べての日本人を悪い人だと考へて、憎んでも居た。所が、此處に來て見ると、總べての日本人が悪い人だと言ふ譯ではないやうだ。宿の主人は親切ものだし、田中に至つては兄弟以上……否、私の現在の兄、（巡査）を考へると、親兄弟なんて、問題にならぬ。それと比べるのさへ、田中に對して濟まぬ。

して見ると、臺灣人に善い人と悪い人とがあるやうに、日本人もさうだと見える。

私は直ぐ、田中と一緒に、伊藤に會ふ爲めに木賃宿を出た。

私と田中が淺草公園に入つて、ずつと奥の方に歩いて行くと、其處の木蔭に坐つてゐた一人の男がつかくくと歩み寄つて來て、

「楊君！今日は……」と私の手を堅く握つた。

「今日は……」と私は口眞似したが、キツネにつま(マ)まれたやうだつた。見たこともない男だ。が振返つて見た田中の表情に依つて、私は噂の伊藤君であらうと直ぐ感づいた。私は直ぐ打解けることが出来た。

「僕も暫く臺灣に住んだことがあるよ。君は日本人が好きかね」と彼は短刀直入(マ)に聞いた。

「……………」私は何と答へていゝか分らなかつた。臺灣で會つた日本人には、好きになれさうなのは滅多になかつたからだ。だと言つて、現に、僕は、木賃宿の主人、田中等が好きである。こんなことを聞く當の本人伊藤君も初印象からが好きになれさうである。

私は一寸考へて、

「臺灣に居る時は、日本人を悪い人とはかり思つてゐたが、田中さんは非常に親切な方だ！」と答へてやつた。

「さうだ、日本の労働者は、大抵田中さんのやうに、いゝ人だよ。……………、臺灣の人達が押へつけられ、いじめられるのに反対なんだよ。臺灣人を苦しめる人達はな……………さうだ……………君の保證金を奪つた上に、追ひ出した、あのおやぢのやうな鬼畜達なんだ。臺灣に行つてゐるのは、こんな性根の人と、この鬼畜達の手先が多いからな！併しそんな鬼畜達は、臺灣の人達に對してばかりではなく、我々本國の貧しい人々に對しても、……………達をも苦しめてゐるのだよ。……………つまり、今の世の中は、金を持つてゐる人が、その上に、貧しい人々の働きを奪ひ、うまく奪ふ爲に押へつけてゐるのだから……………」

彼の言葉は一々私の脳底に響いた。私はよく理解することが出来た。故郷の村長は、臺灣人であるに拘らず、明らかに、彼等とくつきいてゐて村の衆を苦しめてゐるから……

私は村の有様を色々話してやつた。彼は非常に注意深く聞いて、

「さあ！ 手を握らうぢやないか！ 君等を苦しめ、我等を苦しめるものは、同じ種類の人間だ！

と頬を紅めて、興奮して言つた。

この會見が済んで三日^(マ)后、私は伊藤君の世話で、淺草の或る玩具工場に働くことが出来た。そして、私は規則正しく閑の時間を利用して、

.....

こうして、數ヶ月後には、私を追ひ出した××新聞舗に於て、ストライキが捲き起された。紅顔で、氣どり屋の××新聞舗主人が、新聞配達夫の團結の前に、青ざめた顔をうなだれてゐるのを見た時、私の胸は躍つた。

私は、そのエビス顔に、一つ拳骨を喰らはして、そのベソをかく處を見たい欲望に驅られたが、我慢した。併し、彼をして承諾せしめた配達夫の諸要求は、私の鬱憤晴しより、更に有意義であつた。

考へても見給へ！

失業者を釣る「配達人募集」の貼紙は剝がされたのだ！

寢部屋は一人に付疊二疊、フトン一枚の割に定められ、新たに隣りの家が借りられて、皆の宿舍に當てられ、疊の表も取換へられた！

勝手氣儘な規定は剝がされたのだ！

ノミ退治の方法が講ぜられたのだ！

讀者勸誘一人當拾錢に値上げされたのだ！

どうだ！ これでも、勞働者は……………！

——この數ヶ月の勉強こそ！ 母の遺言に對する最も忠實なやり方だ——

と、私は確信に満ちて、巨船蓬萊丸の甲板から、表こそ美々しく肥滿して居るが、一針當れば、惡臭ブンくたる血膿の迸りを見るであらう臺灣の春を見つめた。

——一九三四、五、一——

——〔文學評論〕第一卷第八號（一九三四年十月；昭和九年，東京）

送報伕^{①②}

「呵！這可好了！……」

我想。我感到了像背着很重很重的東西，快要被壓扁了的時候，終於卸了下來似的那種輕快。

因為，我來到東京以後，一混就快一個月了，在這將近一個月的中間，我每天由絕早到深夜，到東京市底一個一個職業介紹所去，還把市內和郊外劃成幾個區域，走遍各處找尋職業，但直到現在還沒有找到一個讓我工作的地方。而且，帶來的二十圓只剩下六圓二十錢了，留給帶着三個弟妹的母親的十圓，已經過了一個 month，也是快要用完的時候。

在這樣惴惴不安的時候，而且是從報紙上看到了全國失業者三百萬的消息而吃驚了的時候，偶然在××派報所底玻璃窗上看到「募集送報伕」的紙條子，我高興得差不多要跳起來了。

我高興得幾乎像是從地獄昇上天國的樣子，也是不足為怪的。

「我可找着了立志底機會了。」

我胸口突突地跳，跑到××派報所底門口，推開門，恭恭敬敬地打了個鞠躬。

「請問……」

是下午三點鐘。好像晚報剛剛到，滿房子裏都是「咻！咻！噠」的聲音，在忙亂地疊着報紙。

在短的勞動服中間，只有一個像是老闆的男子，頭髮整齊地分開，穿着上等的西裝，坐在椅子上對着桌子。他把烟捲從嘴上拿到手裏，大模大樣地和煙一起吐出了一句：

「什麼事？……」

「呃……送報伙……」

我說着就指一指玻璃窗上的紙條子。

「你……想試一試麼？……」

老闆底聲音是嚴厲的。我像要被壓住似地，發不出聲來。

「是……是的。想請您收留我……」

「那麼……讀一讀這個規定，同意就馬上來。」

他指着貼在裡面壁上的用大紙寫的分條的規定。

第一條第二條第三條地讀下去的時候，我陡然瞠目地驚住了。

第三條寫着要保證金十圓。我再讀不下去了，眼睛發暈……。

過了一會回轉頭來的老闆，看到我那種啞然的樣子，問：

「怎樣？……同意麼？……」

「是……是的。同意是都同意，只是保證金還差四圓不夠……」

聽了我底回話，老闆從頭到腳地仔細地望了我一會。

「看到你這付樣子，覺得可憐，不好說不行。那麼你得要比別人加倍地認真做事！懂麼？」

「是！懂了！真是感謝得很。」

我重新把頭低到他底腳尖那裏，說了謝意。於是把另外鄭重地裝在襯衫口袋裏面，用別針別着的一張五圓票子和放在懷裏的一圓二十錢拿出來，恭恭敬敬地送到老闆底面前，再說一遍：

「真是感謝得很。」

老闆隨便地把錢塞進抽屜裏面，說：

「進來等着。讓一個叫田中的照應你，要好好地聽話！」

「是，是。」我低着頭坐下了。從心底裏歡喜着，一面想：

——不曉得叫做田中的是怎樣一個人？……要是那個穿學生裝、樣子親切的人才好呢？……

* * *

電燈開了，外面是漆黑的。

老闆把抽屜都上好了鎖，方才走了。店子裏面空空洞洞的，一個人也沒有。似乎老闆另外有房子。

不久，穿勞動服的回來了一個，回來了兩個，暫時冷清清的房子裡面又騷擾起來了。我要找那個叫做田中的，馬上找一個人打聽一下。

「田中君！」那個男子並不回答我，卻向着樓上替我喊了田中。

「什麼？……那個喊？……」

一面回答，從樓上衝下了一個男子，看來似乎不怎樣壞。也穿着學生裝。

「啊……是田中先生麼？……我是剛剛進店的，主人吩咐我要承您照應……拜託拜託。」

我恭敬地鞠一個躬，衷心地說了我底來意，那男子臉紅了，轉向一邊，說：

「呵呵，彼此一樣。」

大概是沒有受過這樣恭敬的鞠躬，有點承不住罷。

「那麼……上樓去。」說着就登登地跑上樓去了。

我也跟着他上了樓。說是樓，但並不是普通的樓，是個閣樓，站起來就要碰着屋頂。

到現在為止，我住在本所●底××木質宿●裡面。有一天晚上，什麼地方底大學生來參觀，穿遍了我們住的地方，一面走過一面都說，「好壞的地方！這樣窄的地方睡着這麼多的人！」

然而這個××派報所底樓上，比那還要壞十倍。

蓆子底面皮都脫光了，只有草。要睡在草上面，而且是髒得漆黑的。

也有兩三個人擠在一堆講着話，但大半都鑽在被頭裡面睡着了。看一看，是三個人蓋一床被，從那邊牆根起，一順地擠着。

我茫然地望着房子裡面的時候，忽然聽到了哭聲，吃驚了。

一看，有一個十四五歲的少年男子在我背後的角落裡哭着，嗚嗚地響着鼻子。他旁邊的一個男子似乎在低聲地用什麼話安慰他，然而聽不見。我是剛剛來的，沒有管這樣的事的勇氣，但不安總是不安的。

——我有了職業正在高興，那個少年爲什麼這時候在嗚嗚地哭呢？……

結果我自己確定了，那個少年是因爲年紀小，想家想得哭了的罷。這樣我自己就安了心了。

* * *

昏昏之間，八點鐘一敲，電鈴就「令！令！令！」地響了。我又吃了一驚。

「要睡了。喂，早上要早呢……兩點到三點之間報紙就到的，那時候大家都得起來……」

田中這樣告訴了我。

一看，先前從那邊牆根排起的人頭，一列一列地多了起來，房子已經擠得滿滿的。田中拿出了被頭，我和他還有一個叫做佐藤的男子一起睡了。擠得緊緊的，動都不能動。

和把瓷器裝在箱子裡面一樣，一點空隙也沒有。不，說是像沙丁魚罐頭還要恰當些。

在鄉間，我是在寬地方睡慣了的，鄉間底家雖然壞，但我底瘡氣總是要掃得乾乾淨淨的。因為我怕跳蚤。

可是，這個派報所卻是跳蚤窩，從腳上、腰上、大腿上、肚子上、胸口上一齊攻擊來了，癢得忍耐不住。本所底木實宿也同樣是跳蚤窩，但那裡不像這樣擠得緊緊的，我還能夠常常起來捉一捉。

至於這個閣樓裡面，是這樣一動都不能動的沙丁魚罐頭，我除了咬緊牙根忍耐以外，沒有別的法子。但一想到好容易才找到了職業，這一點點……就滿不在乎了。

「比別人加倍地勞動，加倍地用功罷，」想着我就興奮起來了。因為這興奮和跳蚤底襲擊，九點敲了，十點敲了，都不能夠睡着。

到再沒有什麼可想的時候，我就數人底腦袋。連我在內二十九個。第二天白天數一數看，這間房子一共舖十二張蓆子。平均每張蓆子要睡兩個半人。

這樣混呀混的，小便漲起來了。碰巧找是夾在田中和佐藤之間睡着的，要起來實在難極了。

因為我想到大家都睡得爛熟的，不好掀起被頭把人家弄醒了。想輕輕地從頭那一面抽出來，但離開頭一寸遠的地方就排着對面那一排的頭。

我斜起身子，用手撐住，很謹慎地（大概花了五分鐘罷）想把身子抽出來，但依然碰到了佐藤君一下，他翻了一個身，幸而沒有把他弄醒……

這樣地，起來算是起來了，但要走到樓梯口去又是一件苦事。頭那方面，頭與頭之間相隔不過一寸，沒有插足的地方。腳比身體佔面積小，算是有一些空隙。可是，腳都在被頭裡面，那是腳那是空隙，卻不容易弄清楚。我仔仔細細地找，找到可以插足的地方就走一步，容易才這樣地走到了樓梯口。中間還踩着了一個人底腳，吃驚地跳了起來。

小便回來的時候，我又經驗了一個大的困難。要走到自己底舖位，那困難和出來的時候固然沒有兩樣，但走到自己底舖位一看，被我剛才起來的時候碰了一下翻了一個身的佐藤君，把我底地方完全佔去了。

今天才碰在一起，不知道他底性子，不好叫醒他；只好暫時坐在那裡，一點辦法也沒有。過一會，在不弄醒他的程度之內我略略地推開他底身子，花了半點鐘好容易才擠開了一個可以放下腰的空處。我趕快在他們放頭的地方斜躺下來。把兩隻腳塞進被頭裡面，在冷的十二月的夜裡累出了汗才弄回了睡覺的地方。

敲十二點鐘的時候我還睜着眼睛睡不着。

* * *

被人狠狠地搖着肩頭，張開眼睛一看，房子裡面騷亂得好像戰場一樣。

昨晚八點鐘報告睡覺的電鈴又在喧鬧地響着。響聲一止，下面的鐘就敲了兩下。我似乎沒有睡到兩個鐘頭。腦袋昏昏的沉重。

大家都收拾好被頭登登地跑下樓去了。擦着沈重的眼皮，我也跟着下去了。

樓下有的人已經在開始疊報紙，有的人用溼手巾擦着臉，有的人用手指洗牙齒。沒有洗臉盆，也沒有牙粉。不用說，我也不會有這樣文明的東西。我並且連手巾都沒有。我用水管子的冷水衝一衝臉，再用袖子擦乾了。接着急忙地跑到疊着報紙的田中君底旁邊，從他分得了一些報紙，開始學習怎樣疊了。起初的十份有些不順手，那以後就不比別人遲好多，能夠合着大家底調子疊了。

「咻，咻！嚟！咻！咻！嚟！」自己底心情也和着這個調子，非常地明朗，睡眠不夠的重的腦袋也輕快起來了。

早疊完了的人，一個走了，兩個走了，出去分送去了。我和田中是第三。

外面，因為兩三天以來積到齊膝蓋那麼深的雪還沒有完全消完，所以雖然是早上三點以前，但並不怎樣暗。

冷風颯颯地刺着臉。雖然穿了一件夾衣，三件單衣，一件衛生衣（這是我全部的衣服）出來，但我卻冷得牙齒閣閣地作響。尤其苦的是，雪正在融化，雪下面都是冰水，因為一個月以來不停地繼續走路，我底足袋●底子差不多滿是窟窿，這比赤腳走在冰上還要苦。還沒有走幾步我底腳就凍僵了。

然而，想到一個月中間爲了找職業，走了多少冤枉路，想到帶着三個弟妹走投無路的母親，想到全國的失業者有三百萬人……這就滿不在乎了。我自己鞭策自己，打起精神來走。腳特別用力地踏。

田中在我底前面，也特別用力地踏，用一種奇怪的步法走着。每次從防雨板塞進報紙的時候，就告訴了我那家底名字。

這樣地，我們從這一條路轉到那一條路，穿過小路和小巷，把二百五十份左右的報紙完全分送完了的時候，天空已經明亮了。

我們急急地往回家的路上走。肚子空空地，覺得隱隱作痛。昨天晚上，六圓二十錢完全被老板拿去作了保證金，晚飯都沒有吃；昨天底早上，中午——不……這幾天以來，望着漸漸少下去的錢，覺得惴惴不安，終於沒有吃過一次飽肚子。

現在一回去都有香的味噌湯①和飯在等着，馬上可以吃一個飽——想着，就好像那已經擺在眼前一樣，不禁流起口水來了。

——這次一定能夠安心地吃個飽——這樣一想，腳下底冷，身上底顫抖，肚子底痛，似乎都忘記了一樣，爽快極了。

可是，田中並不把我帶回店子去，卻走進稍稍前面一點的小巷子，站在那個角落上的飯館前面。

昏昏地，我一切都莫明其妙了。我是自己確定了店子方面會供給伙食的。但現在田中君卻把我帶到了飯館前面。而且，我一文都沒有……

「田中君……」我喊住了正要拿手去開門的田中君，說，「田中君……我沒有錢……昨天所有的六圓二十錢，都交給老闆作保證金了。……」

田中停住了手，呆呆地望了我一會兒，於是像下了決心一樣。

「那麼……進去罷。我墊給你……」拿手把門推開，催我進去。

我底勇氣不曉得消失到什麼地方去了。……

好容易以爲能夠安心地吃飽肚子，卻又是這樣的結果。我悲哀了。

——但是，這樣地勞動着，請他墊了一定能夠還他的——這樣一想才勉強打起了精神，吃了一個半飽。

「喂……夠麼？……不要緊的，吃飽呵……」

田中是比我想像的還要溫柔的懂事的男子，看見我這樣大的身體，還沒有吃他底一半多就放下了筷子，這樣地鼓勵我。

但我覺得對不起他，再也吃不下去了，雖然肚子還是餓的。

「已經夠了。謝謝你。」說着我把眼睛望着旁邊。

因爲，望着他就覺得抱歉，害羞得很。

似乎同事們都到這裡來吃飯。現在有幾個人在吃，也有吃完了走出去的，也有接着進來的——許多的面孔似乎見過。

田中君付了賬以後，我跟他走出來了。他吃了十二錢，我吃了八錢。

出來以後，我想再謝謝他，走近他底身邊，但看到他底那種態度（一點都不傲慢，但不喜歡被別人道謝，所以顯得很不安，）我就不作聲了。他也不作聲地走着。

回到店子裡走上樓一看，早的人已經回來了七八個。有的到學校去，有的看書，有的在談話，還有兩個人攤出被頭來鑽進去睡了。

看到別人上學校去，我恨不得很快地也能夠那樣。但一想到發工錢爲止的飯錢，我就悶氣起來了。不能總是請田中君代墊的。聽說田中君也在上學，那邊的費用一定相當高，能爲我墊出多少是疑問。

我這樣地煩悶地想着，靠在壁上坐着，從窗子望着大路，預備好了到學校去的田中君，把一隻五十錢的角子夾在兩個指頭中間，對我說：

「這供給你，拿着吃午飯罷，明後天再想法子。」

我不能推辭，但也沒有馬上拿出手來的勇氣。我凝視着那角子，說：

「不……要緊？」

「不要緊。拿着罷。」他把那銀角子擺在我膝頭上，登登地跑下樓去了。

我趕快把那拿起來，捏得緊緊地，又把眼睛朝向了窗外。

對於田中底親切，我幾乎感激得流出淚來了。——生活有了辦法，得好好地謝一謝他——我這樣地想了。忽然又聽到了「嗚，嗚！」的哭聲，吃驚地回過了頭來，還是昨天晚上哭的那個十四五歲的少年。

他戀戀不捨似地打着包袱，依然「嗚，嗚！」地縮着鼻子，走下樓梯去了。

——大概是想家罷——我和昨晚上一樣地這樣決定了，再把臉朝向了窗外。過不一會，我看見了向大路底那一頭走去，漸漸地小了，時時回轉頭來的他底後影。

不知怎地，我悲哀起來了。

* * *

那天送晚報的時候，我又跟着田中君走。從第二天早上起，我抱着報紙分送，田中跟在我後面，錯的時候就提醒我。

這一天非常冷。路上的水都凍了，刺痛得很，穿着沒有底的足袋的我，更加吃不消。手不能和昨天一樣總是放在懷裡面，凍僵了。從防雨板送進報紙去都很困難。

雖然如此，我半點鐘都沒有遲地把報送完了。

「你底腦筋真好，僅僅跟着走兩趟，二百五十個地方差不多沒有錯。……」

在回家的路上，田中君這樣地誇獎了我，我自己也覺得做的很得手。被提醒的只有兩三次在交叉路口上稍稍弄不清的時候。

那一天恰好是星期天，田中沒有課，吃了早飯，他約我去推銷定戶，我們一起出去了。我們兩個成了好朋友，一面走一面說着種種的事情。我高興得到了田中君這樣的好朋友。

我向他打聽了種種學校底情形以後，說：

「我也想趕快進個什麼學校。……」

他說：

「好的！我們兩個互相幫助，拚命地幹下去罷。」

這樣地，每天田中君甚至節省他底飯錢，供給我開飯賬，買足袋。

* * *

「送報的地方完全記好了麼？」

第三天的早報送來了的時候，老板這樣地問我。

「呃！完全記好了。」

這樣地回答的我，心裏非常爽快，起了一種似乎有點自傲的飄飄然的心情。

「那麼，從今天起，你去推銷定戶罷。報可以暫時由田中送。但有什麼事故的時候，你還得去送的，不要忘記了！」老板這樣地發了命令。不能和田中一起走，並不是不有些覺得寂寞，但曉得不會能夠隨自己底意思，就用了什麼都幹的決心，爽爽快地答應了「是！」反正田中君早上晚上還能夠在一起的。就是送報罷，也不能夠總是兩個人一起走，所以無論叫我做什麼都好。有飯吃，能夠多少寄一點錢給媽媽，就行了。而且我想，推銷定戶，晚上是空的，並不是不能夠上學。

於是從那一天起，我不去送報，專門出街去推銷定戶了。早上八點出門，中午在路上的飯館吃飯，晚上六點左右才回店，僅僅只推銷了六份。

第二天八份，第三天十份，那以後總是十份到七份之間。

每次推銷回來的時候，老闆總是怒目地望着我，說成續壞。進店的第十天，他比往日更猛烈地對我說：「你的成績總是那麼壞！要推銷十五份，不能推銷十五份不行的！」

十五份！想一想，比現在要多一倍。就是現在，我是沒有休息地拚命地幹。到底從什麼地方能夠多推銷一倍呢？

我着急起來了。

第二天，天還沒有亮，我就出了門，但推銷和送報不同，非會到人不可，起得這樣早卻沒有用處。和

強行推銷一樣地，到夜深爲止，順手推開一家一家的門，哀求，但依然沒有什麼好效果。而且，這樣冷的晚上，到九點左右，大概都把門上了閂，一點辦法都沒有。

這一天好容易推銷了十一份。離十五份還差四份。雖然想再多推銷一些，但無論如何做不到。

累得不堪地回到店子的時候，十點只差十分了。八點鐘睡覺的同事們，已經睡了一覺，老闆也睡了。第二天早上向老闆報告了以後，他凶凶地說：

「十一份？……不夠不夠……還要大大地努力。這不行！」

事實上，我以爲這一次一定會被誇獎的，然而卻是這付兇兇的樣子，我膽怯起來了。雖然如此，我沒有說一個「不」字。到底有什麼地方比奴隸好些呢？

「是……是……」我除了屈服沒有別的法子。不用說，我又出去推銷去了。這一天慘得很。我傷心得要哭了。依然是晚上十點左右才回來，但僅僅只推銷了六份。十一份都連說「不行不行，」六份怎樣報告呢？……（後來聽到講，在這種場合同事們常常捏造出烏有讀者來暫時渡過難關，可是，捏造的烏有讀者底報錢，非自己掏荷包不可。甚至有的人把收入底一半替這種烏有讀者付了報錢。當然，老闆是沒有理由反對這種烏有讀者的。）

第二天，我惶惶恐恐地走到老闆底前面，他一聽說六份就馬上臉色一變，勃然大怒了。臉漲得通紅，用右手拍着桌子。

「六份？……你到底到什麼地方玩了來的？不是連保證金都不夠很同情地把你收留下來的麼？忘記了那時候你答應比別人加倍地出力麼？走你底！你這種東西是沒有用的！馬上滾出去！」他以保證金不足爲

口實，咆哮起來了。

和從前一樣，想到帶着三個弟妹的母親，想到走了一個月冤枉路都沒有找到職業的情形，咬着牙根地忍住了。

「可是……從這條街穿到那條街，一家都沒有漏地問了五百家，不要的地方不要，定了的地方定了，在指定的區域內，差不多和捉虱一樣地找遍了。……」

我想這樣回答，這樣回答也是理所當然的，但我卻沒有這樣說的勇氣。而且，事實上這樣回答了就要馬上失業。所以我只好說：

「從明天起要更加出力，這次請原諒……」除了這樣哀求沒有別的法子。但是，老實說，說要更加出力，我不曉得應該怎麼做。第二天底成績馬上證明了。

那以後，每天推銷的數目是，三份或四份，頂多不能超過六份。這並不是我故意偷懶，實在是因為，在指定的區域內，似乎可以定的都定了，每天找到的三四個人大抵是新搬來的。

「因為同情你，把你底工錢算好了，馬上拿着到別的地方去罷。本店辦事嚴格，規定是，無論什麼時候，不到一個月的不給工錢。這是特別的，對無論什麼人不要講，拿去罷，到你高興的地方去。可憐固然可憐，但像你這樣沒有用的男子，沒有辦法！」

是第二十天。老闆把我叫他面前去，這樣教訓了以後，就把下面算好了的賬和四圓二十五錢推給我，馬上和忘記了我底存在一樣，對着桌子做起事來了。

我失神地看了一看賬：

每推銷報紙一份	五錢
推銷報紙總數	八十五份
合計	四圓二十五錢

我吃驚了，現在被趕出去，怎麼辦……尤其是，看到四圓二十五錢的時候，我暫時啞然地不能開口。接連二十天，從早上六點轉到晚上九點左右，僅僅只有四圓二十五錢！

——既是錢都拿出來了，無論怎樣說都是白費。沒法。但是，只有四圓二十五錢，錯了罷——這樣想就問他：

「錢數沒有錯麼？……」

老闆突然現出兇猛的面孔，逼到我鼻子跟前：

「錯了？什麼地方錯了？」

「一連二十天。……」

「二十天怎樣？一年，十年，都是一樣的！不勞動的東西，會從那裏掉下錢來！」

「我沒有休息一下。……」

「什麼？沒有休息？相反罷？應該說沒有勞動！」

「……」我不曉得應該怎樣說了。灰了心，想：

——加上保證金六圓二十錢，就有十圓四十五錢，把這二十天從田中君借的八圓還了以後，還有二圓四十五錢。吵也沒有用處。不要說什麼了，把保證金拿了走罷——

「沒有法子！請把保證金還給我。」我這樣一說。老闆好像把我看成了一個大糊塗蛋，嘲笑地說：

「保證金？記不記得，你讀了規定以後，說一切都同意，只是保證金不夠？忘記了麼？還是把規定忘記了？如果忘記了，再把規定讀一遍看！」

我又吃驚了：那時候只是耽心保證金不夠？後面沒有讀下去，不曉得到底是怎樣寫的……我胸口「東！東！」地跳着，再一次讀起規定來。跳過前三條，把第四條讀了：

那裡明明白白地寫着：

第四條、只有繼續服務四個月以上者才交還保證金。

我覺得心臟破裂了，血液和怒濤一樣地漲滿了全身。

睨視着我的老闆底臉依然帶着嘲諷的微笑。

「怎麼樣？還想取回保證金？乖乖地走！還在這裡纏，一錢都不給！剛才看過了大概曉得，第七條還寫着服務未滿一月者不給工錢呢！」

我因為被第四條嚇住了，沒有讀下去，轉臉一看，果然，和他所說的一樣，一字不錯地寫在那裡。

的確是特別的優待。

我眼裡含着淚，歪歪倒倒地離開了那裡。玻璃窗上面，惹起我底痛恨的「募集送報伙」的紙條子，鮮明得可惡地又貼在那裡。

我離開了那裡就乘電車跑到田中底學校前面，把經過告訴他，要求他：

「借的錢先還你三圓，其餘的再想法子。請把這一圓二十五錢留給我做暫時的用費。……」田中向我聲明，他連想我還他一錢的意思都沒有。

「沒有想到連對你也來這一套。你進店的那一天不曉得看到一個十四五歲的小孩子沒有，他也是和你一樣地上了鉤的。他推銷定戶完全失敗了，六天之間被騙去了十圓保證金，一錢也沒有得到走了的。」

真是混蛋的東西。

「以後，我們非想個什麼對抗的法子不可！」他下了大決心似地說。

原來，我們這些餓昏了的失業者，被吸引力比釣魚餌還強的紙條子釣上了。

我對田中底人格懷着異常感激的心情，和他告別了。我毫無遮蓋地看到了這兩個極端的人，現在更是吃了一驚。

一面是田中，甚至節省自己底伙食，借錢給我付飯錢、買足袋，聽到我被趕出來了，連連說「不要緊！不要緊！」把要還給他的錢，推還給我；一面是人面獸心的派報所老闆，從原來就因為失業困苦得沒有辦法的我這裏把錢搶去了以後，就把我趕了出來，爲了肥他自己，把別人殺掉都可以。

我想到這個惡鬼一樣的派報所老闆就膽怯了起來，甚至想逃回鄉間去。然而，要花三十五圓的輪船火車費，這一筆大款子就是把腦殼賣掉了也籌不出來的。我避開人多的大街走，當在上野公園底椅子上坐下的時候，驀地癱軟了下來，心裡面是怎樣哭了呀！

過了一會，因爲想到了田中，才覺得精神硬朗了一些。想着就起了捨不得和他離開的心境。

昏昏地這樣想來想去，終於想起了留在故鄉的、帶着三個弟妹的、大概已經正在被饑餓圍攻的母親，又感到了心臟和被絞一樣的難過。

同時，我好像第一次發見了故鄉也沒有什麼不同，顫抖了。那同樣是和派報所老板似地逼到面前，吸我們底血，剮我們底肉，想擠乾我們底骨髓，把我們打進了這樣的地獄裏面。

否則，我現在不會在這裡如此徬徨，應該是和母親弟妹一起在享受着平靜的農民生活。

到父親一代為止的我們家裡，是自耕農，有兩甲^①的水田和五甲的園地。所以生活沒有感到過困難。然而，數年前，我們村裏的××製糖公司說是要開辦農場，爲了收買土地大大地活動起來。不用說，開始誰也不肯，因爲是看得和自己底性命一樣貴重的耕地。

但他們決定了要幹的事情，公司方面不會無結果地收場的。過了兩三天，警察方面發下了舉行家長會議的通知，由保甲經手，村子裡一家不漏地都送到了。後面還寫著「隨身攜帶圖章。」

我那時候十五歲，是公學校校底五年生，雖然是五六年以前的事，但因爲印象太深了，當時的樣子還能夠明瞭地記得。全村子捲入了大恐慌裡面。

那時候父親當著保正，保內的老頭子老婆子在這個通知發下來之前就緊張起來了的空氣裡面，戰戰兢兢地帶著哭臉接續不斷地跑到我家裡來，用了打顫的聲音問：

「怎麼辦？……」

「怎麼得了？……」

「什麼一回事？……」

同是這個時候，我有三次發見了父親躲著流淚。

在這樣的空氣裡面，會議在發下通知的第二天下午一點開了。會場是村子中央的媽祖廟。因為有不到者從嚴處罰的預告，各家底家長都來了。有四五百人罷。相當大的廟擠得滿滿的。學校下午沒有課，我躲在角落裡看情形。因為我幾次發見了父親底哭臉，甚為耽心。

鈴一響，一個大肚子光頭殼的人站在桌子上面，裝腔作勢地這樣地說：

「爲了這個村子底利益，本公司現在決定了在這個村子北方一帶開設農場。說好了要收買你們底土地，前幾天連地圖都貼出來了，叫在那區域內有土地的人攜帶圖章到公司來會面，但直到現在，沒有一個人照辦。特別煩請原料委員一家一家地去訪問所有者，可是，好像都有陰謀一樣，沒有一個人肯答應。這個事實應該看作是共謀，但公司方面不願這樣解釋，所以今天把大家叫到這裡來。回頭老爺和村長先生要講話，使大家都能夠了解，講過了以後請都在這紙上蓋一個印。公司預備出比普通更高的價錢……呃哼！」這一番話是由當時我們五年生底主任教員陳訓導翻譯的，他把「陰謀」「共謀」說得特別重，大家都吃了一驚，你望望我望望你。

其次是（警部）③補老爺，本村底（警察）分所主任。他一站到桌子上，就用了凜然的眼光望了一圈。於是大聲地吼：

「剛才山村先生也說過，公司這次的計劃，徹頭徹尾是爲了本村底利益。對於公司底計畫，我們要誠懇地感謝才是道理！想一想！現在你們把土地賣給公司……而且賣得到高的價錢。於是公司在這村子裡建設模範的農場。這樣，村子就一天一天地發展下去。公司選了這個村子，我們應該當作光榮的事情……」

然而，聽說一部份人有「陰謀」。對於這種「非國民」，我是決不寬恕的。……」

他底翻譯是林巡查，和陳訓導一樣，把「陰謀」「非國民」「決不寬恕」說得特別重，大家又面面相覷了。

因爲，對於懷過陰謀的余清風林少貓等的征伐，那血腥的情形還鮮明地留在大家底記憶裡面。最後站起來的村長，用了老年底溫和，只是柔聲地說，

「總之，我以為大家最好是依照老爺底希望，高興地接受公司底好意。」說了他就喊大家底名字。群眾都動搖起來了。

最初被喊的人們，以為自己是被看作陰謀底首領，臉上現著狼狽的樣子，打著抖走向前去。當上面叫「你可以回去！」的時候，也還是呆著不動，等再吼一聲「走！」才醒了過來，逃到外面去！

在跑回家去的路上，還是不安地想：沒有聽錯麼？會不會再被喊回去？無頭無腦地著急。像王振玉，可笑得很，聽說在走到家之前，就回頭看了一百五十次。

這樣地，有八十名左右被喊過名字，回家去了。

以後，輪到剩下的人要吃驚了。我底父親也是剩下的一個。因爲不安，眾人中間騰起了嗡嗡的聲音。伸著頸，側著耳朵，會再喊麼？會喊我底名字麼？……這樣地期待著，大多數的人都惴惴不安了。

這時候，村長說明了「請大家拿出圖章來，這次被喊的人，拿圖章來蓋了就可以回去」以後，喊出來
的名字是我底父親。

「楊明……」一聽到父親底名字，我就著急得不知所措，屏著氣息，不自覺地捏緊拳頭站了起來。……會

發生什麼事呢？……

父親鎮靜地走上前去。一走到村長底面前就用了破鑼一樣的聲音，斬釘截鐵地說：

「我不能賣，所以沒有帶圖章來！」

「什麼？你不是保正麼！應該做大家底模範的保正，卻成了陰謀底首領，這才怪！」

站在旁邊的（警部）補，咆哮地發怒了，逼住了父親。

父親默默地站著。

「拖走！這個支那豬！」

（警部）補（拿起手）狠狠地打了父親一掌，就這樣發了命令。不曉得是什麼時候來的，從後面跳出了五六個（巡查）。最先兩個把父親（往派出所方向）拖（走了）以後，其餘的就依然躲到後面去了。

看著這的村民，更加膽怯起來，大多數是，照著村長底命令把圖章一蓋就望都不向後面望地跑回去了。

到大家走完為止，用了和父親同樣的決心拒絕了的一共有五個，一個一個都和父親一樣被拖到（警察）分所去了。④這是後來聽說的，我一看到父親被拖去了，就馬上跑回家去把情形告訴了母親。

母親聽了我底話，即刻急得人事不知了。

幸而隔壁的叔父趕來幫忙，性命算是救住了，但是，到父親回來為止的六天中間，差不多沒有止過眼淚，昏倒了三次，瘦得連人都不認得了。

第六天父親回來了，他又是另一付情形，均衡整齊的父親底臉歪起來了，一邊臉頰腫得高高的，眼睛突了出來，額上滿是泡子。衣服弄得一團糟，換衣服的時候我看到父親底身體，大吃一驚，大聲地叫了出

來：

「哦哦！爸爸身上和鹿一樣了！……」

事實是，父親底身上全是鹿一樣的斑點。

那以後，父親完全變了，一句都不開口。

從前吃三碗飯，現在卻一碗都吃不下，倒床了以後的第五十天，終於永逝了。

同時母親也病倒了，我帶著一個一歲一個三歲一個四歲的三個弟妹，是怎樣地窘迫呀！

叔父叔母一有空就跑來照應，否則，恐怕我們一家都完全沒有了罷。

這樣地，父親從（警察）分所回來的時候被丟到桌子上的六百圓（據說時價是二千圓左右，但公司卻說六百圓是高價錢），因為父親底病母親底病以及父親底葬式等，差不多用光了，到母親稍稍好了的時候，就只好出賣耕牛和農具糊口。

我立志到東京來的時候，耕牛、農具、家裡的庭園都賣掉了，剩下的只有七十多圓。

「好好地用功……」母親站在門口送我，哭聲地說了鼓勵的話。那情形好像就在眼前。

這慘狀不只是我一家。

和父親同樣地被拖到（警察）分所去了的五個人，都遇到了同樣的運命。就是不做聲地蓋了圖章的人們，失去了耕田，每月三五天到製糖公司農場去賣力，一天做十二個鐘頭，頂多不過得到四十錢，大家都非靠賣田的錢過活不可。錢完了的時候，和村子裡的當局者們所說的「村子底發展」相反，現在成了「村子底離散」了。

* * *

沉在這樣回憶裡的時候，不知不覺地太陽落山了，上野底森林隱到了黑闇裡，山下面電燈燦爛地亮起來了。我身上感到了寒冷，忍耐不住。我沒有吃午飯，覺得肚子空了。

我打了一個大的呵欠，伸一伸腰，就走下坡子，走進一個小巷子底小飯館，吃了飯。想在乏透了的身體裡面恢復一點元氣，就決心吃了一個飽，還喝了兩杯燒酒。

以後就走向到現在爲止常常住在那裡的本所底××木賃宿。

我剛剛踏進一隻腳，老闆即刻看到了我，問：

「唉呀！……不是台灣先生麼！好久不見。這些時到那裡去了。……」

我不好說是做了送報伏，被騙去了保證金，辛苦了一場以後被趕出來了。

「在朋友那裡過……過了些時……」

「朋友那……唔，看起來人老了一些呢！」他似乎不相信，接著笑了：

「莫非幹了無線電⑦，討擾了上面一些時麼？……哈哈……」

「無線電？……無線電是什麼一回事？」我不懂，反問了。

「無線電不曉得麼？……哈哈……到底是鄉下人，少見識……」

雖然老頭子這樣開著玩笑，但似乎覺得我很可憐，就改了口：

「請進罷。似乎疲乏得很，進來好好地休息休息。」

我一上去⑧，老板說，

「那麼，楊君，幹了這一手麼？」

說著做一個把手輕輕伸進懷去的樣子。很明顯地，他似乎以為我是到警察署底拘留所裡討擾了來的。當日不懂無線電是什麼一回事，但看這次的手勢，明明白白地以為我做了扒手。我沒有發怒的精神，但依然紅了臉，尷尬地否認了：

「那裡話！那個幹這種事！」說著，斬釘截鐵地否認了。老頭子似乎還不相信，露出可憐我的樣子，但好像不願意勉強地打聽，馬上嘻嘻地轉成了笑臉。

事實上，看來我這付樣子恰像剛剛從警察署底豬籠裡跑出來的罷。

我脫下足袋，剛要上去。

「哦，忘記了。你有一封掛號信！因為弄不清你到那裡去了，收下放在這裡……等一等……」說著就跑進裡間去了。

我覺得奇怪，什麼地方寄掛號信給我呢？

過一會，老頭子拿著一封掛號信出來了。望到那我就吃了一驚。

母親寄來的！

——到底爲了什麼事寄掛號信來呢？……

我覺得奇怪得很。

我手抖抖地開了封。什麼，裡面現出來的不是一百二十圓的匯票麼！我更加吃驚了。我疑心我底腦筋錯亂了。我胸口突突地跳，一個字一個字地讀著很難看清的母親底筆跡。我受了很大的刺激，好像要發狂

一樣。不知不覺地在老頭子面前落了淚。

「發生了什麼事麼？……」

老頭子現著莫明其妙的臉色望著我，這樣地問了，但我卻什麼也不能回答。收到錢哭了起來，老頭子沒有看到過罷。

我走到睡覺的地方就鑽進被頭裡面，狠狠地哭了一場。……

信底大意如下：

——說東京不景氣，不能馬上找到事情的信收到了。想著你帶去的錢也許已經用完了，耽心得很。沒有一個熟人，在那麼遠的地方，一個單人，又找不到事情，想著這樣窘的你，我胸口就和絞著一樣。但故鄉也是同樣的。有了農場以後，弄到了這步田地，沒有一點法子。所以，絕對不可軟弱下來，想到回家。房子賣掉了，得到一百五十圓，一百二十圓寄給你貼補用度。設法趕快找到事情，好好地用功，成功了以後才回來罷。我底身體不能長久，在這樣的情況下不好給別人添麻煩，所以留下了三十圓。阿蘭和阿鐵終於死掉了。本不想告訴你的，但想到總會曉得，才決心說了。媽媽僅僅只有祈禱你底成功，在成功之前，無論有什麼事情也不要回來……

這是媽媽底唯一的願望，好好地記著罷。如果成功以後回來了，把寄在叔父那裡的你唯一的弟弟引去照看照看罷。要好好地保重身體。……再會——

好像是遺囑一樣的寫著。我著急得很。

——也許，已經死掉了罷……——這想頭鑽在我底腦袋裡面，去不掉。

——胡說！那來這種事情——我翻一翻身，搖著頭，出聲地這樣說，想把這不吉的想頭打消，但毫無效果。

這樣地，我通晚沒有睡著一會，跳蚤底襲擊也全然沒有感到。

我腦袋裡滿是母親底事情。

母親自己寫了這樣的信來，不用說是病得很厲害。看發信的日子，這信是我去做送報伙以前發的，已經過了二十天以上。想到這中間沒有收到一封信……，我更加不安起來了。

我決心要回去。回去以後，不能再出來我沒有自信，但是，看了母親底信，我安靜不下來了。

——回去之前，把從田中君那裡借來的錢都還清罷。順便謝謝他底照顧，向他辭一辭行……——這樣想著，我眼巴巴地等著第二天早上的頭趟電車，終於通夜沒有合眼。

* * *

從電車底窗口伸出頭去，讓早晨底冷風吹著，被睡眠不足和興奮弄得昏沉沉的腦袋，陡然輕鬆起來了。——這或許是最後一次看見東京——這樣一想，連××派報所底老板都忘記了，覺得捨不得離開。昨天晚上想著故鄉，安不下心來，但現在是，想會見的母親和弟弟底面影，被窮乏和離散的村子底慘狀遮掩了，陡然覺得不敢回去。

這樣的感情底變化，的確由於現在要去找的、不忍別離的田中君底魅力，而受到了某一程度的影響。那種非常親切的、理智的、討厭虛偽的樸實性格……這是我心目中理想人物底典型。

我下了××車站，穿過兩個巷子，走到那個常常去的飯館的時候，他正送完了報回來。

我在那裡碰到了他。

他本來就是個沈默寡言的人，今天早上表現得尤其陰鬱。

但是，他底陰鬱絲毫不會使人感到不快，反而是易於親近的東西。

他低著頭，似乎在深深地想著什麼，不做聲地靜靜地走來了。

「田中君！」

「哦！早呀！昨天住在什麼地方……」

「住在從前住過的本所的木賃宿里……」

「是麼！昨天畢竟忘記了打聽你去的地方……早呀！」

這個「早呀！」我覺得好像是問我，「有什麼急事麼？……」

所以我馬上開始說了。但是，說到分別就覺得寂寞，孤獨感壓迫得我難堪。

「實在是，昨天回到木賃宿去，不意家裡寄了錢來了……」

我這樣一說出口，他就說：

「錢？……那急什麼！你什麼時候找到職業，不是毫無把握麼？拿著好啦！」

「不……寄來了不少。回頭一路到郵局去。」

「本來是想順便來打個招呼……」

覺得說不下去，臉紅了起來。

「打個招呼？如果又是那一套客氣話，我可不聽呢……」他迷惑似地苦笑。

「不！和錢一起，母親還寄了信來，似乎她病得很厲害，想回去一次……」
他馬上望著我底臉，寂寞似地問：

「叫你回去麼？」

「不……叫不要回去……！好好地用功，成功了以後再回去……。」

「那麼，也許不怎樣厲害——」

「不……似乎很厲害。而且，那以後沒有一點消息，不安得很……」

「呀！有信呢。昨天你走了以後，來了一封。似乎是從故鄉來的。我去拿來，你在飯館裡等一等！」
說著就向派報所那邊跑去了。

我馬上走進飯館裡等著，聽說是由家裡來的信，似乎有點安心了。

但是，信裡說些什麼呢？這樣一想，巴不得田中君馬上來。

飯館底老板娘子討人厭地問：

「要吃什麼？……」

* * *

不久，田中氣喘喘地跑來了。

我底全神經都集中在他拿來的信上面。他打開門的時候我就馬上看到了那不是母親底筆蹟，感到了不安。心亂了。

不等他進來，我站起來趕快伸手把信接了過來。

署名也不是母親，是叔父底。

我底臉色陰暗了。胸口跳，手打顫。明顯地是和我想像的一樣，母親死了。半個月以前……而且是
用自己底手送終的。

我所期望的唯一的兒子……

我再活下去非常痛苦，而且對你不好。因為我底身體死了一大半……。

我唯一的願望是希望你成功，能夠替像我們一樣苦的村子底人們出力。

村子裡的人們底悲慘，說不盡。你去東京以後，跳到村子旁邊的池子裡淹死的有八個。像阿添叔，是帶了阿添嬸和三個小兒一道跳下去淹死的。

所以，覺得能夠拯救村子底人們的時候才回來罷。沒有自信以前，決不要回來！要做什麼才好我不知道，努力做到能夠替村子底人們出力罷。

我怕你因為我底死馬上回來，用掉冤枉錢，所以寫信留給叔父，叫他暫時不要告訴你……諸事保重。

媽媽

這是母親底遺書。母親是決斷力很強的女子。她並不是遇事嘩啦嘩啦的人，但對於自己相信的，下了決心的，卻總是斷然要做到。

哥哥當了（巡查），糟蹋村子底人們，被大家厭恨的時候，母親就斷然主張脫離親屬關係，把哥哥趕了

出去，這就是一個例子。我來東京以後，她底勞苦很容易想像得到，但她卻不肯接受做了（巡查）的長男，也就我哥哥底照顧，終於失掉了一男一女，把剩下的一個託付給叔叔自殺了。是這樣的女子。

從這一點看，可以說母親並沒有一般所說的女人底心，但我卻很懂得母親底心境。同時，我還喜歡母親底志氣，而且尊敬。

現在想起來，如果有機會讓母親讀……的話⑤，也許能夠做柴特金女史⑥那樣的工作罷，當父親因為拒絕賣田而被捉起來了的時候，她不會昏倒而會採取什麼行動罷。

然而，剛剛看了母親底遺囑的時候，我非常地悲哀了。一時間想回家的念頭油然而生。

你底母親在×月×日黎明的時候吊死了。想馬上打電報告訴你，但在母親手裡發現了遺囑，懂得了母親底心境，就依照母親底希望，等到現在才通知你。母親在留給我的遺囑裡面說她只有期望你，你是唯一的有用的兒子。你底哥哥成了這個樣子，弟弟還小，不曉得怎樣……

她說，所以，如果馬上把她底死訊告訴你，你跑回家來，使你底前途無著，那她底死就沒有意思。弟弟我在鄭重地養育，用不著耽心，不要違反母親底希望，好好地用功罷。絕對不要起回家的念頭。因為母親已經不是這個世界底人了……

叔父

——再看不到母親了。她已經不是這個世界底人了——這樣一想，我決定了應該斷然依照母親底希望

去努力。下了決心：不能夠設法爲悲慘的村子出力就不回去。

當我讀著信，非常地興奮，心很亂的時候，田中在目不轉睛地望著我，看見我收起信放進口袋去，就耿耿地問：

「怎樣講的？」

「母親死了！」

「死了麼？」似乎十分感慨的樣子。

「你什麼時候回去？」

「打算不回去。」

「……？」

「母親死了已經半個月了……而且母親叫不要回去。」

「半個月……台灣來的信……要這麼久麼？」

「不是，母親託付叔父，叫不要馬上告訴我。」

「唔，了不起的母親！」田中感歎了。

我們這樣地一面講話一面吃飯，但是，太激動了，飯不能下咽。我等田中吃完以後，付了賬，一路到郵局去把匯票兌成現金，勉強地把借的錢還了田中。把我底住所寫給他一個人回到了本所底木賃宿。

一走進木賃宿就睡了。我實在疲乏得支持不住。在昏昏沉沉之中也想到要怎樣才夠爲村子底悲慘的人們出力，但想不出什麼妙計。

……存起錢來，分給村子底人們罷……也這樣想了一想，然而，做過送報伏的現在，走了一個月的冤枉路依然是失業的現在，不用說存錢，能不能賺到自己底衣食住，我都沒有自信。

我陡然地感到了倦怠，好像兩個月以來的疲勞一齊來了，不曉得在什麼時候，我沉沉地睡著了。

因為周圍底吵鬧，有時候好像從深海被推到淺海邊一樣，意識朦朧地醒來，但張不開眼睛，馬上又沉進深睡裡面去了。

「楊君！楊君！」

聽見了這樣的喊聲，我的意識狀態還是像被推到淺海邊一樣；雖然稍稍地感到了，但張不開眼睛，馬上又要沉進深睡裡面去。

「楊君！」

這時候又喊了一聲，而且搖了我底腳，我吃了一驚，好容易才張開了眼睛。但還沒有醒。從朦朧的意識狀態回到普通的意識狀態，那情形好像是站在濃霧裡面望著它漸漸淡下去一樣。一回到意識狀態，我看到了田中坐在我底旁邊。我馬上踢開了被頭，坐起來了。我茫茫然把房子望了一圈。站在紙拉門邊的笑嘻嘻的老闆，望著我底狼狽樣子，說：

「你恰像中了催眠術一樣呀……你想睡了幾個鐘頭？……」

我不好意思地問：

「傍晚了麼？」

「那裡……剛剛過正午呢……哈哈……但是，換了一個日子呀！」說著就笑起來了。

原來，我昨天十二點過睡下以後，現在已到下午一點左右了……。整整睡了二十五個鐘頭。我自己也吃驚了。

老頭子走了以後，我向著田中。

他似乎很緊張。

「真對不起。等了很久罷……。」

對於我底抱歉，他答了「那裡」以後，興奮地繼續說：

「有一件要緊的事情來的……昨天又有一個人和你一樣被那張紙條子釣上了。你被趕走了以後，我時時在煩惱地想，未必沒有對抗的手段麼？一點辦法沒有時候又進來了一個，我放心不下，昨天夜裡偷偷地把他叫出來，提醒了他。但是，他聽了以後僅僅說：

「唔！那樣麼！混蛋的東西……。」

應和著我底話，一點也不吃驚。

我焦燥起來了，對他說：

「所以……我以為你最好去找別的事情……不然，也要吃一次大苦頭。……保證金被沒收，一個錢沒有地被趕出去……。」

但他依然毫不驚慌，伸手握住了我底手以後，問：

「謝謝！但是，看見同事的吃這樣的苦頭，你們能默不作聲麼？」

我稍稍有點不快地回答：

「不是因為不能夠默不作聲，所以現在才告訴了你麼？這以外，要怎樣幹才好，我不懂。近來我每天煩惱地想著這件事，怎樣才好我一點也不曉得。」

於是他非常高興地說：

「怎樣才好……我曉得呢。只不曉得你們肯不肯幫忙？」

於是我發誓和他合作，對他說：

「我們二十八個同事的，關於這件事大概都是贊成的。大家都把老闆恨得和蛇蝎一樣。……」

接著他告訴了我種種新鮮的話。歸結起來是這樣的：

「爲了對抗那樣惡的老闆，我們最好的法子是團結。大家成爲一個罷……什麼聯盟——忘了是怎樣講的——罷……什麼聯盟，說是總有辦法呢。『勞動者一個一個散開，就要受人糟蹋，如果結成一氣，大家成爲一條心來對付老闆，不答應的時候就採取一致行動……這樣幹，無論是怎樣壞的傢伙，也要被整得不敢說一個不字……』他這樣說呢。而且……那個人想會一會你。我把你底事告訴了他以後，他說：

「唔……台灣人也有吃了這個苦頭的麼？……無論如何想會一會，請馬上介紹！」田中把那個人底希望也告訴了我。

說要收拾那個咬住我們，吸盡了我們底血以後就把我們趕出來的惡鬼，對於他們底這個計畫，我是多麼高興呀！而且，聽說那個男子想會我，由於特別的好奇心，我希望馬上能夠會到他。

向被人糟蹋的送報失業業者們教了法子去對抗那個惡鬼一樣的老闆，我想，這樣的人對於因爲製糖公司，兇惡的〔警察〕⑦，村長等陷進了悲慘境遇的故鄉底人們，也會貢獻一些意見罷。

聽田中說那個人——說是叫做伊藤——特別想會我，我非常高興。

在故鄉的時候，我以為一切日本人都是壞人，恨著他們。但到這裡以後，覺得好像並不是一切的日本人都壞人。木質宿底老闆很親切，至於田中，比親兄弟還……不，想到我現在的哥哥——巡查——什麼親兄弟，根本不能相比。拿他來比較都覺得對田中不起。

而且，就像台灣人裡面有壞人似地，日本人也一樣。

我馬上和田中一起走出了木質宿去會伊藤。

我們走進淺草公園，筆直地向後面走。坐在那裡底樹蔭下面的一個男子，毫不畏縮地向我們走來。

「楊君！你好……」緊緊地握住了我底手。

「你好……」我也照樣說了一句，好像被狐狸迷住了一樣。是沒有見過面的人。但回轉頭來看一看田中底表情，我即刻曉得這就是所說的伊藤君。我馬上就和他親密無間了。

「我也在台灣住過一些時。你喜歡日本人麼？」他單刀直入地問我。

「……」我不曉得怎麼回答才好。在台灣會到的日本人，覺得可以喜歡的少得很。但現在，木質宿底老板，田中等，我都喜歡。這樣問我的伊藤君本人，由第一次印象就覺得我會喜歡他的。

我想了一想，說：

「在台灣的時候，總以為日本人都是壞人，但田中君是非常親切的！」

「不錯，日本底勞動者大都是和田中君一樣的好人呢。（日本底勞動者）反對壓迫台灣人，糟蹋台灣人。使台灣人吃苦的是那些……對了……，就像把你底保證金搶去了以後，再把你趕出來的那個老板一樣的畜

生。到台灣去的大多是這種根性的人和這種畜生們底走狗！但是，這種畜生們，不僅是對於台灣人，對於我們本國底窮人們也是一樣的，〔朝鮮人和中國人〕^⑧也一樣地吃他們底苦頭呢，……總之，在現在的世界，有錢的人要掠奪窮人們底努力，爲了要掠奪得順手，所以壓住他們——。」

他底話一個字一個字在我底腦子裡面響，我真正懂了。故鄉底村長雖然是台灣人，但顯然地和他們勾結在一起，使村子大眾吃苦……

我把村子底種種情形告訴了他。他用了非常深的注意聽了以後漲紅了臉頰，興奮地說：

「好！我們攜手罷！使你們吃苦也使我們吃苦的是同一種類的人！〔我們有共同的敵人！〕^⑨」

這個會見的三天後，我因爲伊藤君底介紹，能夠到淺草底一家玩具工廠去做工。我很規則地利用閒空的時間……^⑩

幾個月以後，把我趕出來了的那個××派報所裡勃發了罷工。看到面孔紅潤的擺架子的××派報所老板在送報伏底團結前面低下了蒼白的臉，那時候我底心跳起來了。

對那胖臉一拳，使他流出鼻涕眼淚來……這種欲望推著我，但我忍住了。使他承認了送報伏底那些要求，要比我發洩積憤更有意義。

想一想看！

鉤引失業者的「募集送報伏」的紙條子拉掉了！

寢室每個人要佔兩張蓆子，決定了每個人一床被頭，租下了隔壁的房子做大家底宿舍，蓆子底表皮也換了！

任意製定的規則取消了！

消除跳蚤的方法實行了！

推銷一份報紙工錢加到十錢了！

怎樣？還說勞動者……⑪

——這幾個月的學習才是對於母親底遺囑的最忠實的辦法。

我滿懷著確信，從巨船蓬萊丸底甲板上凝視著台灣底春天，那兒表面上雖然美麗肥滿，但只要插進一針，就會看到惡臭逼人的血膿底迸出。

——《世界知識》第二卷第六號（一九三五年六月一日）

——胡風譯

——清水賢一郎、彭小妍校訂

註① 東京區名，工人區域。

註② 極下等的宿舍，住客大概是失業工人和流浪者。

註③ 普通是，足袋（Jōg）相當於襪子，穿了以後再穿「下駄」或「草履」。但勞動者用的足袋却和靴子一樣，有厚的橡皮底，穿着這就可以走路或做工了，銷到中國來的「民生鞋」就是的，不過民生鞋前面大指和其他足指之間沒有開叉罷了。

註④ 叫做 Misoshiru，日本人早飯時喝的一種湯。

註⑤ 日本有爲白天做事的人辦的夜學。

註⑥ 日本田地數量，為一平方町底水分之一。

註⑦ 無線 (Musen) 和無錢 (Musen) 同音，所以因為無錢飲食 (吃了東西不給錢) 的罪名被警察捉進去的，叫做無線電。

註⑧ 日本房子進門的地方有一塊空地，在那裡脫掉了下駄或皮鞋，才上到有蓆子的地方去。

註① 1. 日文手稿分「前篇」與「後篇」，前篇已佚，今只存「後篇」。

2. 日文版第一次發表於《台灣新民報》(一九三二年五月十九日至二十七日；昭和七年)，只刊「前篇」，「後篇」遭查禁。日文版第二次發表於東京《文學評論》第一卷第八號(一九三四年十月；昭和九年)，為完整版。《全集》採用《文學評論》版。

3. 《文學評論》版與《台灣新民報》版「前篇」和手稿「後篇」大部份只有用字、遣詞上之差異，但結尾部份改動較大，《文學評論》版結尾註明完稿日期為一九三四年五月一日。由此可知《文學評論》版另有手稿。

註② 1. 胡風譯文第一次發表於《世界知識》第二卷第六號(一九三五年六月一日)，第二次發表於《弱小民族小說選》(上海：生活書局，一九三六年)，第三次發表於《山靈》(上海：文化生活出版社，一九三六年)，三版內容大同小異，

例如《弱小民族小說選》版更正了《世界知識》版的少許別字。

2. 譯者序《世界知識》版置於文前，《弱小民族小說選》版置於文後，至《山靈》版刪除。譯者序如下：

「台灣自一八九五年割讓以後，千百萬的土人和中國居民，便呻吟在日本帝國主義鐵蹄之下。然而那呻吟痛苦的奴隸生活究竟苦到什麼程度？却沒有人有深刻地描寫過。這一篇是去年日本《文學評論》徵文當選的作品，是台灣底中國人民被日本帝國主義統治了四十年以後第一次用文藝作品底形式將自己的生活報告於世界的呼聲。

當然，缺點是有的，例如結構底鬆懈和後半底安逸的感情調子，但那深刻的內容却使人不能不一氣讀完。據說台灣底華文報紙曾連載過很長的介紹批評，但因為對於讀者的刺激力太大，中途曾被日本當局禁止登載。爰特譯出，以便讀者窺知殖民地台灣人民生活底悲慘。讀者在讀它時，同時還應記著，現在東北四省的中國人民又遇著台灣人民的那種同樣的命運了。」

3.「臺灣評論社」版（台北：臺灣評論社，一九四六年）為楊逵編訂之中日對照版本。本版本日文部份補上《文學評論》日文版被檢查刪除的部份，但有時補上的字數和被刪除的字數不符。「臺灣評論社」版的日文「序」（參考《詩文集》），翻譯如下：

「《送報伏》寫於一九三二年，爾後透過賴和先生，在《台灣新民報》連載，但後半却被當局查禁。一九三四年全文始在東京的《文學評論》刊載，但在台灣仍被查禁。

一九三六年，胡風先生的譯文刊登在上海的《世界知識》，接著又被收入《弱小民族小說選》、《朝鮮台灣短篇集》等，但這些書也一直被禁止帶入台灣。

因此，島內同胞可能很少見過這部作品。而今「光復」，得以跟諸位讀者見面，作者的喜悅，莫此為甚。

原文是借自黃得時先生的藏書，由賴女士等人謄寫，僅在此一併致謝。

原文被刪除之部份決定儘量再補上，但譯文則不予改動。

楊逵 一九四六、七、一

4.「東華」版（台北：東華書局，一九四七年）與「臺灣評論社」版內容及「序」完全相同，但中日文編排「東華」版為上下對照，「臺灣評論社」版則為左右對照。

5.「大行」版（台南：大行出版社，一九七五年）為楊逵重新翻譯並增補改寫之版本，和《世界知識》版差異甚大。

6.「前衛」版（台北：前衛出版社，一九九二年），根據《山靈》版，但簡化了譯者之註解。

7.《全集》根據《世界知識》版校訂，「大行」版做為附錄。

註③ 《文學評論》日文版有多處被檢查刪除，胡風譯文（《世界知識》版）有幾處憑猜測補上被刪的文字，《全集》根據手稿「後篇」比對後，以下列方式表明被刪除的文字還原後的情況：

1. 胡風猜測正確的部份，以（ ）表示。

2. 刪節太多，胡風無法猜測的部份，《全集》根據手稿還原，以〔 〕表示。

3. 《文學評論》版日文被刪除的文字，《全集》根據手稿還原，亦以〔 〕表示。

註④ 日文刪去六字，胡風僅猜出「警察」二字。手稿「後篇」(頁八)此部份略為不同，翻譯如下：「一個一個都和父親一樣，說著：『我不賣，所以沒有帶圖章來，』被警部補老爺打了以後，就被拖往警察派出所。」「臺灣評論社」版日文補上六字(頁七十七)，翻譯如下：「本村的警察」。

註⑤ 日文刪去四字，因手稿內容不同，無法還原。手稿內容如下：「如果母親有機會讀一點書的話」(頁二十一)。「臺灣評論社」版未補上(頁一〇七)。

註⑥ Crala Zetkin (一八五七—一九三五) 德國社會主義者，國際婦女運動領袖。

註⑦ 胡風猜測為「警部補」，但手稿上是「巡查」(頁二十九)。「臺灣評論社」版日文補上「官憲」二字(頁二三)，意為「警察」或「當局」。

註⑧ 《文學評論》版刪去十四字，胡風猜測為「日本底勞動者們」，和手稿(頁三十一)不符。「臺灣評論社」版日文補上十字(頁一二七)，手稿字數是十二字，但意思相同。

註⑨ 《文學評論》日文版刪去十一字，手稿有十五字(頁三十一)。「臺灣評論社」版日文補上五字(頁二九)，意思是「共同的敵人」。

註⑩ 《文學評論》日文版刪去八十九字，胡風無法猜測，僅註明：「註原文刪去。」但手稿「後篇」對應的段落(頁三十一)和《文學評論》版此段內容不同，翻譯如下：「這次會見以後，我一面找工作餬口，一面和他們那些日本勞動組合評議會的人們來往。支援了幾次罷工行動，參加過會議，甚至還站在講演會的講台上。」「臺灣評論社」版日文只補上七十九字(頁一三一)，翻譯如下：「和他們那些日本勞動組合評議會的人們來往。支援過罷工行動，參加過會議，甚至還參加過演講會，談我們台灣人受苦的情形。」

註⑪ 手稿「後篇」並無這部份的文字：「對那脾臉一拳：怎樣？還說勞動者……。」「還說勞動者」後面，《文學評論》版刪去日文十二字。由於手稿缺此部分，因此無法還原。「臺灣評論社」版日文只補上十一字(頁一三三)，中文部份在「還說勞動者」後面補上「沒有志氣」四字(頁一三二)。

附錄：

送報伏

一

「呵！這可好了……」我想。

好像肩負着很重很重的東西，而快要被壓扁了的時候，忽然碰到有人幫我這重荷卸了下來似的，是那種輕鬆快樂的感覺。

因為，我來到東京以後，一混就快一個月了，在這將近一個月的中間，我每天由透早到深夜到過東京市的一個一個職業介紹所去，還把市內和郊區劃成幾個區域，帶着從報紙上抄下來的徵募工人的廣告走遍了各處找尋職業——但一直到現在，還沒有找到一個讓我工作的地方。而且，帶來的三十圓，現在只剩有六圓二十錢了，留給和三個弟妹在家的母親的十圓，已經過一個月了，該是快要花光的時候了。

在這樣惴惴不安的時候，而且從報紙上看到全國失業者三百萬的消息大吃了一驚的時候，偶然在大崎派報所的玻璃窗上看到「徵募送報伏」的招貼，我高興得差不多要跳起來了。

「我可找到了立志的機會了。」

我胸口突突地跳，跑到大崎派報所門口，推開門便恭恭敬敬地打了個鞠躬。

是下午三點鐘，好像晚報剛剛到，滿房子裏都是「咻！咻！」的聲音，幾十個送報伙正忙亂地在疊着報紙。在這些忙亂的送報伙中間，只有一個悠閒坐在椅子上對着桌子的，身穿西裝，頭髮光滑滑的男人，把煙捲從嘴上拿到手裏，大模大樣地和煙一起吐出了一句：

「什麼事？……」

「呃……送報伙……」

我說着就指一指玻璃窗上的紙條子。

「你想……試一試嗎？……」

老板的聲音是嚴厲的，我像要被壓住似地發不出聲來。

「是……是的。想請你收留我……」

「那麼……讀一讀這個規定。同意就馬上來。」

他指着貼在裏面牆壁上的、用大紙寫的分條規定。

第一條，第二條，第三條地讀下去的時候，我陡然瞠目驚住了。

第三條寫着要保證金十圓，我再讀不下去了，眼睛開始發暈。

過了一會，回轉頭來的老板，看到我那種頹然的樣子。便問：

「怎麼樣？……都同意嗎？……」

「是……是的。同意是……都同意。只是保證金還差四圓不夠……」

聽了我的話，老板便從頭到腳，仔細地望了我一會，而說：

「看你這副樣子，覺得很可憐。不好說不行。那麼，你得要比別人加倍地認真做事！懂嗎？」

「是！懂了！真是感謝得很！」

我重新把視線落到他的腳尖那裏，說了謝意。於是把另外鄭重地裝在襯衫口袋裡面、而用別針別着的一張五圓票子拿出來，和錢包裡面的一圓二十錢合在一起，恭恭敬敬地送到老板面前，再說一遍：

「真是感謝得很！」

老板隨便把錢塞進抽屜裡面說：

「進來等着，叫做田中的會照應你。你要好好的聽話呀！」

「是，是。」我連連點頭答應，坐在他腳下等着。心裏非常高興，却暗中想着：

——叫做田中的，不曉得是怎樣的一個人呢……要是那個穿學生裝的才好呢！……

在我同老板打交道的時候，疊好了報紙的一個個走出去了。偌大的房裏寂靜無聲了。我靜靜坐在老板腳下，心裏却熱烈的回憶着那些工讀出身而完成了偉大事業的人們的故事。我決心忍受一切痛苦來完成我的志願。

冬天的太陽走得極快，剛打過五點鐘，天就黑了。老板早就把抽屜都上好了鎖，走了。店子裡面空空洞洞的，只剩我一個人。我站起來又坐下去，在這生疏而無所事事的環境裏，不知道如何來度過這一段時間。

身上已經一分錢都沒有了，又餓，又寂寞，又寒冷……我不免萌起被騙走錢之後被遺棄了的感覺。

這是無聊的。錢在那個抽屜裏，桌子在這個房子裏，這房子是大崎派報所！剛剛有幾十個送報伙從這裏走出去。老板剛剛答應收留我，這裏是我這一個月奔波之後初得到的職業的處所。這不是虛幻的樓閣……我打消了那些變化無常的怪誕念頭，而勉強回憶那些立志傳中的人物，來點燃心裏的燈光。

等了好久好久……真的光明來了。第一個送報回來的人把電燈開了。接連，一個，兩個，也有三四個一道回來的。一時冷清清的屋子裏面又熱鬧起來了，我才從幻覺回到現實，我急要找尋那個叫做田中的，便隨便抓住一個人打聽。

「田中君！」

那個男子並不回答我，却向樓上替我喊了一聲「塔那卡」。

「什麼？……那個喊？」

一面問答，從樓上衝下來一個男子，看來似乎不怎樣壞。他也穿着學生裝。因為我決心在東京工讀，

對於穿學生裝的人有特別的好感與期望。

「啊……是田中先生嗎？……我是剛剛進店的，主人吩咐我要承您照顧……拜託拜託。」

我恭敬鞠了一個躬，衷心說出我的來意，那男子却臉紅了，轉向一邊說：

「呵呵，彼此一樣。」

大概是向來未曾受過如此恭敬的鞠躬，有點承受不住罷。

「那麼……上樓去。」說着，就登登地跑上樓梯了。

我也跟在後面上_了樓。但這並不是普通的樓，是站起來就要碰着屋頂的所謂「半樓」。

到現在為止我住在本所區的「木賃宿」裡面。有一天晚上，說是什麼大學生來參觀，他們穿過我們住的地方，一面走過一面卻驚嘆着說：

「好壞的地方！這樣窄的地方怎能睡得這麼多的人！」

然而這個派報所樓上，比它還要壞十倍。簡直不是人住的地方。

「他[△]他[△]米」的蓆面都脫光了，只有髒得漆黑的稻草，我們就要睡在這上面。這裡有三三兩兩擠在一堆講着話的，但大半都已鑽在被窩裡面了。看一看，是三個人蓋一床被頭，從那邊牆根起一排排地擠着。

我是在臺灣鄉村長大的，家父是一個勤懇的自耕農，雖然不怎麼富裕，住的地方却是寬敞的。我愛潔淨，便自己佔了一個房間，每天弄得很整潔。可是，做帝王的也有臥薪嘗膽的時候，我已決定忍受一切了。

我茫然地望着房子裡面，而如此說服自己的時候，忽然聽到哭聲而吃了一驚。回頭一看，是一個十四五歲的少年在我背後的角落裡嗚嗚地響着鼻子。他旁邊的一個男子低聲地、似乎正在用什麼話安慰他，

說話的內容雖然聽不見，不安總是不安的。我是剛剛進來的，雖然沒有管這樣事情的勇氣，但心裡開始沉悶起來了。

——我找着了工作正在高興時，那個少年爲什麼在這時候要嗚嗚地哭着呢？

結果，我自己確定了。這個少年一定是年紀太小，想家想得哭起來的罷。如此我就放了一點心。

昏昏之間，八點鐘一敲，電鈴就「令！令！」地響了。

「睡了，喂。早上要早呢……兩點到三點之間，報紙就到，大家都得起床。」

田中這樣告訴了我。

二二

從那邊牆根排起的人頭，一列一排地多了起來，房子已經擠得滿滿的，我不知道如何擠得到側身之地。田中拿出了被頭，我和他，還有一個叫佐藤的一起擠進去了。擠得很緊很緊，不說翻身，就是要動一下都不可能。我曾看到過人家把盜器裝在箱裡，那是要擠得越緊越好，不許有一點空隙的。我們正在如此擠着，不，說是像沙丁魚罐頭還恰當些。每一個人還要壓得扁扁才行。

在鄉間，我是在寬地方睡慣了的，房間又要打掃得乾乾淨淨，因爲我最怕跳虱。

可是，這個派報所却是真實的跳虱巢，一側身便從腳上、大腿上、腰上、肚子上、胸口上一齊開始進攻來了。癢得無法忍受。本所區的「木質宿」雖然也有很多的跳虱，但那裡不像如此擠得這麼緊，覺得癢

時，我還可以爬起來捉一捉的。至於這個「半樓」裡面，是如此動都不能動的沙丁魚罐頭啦！我除了咬緊牙根忍耐之外，沒有別的法子。可是，一想到這是好容易才找到了的職業，是立志的第一階梯，這一點點算什麼？……也△也△滿不在乎了。

「比別人加倍地工作，比別人加倍地用功……」想着想着，我興奮起來了。因興奮和跳盪的襲擊，九點敲了，十點敲了，我都不能夠睡着。

到再沒有什麼可想的時候，我便伸頸數數擠在這裡的人頭，連我在內一共是二十五個。第二天白天我數數在這房間的「他△他△米」，竟一共才有十二張蓆子。平均每張蓆子要擠上兩個人多一點。

這樣混呀混的，小便漲起來了。不巧得很，我却是夾在田中和佐藤中間睡着的，要爬起來實在艱難極了。大家都睡得熟爛，怎麼好意思掀起被頭把人家弄醒？想輕輕地從頭那一面把身子抽出來，却又碰到睡在頭一排的人的腦袋了，他們的腦袋正塞着我的出路。

我斜起身子，用手撐住，很謹慎地（大概花了不止五分鐘罷）才把身子抽了出來，却免不了碰了佐藤一下，他翻了一個身，幸而沒有把他弄醒。

這樣地，爬是爬起來了，但要走到樓梯口去又是一件苦事。頭那方面，頭與頭之間相接，沒有插足的地方。只因脚比身體所佔的面積小，算是有一些空隙的。可是，脚都掩在被頭裡面，那是脚那是空隙却不容易弄清楚。我仔仔細細的找，找到可以插足的地方就走一步，好容易才走到了樓梯口。中間還踩着了一個人的脚，吃驚地跳了起來。

小便回來的時候，我又經驗了一次更大的困難。要走到自己的舖位，那困難和出來時固然沒有兩樣，

但回到自己舖位一看，被我剛才碰了一下而翻了身的佐藤，已把我的地方完全佔去了。

今天才碰在一起，全不知道他的性子，我不敢去動他。只好暫時坐在那裡，一點辦法也沒有。過了一會，以不弄醒他的程度慢慢地擠下去，花了好久好久的時間，好不容易才擠開了一個可以側身的地方。

鐘敲十二點時，我還張着眼睛睡不着。

不知道過了多久，好像是沈入朦朧裡的時候，我被狠狠地搖着肩頭驚醒了。張開眼睛一看，房子裡面已經是騷亂得像戰場一樣。

昨晚八點鐘命令睡覺的電鈴又在喧鬧地響着。響聲一止，下面的鐘才敲了兩下。我竟沒有睡足兩個鐘頭，腦袋昏昏的，很沉重。

大家都收拾好被頭，登登地跑下樓去了。擦着沉重的眼皮，我也跟在田中後面跑下去。

在樓下，有些人已經在開始疊報紙了，有用乾毛巾擦着臉，也有用手指在刷牙齒的。沒有洗臉盆，也沒有牙粉，我以稀奇的眼光瞧着這些——住在文明都市的東京卻過着如此原始生活的人們。不用說，我沒有帶手巾來，便用水管子的冷水冲一冲臉，再用袖子把它擦乾了。接着急忙地跑到疊着報紙的田中旁邊，從他分得一些報紙，開始學習怎樣疊了。起初幾份有些不順手，但不久也就不比別人遲好多，能夠合着大家的調子疊了。

「咻咻殺！咻咻殺！」自己的心情也和着這個調子，非常的明朗。睡眠不夠而沉重的腦袋輕快起來了。

四

早疊完了報紙的人，一網網地抱起，用帶子掛在肩頭走出去了。我跟田中是第三個出去的。

外面，冷風颯颯地刺痛臉。雖然把全部衣服都穿在身上，我却冷得牙齒闐闐作響。因爲，兩三天來下的雪積到齊膝蓋那麼深，雖在早上三點鐘，雪光照得明晃晃如白天。

這裡是東京的郊外住宅區，爲走捷徑，我們走過許多積雪沒膝的小路。而雪正開始溶化，積雪下面盡是溼漿的泥水，這滲進滿足窟窿的破皮鞋，沒有走多久我的腳就給凍僵了。

然而，想起這一個月中間，爲了找職業走了多少冤枉路，雖然凍得我的脚由痛而麻木，現在走的路却給我許多希望和幻想。再想到和三個弟妹在家等我消息的母親，想到全國失業三百萬人……這樣的苦也滿就不在乎了。我自己鞭策自己說：

——吃得苦中苦，方爲人上人。

如此提起精神走，腳特別用力地踏出去。

田中走在我的前面，也特別用力地踏，用一種奇怪的走法走着。每次從兩板塞進報紙時，就告訴了我那家的名字。我用電筒照着訂戶名單，復誦着以便記入腦裡。

這樣的，我們從這一條路轉到那一條路，穿過小路和窄巷，把二百五十份左右的報紙完全分送完了的時候，天已經亮了。

我們急急的往回家的路上走。肚子空空地，覺得隱隱作痛。昨天，六圓二十錢全被老板拿去當作保證金，晚飯沒得吃，昨天的中午，早上——不……這幾天以來，望着漸漸少去的錢，覺得惴惴不安，終於沒有吃過一次飽肚子。現在，一回去一定有那香噴噴的豆醬湯和熱飯在等着，馬上可以吃一個飽——想着想着，就好像早飯已經擺在眼前，不禁流起口涎來了。如此一想，脚下的冷，身上的顫抖和肚子的隱痛都丟在腦後了。

可是，田中並不把我帶回店子，卻走進稍稍前面的一條小巷裡；站在那個角上的一家小飯店前面。昏昏地，我一切都莫名其妙了。我是自己確定了店子方面會供給伙食的，但田中卻把我帶到了這小飯店來，而我身上連一文錢都沒有。……

「田中君……」

我喊住了正要拿手開門的田中，說：

「田中君……我沒有錢……昨天所有的六圓二十錢，都交給老板作保證金去了……」

田中停住了手，呆呆地望了我一會兒，於是像下了決心似的說：

「那麼……進去罷！我墊給你——」他伸手把門推開，催我進去。我躊躇着，一切的幻想都不曉得跑到那裡去了。好容易以為能夠安心地吃一頓飽肚子，却又是這樣的結果，我又悲哀，又沮喪。

「不過，如此已經開始了工作，暫時請他墊一墊也沒有什麼。等領到薪金便能夠一五一十還他的……」這樣一想才勉強打起了精神，吃了一個半飽。

「喂，夠嗎？……不要緊的，吃個飽呀……」田中看我只吃一碗飯就放下了筷子（他吃了兩碗），便這

樣地鼓勵我。看來，他是比我所想像的更好了。但我覺得很對不起他，再也不敢開口說「再來一個」了。——雖然，肚子因塞進了這一碗飯的刺激，是更覺得餓着。

「已經夠了。謝謝你。」說着，我把眼睛望着旁邊。眼裡發燒，眼淚滲出來了。對於他覺得非常抱歉，又羞怯，又感激——。

似乎同事們都是到這裡來吃飯的。現在有幾個正在那裡吃，有吃完了走出去的，也有接着進來的。許多面孔都好像有一點面熟。

田中付了賬以後，我跟他走出來了。他吃了十二錢，我只吃了八錢。

出來以後，我走近他身邊，想再說一聲「謝謝」，但他卻故意迴避我，把話推開了。他說：

「吃得消麼？這工作似乎非常輕鬆，卻是很辛苦的。尤其在這樣寒冷的冬天。」

「辛苦……我是不在乎的。」

「忍耐一下吧！習慣了可能會覺得好一點。」

「是的，謝謝你。」

「那裡……」他把臉轉開了，好像不習慣於如此客套似的，顯得臉紅紅。

五

回到店子裡走上樓一看，早的人已經回來了七八個，有的正在準備上學去，有的在看書，有的在聊天，

還有兩三個人攤出被頭鑽進去睡了。

田中正在整理書包要到學校去。

看到人們上學校，我是心癢癢的，恨不得馬上也跟着去。但一想到，現在連飯錢也要請人家代墊，心就煩悶起來了。洩了氣的皮球一樣，沒氣沒力地靠在牆壁上坐着，從小窗望着大路發呆。

早上的馬路看來景況很不壞，兩邊店舖前面的各種招牌映着初出的太陽是美觀的，熙來攘往的各種車輛非常熱鬧。上班的上班，上學的上學，都顯得精神抖擻，活活潑潑。誰知道光這個都市裡就有數十萬的失業者，爲了工作，爲了吃飯在掙扎着呢！

這時，我忽然覺得手心有什麼觸着，回頭一看，就是預備好了要去上學的田中，把一隻五十錢的角子放在我手心說：

「這，你拿着吃午飯罷。放學回來，再想法子。」

我凝視着手掌心的那個角子，不知道有什麼東西從肚裡湧上來，把喉嚨塞住，默默地舉頭看他跑下樓去了。他如此的親切，叫我感激得幾乎要流出眼淚來。

「等生活有了辦法，得好好地謝一謝他。」

我這樣想着。忽然又聽到了「嗚嗚」的哭聲，吃驚地回過頭來一看，還是昨晚的那個十四五歲的少年。他戀戀不捨似地打着包袱，響着鼻子走下樓去了。

「大概是想家想得不能安罷。年紀太小怪不得……」我和昨晚做了一樣的解釋，再把臉朝向了窗外。下面的門聲響後，我看見了他向大路的那一頭悄然走去，影子漸漸地小了，卻時時回轉頭來望這邊。

不知怎的，我也悲哀起來了。

那天送晚報，我又跟着田中走。

從第二天晚報起，我便抱着報紙分送，田中跟在我後面，看我送錯了才提醒了我一下。

第三天早晨非常冷，一路上溶化了的雪水都凍結成冰了，滑得很。手也凍僵了，僵硬的不靈活，要從兩板縫把報塞進去也覺得不太容易。

雖然如此，我還是遲不了多少它把報送完了。

「你很不錯，僅僅跟着走這兩天，兩百五十多個訂戶都差不多記清楚了。」

在回家的路上，田中如此誇獎了我，我自己也覺得做得很得手。被提醒的就只有兩三次在交叉路口稍弄不清的時候。

那一天恰好是星期日，田中沒有課。吃了早飯，他便約我去推銷訂戶，我們一道走了，我們兩個成了好朋友，一面走着，一面談着互相的家鄉、談着互相的志趣。

我很高興得到了田中這樣既誠懇又熱情的朋友。

互相瞭解了對方的志趣之後，我說：

「我也想趕快能進個什麼學校，學一點……」

「很好，我們可以互相幫助，拚命幹下去罷！」

這樣地，每天，田中甚至節省他的飯錢來借給我吃飯，看我的鞋子破得不能再補了，又買了一雙「足袋」（編者按：布包靴）送給我。

六

這一天，我和田中一道走在這郊區，空氣清爽，話又談得攏，好像小時候同知心的朋友上山採果一樣非常快樂。

可是，一到目的地，情形就不同了。現在，我們要的獵物不是野菜，而是訂戶。

東京市正在向着郊區發展，新建住宅到處在開工，到處在完成，而天天都有新搬來的。我們的目標就是這些住戶店舖。每當找到目標時，我們便按戶開門，按戶低頭鞠躬，說了一大堆我們報是如何如何的好——其中有些是真的，有些是假的，假的却要說得像真的，真的更要誇大其詞。我是在見習，是在旁邊看着，聽着田中的手法，看這個老實的朋友說起謊話時，總免不了會覺得臉部發燒，紅不紅我自己是看不見的。

「賣花說花香，賣瓜說瓜甜，這是無可奈何的。」不管獵物上鈞不上鈞[△]，退出時田中總是向我這樣解釋。我也表示同意。

這還可以，有些住戶根本就不聽你的胡說八道，一見是推銷報紙的，便惡狠狠的，趕狗一般：「走開！不要不要！」隨即把門關緊，叫我們無法可施。

今天我是一個旁觀者，一切的一切還看得入眼，就是像狗一樣被趕時，也覺得新鮮有趣。那裡知道從改天起我就被派當這個差事了。

「送報的地方都完全記好了嗎？」

推銷訂戶回來，老板把我叫到他面前問話。

「呃，完全記得了。」

我回答了他的問話，心裡非常快樂。爲的是這兩天中竟能把這二百五十個訂戶，散布在這生疏、廣大，而又複雜地區裡。由於二百五十個都記清楚了，所以便起了一種似乎有些自傲的飄然的心情。

「不錯！」

他說了一聲誇獎的話，便拿起幾張訂報單數着，笑哈哈的用手拍在我的肩膀上說：

「頭一次出馬就有這樣的成績，也是難得的。」

這話卻叫我臉紅了。因爲今天的推銷訂戶完全是田中做的，我不過是跟着他走的旁觀者，田中卻把它記在我的成績裡了。

「那麼，從今天起你就去推銷訂戶罷。報可由田中送。但田中有事故時，你還得去送的，不要忘記！」

「是。」

我只好答應。

想起從今以後不能同田中一道走了，免不了覺得有些寂寞。但我曉得這是不可能的：就用了什麼都幹的決心，爽爽快快地再說一聲：

「是！」

今後，雖然各走各的路，我同田中還不是可以睡在一起嗎？星期天，我們也可像今天一樣一道走。只

要有飯吃，能上學，多少能夠寄一點錢給媽媽……我想得如此天真是有理由的。因為，田中曾告訴我，推銷訂戶是按份計酬的，不像送報的薪水是定薪。如果成績好的話，就可以有較多的收入。而且，推銷訂戶是白天的工作，要上學，夜間學校多的是。

於是我便專門出街推銷訂戶去了。

每天早上八點鐘出門，中午在路上買個麵包啃啃，晚上六點左右才回店——再早再晚是不便找到人家打交道的——頭一天僅僅推銷了六份。

第二天八份，第三天十份，那以後總是在七份到十份之間。老板看我的眼光也變了。每次交他訂單時，他總是怒目而視，說我的成績太差。而進店的第十天，他竟比往日更兇猛地說：

「成績這麼差！平均每天要有十五份才行！如此七份八份，還夠吃飯嗎？」

一說到吃飯的問題，我便喪了膽子。

十五份……要比現在要多一倍。那實在夠難的呀！

人家趕狗一樣地叫你走，而隨即把門關得緊緊時，我不知道有什麼辦法可施。

人家堅持不要時，我把頭再低下去，也有沒有結果的，雖然有些軟心腸的人，看我說得要哭了，才勉強訂了一個月的所謂「同情訂戶」，倒是有的，但那不能太多。我着急起來了。

改天，天還沒有亮我就出門，但推銷和送報不同，非遇到人是沒有辦法的，起得這樣早又有什麼用呢？只好在路上走來走去，等人家起床把門打開了才闖進去。一家又一家的打開人家的門，低頭鞠躬，真的假的說了一大套。一直走到天黑了，我還鼓起勇氣打開人家的門，結果是悲慘的。有一戶人家竟把我當做小

偷看待，放出猛狗來追逐，使我跌了幾交，差一點就給咬着了。

七

這一天，好容易才推銷了十一份，離老板所要求的還差四份。雖想再找幾家才回店，但一想起那隻猛狗的追逐，我再也拿不出勇氣來了。

疲乏不堪地回到店子時，是十時只差十分鐘。送報的人都入夢鄉了。老板自然也走了。我洗洗腳上樓時，田中竟還醒着，馬上爲我擠出一個可以躺下去的地方，我便把身插進去了。

「爲什麼這樣呢……」

他好像一直爲我擔心著。

我卻只是垂頭喪氣地搖著頭，整夜不能入眠。

照常一樣，深夜的電鈴一響，大家便忙亂地爬起來下樓去，隨即疊報紙的「啾啾」聲一陣子。門戶關閉聲響後，我才享受了真正的清靜。現在，這裡成爲我獨一個人的天地了，我任意可把手腳伸開。本可任意翻身睡個好覺的，但還睜着眼睛，茫然看着那黑壓壓的屋裡，不知道在想些什麼。一直挨到送報的人回來了我才起身，我要等老板上班，把昨天的推銷成績報告一下才能再出去。

我坐在我經常坐的地方，從小窗看出去。朝陽剛剛出來，把整個馬路照得光輝燦爛，外面的空氣是清爽的。在鄉下住慣的我，自到這個城市以後，特別覺得空氣的缺乏，心裡非常鬱悶。

等了好久好久，老板才挾着皮包來了。我馬上跑下樓去，把昨天的訂戶單交給他。雖然還沒有達到他所要求的目標，十一份是比從前進步得多了，說到我的努力，也是盡到了極限了。雖然不希望他的讚揚，我卻也想不到他會如此兇猛。他數一數訂單之後說：

「十一份？……不行，這不行！」

我膽怯起來了。這個職業是否能夠保得住，叫我開始耽心。正因為如此，我沒敢說一個「不」字。到底有什麼地方比奴隸好些呢？

是的，我是自由的，隨時可以離開。可是，一離開就沒有飯吃，田中給我代墊的飯錢更無法清還，無論如何是離開不了的。

「是……是……」除了說「是」以外別無話可說。不用說，我又拿著單子出去推銷了。垂頭喪氣走出來，就註定要失敗的，果然這一天慘得很，僅得的六份，差不多都是同情定戶，我傷心得要哭出來了。

昨天推銷得十一份都連說「不行不行」了，只有六份要怎麼說呢？……（後來聽到講，在如此場合，同事們都會偽寫幾張單子報上去，以度過難關。如此偽造的「烏有讀者」的報費，自然是非自己剛荷包不可的。甚至有的人會把收入的一半替這種「烏有讀者」付了錢。當然，老板是沒有理由反對這種「烏有讀者」的。）

改天，我惶惶恐恐地走到老板面前，他一聽說只推銷了六份，就馬上臉色一變，勃然大怒了。臉漲得通紅，用手拍着桌子說：

「六份？……你到底是來幹什麼的？你……連保證金都不夠……我就是同情你，才把你收留下來的！」

你不是答應要比別人加倍努力嗎？」

到此，他喝了一口茶，又數一數那些訂單。

「像你這樣的東西是沒有用的，走你的，馬上滾出去！」

我不是木頭人，如此受叱責，免不了是滿腹怨憤的，但一想到走了一個月的冤枉路都找不到職業的情形，又想到三百萬的失業者……便咬着牙根忍住了。

「我將更加勞力，請原諒……」

除了哀求，我沒有法子可想。但我不曉得應該如可去努力。從這一條街到那一條街，從這一巷到那一巷，幾天來，我差不多一家不漏的拜託過了。訂了的是訂了，不要的人又不要，雖說還有些人，看到我說得快要哭出來了，就會勉強答應。這倒不會太多。其後的成績越來越差，每天找到三五個訂戶都是新搬來的。

「本來，不到一個月是不算工錢的……」

老板指着壁上那紙規定說：

「看你這個可憐相，才特別算給你。我是同情你的，但成績這樣差，沒有辦法。」

是第二十天。老板把我叫他面前，這樣教訓了一頓以後就把下面算好了的賬和四圓二十錢推給了我。隨即忘記了我的存在一樣，對着桌子做起事來了。

八

我失神似地看着那張賬單子：

每推銷報紙一份

五錢

推銷報紙總數

八十五份

合計

四圓二十五錢

我啞然看着它。——現在被趕出去，怎麼辦？……尤其這四圓二十五錢的數目真叫我驚異了。接連二十天，不會是算錯嗎？我覺得現在無論怎麼樣說都是白費，便問：

「錢數沒有錯嗎？……」

「錯了？什麼地方錯了？」

「一連二十天。……」

「二十天怎麼樣？一年，十年都是如此的。你自己沒有成績，錢會從那裡掉下來？」

「……」

我不曉得應該怎樣說了，在心裡盤算着：

——好吧！加上保證金的六圓二十錢，就有十圓四十五錢，還給田中八圓還有二圓四十五錢。吵也沒有用。決心不再說什麼，把保證金拿了就走！

「那麼，還有保證金六圓二十錢……」

我這樣一說，老板好像把我看成了一個大糊塗蟲，嘲笑着說：

「你還要拿回保證金？你不說我竟忘記了！我沒有扣你的，你還想拿回保證金？這規定你不是說都同意了嗎？」

我又吃了一驚。我真是一個大糊塗蟲！那時候因耽心保證金的不夠，竟沒有把那規定看完。我用手按着「東東」跳着的胸口，再看下去那壁上貼着的規定。跳過前三條，把第四條讀了，那裡明明白白的寫着：

第四條：只有繼續服務四個月以上者才交還保證金。

我覺得心臟破裂了似的，血液和怒濤一樣漲滿了全身。

睨視着我的老板的臉，依然帶着嘲弄的微笑。

「怎麼樣啦？還想要回保證金嗎？乖乖的走！還在這裡纏，便一錢都不給！你剛才看過的，一定不會忘記，第七條規定是：服務未滿一月者，不給工錢！」

我因為被第四條嚇住了，又沒有看完它，現在轉頭一看，果然，和他所說的一樣，一字不錯寫在那裡。那麼，他算給我這些工錢，的確是特別的優待了。法律由他制定，由他個人來執行，就是古代的帝王也不過如此。——做工的還有什麼辦法！我只好眼裡含着淚，把那四圓二十五錢和賬單拿在手裡，歪歪倒倒的離開了它——這個二十天前曾給我無限希望和鼓勵的派報所。回頭一看，在那玻璃門上面，惹起了我無限痛苦的「徵募送報伏」的紙條子，却鮮明的、可惡的還貼在那裡。在這充滿着饑餓與失業的都市裡，它的確是無法不上釣的一個美餌。

我離開了那裡便乘電車跑到田中的學校，等他下課即把這經過告訴了他：

「借的錢，先還你三圓。其餘的，請再寬限一段時間，我一定想法子來還你。剩的這一圓二十五錢——不，剛乘電車又花去八錢了……這些錢請留給我做暫時的用費……。」

田中搖搖頭歎着氣，但他却把錢推回給我說：

「你拿着吧！我現在還可以過得去，不要急。我們苦命的孩子，在這樣的環境裡，互相幫忙一下是應該的。」

他尚且向我聲明，他連想我還他一錢的意思都沒有，叫我不要把這事掛在心上。

「沒有想到，你也會這樣地被趕出來。你進店那一天，是不是注意到一個少年在哭着？他，那一個十四、五歲的少年也是和你一樣上了鈎的。他推銷訂戶是完全沒有辦法的，只住了六天，被騙去了十圓的保證金之後，竟一錢也沒有拿到便走開了。」

真是混蛋的東西。

「今後，非想法子是不可的。『徵募送報快』的紙條子還貼在那裡，恐怕還有很多人會上鈎的。求職是如此艱難的這些日子……」

他已下了決心似的，說後即把口唇咬得緊緊的。

上課的鈴聲響了，我以萬分的感激和他握別。

九

走出了田中的學校，我爲他的人格感動得淌出了眼淚。茫然走到學校大門前，我才意識到自己的立場。在我前面是四通八達的大馬路，我却停止着，走投無路。

——到那裡去好呢？

我想了一會，却找不出目標，便茫然跟在人群走了。

走着走着，兩個印象極深的人像，竟走馬燈似的，在我腦袋裡面走過又出現。

一個是田中，他甚至節省自己的伙食，借給我付飯錢，買足袋，聽到我被趕出派報所了，連還給他的錢他都不拿而推回了……另一個就是人面獸心的派報所老板，他對走投無路的失業者，竟用「徵募送報伏」的美餌騙走我們的保證金，驅使我們爲他工作之後，竟一錢不付地趕出來……。爲肥他自己，他是不管別人的死活的。

我想到如此老板的人膽怯了起來，甚至想放棄了一切求學進步的念頭逃回家鄉去。可是，要回去，光輪船火車就要三十多圓，這一筆款子在這生疏的東京是無論如何也籌不出來的。

走着，走着，我毫無意識地走進了上野公園，隨便找個椅子坐下之後，便像癱瘓了的人一樣，再也沒有力氣站起來了。在許多遊人之前，我雖不敢表露出哭容，但在心裡面是怎樣哭了的呀！

家鄉，回到家鄉又怎麼樣？

在那裡，不是被逼得走投無路才跑到這裡來的嗎？如今，設使到處求乞能夠籌足一筆旅費回去，也不過是死路一條。

我要苦幹，我要拚命的幹——田中說的，如此也許能夠在死裡求生。

想到了田中，我便覺得精神硬朗了一些。這裡有派報所的老闆，却也有這一類的人，日本人常說：「世間雖有鬼，却也有佛」……忽然間，我的心境來了一個很大的變化，也起了捨不得離開田中的心情。

昏昏的想來想去，終於想起了父親慘死前後的事情，我顫抖了。那些吸我們的血，剝我們的肉，想擠乾我們骨髓的人，在家鄉也沒有兩樣。否則，年老的母親怎能忍心把我送到這麼遠的地方來！……我現在也不會在這裡如此狼狽不堪。年老的母親最愛團圓，我又喜愛鄉下的清靜，要不是被逼得走投無路了，我應該還是和母親弟妹一起在享受着平靜的農民生活——

到父親一代為止，我們的家是自耕農，有兩甲的水田和五甲的旱田，家人又都勤儉，生活一直沒有感到困難。

到幾年前，我們家鄉的××製糖公司說是要開辦直營農場，爲了收買土地，大大地活動起來了。不用說，收買的成績很差。因爲耕地是自耕農民看得如自己性命一樣貴重的東西，除了幾個負債累累週轉不過來的農民以外，誰願意把自己的耕地放手？

但，他們有日本政府做靠山，他們決定了要幹的事情，決不會沒有結果就收場的。過了幾天，警察方面便下了舉行家長會議的通知，由保甲經手，村子裡，只要有土地在那區域的，一家不漏都送到了。通知書下面還附帶寫着「隨身攜帶圖章。」

我那時候才十五歲，是公學校的五年級。雖然是好多年以前的事了，但因為印象太深，至今還能夠把當時的情形記得非常清楚。——

全鄉被捲入了大旋風似地恐慌了。

因為掮客們到處傳說：「不賣也得賣，要是堅持不賣，等警察出面，那就不好受了……」所以一接到這通知書便知道開會的目的在那裡，一時緊張起來了。

當時，父親在做保正，保內人們一接到通知書便擁擠着跑到我家裡來，戰戰兢兢地，有些哭喪着臉地問：

「怎麼得了？……」

「這怎麼辦？……」

對於每一個問話的人，父親的回答非常堅決而明朗：

「是我們的耕地，我們要在那裡耕種才能活命，那麼，不能賣就是不能賣，誰出面也是一樣！」

十

話雖這樣說了，但父親做了保正多年，對於日本在臺灣的警察是知道得很清楚的。如此說法是不是講得通，他可能毫無把握。「這個道理，這個道理」我常聽父親這樣說。如今，這個道理沒有把握說服暴力時，他可能已下了犧牲一切來維護「這個道理」的決心吧，同在這個時候，我就兩三次發現了父親躲着在流眼

淚。

在這樣緊張的情勢之下，會議於發下通知的第二天下午一時開了。會場在鄉裡中央的媽祖廟。有不到從嚴處罰的預告，各家家長都來了，有好幾百人。相當大的廟裡擠得滿滿的。學校下午沒有課，我躲在角落看情形。因為我幾次發現了父親的流淚，很爲此事耽心着。

鈴聲一響，一個大肚子光頭殼的人便站在桌子上面，裝腔做勢的說話了：

「爲了這個鄉的利益，本公司早已決定於本鄉北方一帶開設一個規模較大的農場。因此要收買在這個區域裡的土地，好多天前連地圖都貼出來了，請在這地方有土地的人攜帶圖章到公司來接洽。但直到現在，竟沒有一個人照辦。原料委員也一家一家地去訪問過土地所有人，可是，好像有人在陰謀，企圖破壞公司的計劃似的，竟沒有人肯答應。這個事實應該看作是共謀，但公司方面不願意這樣解釋，如此解釋對於大家都很不利，所以今天特別請大家到這裡來商量。回頭，警察大人和鄉長先生要講話，使大家都能夠了解這個計劃的好處。講過了以後，希望大家都可以安心在這紙上蓋一個章，公司預備出比普通更高的價錢……！呃哼！」這一番話是由當時我們五年級的導師陳訓導翻譯的，他把「陰謀」和「共謀」說得特別重，叫大家一聽即便驚心動魄起來了。

其次站起來講話的是警部補大人，他是本鄉的警察分所的主任。他一站到桌子上面，就用那凜然的眼光望了個大圈，於是大聲吼叫起來說：

「剛才山村先生也說過，糖業公司這次的計劃全是爲了本鄉的利益着想的。想想看！現在你們把土地賣給公司……而且賣得好價錢，很多很多的錢便流到這鄉裡來。同時公司在這裡建設規模宏大的示範農場

以後，本鄉便名揚四方，很多人會到這裡來參觀，因此，本村一定會日益進步，一天一天地發展。你們應該把這當作光榮的事情，大家好好地感謝糖業公司才是道理。然而，有些人正在「陰謀」反對土地收買，這是如何道理！這個計劃既是本鄉的利益，又是「國策」，反對國策便是「非國民」，是決不寬恕的！……」

他的翻譯是林巡查，和陳訓導一樣把「陰謀」和「非國民」「決不寬恕」說得特別重，叫大家又面面相覷，不寒而發抖了。因為對於懷過陰謀的余清風，他們出動了好多軍隊在礁吧咩一帶所作的血腥兇殺的情形，還很鮮明地印在大家的記憶裡面。

最後站起來的是鄉長，他是一個有名的好好先生，用着老年的溫和，柔聲細語地說：

「總之，我以為大家最好是依照主任大人的希望，高高興興地接受公司的好意吧！」

說了以後，他拿起一本冊子，喊起名字來了。最初被喊名字的人，都以為自己被當作「陰謀份子」，臉上顯出狼狽，打着抖，不敢站起來。當警察叫「你可以回去」的時候，也還是抖着不敢動，等再吼了一聲「走！」才醒了過來逃到外面去。在跑回去的路上，還是不安寧地想……會不會再被喊回去？無頭無腦的着急。

這樣地，有八十名左右的人被喊了名字回家去了。原來，他們是沒有土地在公司指定的區域裡面的。以後，是輪到剩下的人着急了。我的父親也是被留下來的一個，到處騰起了嗡嗡的聲音。伸着頭，側着耳朵，「會再喊嗎？」「會喊我的名字嗎？」……這樣期待着，大多數的人都開始惴惴不安了。

這時候鄉長說明了：

「請大家把圖章拿出來，這次被喊的人，到這裡來蓋個章就可以回去。」

第一個被喊了名字的，是我的父親。

「楊明……」

一聽到父親的名字，我就緊張得不知所措，屏着氣息，不自覺的捏緊拳頭站起來觀望。

——會發生什麼事呢？

父親却鎮靜地走上前去，一走到鄉長面前就用了破鑼似的聲音，斬釘截鐵地說：

「我的土地，我要自己耕種才能生活，因此不能賣，沒有帶圖章來。」

整個廟裡的空氣都緊張起來了。

十一

「什麼？你不是保正嗎？當了保正就應該順應國策，做大家的模範，你却做了陰謀的首領，這才怪！」站在旁邊的警部補，發怒地咆哮起來了。他逼住了父親，睨視着父親，父親却默默地站着。毫不動搖。看我的父親如此鎮靜，警部補越發生氣了，他再逼近着說：

「你再說一次……」

「我的土地，我要自己耕種才能生活。因此不能出賣，沒有帶圖章來！」

父親還是悠然不迫地說了。

「這個支那豬！拖去關起來！」

警部補狠狠地打了父親一掌，就向那些待命在旁的巡查發出了命令。

看着這個場面，剩下的人都更加膽怯起來了。很多很多的人都依照着鄉長所說的，一聽到自己的名字被喊，便拿出圖章一蓋，急急不回頭地跑出去了。

後來聽說，到大家走完為止，用了和父親同樣的決心拒絕了蓋章的，一共有五個，而這五個人，每一個都和父親一樣被拖到警察分所去了。我，一看到父親被拖走，馬上跑回家去把這情形告訴了母親。

母親聽了我的話，即刻急得人事不知了。

幸虧住在隔鄰的叔父很快就跑過來幫忙，性命算是救住了。但是，到父親回來為止的六天中間，差不多沒有停止過流淚，飯水不思，睡也不能安然。在這幾天中，瘦得不像一個人了。鄉下人就如此怕官，更怕關，這才越使這些日本警察們爲所欲爲，無所顧忌了。

到第七天父親才回來，他也是變了個樣子回來的。均衡整齊的父親的臉部歪起來了，左邊臉頰腫得高高的，眼睛突了出來，額上滿是瘡子。衣服弄得一團糟，他在換衣服時，不懂事的弟弟一看到父親身上那許多紫色的斑點便大聲地叫了起來：

「哦哦，爸爸身上和鹿一樣了！……」

那以後，父親的舉動也完全變了。過去，每有空時便高興和我們小孩子玩耍說笑的，現在却整天默然不開口，只望着我們淌眼淚。從前每餐要吃三碗飯的，現在是一碗都吃不完，沒有幾天便倒在床上爬不起來了。明明快活的這一個家，完全變了個樣子，笑神遺棄了我們。

如此，父親在床上掙扎了一兩個月之後，終於含恨永眠了。

同時，母親也病倒了，我帶着一個一歲、一個三歲、一個四歲的弟妹們，我是怎樣的窘迫呀！幸虧叔父叔母住在近鄰，每有空就跑過來照應，否則，我們這一家恐怕早就完蛋了。可是，叔父叔母也是被迫出賣了耕地的一家，剩下的耕地不夠做了，只好到遠遠的地方去找零工做來糊口，生活忙亂得很。製糖公司這一舉動，一下子就把幾百農家趕離了耕地，他們都像叔父叔母一樣，只好向四鄰鄉鎮去找零工，做小買賣，爭先恐後造成了激烈的競爭。零工是一做幾停，不能繼續的。所以，空着的日子雖多，心裡却忙忙亂亂，能夠幫我們的能力也非常有限。

這樣地，父親從警察分所回來時，丟在桌上的那六百圓，就因父親的病，母親的病以及父親的出葬等，差不多用光了。到母親稍稍好了的時候，只好出賣那筆旱田來糊口。

父親丟在桌上的那六百圓，他雖然到死沒有說明其來源，但誰都知道這是被公司收買的那筆水田的代價。據說時價是兩千左右的，公司只給了六百圓便說是高價錢了。

而對於堅持不賣、不帶圖章的父親，他們用拳打足踢也不能收到效果之後，便派人到家裡來向母親要圖章，說圖章不蓋，父親便永遠不能回來。一心祈願父親回來的母親，自然到處找了，都找不到。誰知道父親爲了加強自己不蓋章的決心，早就把他的圖章投在灶裡燒掉了。

可是，他們的辦法多的是。始終找不到父親的圖章之後，他們便叫雕刻圖章的人，再爲父親雕刻了一個，印鑑登記、賣渡契約、賣渡登記等一切手續都私自爲父親代勞了。

這是一位被解了職的陳巡查，事後告訴我的。他還說：

「你的父親真真了不起！被關在拘留所的其餘四個人都屈服了之後，只有你父親還倔強地要堅持到底。

我告訴他說：「你的圖章雖然燒掉了，他們却給你代勞，再雕刻了一個了。一切手續正在辦理中」。一聽到這話，他便大發雷霆，說要控告，吵鬧起來了。因向他洩漏了這個祕密，我被罵了一頓，終被解了職，但我一點都不怨恨他……他是個英雄好漢……可惜，孤掌難鳴……」

十二

從小學畢業以後，我也跟鄉人，到處找零工做了。那是「從樓上點眼藥」的，根本無法解決一家的生活問題。

我自小就喜歡看書，在幾本立志傳、偉人傳裡，我讀過了好幾個工讀出身而完成了偉大事業的人們的故事。我常常把這些故事講給母親聽，說我也要到東京去工讀。我知道，父親去世以後，母親是寂寞的，她總是說，我才十幾歲，年紀太小，始終拿不定主意。一直到賣那筆旱田的錢也用光了，他才答應了我的要求。

我立志到東京來的時候，就是不得不出賣耕牛和農具來糊口的時候。她勉強同意了我的遠行，可見家境困難到如何的程度了。一生未曾到過鄰近市鎮、火車也沒有坐過的一個上了年紀的女人，向他說要乘坐幾天的火車與輪船，經過如此大海才可以到達的遠地去工作、去求學，他便會嚇昏了頭的。她終於下了如此決心，不知道淌了多少眼淚才達到的！

我們把一切值得幾個錢的東西——耕牛、農具、腳踏車等等——除了房子以外的一切東西都出賣，而

償還了負債之後，所剩的就只有七十多圓。她留着十圓，剩下的都給我塞進口袋裡說：

「好好地用功呀……」

她站在門口送我，用哭聲說了鼓勵的話。那情形好像就在眼前。

這樣淒慘情形，不只是我們一家。

和父親同樣地被拖到警察所去了的另外四個人，都遇到了差不多同樣的命運。就是那些乖乖不作聲蓋了圖章的人們，失去了耕地之後，優先可以到製糖公司的示範農場去賣力，一天做十二個鐘頭，頂多不過得到四五十錢的工資。這四五十錢的工也不是天天有的，因為公司擁有大資本，土地又集中在一塊，犁地他們用的是機器犁，連牛都失業了。他們要的只是很少很少的打雜工人而已，優先被雇用的也是一做一停，大家都得靠出賣這個、出賣那個來補貼生活，只是賣的速度有分別而已。等賣地的錢用完了，可以賣的東西也賣光了，就只好冒險遠走了。恰恰與他們所說的「鄉的發展」相反，他們給我們帶來的正是「鄉的離散」。

我深深的沉在這樣的回憶裡，不知道何時太陽已經下山了。上野的森林已經隱在黑闇裡，山下面的電燈到處開亮了。我身上感到了寒冷，肚子也餓得咕咕叫。我打了一個大呵欠，伸伸腰站立起來。我走下坡，走進小巷子裡的一家小飯店。無論如何，我要先在疲乏透了的身體裡面恢復元氣，就決心吃了一個飽，還喝了兩杯燒酒。其後，我還是走到先前住過的本所區的那一家「木質宿」，我必須睡個飽覺。

我剛剛踏進一隻腳，老板即刻認出了我，急著問：

「唉呀！不是臺灣先生嗎？好久不見，這些時你是到那裡去了？……」

我不好說是做了送報伙，被騙去保證金，辛苦了一場之後又被趕出來的實情，只說：

「到朋友家裡……」

「朋友家裡？……唔，朋友家裡那會……我看你老了些，又疲乏……」他似乎不相信我的話，却也不好意思說出來，便裝着笑說：

「有一位朝鮮先生，他失蹤了好幾天，到昨天才又突然出現。問他到那裡去了，他竟很坦白地說是幹了『無線電』的……哈哈。」

「無線電？……無線電是怎樣一回事？」我聽不懂，反問了。

「無線電也不懂嗎？……哈哈。無線就是無錢（日文同音），不花錢遊興，到任何飯店酒館，吃得飽飽，喝得醉昏昏，到伙計來要算賬時却身無一文。碰到兇猛的酒館飯店伙計，有時候雖然難免挨打了一頓；可是，睡醒時却發現自己是躺在警察拘留所的，不是躺在路旁。既可以飽食，飽醉又飽睡……不錯吧！」

這老頭子這樣地向我開着玩笑。聽他的話，我心情也輕鬆了一下，便說：

「唔，人窮得不要臉的時候，你說的無線電，却也是一種不錯的職業啊！」

他哈哈地笑着，改了口說：

「請進來吧！看你似乎疲乏得很，進來好好地休息休息。」

我一上去，老板又說：

「那麼，楊君，幹了這一手嗎？……」

說着，做一個把手輕輕伸進懷裡去的樣子。很明顯的，他以為我是到警察署的拘留所裡討擾了來的。

聽他說明以前，我不懂無錢電是什麼一回事，但他這次的手勢，是不需要再加說明的了。明明白白的，他是在問我是否做了扒手。可見住在這個地獄邊緣的失業者們正在盛行着的是什麼！我沒有發怒，只是紅着臉，不尷不尬地否認了：

「那裡話！那個幹這種事！」

老頭子似乎還不相信，但也不勉強打聽。好像這些事情在這裡是太平常的了，一點沒有稀奇似的，哈哈笑着把我帶到房間休息。

十三

到房間裡坐下之後，我回顧了一下自己的樣子，這副疲乏不堪的樣子，難怪他認為是剛剛從警察署的豬籠裡出來的。

我伸伸腰，準備蒙頭大睡一下時，他竟拍了個手。

「哦！忘記了。你有一封掛號信！因為弄不清你到那裡去了，只好收下放在這裡。……等一等！我拿來給你。」說着就跑進裡面去了。

我覺得奇怪，什麼人會察掛號信給我呢？

過一會，把老頭子拿來的信一看，我又不安起來了。那是母親寄來的，到底有什麼事要寄掛號的……我手抖抖的開了封。什麼！裡面現出來的竟是一張一百二十圓的匯票，我大大地吃了一驚。我疑心我

的精神錯亂了。我胸口突突地跳着，一個字一個字地讀那很難看清的母親的筆跡。我受了很大的衝擊，好像要發狂一樣，不知不覺地在老頭子面前落了淚。

「發生了什麼事嗎？……」

老頭子顯得莫名其妙[△]的臉色望着我，但我却什麼也不能回答。收到錢哭了起來……可能他是沒有看到過的，他也不安地注視着我。但我已經忘記了他的存在了，在我的腦海裡，什麼都不存在，只有母親，母親的話佔滿了這天地。

我走到睡覺的地方就鑽進了被頭裡面，狠狠的痛哭了一場。

信的大意是這樣：

——你說東京不景氣，不能馬上找到事情做的信收到了。你帶的錢是那麼少，也沒有一個熟人，又找不到事情做，想着這樣窘的你，我胸口就和絞着一樣，日夜不安。但家鄉也是同樣，自開設農場以後，愈來愈困，弄到這步田地一點法子都沒有。我想，事到如今，你絕對不可軟弱下來，絕對不可萌起回家的念頭。

房子賣掉了，得到一百五十圓，寄一百二十圓給你。你要設法趕快找到事情，好好地用功，成功了以後才回來看顧你唯一的弟弟。阿蘭，阿鐵都死了，只剩了阿勉這個小弟弟，寄在叔父家裡。

——我的身體，不能再活多久了，不願意死後討擾人家，留了三十圓為葬身之用。

——媽媽天天祈願着你的成功，在成功之前，無論有什麼事情都不要回來。這裡好像是地獄，沒有出路……。

——這是媽媽唯一的願望，好好地記着罷。

如此的信，跟遺囑沒有兩樣，我着急得很。

——也許已經死掉了罷……

這念頭鑽進我的腦袋裡面，揮去不掉。

——胡說，那會有這種事情……

我翻一翻身，搖着頭，出聲這樣說着，想把這不吉的念頭打消。但毫無效果。

這樣地，我沒有入眠，跳虱的襲擊也全不感覺。

我腦海裡滿是母親的事情，滿是破碎了的家裡事情。

我爬起來看看她發信的日子，這封信竟在我去做送報伙以前寄出的了，至今已經過了二十多天。想到

這中間沒有第二封寄來——我更加不安起來了。

現在，我口袋裡有錢，我想回去看個究竟。回去以後，能不能再到東京來也不想。母親囑我不要回

去，她說家鄉沒有出路，但在這裏還不是一樣！

——回去之前，應找田中辭行，也該把錢還清。他是如此的好人……我不該辜負他。

這樣想着，我眼巴巴的等着第二天早上的頭趟電車，很早很早就跑出來了。等了好久好久，電車才開來，但天還沒有亮。爬上車後，我從電車窗口伸出頭去，讓早晨的冷風吹着，被睡眠不足和興奮弄得昏沉沉的腦袋，這才鬆了一些。

——這或許是最後一次看見東京……

這樣一想，連大崎派報所老板兇惡臉孔也忘記了。一切一的不如意事忘得一乾二淨，有一點捨不得離開的感覺。

同車的乘客雖然不多，可是，他們似乎都有事情做的。那些滿身油味很濃的人們，可能是做夜班退下來的。那些手拿便當盒子、衣着乾淨的工人，可能是要趕上早班的。雖說失業很者多，有事情做的，却也不少。偌大的東京，豈不能再容納我一個？……

昨夜整個晚上想着母親，想着趕回去看個究竟的決心已經動搖了。——家鄉沒有出路，在未成功以前千萬不要回來……母親這囑言的力量顯得大起來了。

十四

我心裏充滿着矛盾。

一心想回去，一心又怕回到家鄉找不到出路。一心想離開這找不到出路的東京——却又萌起了一種僥倖心理——耐心再找的話，也許可以找到一點事情做。

這樣感情的變化，田中的魅力所佔的分量的確很大。派報所老板雖然騙過我——還有那個少年。可是很多送報的人都勉強可以維持，還可以以上學去。

我下了電車，穿過兩個巷子，終於走到常去吃飯的那家小飯店。在那裏吃着早飯等着，沒有好久，田中已把早報送完走進來了。

本來，他就是一個沒有喜色的人，今早上更顯現陰沉沉的。他低着頭，似乎深深地在想着什麼，進來坐到我的面前，却沒有發現我在那裏。

「田中君！」

聽我喊他，他才猛抬起頭來說：

「哦！早呀！你昨天住在什麼地方？……」

「住在從前住過的那家『木賃宿』裏……本所區。」

「是嗎？昨天倒忘記了問明白你要去的地方……今天好早呀！」

這句「好早呀！」好像是在問我有什麼急事來得這樣早。

「昨天回到從前住過的『木賃宿』時，想不到老早老早家裏就寄了一筆錢在那裏……」

我說着，從口袋裏把信拿了出來。

「錢……？那急什麼！你什麼時候找到職業，毫無把握，還是帶着好啦！」

「不，寄來了不少。回頭我們一道到郵局去好嗎？」

這樣說了才進入本題：

「實在我是來向你告……」

「什麼？又是那一套客氣……」他迷惑似地苦笑。

「不！由那封信看來，母親似乎病得很厲害……我想回去一趟，看個究竟，來向你告辭……」

他直望着我的臉，寂寞似地問：

「叫你回去嗎？」

「不……她叫我不要想回去……她說回來家鄉也是無路可走的。她叫我成功了以後再回去……。」

「那麼，也許不怎樣厲害吧？……。」

「不……似乎很厲害的。那以後二十多天了，沒有一點消息，更叫我不安……。」

「沒有一點消息嗎？」

田中也在替我耽心起來了。

這時候，在我們旁邊吃着飯的一個同事，突然插嘴說：

「呀！有信。有你的信。昨天我去拿信時，看到了有一封是你的。」

「唔，那麼我去拿，你在這裏等一等……。」說着，田中沒有把飯吃完就跑出去了。

我也焦急起來，走到飯店門口去等他。

不久，田中氣喘喘地跑來了。我的全神經都集中在他手上的那封信上面，迎面趕去把信接了過來。

看到寄信人不是母親，却是叔父的名字，我的心開始騷動起來了。

我急急把信封撕開……。

啊！真的母親已經死了。在半個月以前。……而且是用自己的手送終的！

我的眼睛發花，我的頭腦昏昏地幾乎要倒下去了。田中急速把我撐起，帶進飯店裏靠牆躺着。又是悲哀，又是憤恨，兩道眼淚直流在臉頰上我都無法去拭它。

——親愛的孩子，我所期望的唯一的兒子；我再活下去是非常的痛苦，而且對於你也沒有好處。因為

這只會加添你的負擔，却絲毫不能幫你做一點事情。沒有我了，你即無所掛慮，可以勇往直前。

我唯一的、也最後的願望是你堅心努力，能夠替陷在地獄邊緣的鄉人出一點力，救救他們。

鄉裡人的悲慘處境，訴說不盡。自你去東京以後，跳到池子裡淹死的已經有好幾個，也有用繩子吊在樑子上死的。最慘的是阿添叔，阿添孀和他們三個兒子，全家死在火窟裡。

母親期望你成功回來，是爲了拯救在苦難中的家鄉人，却不希望你揚眉得意，衣錦回鄉。我們在苦難中，他們都不願自己的艱難，幫我做了很多事情，你也不能只顧自己才是。

我怕你聽到我的死訊即跑回來，如此，花掉冤枉錢是不值得的……特請你叔父暫時不要告訴你……諸事保重。媽媽

這是母親的遺書。母親已怕官，更怕關，父親被關在拘留所時，她會昏倒過幾次。她一生所求的是省事安寧。可是，一到事不能省，安寧也求不得時，她便倔強起來，不貪生也不怕死。她並不是遇事嘩啦嘩啦的人，但對於自己所信的，一下了決心總是斷然要做到的。

我有一個大哥，當了巡查補，他曾把日本人靠山，欺負了鄉下來。這事媽媽聽入耳朵，查問屬實時，就斷然主張脫離親屬關係，把大哥趕了出去，那就是表現她個性強的例子。我離家到東京來以後，她的勞苦與煩心是一言難盡的，但她却不肯接受大哥的絲毫幫助，終於失掉了一妹一弟，又把剩下的小弟弟寄託在叔叔家裡自殺了。她是這樣的女人。

十五

現在想起來，如果給母親多讀些書的機會——多讀那些臥薪嘗膽的故事，讀那些越關越堅強的革命家們的故事，讀那些爲了拯救苦難人民而苦鬪一生的偉大人物……那麼，當父親因拒賣田地而被捉起來的時候，就不會昏倒而採取更實際且有效的行動罷。

然而剛剛看過母親的遺言，我也爲這悲哀搞得心理亂糟糟的，一點主意都沒有。

在那裡輪着好久好久，激動的心情稍安定下來了，我才拿出叔父的信看下去。

——你的母親，在×月×日黎明吊死了。我看到這慘狀時，就想馬上打電報告訴你的，却在你母親手裡發現了她的遺書，了解了她臨終時的心境，才依照你母親的願望，等到現在才通知你。

——母親對於你的期望很殷，她怕你因得知這消息而趕回來，如此花了冤相錢是不值得的，如此空費了時間，可能也會錯過了機會。

——把你當做她唯一可以寄托希望的兒子，你哥哥太自私，成了眾所咒罵的傢伙了，小弟弟又是年紀太小，不懂得什麼……

——她說，她走了這條路，爲的是要切斷你的掛慮，讓你可以全心——毫無牽掛地向你的理想勇往直前，去用功，去做事。

——她說，如果你跑回來，而使你的前途無着、盡棄，那她的死就沒有意思，反會害了你。

——小弟弟在我這裡，我將鄭重地養育，你用不着耽心。

——千萬不要違背了你母親對你殷切的期待，千萬不要萌起回家的念頭……這裡求生都不得，還有進步的機會嗎？

——你母親已經不在這個世界了，你回來也是看不到的，安慰不了她的……。

諸事保重

叔父

是的，再也無法看到母親了。她已經不在這個世界了……這樣一想，我才斷了想跑回家……家也沒有……的念頭。這才下了決心，無論如何，不能設法為這悲慘的家鄉出一點力，就死也不回去。

當我讀着信，一下子悲沉，一下子興奮，心裡亂糟糟的時候，田中坐在我旁邊把我撐着，目不轉睛地望着我，看見我收起信箋放進口袋裡時才耽心地問：

「怎樣講的？」

「母親死了！」

「死了麼？」他也淌出了眼淚。

「你什麼時候出發？馬上就要回去嗎？」

「不，我不打算回去了！」

「……………」

「回去也不能看到她了，她死了已經半個月了。而且，母親遺言叫我不要回去。」

「半個月？……臺灣來的信要這麼久嗎？」

「不，不是的，母親特別託付叔父，叫叔父不要馬上告訴我。」

「唔。爲什麼呢？」

「她怕我一聽到壞消息就盲目地跑回去。她希望我在這裡找到出路。她說，我現在回去就一切都完了……」

「唔！真是了不起的母親！」

田中感歎了。

我們都想把飯吃完，但因爲太激動了，飯不能下咽。雖然田中再三的拉着不放，我走前一步付了賬，拖田中一同到郵局去把匯票兌來了，田中堅持不肯收，但我蠻蠻地把借的錢塞進田中的口袋裡，心情才覺得輕鬆了許多。之後，我又把住所寫給田中，就一個人回到本所區的「木質宿」。

一走進「木質宿」，我就鑽進被頭裡了。實在疲乏得支持不住。但在昏昏沉沉之中也想到了母親的遺言，想到了如何才能爲家鄉那許多悲慘的同胞出力，却想不出什麼妙計來。——存起錢來，救救他們之急……也這樣想了一想，我馬上搖頭把它打消了。這是一種最最天真又可笑的幻想。做過了二十天的送報伏的經驗，走了一個月的冤枉路，不用說存錢，僅僅爲了養活自己都全無把握的現在，怎能談到其他！

我陡然感到了倦怠，好像兩個月以來的疲勞一齊來了，不曉得什麼時候，在昏昏沉沉之中睡着了。

十六

有時候，因為周圍的喧嘩，覺得好像從深海裡被推到淺的海邊一樣，我好幾次意識朦朧地半醒過來了，却還是張不開眼睛，隨即又陷進深睡裡面去了。

「楊君！楊君！」

聽見了這樣的喊聲時，我已半意識的感覺到了，好像也模模糊糊地答應過了，可是睡意却又把我帶進深睡裏，張不開眼睛。

「楊君！」

這時我又聽到了喊聲，而且我的腳又被搖動了一下，好不容易才張開了眼睛，却還沒有完全醒過來。從朦朧的意識狀態回到正常的意識狀態，那情形好像是站在濃霧裡面望着它漸漸淡下去一樣，好久好久我才意識到有人坐在我的身邊，而他就是田中。

我馬上把被頭踢開坐了起來。

我茫茫然把房子裡望了一圈。

站在門邊笑嘻嘻的「木賃宿」老板，望着我這種狼狽的樣子笑着說：

「你很像中了催眠術一樣呀……睡了幾個鐘頭了？……」

我揉揉眼睛不好意思地問：

「傍晚了吧？……」

「那裡——剛剛過了正午呢……哈哈……可是，已經換了一個日子了呀！」

「木質宿」老板說着就笑了起來。

原來，我昨天十二點鐘睡下以後，現在已經是隔天下午一點左右了……。整整睡了二十五個鐘頭，我自己也吃了一驚。

老頭子走了以後，我面向着田中坐着。

他有點急事要告訴我的，顯得非常緊張。

「真對不起。等了很久了罷？……」

對於我的抱歉，他答了「那裡」以後，興奮地說：

「有一件要緊的事情要告訴你的……昨天又有一個人和你一樣被那張「徵募送報伏」的紙條子釣上了。你被趕走了以後，我時時在想著，對於老板這一手，我們就沒有對抗的手段嗎？可是，還沒有想出一點辦法的時候，竟又釣上了一個，我非常爲他耽心。因此，昨天夜裡，我偷偷地把他叫出來，提醒了他。可是，他聽了以後，僅僅說：

「唔，那樣嗎？真是混蛋的東西……」

却一點也沒有驚慌。我說：

「所以，我以爲……你最好去找別的事情做……。不然的話，你一定也要吃一次大苦頭……。這裡送報伏根本就沒有缺貨，一兩天後便會派你去推銷訂戶……而結果是保證金被沒收，一個錢沒有地被趕出去

——。」
但他依然毫不驚慌，伸手握住了我的手便問：

「謝謝你的忠告，那麼請問，看見同事吃了如此的苦頭，你們能不做聲嗎？」

這話叫我生氣了，便說：

「不就是不能默不做聲，才把實情告訴了你嗎？」

「謝謝！不過，我是不能一走了之的。我走了以後還有人會來上釣，如此白白地奉獻給他十圓錢，這

對嗎？」

「不對，當然不對！但你有什麼辦法？！」

「辦法倒是有的，只不過得你們不肯幫忙。」

於是我發誓和他協力，他便高興地說了他的辦法來了。

「爲了對抗這樣兇惡的老板，我們唯一而最好的法子就是團結。團結才有力量。我們一個一個散開着，你想你的、我做我的，如一盤散沙才會受人糟踏[△]，受人欺負。這道理你懂得罷！在要採取某種對抗時，我們應該一致行動……這樣幹，無論是怎樣兇的傢伙，也會被弄得不敢說一個不字的……。」

這個人似乎飽經世故，說話很有把握，我把你家鄉的事情和你在這裡的遭遇都告訴了他。他說：

「唔！臺灣人也有吃了這個苦頭的嗎？……無論如何想會一會他，請你馬上介紹一下！」

十七

最後田中把那個人（名叫伊藤）的希望也告訴了我。

田中所說的這樣一個人，給我消沉的精神注入了許多活力，我像一盞將要熄滅的燈，忽得到加油似的，把頭擡了起來。

聽說有辦法收拾那個咬住我們、吸盡我們的血的惡鬼一般的派報所老板，我是多麼高興呀！而且，聽說那個男子要會我，由於特別的好奇心，我也希望馬上能夠見他。要是他真的有什麼辦法教給我們來收拾那個派報所老板，那麼，對於我們家鄉的遭遇一定也會貢獻一些好意見罷！

在故鄉的時候，我以為一切的日本人都是壞人，一直都恨着他們。因此，初到東京時，我還是抱着恐懼之心的。這樣的心情已經有一點改變了。我所接觸過的那些人，除了派報所的老板，好人竟是多得很多。「木賃宿」的老板是個愉快爽直的好好先生，許多住民當我推銷訂戶時，竟會爽爽快快地答應了，為我成了一個不高興看的報紙的「同情訂戶」，白白花了一圓錢。至於田中，他比親兄弟還要好……不，想到我那當過巡查補的哥哥，什麼親兄弟，拿他來做比較都覺得對不起田中。

如此看來，和臺灣人裡面有好壞人一樣，日本人裡面竟也如此。

我馬上和田中一起走出了「木賃宿」去會伊藤。

我們走進了淺草公園。筆直地向後面走了一刻，坐在那裡樹底下的一個男子突然站起向着我們走過來

了。他伸出很堅固的手緊緊握着我的手說：

「楊君！你好……」

「你好……」

我也照樣說了一句，却像被狐狸迷住了一樣，因為他是未曾見過面的人。田中未曾說明要到那裡去見伊藤，但回轉頭來看一看田中的表情。我即刻明白了，他就是伊藤先生。

我馬上就和他親蜜無間了。

「我也在臺灣住過一些時候。你喜歡日本人嗎？」他單刀直入地問我。

「……」我一時不能把自己的意思坦白說出來。因為與他是頭一次見面，他自己又說在臺灣住過了一些時候。現在我覺得他是不错的，我會喜歡他，可是，在臺灣我就沒有碰到過像他這樣的人。

想了一會，我才說：

「田中先生很好，我很喜歡他。可是，在臺灣，我就沒有碰到過像田中先生這樣的人。」

「不錯，日本的工人，大多數就像田中君一樣，待人很客氣，沒有什麼優越感。日本的工人也反對日本政府壓迫臺灣人，糟蹋臺灣人。使臺灣人吃苦的是那些有特權的人，就像騙了你的保證金之後又把你趕出來的那個派報所老板一樣的人。到臺灣去的日本人，多數是這一類的人。他們不僅對於你們臺灣人如此，就是在日本內地，也是叫我們吃苦頭的人呢……。總之，在現在世界上，這類的人都想佔人家的便宜，靠別人的勞力來發財，甚至用欺騙的手段置別人於死地也不顧的。他們爲了要掠奪得順手，所以選用各種手段來壓迫我們，來限制我們的自由……」

他的話，一個字一個字都在我腦子裡面起了很大的回響，比讀那六年的書懂得更多了。

家鄉的鄉長雖然是一個臺灣人，我的哥哥也是臺灣人，可是，爲了個人的利益，他們便依付了他們，做了他們的走狗來欺騙、壓迫鄉人了，叫我們吃了如此的苦頭。

我把我們家鄉的種種事情，特別把這次強制收買土地事件很詳細地告訴了他。他很注意的聽過了以後，便漲紅了臉，振奮地說：

「好！我們就攜手奮鬪吧！叫你們吃苦頭的，也同樣叫我們吃着苦頭，他們是同類，是我們共同的敵人！」

我同伊藤會見的第三天，我由他的介紹，到了淺草區的一家玩具工廠去做工。生活才稍爲安定了一下。

其後，每有空，我就去找他請教各種疑問和難題，他總是解答得非常切當。我漸漸地堅定了生活的信心，不再徬徨了。

每有機會，他又給我介紹了很多的朋友，有時候還約我去參加各種的會議，去聽演講會，有一次我竟被拉到講台上去向幾千的聽衆報告我們家鄉發生的那次事件了。

幾個月之後，把我趕出來的那個派報所裡暴發了罷工。看到這個面孔紅潤、而喜歡擺架子的大崎派報所老板在送報伏團結之前，竟不得不低下了蒼白的臉，那時候我的心躍動起來了。

給那胖臉一拳，使他流出鼻涕眼淚來——這種欲望推動着我，但我忍住了。使他承認了送報伏的那些要求，要比我發洩積憤是更有意義的。

想一想看：

勾引失業者的「徵募送報伙」的紙條子撕掉了。

任意製訂的規定取消了！

推銷報紙一份的工錢改爲十錢了！

寢室每個人要佔兩張蓆子，每個人一床被頭，租下了隔壁的房子做大家的宿舍，蓆子都換新的。

消除跳虱馬上實行了！

怎樣？誰說工人沒有志氣？

誰說工人沒有力量？

誰敢說工人一定要過着豬都不如的生活？

在慶祝勝利的集會上，我又一次站到演講台上去向大家報告了家鄉的情形，同時也披露了我已決定馬上回到家鄉去奮鬥的使命，我越說越激昂，聽衆更是火一般的激烈。在我說出最後一句話而將要下台時，我便聽到掌聲齊鳴「幹！幹到底！」的高呼。

這個會竟一變而成爲我的歡送會、壯行會，就像把一個戰士送上戰場的氣氛瀰漫了會場。

隔天，我要出發回鄉時，雖然沒有「衣錦」，穿的還是那一套天天穿着的工作服，很多既知未知的朋友却把我送到東京火車站的月台上握別——大家振奮着，沒有惜別的氣氛。

——這幾個月的學習，才是對於母親遺囑最切實際的了！

我滿懷着信心，從巨船蓬萊號的甲板凝視着臺灣的春天——這寶島，在日本帝國主義的統治之下，表面雖然裝得富麗肥滿，但只要插進一針，就會看到惡臭逼人的血膿的迸流！

（原作日文，一九三二年寫於高雄市內惟。臺灣新民報刊登前半，後半被禁。一九三四年才於東京「文學評論」全文刊出，有人把它譯成中文登於上海「世界知識」，繼被收載於「朝鮮臺灣小說選」及「世界弱小民族小說集」。民國六十三年十月全文重刊於「幼獅文藝」第二四九期。）

——〈鵝媽媽出嫁〉（臺北：大行出版社，一九七五年）

靈籤

山から歸つて來ると効嫂が戸口に腰掛けて待ちあぐんで居た。私か歸つて來たのを見つけて、大急ぎで立ち上つて、

「お歸りですか」と聞いたが、これは通り一遍の挨拶で、何か重大なお話があるらしく、非常にせき込んでゐて、目は赤く泣き腫れてゐた。

——夫婦喧嘩ではないかな……

私は薪を下しながらこう考て見たが、事實この村は生活苦の爲めに夫婦喧嘩は仲々盛んではあるが、効兄と効嫂が喧嘩をするなんて一寸考られない話だ。私は××會社の人員整理に會つた爲めこの村に逃げ込んで來、唯一人のインテリなので、宛ら村の顧問の如く、やれ！夫婦喧嘩だの、やれ！親子喧嘩だの、誰それが誰をどうしたんだとか言ふやうに、殆んど毎日のやうに相談なり、依頼なり、はては調停にと引張り廻はされたものである。

その故で、この村に來てから未だ一年そこ々々ではあるが、この村については、相當詳しい智識があるやうに考へてゐる。

で、この私の経験から言つて、私は林効夫妻を非常な好一對と考へ、理想的な夫婦だと考へてゐる。彼等はモボ、モガの如き甘い夫婦では決してないが、又一度もモボモガのやうに角逐したのをも見たことがなかつた。夫が男子としての權勢を振り廻はさなにかはりに、妻は男が女を養ふべきだと言ふ考へを少しも持つて居ない。従つて、段々生活が苦しくなつても、女は男を責めないで、自ら男の苦闘に協力するし、男は男で十分女の意志を尊重して居る。だから喧嘩の起りやうがないのである。それからと言つて、決して世の所謂嬖天下ではない。彼等の家庭は男が女を養つて押へつけるのもなければ、女が男に頼つてその附屬物となるのでもない。平等なる二人の人間の共同生活……これが彼等の家庭である。これは私の觀察だけではなく、村でも相當の評判になつて居る。

——この夫妻の喧嘩?……どうしても考へられない話である。

ではどうしたと言ふのだらうか?……

村の誰かとの悶着?……

否!これは猶あり得ない話である……

彼等は何時でも、又何事につけても、人に對する關係は非常に圓滿で、言はゞキリストの言ふ左の頬を打たれば右を出す程の自己沒却主義である。税金、過度なる義務勞役、無茶な小作料等フトンを賣つても滞つたことがなかつた。

ではどうしたと言ふのだらう?……

野菜の收穫で目が廻るほど忙しい今に、目を泣きはらして訪ねて來るとは?……

彼女は涙を落しながらすゝり上げて、とう々々聲を上げて泣いてしまった。様子が分らないので何と慰めていゝか、私は途方に暮れた。

二三日前畑で効兄に會つた時には、この一月ばかりはとつても多忙だと言つてゐた。夜もロクに寝る暇がないと話してゐた。なんでもニンニクの收獲（マヤ）で、一本一本その外葉を除かなくちやならぬので非常に手間どるさうだ。

× ×

「どうかなさいましたか?……」

愈々不審になつて私は頭を傾げて聞いた。

「之を讀んで見て下さい……」と言つて彼女が出した紙切を見ると二枚の籤詩である。「靈籤」と二號活字で横に出てる下に、次ぎの文句があつた。

勸君把定莫心慮（マヤ）

凡事求謀自有餘

和合兼卑招吉慶（マヤ）

時來海底取明珠

もう一枚は

險阻高山行過盡

崎嶇窄路屢遭難

而今坦道安身利③

切莫孤疑錯用功

私がこれを読んでゐる間、彼女は私の顔付から吉凶を判断せんとするものかのやうに、ピク々々私の顔を見詰めてゐたが、私の了解を求めるかのやうに、

「どうして私達こんな不運でせうね？……私は別に悪いことはしないつもりですけれども、神さまはどうしてこんな辛く私達に當るでせうね？……何時から運が開けるでせうね？……」と聞いた。

「これからよくなりますよ。」

「今年になつてから三人の子供をすつかりとられてしまつて……」彼女は再び涙聲になつたので、私は狼狽してしまつた。實際、何と言つてなぐさめていゝか知らないのである。昨夜に彼女は残つた一人息子を死なしたと言ふのである。それで、今年になつてから約半年の間、彼女は三人の子供をすつかり失くしてしまつたのである。

私は仕方なしに、

「これからよくなりますよ、よくなりますよ。」と繰返した。

彼女はやつと涙を袖で拭て、

「籤詩に何んと書いてるの？……」と聞いた。

こんなものを私は讀んだことがなかつたので、詳しいことは知らなかつたが、大體の意味を話してやつて、

「まあ……不運は過ぎ去つた……これからよくなると言ふ意味なんですよ……」
と結論した。

彼女はそれでも多少の不安は持つてゐたが、無理にでも信じやうと努めてゐる様子があり々と見え
た。間もなく彼女は歸つて行た。

× ×

私は大急ぎで薪を片つけると又山に登つた。そこには子供を負さつた妻が薪を集めながら私を待つて
ゐるのである。私達はしこう、て朝の五時半頃から山に登つて高い木の上から枯枝を斬り落し、拾ひ集
め、妻一擔、僕三擔を一日かゝつて高い山上から擔いて降り、さうして夜になつてからそれを町迄手車
で持ち出して賣るのである。これでやつと五十錢位になるのである。併も官有地だと言ふんで捕へられ
たら、ひろい目に會はされるのである。

「遅いぢやないの？……」

私があんまり急いで崎を登つた爲め、息が切れさうになつて妻が待つてゐる山の頂上迄行つた時、妻
は不審がつてこう聞いた。

「効嫂が籤詩を讀んで呉れつて待つてゐるんでね？……」息を靜めてから私は答へた。

「籤詩？……何う書いてたの？……どうなの？……」

「妻は卜命か籤詩になると氣違ひのやうになるのだ。」

「六かしい文句で忘れたが、大體の意味は、これからよくなる。不運は盡きた」と言ふのだ

「さうでせうもう……三人の子を全部とられたんだから、今度生むの位丈夫に育てさしてもいゝ頃よ。」

「いゝ頃で、誰も反対しやしないでせう?……ねえ?……併しどうだか分るものか!……」

「神様の言ふことですもの……間違ふ筈ないわ……」

「神様の……人間は泥人形より馬鹿だと言ふのかね?……」

「どうして?……」

「どうしてつて、あれの子供は大抵世話が行きとゞかない爲めに殺したんだと僕は思つてゐるよ。生れて二ヶ月から米汁を、五ヶ月から薯を食はしたと言ふぢやないか?……助りつこないよ。どんな丈夫な子供でも直き臺なしになつちまひますよ。それに夜は二三時間しか子供の傍に寝る時間がないと言ふぢやないか?……併もたつた二三時間しか寝ないから、横になつたら、死人のやうに寝込んでしまつて、子供の世話なんて出来るわけはないよ。晝は晝で忙しさにまぎれてほつたらかした。今度死んだのは肺炎と言ふぢやないか?……營養は悪いし、胃腹は壊はすし、風はひきつばなしで、死にさうになつてから、診断書を買ふ爲めに醫者に診て貰ふんだから、育たる譯はないぢやないか……」

「可憐さうにね……でも忙しいからよ、金もないし……今度の戸税はとう々々納められなかつたと言ふですの……」

「そこだよ、官廳のことゝなると違へたことのない彼等がだ。もつと子供の世話をする時間が出来て、金が少し餘裕にならなくちや、私はその靈籤もいゝ加減なものだと考へてゐる」

かう言つた時、私は

——人ごとではないぞ！……

と考へた。私は妻の負つてゐる子供がひどくせきをしてゐることに氣付いたのだ。それに一日五十錢（それも毎日と言ふ譯に行かない。先月の如き足に傷ついて十日休まざるを得なかつたし、その前の月は雨で一週間ばかり居食をしたから）では飯でやつとだから、セキはもう一週間も前からだつたが、未だ醫者にかゝることが出来ないでゐるのだ。それに牛乳を飲まずことが出来ないで朝夕はオカユ晝は握飯を食はしてゐる（未だ六ヶ月だ）ので腹も少しわるいし、營養も不良に陥つてゐる……

私はこんことを考へて暗然とした。私達が家に爲つた時、太陽は已に落ちて、日はトツブリ暮れてゐた。さうして一帯は愈々暗闇に包まれて行つた。

一ヶ月ばかりして、私は効嫂が又流産をしたことを耳にした。

——これからよしなりますよ……

と彼女に向つて言つた私の言葉を思ひ出して、私は恥しくてならなかつたと共に、無情なるこの世が憤しくなつた。

妻は靈籤に對する信仰を打破られたものゝやうに、ムツツリしてしまつた。

——一九三二・五・二四——

——〈革新〉（臺北・大溪革新會，一九三四年十月；昭和九年）

靈籤^①

從山上一回家，効嫂坐在門口等煩了。她一看到我回來，就急忙站起來，問說：「回來啦。」但，這只是隨口的招呼而已，似乎有重要的事情非常着急，眼睛哭得紅腫的。

——會不會是夫婦吵架？……

我一面放下柴薪，一面這麼想，而事實上因為村子裡生活辛苦，夫婦吵架是頗為常見的，不過効兄和効嫂會吵架卻是難以想像的。我因為被××公司裁員，才跑到這個村子來，由於是唯一的知識分子，就像是村子的顧問一樣，什麼夫婦吵架啦，什麼父母和子女吵架啦，誰又把誰怎麼樣啦，如此這般地，差不多每天都有人來諮詢或請托，甚至爲了調停而被拉得團團轉。

因為這個緣故，雖然來到這個村子才短短的一年，對於這個村子，我自以爲是相當了解的。

依我的經驗來說，我以爲林効夫婦是非常好的一對，認爲是理想的夫婦。他們雖然絕對不是時髦男女那樣的甜蜜夫婦，同時，我從沒見過他們像時髦男女一般地鬧彘扭。丈夫不要男人的權威，同時，妻子也絲毫不認爲男人應該養女人。因此即使生活越來越苦，女的不責備男的，自己幫著男人奮鬥，男的呢，也十分尊重女人的意見，所以不致於吵架。雖說如此，卻也絕不是所謂老婆當家的。他們的家庭既非男人養

家而壓抑女人，也不是女人依賴男人成爲附屬物。兩個人平等地共同生活……這就是他們的家庭。這不只是我的觀察，在村子裡也是有目共睹的。

——這對夫婦吵架？……說什麼都難以想像。

那麼說來，到底怎麼了？……

跟村裡的什麼人爭執？

不。這是更難以想像的……

他們不論什麼時候，同時不拘何事，對人的關係是非常圓滿的，可以說是基督所說的，被人打了左臉頰的話，還要轉出右臉頰的非自我主義者。税金、過度的義務勞動、佃租等，寧可賣了舖蓋也不耽誤。

那麼到底怎麼啦？……

在收穫蔬菜忙得團團轉的現在，爲什麼哭腫眼睛來訪？……

她落著淚嗚咽著，終於哭出聲來了。由於不明緣由，不知如何安慰她才好，我沒輒啦。

兩三天前在田裏碰見効兄時，說是這一個月非常忙碌，連夜裡睡覺的時間都不夠。說是在收穫大蒜，必須一棵一棵剝除外葉，所以很費工夫。

× ×

「怎麼啦？……」

我越來越覺得訝異，側著頭問她。

「請把這個念念看……」說著她拿出紙條來，我一看是兩張籤詩。以二號鉛字橫印著「靈籤」的下面，

有如下的句子：

勸君把定莫心慮②

凡事求謀自有餘

和合謙卑招吉慶

時來海底取明珠

另一張是：

險阻高山行過盡

崎嶇窄路屢遭難

而今坦道安身利③

切莫狐疑錯用功

我在念的時候，她彷彿要從我的表情判斷吉凶似地，提心吊膽地凝視著我底臉，想得到我的同情似地問：

「爲什麼我們這麼倒霉？……我自以爲並沒有做過壞事情，但神爲什麼要這般折磨我們呢？……什麼時候起，才能開運呢？……」

「從現在起會好起來呀。」

「今年三個孩子都死了……」由於她又哭哭啼啼起來，我便狼狽不堪了。事實上，我是不知該怎樣安慰她才好。說是昨夜她死去了唯一留下的兒子。因此，到今年的約半年之間，她三個孩子都失去了。

我不得已反覆地說：

「今後會好起來的，今後會好起來的呀。」

她這才以衣袖拭掉眼淚，問：

「籤詩寫著什麼……？」

這種東西以前我從沒看過，所以並不太了解，不過把大概的意思說給她聽：

「嗯……說是霉運已經過去了……今後會好起來，就是這種意思呀……」這樣下了結論。

她還有些不安，可是看得出勉強嘗試去相信的樣子。不久她就回去了。

× ×

我急忙把柴薪收拾好，就又上山去了。我妻子在那兒等著我，一面背著孩子，一面擔著柴薪。就這樣，我們從早晨五點半左右上山，爬上高樹砍下枯枝，撿起來，妻一擔，我三擔，花整天時間從山上擔下來，然後到夜晚才用手推車帶到街上去賣。這樣子才獲得五十錢左右。而且由於是官有地，如果被抓到的話，一定會大吃苦頭的。

「怎麼這麼遲？……」

由於我火急地爬上山坡，到達妻在等待著的山頂上時，已經前氣不接後氣了。妻訝異地這麼問。

「因為効嫂等著要我給她讀籤詩呀？……」等喘息平靜下來，我回答道。

「籤詩？……寫著什麼？……什麼樣的？……」

妻一談到算命或籤詩，就會變得神經兮兮的。

「詞句很難懂，我記不得了，但大概的意思是今後會好起來，霉運已經過去了，是這麼說的。」

「我想是嘛，已經……三個孩子都失去了。所以至少這回要生的，該讓他結結實實地長大才對呀。」

「妳說這回該是這樣，誰也不會反對吧？……不是嗎？……可是誰知道會怎樣呢！……」

「神說的嘛……不會有錯的……」

「神說的……難道說人比泥菩薩還傻嗎？……」

「爲什麼這樣說呢？……」

「還用說爲什麼嗎？我以爲她的孩子幾乎都是因爲照顧不周才死的。不是說生下來兩個月就給寶寶喝米汁，五個月就給他吃蕃薯嗎？……怎麼會有救呢。不管怎樣結實的孩子都很快就會完蛋的。還有，不是說晚上睡在孩子身旁的時間只有兩三個小時嗎？……而且因爲只睡兩三個小時，一躺下去就睡得像死人，怎能照料孩子呢？至於白天呢，由於忙碌就拋在一邊不管。不是說這回死的是因爲肺炎嗎？……營養壞、胃腸壞、老是傷風，到了快要死時，爲了要拿死亡證明書才給醫生看，怎麼養得活呢？……」

「真可憐呀……可是就因爲忙呀，又沒有錢，聽說這回戶稅最後還是繳不出來……」

「問題就在這兒，他們從不耽誤公家的事情。可是除非有更多時間照顧孩子，而且金錢也稍微寬裕一點，否則我認爲那靈籤是靠不住的。」

這樣說的時候，我想：

——這不是無關自己的事吶！

我發覺到妻子背著的孩子咳嗽得厲害。並且一天五十錢是剛好吃飯的（但不是每天都那樣。如上個月

腳受傷，就不得不休息十天，上上個月因為下雨，約有一個星期光吃不做，因此，咳嗽已經一個星期了，卻還沒能看醫生。再加上沒有能力讓他喝牛奶，早晚是稀飯，中午吃飯糰（才六個月大），所以肚子有點兒壞，營養也是不良的……

我想到這點就黯然了。我們回到家時，太陽已下山，夜幕低垂，周遭逐漸被黑闇吞噬。

約過了一個月，我聽到効嫂又流產的事情。

——今後會好起來的……

我想起自己向她說過的這句話，感到羞愧得無地自容，同時憎恨起這種無情的世界來。

我的妻繃著臉一言不發，彷彿對靈籤的信仰破滅了似的。

——葉笛譯

——清水賢一郎、彭小妍校訂

註① 日文已發表的版本只有「革新」版。手稿資料中有一份殘稿，與「革新」版有差異，並非「革新」版之手稿。

註② 手稿殘稿寫為「莫心虛」。

註③ 手稿殘稿寫為「安利身」。

難産

(一)

馬の肥える秋——

愈々秋だ。空は高く晴れて、今朝の如き戶外の空氣は一寸冷い位の感觸だ。冷水をザアツと浴びて、タワルで肌が熱くなる位に摩擦して、この夜明け前の空氣に觸れた時の清々とした爽やかさ——寝不足の頭も一時に秋空の如く晴々(ハレ)となつた。馬の肥える季節と言ふが、私も生活力の充實して行くのを覺えるであつた。

……秋のあけぼの……

呑氣な學生時代に作つたローマンチックな歌が、無意識に咽喉を衝いて出た。私は何時の間にか家の前に横たはる縦貫道路に立つてゐた。電氣は未だ消えてはゐなかつた。ほの暗い中にも夕方のあのあはたゞしさとは違つて、秋の曉にはある落ちつきがある。文字を以つて心の中のをさらけ出すにはも

つてこいの時だ。××雜誌に今度こそは落伍すまい！

晝間だと往來する自動車の捲き起すホコリの風で厭なこの大道も、今ではしつとりと露を含せて清爽たるものだ。

路の向ふは八卦山、山上に點々見える電氣の光りは彰化温泉、その手前には左に坂を登ると廣々とした草原があつた筈。

闘士と言はれた當時、暫くこの邊に住んだことがあつたがその時分はよくこの草原を驅け廻つて、快活に暮したものだつた。過ぎし日がなつかしく回顧された――。

こうしたとりとめのないことに思ひふけつてゐる中、何時の間にか……秋のあけぼの……の叫喚が口笛に變つて、私は當の草原に登る坂の中央に立つてゐた。

とたんに憂鬱が襲つて來た――。

東天は紅みつゝあるのだ。夜明けだ。家では仕事がせき立てゝゐるのである。

×

金のない爲めに、總べての計畫が暗礁に乗り上がつて没落した私は、裸一貫で生活戦線に立たされた。どん底への路を流轉又流轉、こうして五六箇年振りにこの古巢に舞ひ戻つて來たのが三箇月前、當時の友人達の奔走でミシンを月賦で買ひ、日布店から何十圓かの布を借りて唯一の資本とし、流浪の中に覺えた裁縫で子供服製作販賣を始めたのが、此處に定居して一週間後、こうして私は夜明けから夜の十一―二時頃迄ミシンと取組み、妻は子供を一人は脊負ひ、一人は手を引いて賣つては歩き、どうにかこう

にかして食つては來たのだが、二三日來からの北風で私達は狼狽したのであつた。

もう秋だ。夏物は一日も早く處分せねばならぬ。少しでも残つたら、それだけ布店の支拂に故障が出るし、冬物の製作資金は何處からも求め得られなくなるのである。今迄だつて無理に無理を重ねて、やつとのことで融通して貰つたのだから、これ以上の融通は到底不可能だ。こうした状態のもとに妻はセキでなやんでゐる小さい方の子供を脊負つて、出征兵士のやうな緊張味を見せて、少しは暖かであらう南部へ子供服販賣に出かけたのが昨日の朝、私は残つた夏物の材料を一日も早く商品に造り上げて送らねばらぬのであつた。こうして私は延々になつて來た自分の言ひたいことを從來通りに再び心の中に抱いて腐らねばならぬかと思ふと憂鬱だつた。

X

私は振り返ると坂を駆け下りた。

過勞と睡眠不足の爲めにポーとする頭腦、痛む胸、けだるい全身の筋肉——之等はこの自然の清い空氣に、一時は何もかも忘れて晴々しかつたが、坂を下りると共に、之等の苦しみは再び私の全身を包んでしまつた。私は手を滅茶苦茶に振り廻してこの苦しみを打ち出さうと努めたが無駄だつた。私は狂しい焦燥に胸を焼かれた氣持で両手を胸に組み合し、誰かに追はれてゐるかのやうな氣持で庭に駆け込み、ドンと肩で戸を押し開けて家の中にとび込まうとした。

——コツン！カラン！ドシン！

と言ふ音の後から、子供の「ウワン／＼」と言ふ泣き聲が聞えた。私はハツとして踏み込んだ足を引

つ込めた。開かれた扉の横に、この五月で四つになつた長女が釜を抱へて居り、顔から、胸から、地面一杯に米が散亂してゐるのであつた。私は娘から釜をとり上げて抱き上げた。おでこには大きなコブが出来て居て、二つの目から出た涙が兩頬を傳つて流れて居た。ウワーンと尾を引いて泣く。

×

「どうしたんだね？」

「アタシ御飯炊くの……」フン／＼鼻をならしながら娘は泣き聲で答へる。

「さうか！御飯を炊くほど大きくなつたんぢやないかい？それで泣いたりしたら笑はれるぞ！さあ黙つた黙つた……」

私はおでこのコブをこすつてやりながらたしなめた。と、娘は直ぐ泣き止んで、手の甲で涙を拭き落とし、私の顔に向けて笑つて見せた。私も誘はれて笑つた。それがいかにも可愛かつたので、私はギョツと抱きしめてやつて、

「この通り！笑ふんだ、笑ふんだ！」と言つて、おでこにキツスをしてやつた。

×

私が冷水摩擦の後、朝の空氣があんまりにいゝので、終に、誘惑されて、前の草原の坂迄行つて居る中に、何時の間にか起きたのか娘は釜の残飯をハチに移し、釜には米を入れて水道へ磨きに行かうとするところだつたのである。それが丁度私の駆け込んで來るところで扉が勢ひよく開かれたのだからたまら

ぬ、コツンと扉におでこを打たれて、轉つたのであつた。

未だ四つではあるが、玩具を買つてやれないので、遊ぶことがなくて、よく……お洗濯をする……と言つては着換へたばかりの服を自分で又着換へなほして、砂を石鹼だと言つては服一杯になすりつけて、水遊びをするのであつた。始めの中はよく石鹼を持ち出して、つぶしてしまふのだつたが、母親に三度ばかり折カンされてからと言ふもの、砂を石鹼代用にすることを考へ出したのであつた。

この娘が、又、——御飯を炊んだ——と言つては、時々水道の流しに米をこぼすので何時も叱られたが、自分ではもう子供ぢやないんだと言つて、隣近處が御飯の仕度をするのを見ると、急いで釜に米を入れて、婆さん、姉さんの仲間入りをするのであつた。それが最近にはあんまりお米をこぼさなくなつたので、自分では鼻高々で振舞つて來たが、米の入れ工合を未だよう覺えないので、時には二倍もの米を入れるかと言ふと、時には一人前にも足らない位しか入れなかつたりして、却つて厄介だつた。

この朝も泣き止むと私に膝から降りて、地面にこぼしたお米を拾ひ集めにかゝつた。

「トウちゃん……ワタシ皆拾つてから御飯炊くわ……」

と言ふのである。

「いゝよいゝよ。昨日澤山残つたから、今朝は炊かなくともいゝ。早く顔を洗つて來て御飯にしやう！」

と私が言ふと娘は又温順に

「ハイ。では御飯濟んでから拾ふわね……お晝にわたし炊くわよー」

言つて、米を拾ふ手を止めて私を見た。

「いゝとも、いゝとも。お晝には炊かせるから早くお顔を洗つて來なさい。」
娘は釜を置いて、タヲルを洗面器に入れて、チヨコ／＼水道の方へ歩いて行つた。

×

私は直ちに残飯のハチと昨日の残りの漬物を入れた小皿、茶碗、箸をテーブルの上にならべて、自分で飯を濟してから、ミシンの掃除を終へ、早速仕事に着手した。この間に娘は顔を洗つて来て、自分で飯を食べ、それが濟むと茶碗から著迄洗つて、丁寧に片づけ、テーブル迄雑巾をしぼつて来て綺麗に拭いてゐた。まるで一人前の主婦かのやうにまめ／＼しく立ち働いた。それも濟むと米を拾ひにかゝり、すつかり綺麗にしてから、箸を持ち出て掃除した。箸があんまり大きかつたのでウマク使へず、間もなく箸を隅の方に立てかけて、

「トウちゃん……わたし秀英のとこ遊びに行くわよ……」と言つて來た。

「ヨシヨシ！」

私はミシンをカタ／＼ならしながら肯くと娘は矢のやうに驅けて行つた。

×

暫くすると娘と秀英がひきつれて来て、庭に破れ蓆をひきずり出して、遊びに夢中だつた。

秀英と言ふのは娘より一つか二つ位上かと思はれる、私達の住んでゐるこの家の家主であり、相當の地主林連三の第三番目の妾の生んだ子であつて、綺麗な人形を脊に負ふて

「いゝ子だいいゝ子、泣くんぢやないよ……」等言つてあやしなから子守／＼つこをしてゐるのであつた。

娘は秀英の附添女中といふやうな格で、色々と世話をやいてゐたが、その中に秀英の脊負ふ人形が、おつこちさうになつたので、娘は

「おつこちるよ、おつこちるわよ……」

と言つて抱き止めた。それからいゝ工合に抱きなほして

「いゝ子、いゝ子」

と言つて、如何にも嬉しさうに人形の顔に頬づりした。

すると秀英は顔色を變へて

「知らないわ！人形私のおよ！私のおよ！」

と言ひ言ひ泣き泣き、娘の手から人形をひつたくらうとした。今迄嬉しくてたまらないやうに人形の顔に唇をつけてゐた娘は、秀英のこの泣き面と手出しで、カツとしたらしく、人形を地面に打きつけて

「返すわ！返す！」

と言つて、秀英の蓆から離れて家の戸口に來て立つた。

秀英は一層大きな聲を出して、人形を抱き上げて「ウワンく、」と泣き續けた。私は腹の中で笑ひながら、この子供等の階級鬭争を見た。

「秀英！どうしたのよ！誰が打つたのよ！」

秀英の母である林連三の第三號は家の中から驅け出してベチャく我鳴り立てた。

「守俄だよ守俄だよ……ウワンく」秀英は訴へた。娘は顔を澎らまして、戸口につゝ立つた儘、癩

で續けたまらないかのやうに秀英を見つめてゐた。

「こまるわね！秀英、お歸りなさい。此處で遊んぢやいけません！」と言つて第三號は、私に當てつけるやうに秀英を引きづつて行つた。

私は腹の中で笑ひながら、黙つてミシンをカタ／＼と踏んだ。併し、自分の娘が欲しさうな目で、秀英の人形を追つて居るのを見て、併も買つて呉れとは言へないで、淋しさうに立つてゐるのを見ると、心をしめつけられるやうな思ひだつた。

×

その中に郵便配達が一枚のハガキを持つて來た。家からで金を少し送れと言ふのであつた。家の困つてゐることを私は百も承知で居る。兄の月給（三十圓）で以つて、父母、兄夫妻、それから兄の子供達五人、合せて九人の人間を養つて行かねばならぬし、廿年前兄が妻を貰ふ爲めに信用組合から借りた三百圓の利子に月々三圓五十錢計りとられるし、田舎では道路の修繕だ「荊竹刺」（マラリア防遏の爲めに竹藪を綺麗にすること）だと言つては金をとられるし、その外、何々の寄附だと言つては無理に金をとられるので、どんなに切りつめてもやつて行けさうな筈はないと言ふことを私は十分知つてゐる。

父はもう七十歳を過ぎて居り、何時か私が歸つた時に、十錢の煙草（それで十日間位喫へるのだが）が買へないで、煙草の包装紙をポケットに入れて、時々出してその香を嗅いで我慢してゐるのを見たとき、私はすまぬ／＼と涙を呑んだのであつたが、併し、今ではどうにも仕様がなかったのであつた。現に、昨日南部へ商賣に行く妻が、車賃の爲め全持金から五錢だけ残して、全部はたいて持つて行つてやつと

車賃に足りた位であり、五錢の金も昨日三錢の漬物を買つたので二錢と言ふのが今のありつたけの財産であるのだ。

——昨夜から商賣が始められる筈だから、（今日）明日中には多少送つて来るだらう。その時に送つてやらう——と私は考へた。

×

——サバヒイーサバヒイー——魚賣りだ。

「トウちやん、魚買ふ？」娘の聲だ。

娘は、さつきからあんまり淋しさうにしよんぼりと立つてゐたので、可憐さうになつて二錢の中の一錢をやつたら、早速甘蔗を買つて来て、人形のこと（人形）は忘れたかのやうに、うまさうに嚼つてはスースーと汁を吸ひ込んで居た。

「買はぬ」と私が言ふと娘も私を真似て「買はぬ」と言つた。その中に野菜賣りが又來た。

「トウちやん！野菜買ふ？」と娘は又言ふのであつた。

「買はぬ」と私が言ふと、娘は又真似て言つた。

何時も聞かれてはうるさいので、私は娘を呼びつけて

「守俄、トウちやん今金ないんだ。だから何も買へないのだ。いゝかい。又買ふかくなんて言つちやいけないよ」

と言つてやると、娘

「ぢや金があつたら魚買つてね！」

とせびつた。

「ヨシく。金があつたら何でも好きなもの買つてやるよ」と言つてやると娘は外にとび出して、隣の婆さんに

「うちのトウちゃんね……金があつたら魚買つて呉れるわよ……」

と吹聴した。私はミシンをカタク踏みながらこれを聞いてへんな氣持だつた。此處數日來北風の爲めに商賣が悪かつたので、魚も肉も喰はなかつた娘は、「金が出来たら買つてやると言ふ、この何時出来るかも分らない金、従つて何時買つて貰へるかも分らない魚を、こんなにも嬉しさうに期待してゐるのであつた。

それから魚賣りや野菜賣りが何度も家の傍の横町を通つたが、娘はもう買ふかとは聞かなかつた。行商人達があんまりうるさく買ふか買ふかと言ふと、娘は「買はぬ」と言つて取合はないのだつた。席に腹んばいになつて、鉛筆で、何時の間に持ち出したのか原稿用紙の枱の一つくハとかナとかタとかコとか言ふ片假名を以つてうめて行くのであつた。

×

——賣甘蔗咯……一錢二節拉……

甘蔗賣りだ。

「賣甘蔗的、賣甘蔗的！」

娘が立上つて呼んだ。私はハツとして娘を見た。この私の目が娘の目とかち合つた。娘も瞬間さつき
の言葉を思ひ出したらしく鉛筆持つた手を振つて、

「買はぬよ、買はぬよ！」

と言つた。

「馬鹿！買はぬなら何故呼ぶか！」

甘蔗賣りはブン／＼怒つて立ち去つた。娘はけろりと忘れたやうに原稿用紙の柵の中に續いてアとか
イとかを埋めて行くのであつた。私は微笑を禁ずることが出来なかつた。

×

サイレンが鳴つた。娘は立ち上つて、

「トウちゃん、お腹減つた。わたし御飯炊くわ！」

と言つた。さうして紙と鉛筆を抽出に抛り込んで、釜をかゝへて水道の方へノコ／＼と出て行つた。
私も仕事の手を一寸休めて立つた。借りた椅子があんまり高かつたので、身體を不自然に屈げねばな
らなかつた爲めに、胸の壓迫感と脊中の緊張感(ツマ)は余計に私の身體を疲(ツマ)らせた。私は兩手を上につき上げ
て、全體を後に二三度そらして見た。骨節がポキ／＼と鳴つた。それから火を起して水道に出て見た。
米は今朝こぼした爲めに埃が澤山混つてゐたので、娘は焦つて、私の顔を見ると、

「いやだわ！洗つても洗つても綺麗にならぬのー」

と言つた。

「あなたがこぼしたからだよ。」

私も手傳つて埃を撰り出した。

こうして、私達二人は御飯の出来るのを待つて、残つたたつた一錢で瓜の漬物を買つて午飯を濟ましてから、私は再びミシンのと取組みを始め、娘は又秀英のところへ遊びに行くと言つて出た。

×

「ウワンく……」

暫くすると娘は泣きぢやくりながら歸つて來た。

「どうしたんだ！」

私は仕事の手を休めて抱き上げて聞いた。

「うゝゝあん……うゝゝ……あの秀英のカアちゃん私が私をつねつたの……うゝゝあん……」

娘は又も泣きぢやくりながら答へた。見ると股のところこもに二三個處ツメの跡が残つて居た。私の胸はにえくり返つたが我慢した。

「もういゝ。いゝ。黙つた。庭で遊んだらいゝんだ。あんなところへ行つちやいかん！」

と私は言つたが、友達のない玩具のない子供を考へると可憐さうであつた。その中に娘は眠くなつたらしくコクリくこくりくとやり出したが、咽喉の底から「うゝゝゝ」とぢやくぢやくつて來るのであつた。

×

床に移した娘はどうくく眠つてしまつた。私はスピードを出してミシンを踏んだ。斜布ハスキレと布クレつばしと

がミシン針の下を通つて行く中に縫ひ合され、段々と服の形を整へて行くのであつた。

こうして日が没し、電氣がついたが娘は段々深い睡りに落ちて行つた。私も晩飯を忘れてミシンを踏んだ。そのうちに仕上げた服はミシンの前にうづ高く積み重なつた。七時―八時―九時―と隣りの時計が鳴つたが娘は起きなかつた。私は煩はされずにミシンと取組み、仕事はどんく―とはかどつて行つた。さつき迄隣の家で喋くつてゐた近處の女達は皆眠に歸つたらしく、静かになつて來た。私は何時でもこの時分になると目がますく―さへて來て仕事がはかどるのであつた。さうして、何時もこの時間より十一―二時頃迄の間の最も能率的な時間を私は逃さなかつた。

が、暫くすると郵便配達が又一枚のハガキを持つて來て私のこの時間を臺なしにしてしまつた。

××雜誌社からで、

「第×號の原稿は皆集つた。君の原稿を待つて印刷に廻す」と言ふのであつた。こゝ數年來何時も叫びたいことで心の中が一杯だつた點に變りはないにしても、從來は書いても仲々發表する機會が容易に得られなかつたから我慢が出來たが、今度と言ふ今度は、文學運動が本格的になつて來て居り、切實に自分のものが求められてゐるに拘らずそれを書かないで置くといふことは、何と言つても我慢のしやうはないのであつた。私は直ちに仕事場を片付けて、ミシンを机にして原稿用紙をのべペンを握つて目を光らした。

手先の仕事だと油ののるこの時間ではあつたが、頭の仕事になると、こんなに疲れた後ではカラツキシ駄目であつた。筋書の暗誦迄出來て居る筈のものが、このボーとした頭からは仲々文字になつて表は

れて來なかつた。

私は焦慮した。が、焦慮すればする程、目が光るばかりであつた。一行書いては、二行書いては紙屑籠へ、何時もそれが少しも自分の言ひたいことを表現してはゐないやうな氣がして、紙屑籠を滿して行くのみであつた。

こうして行く中に、光つた目迄がよろマんで來た。私はペンを抛り出して頭を抱へた。さうして無理にでも頭をまとめやうと努めたが、私の頭は明日の米に、妻が南部での商賣狀況に轉々するのみであつた。と、私は空腹を感じて頭がフラフラツとした。

私は先づ腹を造へねばならぬと思つた。

それから火を起して、米櫃を開けて見た。石油罐の米櫃には底が見えてゐた。今晚喰つてしまつたら、明日は腹を抱へねばならぬのであつた。自分は東京に居た時分、失職して一週間ばかり一つも物を食はなかつた經驗を持つて居るからいゝが、今晚も食はなかつた娘が、明日一日中「腹が減つた減つた」と泣かれるのを見てはたまつたものではない。私は米櫃に蓋をして、折角起した火を消しにかゝると、娘が目をパツチリ開けて起きあがつた。さうして腹を抱へて

「トウちゃん……私お腹減つた——」

と言つた。

「ヨシく。今炊いてやるから、待つといで——」

私は思ひ切つて、米櫃を持ちあげて、ありつたけの米を釜にあけた。それから私達二人はお粥のグツ

ツ／＼煮え立つのを見守つた。

×

「守俄！おかずにいから鹽つけて食べやうね——」

「ハイ」。

と言つて娘はうまさうにフウ／＼熱いお粥を吹きさましながら口にかき込んだ。

「ウマイ？」

「ウマイわ——」

私は胸が一杯になつた。我儘盛りの四つの子だ。大低の子供なら、三度の飯以外にも尙何かかかると間食を求める四つの子だ。それが、お粥に鹽をつけてウマイと言ふのである。

いや、確かにウマイなのだ。僕もさうして食つたがうまかつた。食欲の旺盛なる秋だもの！六時頃食ふべき夕飯を今に迄延して、お腹は空っぽになつてゐるんだもの——。

こうして私達がお腹を造へて、總べてを片づけた時には、隣りの時計が三時を打つた。私は翌日の米が氣になつて、到底書けさうもなかつたので、その儘娘と一緒に床についた。娘は間もなく又眠つてしまつたが、私の目はさへる一方だつた。

×

私は横になつた儘、過去の色んな場面を回顧した。

さうして得た結論は自分の如きものが、現代社會に於ける生活權失格者であると言ふことだ。働いた

だけでは、如何にそれが血みどろの働きであつても駄目だ。現代社會に生活權を主張する爲めには、先祖の残した財産に依るか、でなければ蛇の如き狡猾さで、極端なるエゴイズムを以つて身を堅め仲間をも喰ふだけの圖太さがなくてはならぬのである。血みどろに働く労働者、農民の生活困難は、曾つてその一つ一つを見て來經驗もして來た。而して、その中から頭をもたげて行きつゝある二三の惡棘なるものも身にしてみせて見せつけられたのだから。これらは今では自分の表現せんとする全藝術の素材となつてゐる。こうした、生活戦線上では無力なる自分が、自分自身の生活さへよう維持出來ない自分が、その上に將來の爲めに何かを残さうと言ふ考へそのものが、どんなに氣違ひじみたことであるかを、私は一しほ深く身にしてみて感じたのであつた。

數年前には只七錢を以つて第二世を世に出さうとし、醫者も産婆も呼べなかつた爲めに妻が難産した。而して、今では自分が懷中無一文で藝術の難産に疲れ果てゝゐるのである。

×

翌日私達二人の親娘が腹を抱へて待つた妻からの通信は、

——北風強く、商賣甚だ悪し、子供の病氣經過香しからず——と言ふのであつた。私はそれが北風に依る影響よりも、生活の嵐により多く影響されて居ることを知つて居る。南部では北風さへ吹かなければ夏物の需要はあと三四箇月續くことを私は從來の經驗で知つてゐる。何と言つても、我々の顧客である貧しき人々は、食ふことに追はれて、衣服を買ふところの騒ぎではないのだから。「夏の衣服はポロくになればなるだけ涼しいんだよ……買はぬ」と一人の百姓に吐鳴りつけられた旨、妻の手紙には書

添へてあつた。

我が藝術は——ばかりではない、第二世も、私自身の細胞も——今後益々難産の度を加へられるであらう。妻の通信は放漫した私の意識に對して、暴風警報の役割を果した。自分の叫ばざるを得ない事柄がこの世から消え失せない限り、石に噛りついてもペンを抛り出すべきではないであらう。難産からと言つて、ピチ／＼した壯健な子が生れないとは誰が斷言し得やうぞ！ 否！ 嵐にもまれてこそ、この子等は益々頑強になり、光に向つて突進し得るやうになるであらう。一代で果せなければ、二代でも、三代でもかけてやるまでだ——。

(一)

それでも、私は、妻の今度の商賣が、全然駄目になるとは思へなかつた。北風は昨日の朝から嬉んで居り、昨日の日中賣れなかつたとしても、昨夜の夜店では多少とも賣れたらうと期待した。昨夜に賣れば、今朝には送つて来る筈だし、この晩には配達されるだらうと期待した。

娘は、晝も夕方も、皆の飯炊き時分には米櫃を開けて見たが、空罐をカン／＼鳴らして、「お米がないわ!」と叫んだ。その度毎に、私は仕事の手を休めて、

「守黙つておいで!」と吐鳴つた。

娘は綺麗に洗つた釜を下げて、チヨコ／＼とケゲンな顔をして寄つて來ながら、

「お米がないよ……!」と繰返すのであつた。

その度毎に、私は上衣を着ながら、

「お待ちなさい! 今に買つて來るから……!」といつて外に出るのであつたが、一時間後には又手ぶらで歸つて來るのであつた。曾つて鬪士面をして快活に此處で暮した時分には、私も又一人の名士であり、人との交際も明けつばなしで、金がなければ卒直に言へたのであつたが、今は情勢が一變してしまつて、以前のやうに明けつばなしで卒直に話しの出来るのはタンとはなかつたのであつた。少くとも、自分から氣兼ねなく金がないと言へる相手は少かつた。その第一の理由は、曾つて名士扱ひにされ

た闘士と言ふものは、今では嫌な目で見られるか、恐れられてゐるからであり、第二の理由は闘士として皆と交際して来た自分は、今や落伍して己(マユ)に闘士ではなくなつてゐるのであり、金がないと人に言ふ理由は己(マユ)に失くしたと言ふ氣持ちからであつた。

こうして、私は、曾つての同志かパトロンの家を一軒一軒廻つたが、或るところではその家の中にさへ踏み込み得ないで歸つて来るのであつた。ビク／＼して歸つて来て見ると、娘は御飯のことなど忘れて遊びたはむれてゐるので、始めてホツとするのであるが、この夕方はさうではなかつた。娘は腰掛けで、扉に靠れてフンフン鼻を鳴らして、「お腹が減つた……お腹が減つた……」と泣いてゐるのであつた。私は手で口を塞いでやつて、

「黙れ！黙れ！」と吐鳴(ハヤ)つたが、可憐さうになつて胸が一杯になり、知らず／＼に目頭が熱くなるのを覺えた。

× × ×

隣の婆さんが現はれて、

「可憐さうに……さつきからお腹が減つたつて泣いてゐたのよ……」と言つて、并に一杯のお粥を持つて来て呉れたが、私は「有難い！」といふ感謝の念に驅られながらも、侮辱されたやうな感じで顔を紅らめて、

「お婆さん……いゝよ……今に米を持つて来るから」と嘘を言つた。

婆さんは

「いゝから食べさせなさいよ……もうこんな遅いから……」と言つて、井を娘に持たして歸つて行つた。娘は又フン／＼鼻をならしてゐたが、お粥の井を貰ふと、急に元氣づいて、箸をもつて来て、おかずにないとも何とも言はないで、ガツ／＼かき込んだ。私はホツトして仕事に着手した。

× × ×

娘は井のお粥を平げてしまふと、顔と足を洗つて暫く私の傍に腰掛を以つて来て腰掛けてゐたが、眠くなつたのか、

「トウちゃん私寝るわー」

と言つて自分で床に入つて、フトンを引きづいて来て顔迄被つて、直ぐ鼻をかいて寝入つてしまつた。私は睍れなかつた。カタ／＼と鳴るミシンの音迄が陰氣臭く感ぜられて、私を益々いら立たせた。それでも、私は機械的に手と足を動かした。それは實に單調な響であつた。仕事に熱が出るのでもなければ、だからと言つて居睡りをしてゐる譯でもなかつた。いら／＼して隣りの時計が九時を打つのを心の中から待つてゐたのであつたが、それが實に實にのろくさかつた。八時を打つたのを九時と間違へたり、九時が鳴るのは實に千秋の思ひだつた。さうして十時迄待つたが、郵便配達の声はとう／＼聞かれなかつた。私はガツカリしてしまつて、戸を閉め立て、床に入つたが、それでも、郵便配達が遅れて來やしないかと耳をそば立て、横町を人が通る度毎に、自轉車のベルが鳴つて通る度毎に片膝ついて身を構へるのであつた。

「馬鹿馬鹿！ こんな遅くに郵便配達が來る譯があるか！」と自分で自分の馬鹿げた振舞を叱りつけ

ながらも、横町にベルの音か人の足音を聞きつけると耳をそば立て、とび起きる身構へをするのであった。十一時が鳴つて、十二時が鳴つた。私はポーとした頭を抱へて、相變らずボンヤリと横になつた儘だつた。

× × ×

カン／＼といふ音で、私はハツとして目を醒した。

「お米がないよ……」と娘は米櫃に使つてゐる石油罐を打いてゐた。

「馬鹿！黙れ！」と吐鳴つて私は飛び上つた。娘は屹驚して泣き出した。私は腹を立てた。それは妻に對する憤りでもあり、娘に對する憤りでもあり、又、何か得態の知れない何ものかに對する憤りでもあつた。

「馬鹿！黙れ！」

私は娘の手を掴んで吐鳴つた。娘は曾つてない頑固さで、聲を張り上げて泣き叫んだ。さうして、私の手から自分の手をもぎとらうともがいた。私は頬べたを一つピシヤリと擲りつけてやつた。娘は益々大きな聲を張り上げた。

「こら！黙らんか！」と私は重ねて吐鳴つたが、娘は咽喉もさげよとばかりの聲を出して「ウーワン……ウーワン」と泣き續けた。

私は根氣負けをした。可憐さうにもなつた。

「もういゝ！いゝ！黙つた黙つた！」と折れて出た。さうすると娘も段々小さい聲になり、到頭黙つ

てしまつたが、咽喉の底から「うゝゝゝ」とぢやくり上げてゐた。

× × ×

嘗つては、一週間ばかり水だけで暮したところのある私ではあつたが、今度は明きらかにさうは行かなくなつてゐた。當時は身體もよかつたし、闘士だと言ふ自覺で元氣もよかつたし、それに、獨身だつたので、食はなかつたからとて傍の人に對する氣兼ねもなかつたが、今は總べての條件が非常に悪くなつてゐた。「お腹が減つた……」と言ふ子供の泣き聲からが、隣近處にどう言ふ話の種を時き散らしてゐるか分つたものぢやないと考へると、私はイリ／＼して來るのであつた。それからと言つて、御飯を食はねば、「お腹が減つた……」と子供が泣くのは自然なことであり、可憐さうでもあり、いや、可憐さうだからこそ、益々ぢり／＼と私を迫め立て、夜も寝つかんし頭も休まんし、譯の分らん立腹を感じさせるのであつた。その爲めの精神的打撃だけでも耐えられなかつたのに、只でさへ、どうかすると頭のふらく／＼として來るこの頃の身體に、仕事も張り合ひのある性質のものではなかつたから、たつたの一日だけで、嘗つての一週間に増して、私を滅茶苦茶に打ち負かしてしまつたのであつた。

× × ×

それから一週間と言ふ日にちが経過した。眞晝である。

娘は遊ぶ元氣もなくなつて寝てゐた。

私は妻からのハガキを手にして、顫へてゐた。北風は跡方もなく娘んで、珍らしい秋日和であつた。

太陽は麗らかに照つて居り、庭では家主の娘秀英が夏物一枚で遊びたわむれてゐた。その傍で林連三の

石に噛(か)いついても、ペンを抛り出すべきではないと言ふ考へからが、甚だ無稽な考へ方であつて、ペ
ンに噛りついて來ながら、私は果して何を書いたと言ふのか！

××雜誌は己(みづか)に店頭(みせ)に飾られて居るのに、私は又も落伍したではないか！
これではピチくした子を産むどころか、自分自身迄が野たれ死する外ないではないか！

(三)

昨夜來ボソ／＼と降り續いた雨は止みさうにも見えなかつた。大降りもせず、止みもしないこの秋雨は、益々秋の氣持を憂鬱にした。それに氣溫もぐつと下つたと見えて、冬の近づいたことをしみ／＼と感ぜしめた。充分着るものがあつて、暖い食べ物でもあれば、冷い空氣は氣持のいゝものであるし、殊に、このトタン葺の窓のない低いバラック建物に住む私としては、パン焼きカマのやうな夏の熱にコリ／＼して冬の到來を望んだのであつたが、今となつては、冬は怖いものに感ぜられた。フトン迄質屋に預けて換へて來た五升の米は半分ばかり減つてしまつたからである。

寒さがゾク／＼と脊骨^{（マヤ）}をゆすぶつて、腹のなかから私はブル／＼と顫へ出すのであつた。風を防ぐ爲めに戸扉を閉めたので眞暗闇になつた部屋のなかを、私は手のやりばに困じ果て、腹の中で「二―一、二と叫びをあげて、何とか式の體操をやつて見た。だが、これはあんまりに寛漫^{（マヤ）}で、身體を暖めはしなかつた。私は臺灣式の拳頭^{（マヤ）}見たいに、兩足を踏張つて、兩手を滅茶苦茶に振り動かしつきとばした。今度は少し暖かになれさうだつた。が、同時に呼吸が苦しくなつて、頭がボーとなつてしまつた。私は腰掛に腰を下して、兩手で頭を抱へた。傍にボンヤリ立つてゐた娘が黙々と寄つて來て膝の上に乗つて乗つた。私は兩手を頭から離して、娘の手を握つた。それは氷のやうに冷かつた。私は頬を娘の頬に當て見た。やはり冷かつた。私はグツと抱きしめてやつた。

「寒いかな……」

「は……い……」と答へる娘の聲は微かに顫へを帯びてゐた。

×

私は風呂敷包を解いて、娘の着物を三枚捜し出して着せてやつた。二枚は夏物で、一枚は布端をつき合して造へた、變なものではあるが、ネルの袷であつた。

「これでいゝか？……」

「さ……むいわ……」娘の聲は相變らず顫へてゐた。

私は更に單の着物（夏ものばかりではあるが）を捜し出して着せてやつた。裾は脚迄下つてゐて、とう／＼ダルマのやうにしてしまつたが、それでも又寒いと言ふのであつた。私も再び寒さにブル／＼顫へ出して來るのを覺へた。さつきの運動で少しは暖かになつたのだが、その暖かさは何時の間にか消えてしまつたのである。私も夏物冬物とり混ぜて三枚重ねて着込んだが、寒氣は止まらなかつた。

私は部屋の中を歩き廻りながら考へ込んだが、どうすればこの寒さに耐えられるか分らなかつた。勿論、火を起してあたればいゝと言ふことは分るが、營養にならないことで炭を空費することは許されないのであつた。酒を飲めば暖かくなると言ふことも分るが、これは猶更出來ない相談であつた。運動はいゝが、寛慢な運動では役に立たないし、過激にやつては頭の方が堪らないのであつた。

こうして、私が何かの大發見をしたやうに喜んだのは冷水摩擦であつた。洗面器に冷水を入れて持つて來ると、私は素裸になつて、冷水を含ましたタオルで皮膚の熱くほてつて來る迄にすり上げた。それ

から着物を着ると、確かに大分暖になつて来た。娘をも裸にして摩擦してやらうと冷たいタオルを脊中に當てやると「キヤン／＼」言つて逃げやうとしたが、無理に抱き込んで摩擦し、着物を着せてやつたら、「もう寒くない！」と言つて、元氣づいて外に遊びに出た。雨は又降つてゐるが、軒下傳ひに隣りの婆さんのところへでも遊びに行つたらしい。

×

これで私も少し元氣（マイ）ついて来た。扉を片方だけ開けて、蓋をしたミシンを光のとゞく位置に動かして、これでも私は何かを書かうと考へたのである。

残りの材料はすつかり仕上げてしまつたし、商賣が悪いので送（マ）なかつたし、いや運賃を拂ふ金もなかつたので、仕上げたものは床の一隅に積んで置いた儘ではあるが、人間と言ふものは妙なもので、こう迄なると、却つて心配しないものである。

自分でもおかしいと思ふ位に頭がさえて、熱が出て、晝と夕方（マ）の二度、立つてお粥を炊いた外は、ペンを握り通しで、併もすらくと書けて行つて、夜の十二時頃迄には、四百字詰の原稿用紙を二十枚も書き上げた程であつた。この間、雨も本降りになつたやうだし、風も吹き出たやうで、トタン屋根がト／＼と鳴つたり、ガタンパタンと騒いだりしたけれども、或ひは毛布を脊中（マイ）から被つたせいから知らんが、寒さはとんと感じなかつたのであつた。

×

私はこの短篇に「收獲（マイ）」と言ふ題をつけて床に入つたが、數年來味（マ）つたことのない或る満足感を覚え

たのであつた。丁度、咽喉につかへた何物かを呑み込んだ時のやうでもあり、非常に難しい問題をやつとのことで解いた時のやうでもあり、又、心に抱いてウゾ／＼してゐる何等かの憤激を、適當な機會にぶちまけた後のそれにも似てゐた。と共に、私はこの作の主人公を考へて、或る感傷にとられて涙がこぼれるのを覺えたり、奇想天外な空想を頭に描いて、思はず拳を握り、唇を噛みしめたりもした。主人公は實在の老職工で、昨年餓死同様にして死んだのであつたが、作の大體の筋と言ふのは、彼が工場より三十八名の同僚と共に産業合理化の爲めに解雇された時、一部のものがストライキ云々と力きんだにも拘らず、彼は清い空氣と輝く太陽にあこがれて、皆との一致行動を避け、靜かな餘生を送らうと田舎に歸り、差當り村の小作人達の收獲(マヤ)の手傳にでも使はれ、その中には一人前の百姓にならうと考へて、一生懸命に働いたが、彼を雇つた小作人達の大半が地主に依つて收獲(マヤ)したものを差押へられた爲めに賃金さへ満足に貰へず、愈々百姓となる決心がぐらついて、ストライキのメンバーを訪ねたら、そちらも失敗に終つて途方に暮れてゐると言ふ事實を描いたのであるが、何らか自分の心をつゝいたやうもあつて、私は眠れなかつた。

×

こうした興奮状態から段々醒めて來た時に、私はブルツと寒けを感じて顫え出した。残つた二枚の毛布を娘と一枚づゝ着たゞけなので、寒いのが當然ではあつたが、今迄は興奮してゐたゞめにそれほどは感じなかつたけれども、一旦寒いと感ずると腹の中から、脊中(マヤ)からブル／＼と顫へ上つて來て、胸が痛む程であつた。私は起きて來て、もう一度冷水摩擦をやつて見た。やつた後暫くは大分暖みを感じた

が、床に横になると又顫え上つて來るのであつた。私は娘の手を握り、顔に觸れて見た。勿論冷かつた。私は「どうにでもなれ！」と言ふ氣になつて、コンドはカン／＼と火を起し、それに灰をかぶせて毛布の中に入れ、もう一枚の毛布もその上に重ねて、足を入れた。この時、私は足先きに冷いものを感じた。毛布をまくし上げて見たら、娘の尻の方に水が溜つてゐた。小便である。

あんまり寒い爲めに、何時の間にか娘は滅多にやらぬ寢小便をやつたのである。私は娘をひつくり返して見た。着物はビシヨ濡れた。あるだけを全部着込んで濡らしたことは困つたものである。着換へるべき着物は一枚もないのだ。

さん／＼頭を捻つた結果、私の着てゐるのを三枚だけぬいて娘に着せ、娘のは全部ぬいて火にあぶつて乾かさうと言ふことにした。其處で、私は炭を添いで、もう一つのコンロに分け、一つは灰をかぶせて毛布の中に入れて、娘をその傍に寝かせ、もう一つで、私は娘の濡れた着物を一枚一枚ひらいてあぶつたのであつたが、小便の瓦斯が鼻を衝いて臭いことお話以上であり、その爲めに、私は續けざまに何十かのクシヤミをやつたのであつた。それでも私は根氣よく、全部の着物をあぶり乾かして娘に着換へさし、コンロを圍んで横になつた。暖くなると間もなく睡氣がさして來た。が、コンロの儘では危険と思つたので、私は火箸を持つて來てコンロの上に置いた。置いて毛布をかぶせて見ると、これでも安全ではないやうに考へられたので、ナベを以つて來てコンロに蓋をした。これで大丈夫だと思つて、私は再び横になつた。

「無駄な犠牲ではない！ 決して無駄にはしない！」

私が目頭を赤らめながら、臨終の老職工の手を握つて、自分にこう言ひ聞かせてゐる場面である。この場面は非常に深刻に私の頭にこびりついて居る。

私が病人を前にして沈んでゐるこの時に、誰かゞ私の肩を揺り動かした。と共に、何か焦げた臭氣が鼻をついた。私はこの老職工に飲ます煎薬が焦げたんだと思つてハツトした。ハツトしてはね起きた時危くコンロをひつくり返すところだつた。一場の夢だつたのである。

が、私を驚かしたことはこの夢ばかりではなかつた。この夜中に、南部へ行商に行つて居る筈の妻が私の傍に立つてゐたのである。この家の扉は、外からも開けられる仕掛けになつて居り、南部から夜行で歸つて來た妻は、呼んでも應へがないので、自分で開けて入つて來たのだと言つたが、目を醒して妻の姿を見た時、而も死んだ人の夢を見たばかりの時だつたので、驚いたの驚かないのと言ふどころではなかつた。私が目を皿のやうにして恐ろしい顔付で妻を睨んださうだが、さもあるべきことである。その中に私も段々落ついて、夢と現との界がハツキリと分つて來た。

「どうしてこんなに遅いのだ？……」

私のこの問に對して、妻は黙々と脊中の子供を下し、おしつこをさしてから娘の傍に寝かしつけ、大きな溜息と共に床に腰を下しながら、

「商賣なんか……もうコリ／＼したわ……」と言つた。

理由は手紙で幾度となく聞かされたし、賣れないからだと言ふことも分り切つてゐるが、口でこう言

ふことを聞かされると、妙なもので、私は再び

「何故だ？……」と聞いてしまった。聞いてしまつて、私は、馬鹿馬鹿しい！ 聞かなくとも分り切つたことではないか——と自分ででられて、目を毛布の方に落した。コンロの方で一寸煙が立つてゐるやうに見えて、馬鹿に焦げ臭かつた。私は毛布を持ち上げて、ナベを打き落した。毛布に手でさわつて見ると、ナベと同じ位の大きさのものがスポリと落ちて、毛布に頭位の孔が開いてしまつた。妻は目を丸くした。私は苦笑した。妻はもう一つ大きな溜息をついて、その儘黙つてしまつた。二つの目から涙の線が頬を流れ落ちた。

X

私も困難にぶつゝかるとセンチになることはあるが、妻となると、それはもう氣狂ひ見たいなもので、涙をポロ／＼流したり、フン／＼と泣いたりすることは又沈静な方で、そこから一步進むと、それこそ滅茶苦茶なもので、子供にあたり散らしたり、片言双句をつかまへて愚論を繰返したり、それはもう手に負へない狂態を演ずるのであるが、この夜はヘンに物静かであるので、今度の行商はそれ程悪かつたのではなかつたぢやないかと私は考へた。又、これが何よりの關心事でもあるので、

「どの位賣つた？……」と聞いて見た。

妻は黙々と、懐中から金入を出して目の前にイヤラ／＼とあけた。私は勘定して見ながら、妻が又札を出すかと待つたが、妻はその儘手を懐に入れてぢつとして居るので、不審に思つて私は妻の顔を見て聞いた。

「これだけか……」

「へえ……」と答へて妻は相變らず沈んでゐた。

私はどきつと胸を衝かれたやうに感じて、目の前の錢を見た。只の五十三錢である。二圓五十錢も汽車賃を以つて行つて、十數日かゝつて賣つて來た殘金がたつたの五拾三錢とは！ この中から材料代も支拂はねばならぬので、私は何が何だか分らなかつた。

金が手に入れば、私だとたまには何かうまいものも食べたいので二十錢や二十錢位は無駄使ひをすることもあるが、この點となると妻は大變なけちんぼで、時たまの十錢や二十錢の使途不明にも散々油を搾られるし、五錢でも菓子を買つて歸ると小言だし、子供達が一錢餘計食つたと言つては雷のやうにやかましいので、小使帳(マ)を見せられる迄もなく、商賣の狀況は推察出来るのであつたが、それにしては、妻の態度があんまりに落付いてゐると私は思つた。が、この間の狀況を聞いて見て、私の心理状態とも考へ合せて見るとよく理解出來た。人間は、或る限度以上の困難にぶつかると却つて落ちつくものである。

×

フトンもないので、私と妻はとうくコンロを圍んで夜を語り明したが、妻の話の大體はこうである。出發した日の午後からI市の市場で賣つたが、たつた一枚二十錢しか賣れなかつた。二十錢の中市場使用料に五錢、夕飯二人で十錢、カーバイトを三錢買つて夜は又夜店に出て見たが一錢も賣れなかつた。その夜は妹の家に泊つて、翌日又賣りに出たが、午前、午後、夜を通じて子供服一枚とエプロン一枚合

せて三十銭だけ賣れて同じ市場使用料、食費、カバ^マイト代で全部使つてしまつた。風が大變強かつたので、その爲めだらうと考へて、第三日から戸別訪問に出て賣つたが、もとの教へ子（妻は元學校教員であつた）で同情して買つて呉れたところもあつて、やつと一圓位賣りはしたが、皆から聞いた話では、數日前大阪の××加工所が出張販賣に來たばかりで、何んでも三日間で二三千圓もの賣上げがあつたらしいと言ふのである。それではあんまり遅れて來たな—と私が言ふと、向ふでは、あれより早く來ればいゝかも知れないが、併し、ぶつかつたらやつぱり駄目だらうと言ふのである。何故かと聞けば、彼は、雜貨店をやつてゐるので、賣る爲めに度々、この××加工所から買つゐるので、その様子をよく知つて居り、向ふは大變に安いからと言つた。私のところも、技術は相當なもので、裁斷は一寸も屑が出ないし、ミシンも色々新しい附屬品を取付けてやつてゐるから……殆んど當りまへの市代位の値段で賣つて居り、技術に依つて省いた布を手間賃にして居る位だと答へると、彼は、それ位ではなかく××加工所と競争出来るもんぢやないと教へて呉れた。××加工所では裁斷は總べて機械でやつて居り、屑の出ないのも勿論だが、電氣で動くミシンが二百臺からあり、二番交替で五百人ばかりの職工を使つて居り、總べて分業で、その能率と言つたら比べにならぬし材料も向ふは織布工場から直接買つてゐるので、値段には大きな開きがあらうと言つた。こう言はれゝばなるほどと私も考へた。私達が買つた布は小賣店からで、工場からこゝ迄來るには少くとも三つの手を経てゐるから、材料代に於いて二三割高いことは免れないだらうし、話しに依れば、能率の大變^マに開きがあることも分るので、私は、こんな商賣はもうコリ^マくだと思つて早く歸らう^マくと思つたのです。妹も困つてゐるので、借りられなかつたから車賃

だけでも賣り溜めて歸らうと思ひましたが、それで子供を背負つては田舎迄賣つて廻つたが、毎日食はねばならないし、食ふと言ふと一日二三十錢も溜らないし、時には賣れなくて貯へを却つて減らすのでいらくしました。今日でやつと車賃が出来たので歸つて來たのです。

妻にはマルクスもエンゲルスも知つてはゐない。だから、妻は非常に重大なる事實を發見したやうに物語つたが、少しばかりマルクスを噛つて、曾つては讀書會や研究會でマルクスのABCを人に向つて講義した私は、このことはあんまりにも分り切つた常識ではあつたが、うかつにも自分がこんな立場に追ひ込まれて、この常識を忘れかけてゐるが、こうして自ら味はされて見ると、理論的には變りはないにしても、そこには何等か違つたものを感じさせられたのであつた。

x

妻の話を聞いて、私は一つの眞理をつかんだ。このやうに高度に發展した資本主義社會に於ける手工業者の慘狀についてである。マルクスを讀んだ時、一々なるほどくと合點はしたが、その時の理解は根底のないもので、別に切實な感じはなかつたが、こうして自分でなめさせられて見ると、この眞理には怖しい魅力があつた。私が低能であるせいかも知らないが、私には、頭のなかの理論と、體驗で會得した理論とは、その魅力に於いて、その迫力に於いて、非常な相違のあることが感ぜられた。武田氏はこんなことを主觀が幼稚であると言はれてゐるやうであるが、なるほど幼稚は幼稚であるだらうが、私は此處により堅實なる或るものをつかまされたのであつた。而して、私は私の今度書いた「收獲」が、例へ如何に多くの缺點を藏してゐるとは言へ、其處にはより高度の何ものかあると言ふことを自覺し

た。

最近五六年間、私は本を読む機会を殆んど恵まられなかつたが、それ迄に讀んだプロ小説の印象では、言ふことは分つて居りながらも、何か不足して居るやうな感じ、例へば、實感とか迫力に缺けてゐるやうな感じがあつたやうに憶へて居るが、それらの點を、この私の作が補つてゐるのではないかと言ふ感じもあつた。こうなると、一時に私は浮き／＼して來るのを覺えた。何だか、私の身體のなかには、鬱積された無限の力があるやうな氣になつた。

私は書いたばかりの原稿を妻に見せた。妻は黙々と讀んでいた。その時、私は妻の顔を注視したが、妻の顔には頁をめくつて行く中にだん／＼緊張味が見え、息が切迫して來るやうに見えた。見てゐる私もつり込まれて、顔の格好が變つて行くやうに感ぜられて私は目を伏した。が、時々或る衝動に驅られて目を上げて妻の顔を見た。見てゐると又顔面筋肉が引迫つてゐるのを覺えるのであつた。

×

「話で聞いた時はそれほどなかつたが、こうして讀むと涙^(ナミ)じん^(ン)で來ますわ!」
讀んでしまつて妻は折り疊みながらこう言つた。見れば目頭を赤く染めてゐた。

——これが藝術の力と言ふものであらう——
と私は考へた。

「どうだ?……面白いか?……」と私は聞いて見た。

妻は一寸頭を傾けて

面白くはないが、何らか心にピンと響いて来るやうだわ……
胸が一杯なつてしまつたわ……

と妻は自分の心理を摸索しながらユツクリと答へる。
藝術の眞の目的はこれだ！ と私は心の中で叫んだ。

「これ……お金になるでせう？……あんたもこれを書いて賣つた方がいゝと思ふわ！ 一枚何圓もすると云ふぢやないの？」

と妻は考へく言つた。

「私……何かの雑誌で見たことがあるわ！ 有名になれば一枚二三十圓にもなるんですつて……」
こう言つて私が一寸も返事をしないのを見ると、妻は恥しさうに黙つてしまつた。答へないのはいけなと思つたので、私は、私の考への儘を話してやつた。

「努めて書くには書くが、賣れるかどうか……それは自分には分らないことだよ。自分では、自分の書いたものが人のよりいゝと思つて、一般のものさしは必しも自分と同じであるとは言へないから、自分でいゝと考へたからつて、それが一般に通じるかどうか分らないよ……」

「さうね……」こう言つて妻は潤れかゝつてしまつた。

私は悪いことを言つたな——と思つた。併し、當てにならないことで期待させるよりも、何とか確實な生活の道をこれからさがした方がいゝとも考へて、自分でなぐさめた。

「それはさうと、先づ確實は生活方法を見つけないならばなまゝ。方々で懸賞募集をやつて居るやうだ

から、書いて當つて見るもいゝが、併し、定つたものぢやなし、あんまりそれを當てにして居ると、却つて困ることもあるからな……」私はあんまり失望させ度くないのでこう言ひなほした。眞の私の氣持では、私は人に訴へる爲めに小説を書かうとしてゐるのであり、人を喜ばせやう、面白がらせやうとして書かうと言ふのではないから、こんなものは金になるなんて、あんまりに蟲の良過ぎる話だと思つてゐるのである。だから、私は、私の書いたものが一人でも餘計の人に讀まれゝば……と考へてゐるのであつて、これを賣ると言ふことは、非常に高い空想に近い理想に思はれた。

私のこの考へ方は、言つて見れば、この數年來に於ける私の生きる爲めの苦闘が、生活の爲めに足るか足らん位の金を貰ふ爲にも不平不満を言ふことを禁ぜられ、口を塞がされるのに、私の小説が賣れるとすれば、不平不満をたゞくそのものが金になる……と言ふことになるので、私の實生活とはあんまりにかけ離れて居り、まるであべこべであるからであつた。

こんな譯で、私達は、一方では小説を書かうと思ひながらも、何か常識で言ふところの生産的の仕事を見つけて、生命を維持しやうと言ふ話に返つて來たのであつたが、資本なくしてやれることは、何を考へてもこの五六年の間に曾つてやり、而して食へなかつたものばかりであつた。

(四)

話がこの難關にぶつかると妻は黙り勝ちになつた。私も色々考へてさんぐ頭を痛めたが、食へさうな妙案はなかつた。こうして話の種が盡き、二三日の中に當面する飢餓と、現に當面してゐる寒さとの解決の爲めの話の種が見つからない中に、疲れからでもあらう……妻はコクリくと居睡りをやり出した。私は、休んで居れと言つてやりたかつたが、コンロを毛布の中に入れることの危険から、今は二枚の毛布を小さく折り疊んで二人の子供に被せてゐるので、さうも言へなかつた。こうして私は益々焦燥を感じた。

その中に壁の隙間から光りが射し込んだ。私はこの沈鬱な部屋の中の空氣が堪らなくなつて外に出た。雨は娘んで居た。この雨に洗はれて、縦貫道路の木々は澤のある青緑に光つてゐた。冷い空氣は重い頭を軽くした。路に沿ふた田では、ところぐ稲刈が始つて居た。立派な穂をつけた稻がたわむになつて、朝の微風に戦いてゐた。それを百姓達はさつくと刈取つて行き、稻扱機にかけてゐた。こうして集めた籾は袋につめられて一袋々と殖えて居た。今年も又豊年らしかつた。何時か見た新聞では、米が出來過ぎて、議會に米穀管理案とかを出さなければならなくなるさうだ。なのに、三日前此處から一里離れた村では一人の百姓が食へなくなつて首をくつて死に、私のやうな新米の小商人ばかりでなく、相當古手の小商人達迄が食へなくなつて、戦々兢兢として居る有様である。

大自然は相變らず快適なものである。この大自然を利用し、征服する人間の偉大なる努力もあらゆる方面に於て發揮されて居る。當り前なら、人間は益々快活に、活しよくなるべきであるのに、歪められた制度、歪められた人間性の爲めに、事實に於ては原始民以下の、原始民より惨めな生活を強いられて居る現状である。而して、この非人間的な社會を人間らしいものにしやうとして働いてゐた友人達が、その上に又より非人間的な刑罰を加へられて居る現實……。

私は是等の事實を逐一まとめ上げて、大衆に訴へやうと幾度ペンをとつたことか！ところがこの小さい。誠迄が、嵐にへし折られて難産に難産を續けて來たのであつた。私の小さい誠を生かす爲めには、私は先づこの嵐に堪え得るだけ強くならなければならぬ！と、こう考へて來た時、私は再び、如何にして現在當面してゐる飢寒を切り抜くべきかの難題にぶつゝかつた。この時にはいゝ空氣も、爽かな朝の微風も、重い頭を醫して呉れることが出来なくなつて居た。私は出る時と同じ重い頭を抱へて家に歸らねばならなかつた。

X

戸を開けて入ると、妻は蝦のやうになつてコンロの傍に横になつて居た。着物を二三枚被ただけで。

「おい！風を引くぢやないか！」

私は揺り起した。妻は目をシヨボくさして起きたが、兩手を組んで肩を持ち上げて顛へて居た。

私はコンロの灰をかき落した。炭火は燃え盡して消えかかつてゐた。

私は炭を添いで口で、フー／＼吹いた。炭はパチツとはぢいて火がつき始めた。

「駄目ぢやないか！そんなこととして風でも引いたらどうする！」

私は激しい口調で言つた。事實今又妻に風でも引いて寝つかれたら……と考へると怖しくなるのであつた。妻は黙つてうつ向いてゐた。私の恐怖は憤激に變つた。私はぢいつと睨みつけてやつたが、考へて見ると無理もないことであつた。この十數日間子供を脊負つての奔走でどんなにか疲れたらう。そして、妻としてもどんなに一日ののびくした休息を待ち望んで歸つて來たらう……。

私は憤りを風にして火をフー／＼吹き續けた。パチ、パチツと火の粉が飛んで炭は赤く燃え始め、終には總べての黒いところを赤で染め盡した。私はその氣持よささうに燃え出したコンロを妻に押しやつた。妻はボンヤリした顔付でコンロにズリ寄つて、抱へるやうにして火にあたつた。

×

私もその前に腰を下して手をあぶりながら考へた。先づ何よりの緊急事は質屋に預けたフトンを出さねばならぬと考へた。それには借りた二圓と利子の三錢が必要であつた。この二圓と言ふ大金を造へることが、今の最も切實な問題であつた。而してこの二圓を造へる考へで、理想も藝術も、はた又人生迄が私の頭からけしとんだ。どうせ冬物の材料が手に入りさうもないから……だとすればミシンの必要は差し當りないから、このミシンをでも質に入れ、ば少しはまとまつた金も出來て、第一はフトンを出すことが出來、第二は差し當りの難關を切り抜けることが出來やう……。その中にはなんとかならうと考へた。だが、ミシンの月賦はそれを全部支拂つてしまはない中は、會社のものだと言ふ契約に印を挿されてゐるので、質に入れたことが曝露した場合の「横領」と言ふ罪が怖かつた。

この外になにがあらう……と私は部屋の中を物色した。私の一張羅は己に持つて行つたし、靴も持つて行つた……さうだ！と私は妻の靴に目をつけた。私はそれをとり上げて見たが、この十数日の間に靴底は大分すり減つて居た。これでは曾つて以つて行つた私の靴と比べて、三十錢も借りられないであらうと私は考へた。私は妻の靴を置いて又部屋の中を物色した。床の一隅には先日仕上げた夏物の子供服が積み重ねてあつた。妻も大分賣り残して歸つたから合せて持つて行かうと考へて、私は先づ家の分を勘定して見た。大中小合せて五十三枚あつた。賣値の三分の一借りられるとして一枚七錢位、まあ……家のだけでざつと三圓五拾錢のところは間違ひないだらうと私は考へた。

「賣り残りほどの位あるかね？……」

私は妻に聞いた。

「二百枚位でせう……。」

と妻はけんな顔で私を見て答へた。

「二百枚……二七十四……合せて十八圓にはなる……」

と私は獨り言を言つて、

「で……その二百枚は何處に置いてあるのだ？……」

と聞いた。

「手荷物として驛にあるわ……。」

「札を呉れ！今直ぐ出して来るから……。」

私は札を受取りながら、

「それから家の分も風呂敷で包んで置いて呉れ！」

と言つて急いで驛に駆けつけた。

×

私は手荷物を受け出してその足で××質屋に向つた。質屋の戸は未だ開けられてゐなかつた。私は荷物を隣りの雜貨屋の店頭の邪魔にならないところに置いて、朝のおかずにもソヤツケモノを買つて、それから一寸見て呉れるやうに頼んだ。それから家に歸つて包の分をも持つて來た。質屋は未だ閉つて居た。私はその前を行き來して待つたがなかく開けなかつた。私は暫く歩いては隣り近處の店の時計を覗いて見た。九時半……四十分……四十五分……五十分……五十三分……さうして十時に五分を過ぎて始めて質屋の鐵格子の戸がギー／＼鳴つて開けられた。開けられると何處からともなく三四人やつて來て私より先きにのれんをくゞつて入つた。

最初の人は新聞紙に包んだ靴を出して二十錢借りて歸つて行つた。次ぎの人は金の腕環を出して三十圓、二十五圓だと駄引をやつて居たが、結局二十三圓を借りて歸つて行つた。

私は第一着の靴の残して置いた新聞を拾ひ上げて讀みながら順番を待つた。さうしてボンヤリと新聞に目を通しなら、幾何貸して呉れるであらうかと胸の中で計算した。

第三番目の叔さんはポロ／＼のオーバを出して、始めは一圓借りると言つて斷られたが、終には十錢でもいゝから是非貸して呉れと迄折れて出、とう／＼一錢にもならぬと斷られて、ぶつ／＼言つて歸つ

て行つた。歸つて行く様は今にも倒れさうで見て居られなかつたので、私は追つかけて行つて十錢握らしたら、

「神様―神様」と言つてひざまづこうとするので、私は面喰つて質屋の中に逃げ込んだ。この時は皆出てしまつた後で、私の番になつて居た。

私は品物を出して見せて、

「二百五十枚ばかりありますが……。」

と言つた。係りのものは頭をかしげたりして、

「商品はいけないことになつてゐるんだが……。」

と言つた。私は心配になつてしまつて、

「是非々々頼むから……。」

など、しどろもどろに言つたやうだつたが、後で考へて何時も赤面するほど、その時のあはて方つてなかつたやうに憶えて居る。それは兎も角、私のそんな一生懸命な哀願に係の者も感動したと見えて、一枚持つて中に入つて上の者と相談した後、

「當り前はいけないことになつて居るんだが、まあ……一枚五錢當てなら貸さう。」と言つた。

「間違ひなく出すんだから……八錢ではいけないでせうか？一枚二十錢で賣つてゐるんだから……。」

「いや！駄目だ！五錢でも特別なんだから……。」

と言つて行きかけるので、私は又驚いてしまつて、

「では……頼みます……。」と不自然な聲で呼びかけた。

こうして勘定した結果が二百五十枚、拾二圓也と裁定された。私はその二圓に三錢を添へてフトンを受出して歸つた。

先づ今晚から足を伸して眠れるし、それに現金を拾圓も持つて居るから、少しは軽い氣持になることが出来た。そして少しでもこの軽い氣分を永く保つ爲めに、布店に對して造へた負債のことは道々考へないことに努めた。

×

「阿爸！御飯！」

戸口で待つて居る娘が呼んだ。私は脊負つたフトンを床の上に下して娘を抱き上げた。

「小弟が歸つて来たよ！阿爸！」

と娘は嬉しさうだ。

「ふむく！歸つて来た。弟を大事にするんだよ、いゝかい？」

「私……小弟のお守りするわ！」

「お守りする？ふむ！偉いぞ！」

「小弟寢坊ね！又寝てるの……」

「寢坊だ！……」

私は眠つて居る弟の方を、一寸覗いて見たが、暗くてはつきり見えなかつた。頬に一寸手で觸つて見

だが、大分痩せてゐるやうでもあつた。

「さあ……先きに御飯にしやう。いゝ氣持で寝て居る弟を邪魔しないで。」

私達は久し振りで暖いミソ汁を飯にかけて喰つた。焼いたイワシもあり、ツケモノもあつて、娘は大變に喜んだ。私も氣が樂になつて居り、妻は十二圓も借りて來たことを聞いて、始めは「そんなに借りでどうして返すの……」と言つて心配さうだつたが、終には娘の機嫌にフリ込まれて、

「何か一緒に居て働ける仕事ないかしら？……この間は淋しいし、頼りない、それに賣れなくて心配ですし……もう……」

と言つて目頭を拭つて居た。

「さうだ。考へて見やう。」私は飯をかき込みながら答へた。」

×

「阿爸！阿爸！」

目醒めた息子が呼んだ。私はとんで行つて抱き起した。

「寢坊！醒めたか！」

私は抱き上げて戸を開けた。

部屋の中は急に明るくなつて、子供はまぶたを顫はして又閉ぢてしまつた。

「どうした？目が開かないのか？……」

「ゴミが入つた、ゴミが入つた！」

と言つて手をかぎして無理に開けようとしたが、開けられないらしかつた。妻は受けて説明した。

「二三日前から何時もゴミが入つたと言ふの。ゴミが入つた譯ぢやないの。少し目が悪いやうですの……。」

「さうか？御飯にしやうね！後で目薬買つて来るから。」

私は子供を妻に渡した。妻は匙で御飯を食べさせたが、その間も子供は「ゴミが入つた」と言ひくして食べてゐた。私は飯をかき込みながら子供の顔を注視した。怖しい位痩せこけてゐた。顔色も大變に悪くなつて居る。

「せきはよくなつたやうだね？……」

「はい！」

「どうしてそんなに痩せたんだらう？……」

「どうしてせうか……。」

妻もしげくと子供の顔に見入つて、

「向ふに行つてから段々元氣がないやうになつたの……。」

と言つた。

「醫者にかゝらなかつたかい？」

「だつて……」と言つて妻はうつ向いた。

だつて金がないんだと言ふのだらう。一難去つて又一難か！私は太い息を吐き出して床にパタンと横

になつた。

X

皆が御飯を濟したのを待つて、私は質屋から借りて來た十圓札を妻に投げてやつて、

「醫者につれて行け！」と言つた。

「これを使つてしまつたらどうするの……。」

「どうするもこうするもないぢやないか！そんなに衰弱した子供をほつて置けるかつ！」

「だつて……」

「何がだつてだ！」

妻は又黙つてしまつて、もぢく／＼して居た。

「直ぐつれて行け！」

「……」

「聞えないのか！」

「だつて……」

「馬鹿！」

このけん幕に子供達は吃驚して泣き出した。

私は分らなくなつてしまつた。一體私は誰に向つて怒つて居るのだ？妻はメソ／＼泣き出して居た。

こうなつたのは妻の間違ひでも罪でもない筈だ。それを……妻に向つて私は暴言を吐いて泣かしてしま

つた。私は又大きな溜息を吐出した。そして拳骨で自分の頭を一度に打ちわつてしまふことが出来たらと考へた。此處で自分が案外につまらない男であることを發見して、私はつくづく人生が嫌になり、自然に泣けて來るのであつた。その間に妻は子供を連れて出て行つた。

——一九三五、三、一二

御断り……私の計畫では「難産」を三部作とし、第一部が「新しき社會の難産」第二部が「新しき藝術の難産」第三部が「新しき人間の難産」とするつもりで居ました。今迄書いて來たのは第二部です。この第二部も私の一身上の都合で不本意ながら此處で畸形の儘々に一時中止せねばならなくなりました。諸君は難産から一縷の光明を見出さうとしてついて來たのでありませう？……實に濟まないことです。私もはやく難産とお別れさしたく、安産し得る時代を見たいのです。

「大事にしないと結核にやられるぞ！」と一友人が忠告して呉れた。

「難産をそんなに永く續けると命が縮まるぞ！」と懇意の一送者が忠告して呉れた。

「結核にやられたり、命が縮つたりしては堪らないぞ！」と私は考へた。未來に期待を持ち、未來に生きやうとする私をおどかすには是で十分だつた。

私の一身上の都合と言ふのは、死を怖れる私の意氣地なしと言つてもいい譯です。

頭がボウ然として、身體がだるくつて、一日正味十四時間頑張つても一千字も書けない現状ですから、之を續けて行けば又も「吊鼎」せねばならないし、此處からも命を縮める條件が備つてゐるのです。之

が又「難産」の題に相應しい運命でもあらう。が気分でもよくなつたら必ず終迄書き上げます。御諒承下さい。申譯に左にこの第二部の續きの要領を誌して置きませう。

子供の病氣は營養不良の爲めに目玉が腐つて居ると診斷され、ハリバと鶏の肝臓を食はせると言はれた。そうして、十圓は三四日の中に綺麗にしてしまつた。私は或る洋服店に雇はれ、悪い條件で十圓前借りして妻に送つた。休息時間に皆が「講古」をして楽しむので、私も私の「收穫」を皆に話して自分で慰めた。大變に受けがよかつた。その中に「××新聞に原稿募集の廣告があるので『收穫』を送つた」と妻から手紙があり、當選すれば三十圓になるとも言つて來た。數日後妻は××新聞社のTからの手紙を廻して來た。Tは中學で一緒になつたことのある男で、當の新聞社に勤めて居り、手紙の要領は「原稿を見た。こんなものはチャーナリズムには歓迎されない。出すなら一口に言へば、少し甘い奴を書け」と言ふのであつた。私は原稿を送り返して貰つて××雜誌社に送つた。その間に口傳へに私の「收穫」は大分廣まつて行つた。併し、××雜誌社からも又原稿を送り返され、「本雜誌の性質上掲載不能」と添へ書きされてあつた。

子供は大分よくなつたが片目になつてしまつたと妻から知せがあつた。「收穫」はとう／＼何處でも活字にして呉れなかつた。只口傳へに勞働者達の間に微々ではあるが或る反應を呈して來たことは、せめての慰みであつた。小さい火花も活潑に散れば大火事になるのだから。

——〈台灣文藝〉第二卷第一號至第四號
(一九三四年十二月至一九三五年四月；昭和九年十二月至昭和十年四月)

難產

(一)

秋高馬肥——

秋天終於到了。天空高遠晴朗，如今晨，戶外的空氣感覺有一點冷。把冷水嘩地一沖，肌膚用臉巾磨擦得發熱，接觸到黎明前的空氣時十分清爽，睡眠不足的腦子也一下子變得如秋空般晴朗。說是秋高馬肥的季節，我也覺得生命力越來越飽滿。

……秋天的黎明……

無憂無慮的學生時代作的浪漫蒂克的詩歌，無意識地脫口而出。不知何時我已站在橫亙於我家前的縱貫道路上。電燈還沒熄。秋天的拂曉，薄暗中有一種沉靜，不似夕暮的倥傯。要以文字一吐胸中塊壘，這是再好也沒有的季節。這次絕不在××雜誌上掉隊了！

白天熙來攘往的汽車捲起濛濛飛塵而令人討厭的大路，現在卻滿含露水清爽宜人。

大路對面是八卦山，山上點點可見的燈光是彰化溫泉，那前面從左邊一登上坡，應該是一片廣大的野地。

從前被稱爲鬥士時，我曾短期在這一帶住過，那時常在這野地上跑來跑去，快活地過日子。過往的時日回顧起來，令人懷戀……

沉緬於漫無邊際的思憶裡……秋天的黎明……詠唱變成口哨，不知不覺中，我已站在通往野地的山坡中央。

倏然憂鬱襲了上來……

東邊天空逐漸轉紅。天亮啦。家裡工作在催促著我呢。

×

我因爲沒錢，一切計畫都觸礁而落魄了，赤手空拳站在生活戰線上，一直淪落到赤貧的地步，就這樣隔了五、六年，於三個月前轉回來這舊巢，當時由朋友們的奔走以每月分期付款買了縫紉機，從H布店借幾十圓布爲唯一的資本，拿在流浪中學到的裁縫技術，開始製作童服販賣。這已是定居於此地的一個星期後，就這樣我從天亮到夜晚十一、二點左右，與縫紉機爲伍。妻背著一個孩子，拉著另一個的手，邊走邊叫賣，總算將就著過日子了。但兩三天前開始颳北風，我們就狼狽起來了。

已經秋天了。夏天的服裝不能不早一天處理掉。要是剩了一點，就會影響到向布店付款，製作冬服的資金是從哪裡都借不到的。即使一直到現在還是十分勉強請人通融的，再想請人通融絕對是不可能的。在這樣的情況下，到昨天早晨，妻才背起因咳嗽受苦的么兒，露出戰士一般的緊張神色，到少許暖和一些的南

部去販賣童服，而我則必須早一天把剩下的夏服材料製成商品寄去。就這樣我只好又像往日一樣，把自己想要說的事情一拖再拖，埋在心中讓它腐化下去，一想到這樣就憂悵起來。

×

我一回頭就跑下山坡。

由於過勞和睡眠不足而昏然的頭腦，發疼的胸部，渾身傭倦的肌肉……這些因自然清新的空氣，一時渾然全都忘記，清爽起來，但一跑到坡下，這些苦痛就又把我不全身籠罩住了。我亂七八糟揮動著手，努力把這種痛苦驅逐出去，卻還是枉然。我焦躁得快發狂了，胸口像燃燒似的，雙手抱在胸前，好像有人在追逐我一般，跑進庭院，咚地用肩頭推開門要衝進屋裡。

……格咚……卡榔！格咚！

緊接著這聲音之後，聽見孩子「哇哇哇」的哭聲。我嚇了一跳，抽回踏進去的腳。在打開的門邊，五月份才滿四歲的長女抱著飯鍋跌倒在地下，臉上、胸部、遍地都是散亂的米。我從女兒身上拿起飯鍋，抱她起來。她額頭上撞出一個腫泡，淚水奪眶而流出，沿著臉頰掉落下來。哇——地哭聲拉長著。

×

「怎麼啦？」

「我要煮飯的……」女兒抽抽嗒嗒地哭著回答。

「是這樣，已經長大得會煮飯了嗎？這麼大還哭，會被人笑訥！來，不哭，不哭。」

我撫摸她額頭上的腫泡安慰她。於是女兒馬上停止哭泣，用手背拭掉眼淚，對著我笑。我也不覺笑了

起來。那樣子看來太可愛了，我一把緊抱住她：

「像這樣！要笑，要笑呵！」說著親了一下她的額頭。

×

我用冷水摩擦皮膚後，由於早晨的空氣太清新，終於被誘惑著，走到前面通往原野的山坡。女兒不知什麼時候起來了，把飯鍋裡的剩飯移到大碗裡，然後在飯鍋裡放米，正想到自來水那邊淘米。就在這時我衝進來，門猛地被打開，這可把她搞慘了，格咚一聲額頭被門碰到，跌倒啦。

雖然才只有四歲，因為買不起玩具給她，也就不能玩，常說……要洗衣服……就把剛穿上的衣服，自己全又脫下來，拿砂說是肥皂，把砂塗滿衣服來玩水。開始時常常拿肥皂玩，費了不少肥皂，可是被母親責打了兩三次以後，就發明了用砂代替肥皂的遊戲。

女兒還常說：「要煮飯。」而經常把米撒在自來水的水槽裡，所以老是挨罵，但她卻說自己已經不是小孩子了，一看四鄰在準備做飯，就趕緊把米放進鍋裡，與老婆婆大姐姐們爲伙了。而最近較少把米撒掉，所以自個兒得意洋洋的，可是要放多少米還沒記住，所以有時放進兩倍的米，有時卻放進連一個人份都不夠的，反而添麻煩哩。

這天早上，她一停止哭泣，就從我膝上溜下去，動手撿集掉落在地上的米，說：

「爸爸……我全部撿起來，再煮飯……」

「算啦，算啦。昨天剩下很多，所以今天早上不用煮，快去洗臉來吃飯吧！」我一說，女兒就又順從地：「是，那吃了飯才來撿，中午我來煮——」說著停下撿米的手看著我。

「好，好，中午讓妳煮，所以快去把臉洗好來。」

女兒攔下鍋子，把面巾放進洗臉盆，邁著小小的步伐，走向自來水那邊去了。

×

我立刻把大碗剩飯、昨天剩下的小碟醃菜、飯碗、筷子擺在桌上，自己先吃完飯，把縫紉機弄乾淨，馬上著手工作。其間，女兒洗好臉來，自己吃飯，吃完飯就把飯碗連同筷子都洗好，小心謹慎地收拾好，連桌子都絞乾抹布擦得乾乾淨淨的，宛如一個成熟的主婦一般，勤勤快快地工作著。一做完就動手撿米，完全撿乾淨後，就拿出掃帚來掃除。由於掃帚太大用得不順手，一會兒把掃帚靠立在角落，說：

「爸……我要去找秀英玩……」

「好，好！」

我格噠格噠地弄響著縫紉機，一答應，女兒就箭也似地跑開了。

×

過了一會兒，女兒和秀英一塊回來，把破蓆子拖到院子裡，忘我地玩起來。

秀英這女孩子好像比女兒大一、兩歲。她是我們家房東、也就是有相當產業的地主林連三的三姨太所生的孩子，背著漂亮的娃娃，說著：「好寶寶，好寶寶，不哭呀……」等等，哄著娃娃玩著祿姆遊戲。女兒像是秀英的貼身女傭角色，無微不至地照顧著她，不久，秀英背著的娃娃差點兒掉下來，所以，女兒就說：

「要掉下來了，要掉下來了……」一把接住了娃娃。然後把它抱好：

「好寶寶，好寶寶。」

說著大爲高興地跟娃娃磨蹭著臉。這一來，秀英就變了臉色：

「不要，不要，娃娃是我的，我的呀！」邊說邊哭著，一面從女兒手上搶奪娃娃。女兒本來一直高興得不得了似地，把嘴唇貼在娃娃臉上，但是由於秀英的哭聲和干涉，像是突然生氣了把娃娃摔在地上：

「還妳！還妳！」說著，離開秀英的蓆子來到家門口站著。

秀英越發大聲地哭叫著，抱起娃娃：「哇哇哇哇」不斷地哭著。我看了這場孩子們的階級鬥爭在心裡笑著。

「秀英！怎麼了呀？誰打的呀！」

秀英的母親，林連三的三姨太從屋裡跑出來，絮絮叨叨地嚷叫著。

「守俄吶，是守俄吶……哇哇，哇哇」秀英哭訴著。女兒繃著臉，就那樣佇立在門口，盯著秀英，彷彿討厭極了。

「真煩人！秀英，回家。不可以在這裡玩！」三姨太像針對我一般地說著，把秀英拉走了。

我在心裡笑著，默默格噠噠地踩著縫紉機。然而，看見自己的女兒露出渴望的眼神追蹤著秀英的娃娃，而且不能說「買給我」，落漠地站著，我彷彿自己的心被勒緊了似的，不暢快起來。

×

不久，郵差送來了一張明信片。從家裡寄來的，叫我寄點錢回去。家裡在鬧窮，我是一清二楚的。以我哥哥的月薪（三十圓）得養活父母，哥哥夫婦，還有哥哥的五個孩子們，總共九人。二十年前哥哥爲了

要娶妻子，從信用合作社借來三百圓，每月要付三圓五十錢左右的利息。在鄉下，修理道路啦，「剝竹刺」（爲防患瘧疾要把竹叢弄乾淨）啦，都要拿錢，此外，什麼捐獻啦，又硬要錢，所以我很清楚，不管怎樣擲節度日，都是艱苦的。

我父親已年逾七十，上次我回家時，十錢的香煙都買不起（本來可以抽十天左右），只好把香煙的包裝紙放在口袋裡，有時拿出來聞一聞那香味而強忍著，看到這情況，我衷心愧怍偷偷飲淚，然而，如今已是無可奈何。事實是，妻子昨天要去南部做買賣時，把家裡的錢只留下五錢，其餘的都帶去，才剛剛車資。而剩下的五錢，由於昨天買了三錢的醃菜，現在所有的財產就只剩二錢了。

——應該從昨夜就可以做生意，所以也許今天、明天多少會寄一些來吧。那時就給家裡寄去——我這麼想著。

×

虱目魚！虱目魚——是賣魚的。

「爸，要不要買魚？」是女兒的聲音。

女兒自剛才就落漠而無精打采地站著，我覺得可憐，從二錢裡頭給了她一錢，她就馬上買甘蔗來，像忘掉娃娃的事情一般，津津有味地啃著，嘶嘶地吸著甘蔗汁。

「不買」我一說，女兒也模仿著我說：「不買。」不久，又來了賣青菜的。

「爸，要不要買菜？」女兒又說了。

「不買，」我一說，女兒就又模仿著說了。

常被問的話是麻煩的，所以我把女兒叫到跟前，對她說：「守俄，爸現在沒有錢，所以什麼也不能買。知道嗎？別又說要不要買啦！」

「那要是沒有錢就買魚呀！」女兒央求著。

「好好。有錢的話，喜歡什麼就買什麼給妳」這麼一說，女兒就跑到外面，向隔壁的老婆婆吹牛說：「我爸……一有錢就要給我買魚咧……」。我格噠格噠地踩著縫紉機聽到這句話，心情覺得怪怪的。因為這幾天來刮北風，生意不好，女兒魚和肉都沒吃到，一聽到「要是沒有錢就買給妳」，便高興地期待著。其實不知何時才能有錢呢，因此，也就不知何時才能買魚給她了。

此後，賣魚的和賣菜的好幾次經過我家旁邊的胡同，可是女兒已經不問「買不買」了。當叫賣的煩人地問買不買時，女兒就說「不買」而不理他們了。她不知什麼時候拿出稿紙，趴在蓆子上，用鉛筆在一個個格子裡填寫片假名，如ハ、ナ、夕、コ。

×

賣甘蔗咯……一錢兩節啦……

是賣甘蔗的。

「賣甘蔗的，賣甘蔗的！」

女兒站起來叫道。我一愣，看著女兒。我的視線和女兒的視線接觸了。女兒好像在瞬間想起剛才的話，揮動著拿鉛筆的手說：

「不買啦，不買啦！」

「混蛋！不買，爲什麼叫！」

賣甘蔗的氣乎乎地離開了。女兒卻忘了似地，毫不在乎地在稿紙上繼續填寫著了或者不。我禁不住笑了。

×

汽笛響了。（註：報午時的汽笛）女兒站起來，說：

「爸，肚子餓了。我來煮飯！」然後把紙和筆拋進抽屜裡，抱著鍋子向自來水那邊姍姍地走出去了。我也稍停工作，站起來。因爲借來的椅子太高，只好把身體不自然地彎下去，因此胸部的壓迫感和背部的緊張感更加使我的身體疲倦了。我把雙手向上舉，試把整個身子向後弓彎了兩三次。骨節嘎巴嘎巴地發響。然後，我升起火，走到自來水那邊看了一下。由於米早上撒了，沾上很多塵土，女兒焦急了，一看到我的臉就說：

「討厭，洗來洗去都不乾淨吶——」

「因爲妳撒的呀。」我也幫她挑揀出塵土。

就這樣，我們兩人等煮好飯，就拿剩下的一錢買醃黃瓜來，吃了午飯，之後，我又開始縫紉機的工作，女兒說又要去秀英那裡玩，就出去啦。

×

「哇哇」

過了一會兒，女兒抽抽嗒嗒地回來了。

「怎麼啦！」

我停下工作，抱起她來，問。

「嗚嗚嗚……嗚嗚嗚……那個秀英的媽媽擰了我……嗚嗚嗚……」

女兒又抽抽嗒嗒地回答了。一看，膀部地方留著兩三處指甲的痕跡。我心中雖然怒氣騰騰，卻忍耐下來。

「好啦。算了。不哭。在院子玩就行啦。不要去那邊了！」我說著，可是，一想到孩子既沒有朋友，又沒有玩具，就覺得可憐。不久女兒像是睏了，前仰後合地打起瞌睡來，卻從喉嚨深處「嗚嗚嗚」地抽嗒著。

×

女兒抱到牀上，終於睡著了。我加快速度踩縫紉機。斜布和布塊通過縫紉機的車針下時，縫合起來，服裝就逐漸成形了。

就這樣，日落了，電燈亮了，可是女兒睡得越沉了。我也忘記晚飯，踩著縫紉機。不久，完成的衣服高高地堆積在縫紉機前面。七點——八點——九點，隔壁的鐘響了，可是女兒沒醒。因為沒有人打擾，縫紉機的工作順順當當地進行著。一直到附近在左鄰右舍聊天的女人彷彿都回家睡了，周遭逐漸安靜下來。每到這個時辰，我的眼睛總是越來越亮，工作進展得很順利的。就這麼著，這時到十一、二點之間是最有效率的，我一向抓緊這段時間。

但，過一會兒，郵差又送一張明信片來，把我這個時間糟蹋了。

它來自××雜誌社，寫著：

「第×號的稿件都湊齊了。等你的稿子來？即刻付印」。這幾年來總是滿懷心事，想要吶喊，雖然一直如此，過去即使寫了，也很難得到發表的機會，所以還能忍受；但這回呢，文學運動變得轟轟烈烈，人家確實迫切需要我的稿子，我卻反而不寫，這無論怎麼說都是難以忍受的。我立刻收拾好工作場，以縫紉機爲桌子，攤開稿紙，握住鋼筆，亮起了眼睛。

這段時間如果是手指尖的工作，是會很順利的，可是用腦的工作，這樣疲倦之後根本做不來。本來連故事情節都背熟了，但是現在腦袋已經發昏，很難寫成文字。

我焦慮煩躁起來。但越焦慮，只是眼睛越亮而已。寫了一兩行就丟進置紙簍裡，總覺得絲毫也沒表現出自己想說的，只是塞滿置紙簍罷了。

就這麼著，連閃亮的眼睛都暗淡起來。我拋開鋼筆抱住頭，努力勉強整理腦裡想的，但我的腦袋卻只能在明天的米和妻在南部的生意狀況之間打轉。

倏然，我感然饑餓，頭昏沈沈的。

我想非先填飽肚子不可了。

然後，生火，打開米桶來看。石油桶改裝的米桶看得見底。要是今晚吃掉，明天就不能不勒緊袴帶了。自己在東京的時候，曾經失業，有幾乎一星期沒飯吃的經驗，所以還能忍耐。可是，看著今晚也沒吃的女兒，明天一整天哭喊著「肚子餓，餓啦」的樣子，怎能忍受得了？我蓋上米桶，要弄熄好不容易生起來的火時，女兒眼睛睜得大大地起來了，然後，抱著肚子說：

「爸……我肚子餓了……」

「好好，這就給你煮，等一等……。」

我乾脆提起米桶，把所有的米倒入鍋裡。然後我們兩人就注視著稀飯咕嘟咕嘟的沸騰。

×

「守俄！沒有菜，沾鹽來吃吧……」

「是」女兒說著，好像很好吃似地，呼呼地吹涼著熱稀飯，扒進嘴裡。

「好吃嗎？」

「好吃呀……」

我心酸了起來。正是任性的四歲孩子哩，要是普通四歲的孩子，三頓飯以外還會要求零食，想吃這吃的。然而，她卻鹽拌著稀飯，說是好吃。

但是，確實是好吃。我也是那樣吃的，可是真好吃。因為是食慾旺盛的秋天嘛！把該在六點左右要吃的晚飯延到現在，肚子已經空了……。

就這樣我們吃了飯，把一切收拾好時，鄰家的時鐘敲了三點。我擔心著明天的米，覺得說什麼也寫不出東西來，也就和女兒一起上牀了。女兒一會兒就又睡著了，可是我的眼睛越發亮起來。

×

我躺著，回顧過去各種情景。

於是乎獲得的結論是，像我這樣的人，簡直不配在現代社會中生存。單憑工作，無論多麼不顧死活的

工作，是不行的。如果要在現代社會中求生存，不是靠祖先留下的產業，就必須和蛇一樣老奸巨滑，以極端的利己主義武裝自己，必須厚顏無恥；連自己的夥伴都得吞掉，否則是不通的。我曾看過，也經驗過勞動者不顧死活的工作，還有農民艱苦的生活。我親眼看見，也深刻體會到其中險惡越來越猖獗。這些如今都成爲我要表達的全部藝術的素材。在生活戰線如此無力的我，連自己的生活都維持不了，如果還想爲將來留下什麼，這種想法本身，簡直是形同瘋人，我是格外感同身受的。

幾年前要生孩子時，手頭只有七錢，由於醫生和助產士都請不了，妻子難產了。而如今我身無分文，爲藝術的難產而疲憊不堪。

X

第二天，我們父女倆餓著肚子，等到了妻的來信，信上寫著：

……北風強，生意很壞，孩子的病況不好……

我清楚：與其說是北風的影響，倒不如說是受到生活暴風雨的影響。由過去的經驗我知道，在南部只要不刮北風，夏天衣服的需求還能繼續三四個月。不管怎麼說，我們的窮主顧爲糊口而掙扎，那能買衣服呢？「夏天的衣服越破就越涼快呀……不買」被一個農民這樣罵過的情形，妻的信中還提到一個農民這樣嚷嚷。

不只是我的藝術，連我第二代，我自己的細胞，今後都會越發難產吧。妻的書信對我散漫的意識起了暴風警報的作用。只要我不滿的現況不從世上消失，無論怎麼艱苦都不該拋棄筆桿的。即使是難產，誰敢斷言就不會生出生龍活虎般的健壯孩子呢？不，歷練了暴風雨，這些孩子才會更堅強地衝向光明吧。如果

一代不能成功，就讓第二代，第三代再接再厲吧——

(一)

即使如此，我並不認為；妻這回的生意會完全失敗。北風從昨天早晨就停息，我期待著即使昨天白天賣不出去，昨晚的夜市上多少總會賣出的。我盼望；如昨晚賣了出去，今晨該會寄來，今晚會送到吧。

白天和傍晚做飯的時刻，女兒打開米桶看，把空桶打得噹噹響，大叫著：「沒有米吶！」每次我都停下工作，怒吼：「守俄，別叫！」

女兒提著洗乾淨的飯鍋，顯出訝異的神色，邁著小小的步伐靠過來，反覆說著：「沒有米吶……」。

每當那時，我就邊穿著上衣邊說：「等等！這就去買米……」說著便走出去，但一個小時後，又空著手回來。以鬥士的姿態在這裡快活地過日子時，我也算有名氣，跟人交往時坦誠相處，如果沒錢就率直地說沒錢，可是現在情勢完全不同，沒有多少朋友可以像以前一樣坦誠地交談了。至少，我能坦白地說沒錢的對象是很少的。第一個理由是，曾被看成是名人的所謂鬥士，如今不是遭人白眼，就是人人退避三舍。第二個理由是，我雖然曾以鬥士的姿態和別人打交道，如今已落伍不再是鬥士，所以我認為已經失去向人哭窮的立場。

就這樣，我一家家地走訪以前的同志或贊助人的家，可是，有時連對方的家門都沒踏進就回來了。我每次懷著一顆忐忑的心回來一看，女兒總是忘掉吃飯的事情在遊戲，這才鬆一口氣，但這個傍晚不是這樣。女兒坐著，靠著門抽抽嗒嗒地哭訴著：「肚子餓……肚子餓了……」

我用手摀住她的嘴，怒叱著：

「別出聲！不哭！」但又覺得可憐，百感交集，不知不覺眼角發熱，自己也要落淚了。

× × ×

隔壁的阿婆出來了。

「真可憐……從剛才就一直哭訴著肚子餓了……」說著，端來一大碗稀飯，我雖然心裡滿懷感激，卻懷著受辱似的感情紅著臉撒謊說：

「阿婆……不用啦……就要拿米來啦」。

「好嘛，給她吃呀……已經這麼晚，所以……」阿婆說著，讓女兒拿著大碗就回去了。女兒還抽抽嗒嗒的，但一接過大碗粥，忽然有精神起來，拿來筷子，也沒說沒菜什麼的，就狼吞虎嚥地吃起來。我才放心動手工作起來。

× × ×

女兒吃完大碗粥，洗了臉和腳，搬來凳子在我旁邊坐了一會兒，也許睏了。

「爸，我要睡啦！」

說著就自己上床，拖出被來蓋到臉，馬上打呼嚕睡著了。

我的心情不爽快。連縫紉機咯答咯答的聲音都覺得陰沉，越發使我焦躁起來，然而我還是機械性地動著手和腳。那聲響實在單調，我對工作雖然不熱衷，也並沒有在打瞌睡。我焦躁地等待隔壁的鐘敲打九點，但時間過得真慢，鐘敲八點時，我誤以為是九點，等鐘敲九下，真像一日三秋。就這樣直等到十點，始終

聽不到郵差的聲音。我大失所望，鎖好門上了床，可是心裏還想著，郵差送信會不會遲到？我側耳傾聽，每當有人經過小巷，每當有腳踏車的鈴響著經過時，就豎起一隻膝蓋，擺好起床的架勢。

「混蛋！哪有這麼晚郵差會來的！」

我叱罵著自己優氣的行徑，卻一聽見小巷有鈴響或人的腳步聲就豎起耳朵，準備一躍而起。鐘響十一點，又敲打了十二點。我抱著發昏的頭，仍然呆呆地躺著。

X X X

由於噹噹的聲音，我猛地醒了。

「沒有米哪……」女兒敲打著石油桶改裝成的米桶。

「混蛋！別吵！」我怒罵著跳起來。女兒嚇哭了。我生起氣來。那是對妻的憤懣，對女兒的憤怒，同時，也是不明所以的憤怒。

「混蛋！別吵！」

我抓住女兒的手怒吼。女兒從來沒有這樣頑固，大聲哭叫起來，掙扎著要從我底手抽脫自己的手。我一巴掌打在她臉頰上。女兒越發大哭。

「喂！還哭！」我又怒罵，但女兒扯著嗓子「哇哇……哇哇」地不斷地哭叫著。我拗不過她，也覺得可憐。

「好啦！好啦！別哭，別哭啦！」我讓步了。這麼一來，女兒也逐漸放低聲音，終於沉默了，可是卻從喉嚨深處「嗯嗯嗯」地抽噎著。

× × ×

我曾經大約有一個星期只喝水過日子，但這回很明顯，那樣是行不通的。當時，我身體很好，而且由於自覺是鬥士，精神也挺好的，加上又是個獨身漢，即使不吃，也不必介意旁人說什麼。可是現在一切狀況都變得極為惡劣，一想到孩子哭叫著「肚子餓了……」，鄰居聽了不知會說什麼樣的閒話，我就坐立不安了。話是這麼說，但如果沒吃飯，小孩子哭叫「肚子餓了……」，也是理所當然的，也怪可憐的。不，就因為可憐才會使我壓力更大，夜晚睡不著，腦子也不能休息，發起無名怒火來。因此，只是精神的打擊就受不了了。何況最近身體不行動輒便頭昏，工作也沒什麼作為，所以僅只一天，就比過往的一個星期還磨人，把我搞得七零八落慘兮兮了。

× × ×

一個星期以後，正午時分。

女兒沒有興緻玩耍，睡著覺。

我手拿著妻的明信片，顫抖著。北風停了，渺無蹤跡，是難得的秋高氣爽的好日子。太陽亮麗地照著，院子裡房東的女兒秀英只穿一件夏天的衣服在遊戲。旁邊林連三的第一號、第二號、第三號姨太太湊在一起，和隔壁的阿婆在聊天。我打從脊骨裡發冷，哆嗦起來，下腹部出力也抑制不住。

× × ×

——生意這東西……還是別做了吧……

妻的明信片，開頭是這句，結束了也是這句。

我內疚起來，以前信上太苛責她了。可是，不是別無辦法嗎！如今不是從上衣到鞋子都當了嗎？還有，房東很生氣地來討房租時，不是也向K借了二圓嗎！

X X X

「就算賭上兩代，三代還是要幹」，這種浪漫的逃避想法，一瞬間消失了。「爲將來留下什麼」，這種想法本身叫我感覺愚蠢透頂。從前還能挨日子時候，我日復一日告訴自己，什麼「爲了將來」啦，什麼「就是賭上兩三代也要幹」啦，我懷著這種浪漫的……類似宗教信仰的心情，每天乏味的生活因此變得有色彩起來，也變得有意義了。可是現在落到這種地步，一下子就把我從雲端拉了下來，使我面對現實，逼著我下決心。

說是爲將來，但如果沒有今天，那裡談得上將來。要是這樣的情況繼續下去，就是經過三代，你說還能做出什麼來！

無論怎樣艱苦也不應該拋棄筆桿，這種想法太荒唐無稽。拿著筆鏗而不舍，可是我到底寫出了什麼！
X X 雜誌已經上市了，我不是又掉隊了嗎！照這樣下去，不用說生不了生龍活虎的孩子，不是連自己本身都要餓斃在路旁嗎！

(三)

昨夜以來若斷若續地下著的雨，好像不會停的樣子。

不大不小又停不下來的這場秋雨，越發使得秋天的氣氛憂鬱起來。加上氣溫也驟然降低下來，讓我深深感到冬天近了。要是有足夠的衣服穿，有熱騰騰的食物，冷空氣是令人舒爽的。尤其是我住的木頭房子又低又矮，沒有窗戶，屋頂又是馬口鐵蓋的，夏天熱得像烤箱一樣，真不敢領教，因此更期盼冬天的來臨。但事到如今卻感覺冬天可怕了。因為拿被子典當給當舖換來的五升米，已經減去了一半。

寒冷刺刺地搖撼著脊骨，我打從肚子裡哆嗦起來。爲了避風，我關上門。在黝暗的房間裡，我試著做某某式的體操，手不知要往哪裡擺，肚子裡喊著一、二——一、二。不過，太緩慢，無法使身體暖和起來。我像台灣式的拳術一樣地，雙腳叉開用力踏地，雙手亂七八糟地揮動著猛向前擊。這回好像暖和了一些。可是，同時呼吸變得急促痛苦，頭昏昏的。我坐在椅子上，雙手抱著頭。女兒呆呆地站在旁邊，默默靠過來，坐在我膝上。我把手從頭上拿開，握住女兒的手。她的手冷得像冰一樣。我把臉頰偎在女兒的臉頰上，還是冷冷的，我一把緊緊抱住她。

「冷嗎？……」

「好……冷……」女兒回答的聲音帶著微微的顫抖。

X

我解開包袱，找出女兒的三件衣服給她穿上去。兩件是夏天的衣服，一件是碎布拚湊起來的奇怪的衣服，卻是法蘭絨的夾衣。

「這樣可以嗎？……」

「冷……冷呀……」女兒的聲音仍然在顫抖。

我又找出單衣（盡是夏天的）給她穿上，衣服的下擺垂到腳上，最後變得像不倒翁似的，卻還說冷。我自己也覺得寒冷，發抖起來。因剛才的運動變得暖和了一點兒，可是那溫暖不知何時已經消失了。我也把夏天和冬天的衣服混著穿上了三件，卻還抵擋不住寒冷。

我邊繞著房間走，邊思索，卻不知道怎樣才能抵禦得住這股寒冷。當然，我知道升起火來烤火就行，但除非爲了吃飯問題，否則是不能浪費木炭的。我也知道一喝酒就會暖和起來，可是這是更加不可行的。運動是好的，不過緩慢的無濟於事，如果做得激烈，頭部卻挺不住。

就這樣，我想到了用冷水搓身的辦法，高興得像是大發現一樣。我拿來一臉盆冷水，脫光衣服，先用蘸上冷水的臉巾直擦到皮膚發熱，再穿上衣服，真的十分暖和起來。我也脫光女兒的衣服，把冷臉巾放在她背上想替她搓背，她就「噢噢」叫著想逃，我硬抱她來搓背，一幫她穿上衣服，她就說：「已經不冷啦！」便起勁地到外邊玩了。雨仍然下著，但她似乎沿屋簷下到隔壁阿婆家去玩了。

×

於是我也打起精神來。只打開一扇門，把蓋上蓋子的縫紉機挪到陽光照得到的位置，即使如此，我還是想寫點東西。

剩下的布料全都做好了，由於生意不好，沒有寄出去。不，連運費都沒錢付，所以做好的堆放在床的角落裡。人是奇怪的，落到這種地步，反而就不擔心啦。

頭腦清醒得很，幹勁十足，連自己都覺得訝異，除了中午和傍晚兩次站著煮稀飯以外，一直握著筆，而且寫得順暢無阻，到夜晚十二點左右，已寫好二十張四百字稿紙。在這其間，雨好像下大了，風也刮了起來，馬口鐵屋頂咚咚發響，格咚吧咚地鬧出響聲，不過也許是我把毛毯蓋到背上的緣故，幾乎一點都不覺得冷。

×

我給這個短篇題上「收穫」，上了床，感覺到幾年來未曾領略過的某種滿足感。心情就像吞下堵塞在喉嚨的什麼東西，也像好不容易才解答了非常困難的問題，又像把心中的積鬱憤怒在適當的時機裡發洩一空。同時，我思索著這篇作品的主角，於是油然感傷而潸然淚下，腦子裡想像著驚心動魄的情景，不覺緊握拳頭，咬住嘴唇。主角是真實存在的老工人，去年像餓殍一般死去。作品情節大要如下：他和三十八名同事被工廠爲了經營合理化，解雇了。雖然有一部分人主張要罷工，可是他憧憬清新的空氣和燦爛的太陽，於是不跟大家一起行動，想回鄉下過靜謐的晚年。他打算先幫村裡佃農們收割，然後慢慢地變成一個道地的農人。他開始拼命工作，但因爲雇用他的佃農們大多收穫被地主查封了，連工資都付不清，他要當農人的決定動搖了。而當他去找罷工的成員時，才知道那邊也終歸失敗，無路可走。小說描寫的是這樣的事實，真好像捅了自己的心一般，我睡不著了。

××

從這種亢奮狀態逐漸清醒時，我凜然感到寒冷，不禁哆嗦起來。由於剩下的兩條毛毯我和女兒各蓋一條，冷是理所當然的。由於剛才一直處於亢奮狀態中，並不覺得那麼冷。可是一旦感覺到冷，就從肚子裡，背上，一直顫抖上來，冷得胸部都要疼痛了。我爬起來，又做了一次冷水搓身，做過後短時間感到相當暖和，但一躺上床，卻又冷得顫抖起來。我握住女兒的手，摸觸她的臉，當然是冷冷的。我的心情變了，「管他的！」於是就在小爐子裡升起旺盛的火，蓋上灰，拿進毛毯中，再把另一條毛毯蓋在上面，把腳伸進去。這時，我的腳尖感到冷颼颼的，把毛毯捲起來一看，女兒的屁股那邊有一泡水，是小便。

由於太冷，女兒不知什麼時候尿的床。我把女兒翻過來看，衣服都濕透了。所有的衣服全穿上又弄濕了，真是糟糕。連一件可換的衣服都沒有。

我左思右想的結果決定我自己身上穿的，只脫下三件給女兒穿上。女兒的衣服全部脫下來烘乾。於是，我添上木炭，分一點到另一個小爐裡。一個爐子蓋上灰放進毛毯裡，讓女兒睡在旁邊。把女兒弄濕的衣服脫下來，用另一個小爐子烘烤，小便的味道沖鼻而來，奇臭無比，害得我接連打了幾十個噴嚏。即使如此，我還是有耐心地全部衣服烘乾，給女兒換上，我就靠著小爐子躺了下來。一暖和，不久就睏了。但我覺得這樣用小爐子危險，便拿火筷子來，擱在小爐子上面。擱上火筷子後，把毛毯蓋上，覺得還是不安全，就拿鍋子來蓋住小爐子。我想這樣就沒問題了，才又躺了下來。

x

「你的犧牲決不是沒有意義的！決不讓你白死！」

我的眼眶紅了起來，握住垂危的老工人的手，自言自語道。這個情景深深地烙印在我的腦海裡。

面對著病人，我沮喪起來，此時有人搖了搖我的肩膀。同時，有些燒焦的臭味沖鼻而來。我以為是要給老工人喝的湯葯燒焦了，嚇了一跳。吃了一驚跳起來時，差點就弄翻了小爐子。原來是一場夢。

但，讓我吃驚的，不只是這個夢。這樣的三更半夜裏，去南部做買賣的妻竟站在我身邊。我家門的設計，是從外面也能打開的，妻說：剛從南部坐夜車回來，因為叫都沒人應門，自己就開門進來了。當我醒來看到妻的身影時，由於剛剛做了死人的夢，所以把我嚇壞了。據說，我張大了眼睛瞪著妻子，表情可怕極了。想來，真是那樣的。隨後我慢慢鎮定下來，清晰地理解到夢和現實的際分。

「怎麼這麼晚呢？……」

我這樣問她，妻卻默默地把背上的孩子放下來，讓他小便後，哄他睡在女兒的旁邊，深深嘆了一口氣，坐在床上說：

「生意這東西……再也不敢問津了……」

到底爲什麼，信上已經談了好多次，貨賣不出去，我也是一清二楚的。但聽她開口這麼說，我也不知怎麼回事，不禁又問她，「爲什麼？……」問過之後，我自己都覺得：無聊透頂！不是不用問也明白得很嗎！——我覺得不好意思，就把眼光移到毛毯那邊。小爐子那邊似乎冒著煙，一股焦臭味。我掀開毛毯，打落鍋子，用手一摸毛毯，和鍋子一般大小的一塊東西掉了下來，毛毯就開了一個洞，約有頭一般大。妻訝異地睜大眼睛。我苦笑。妻又深深嘆口氣，就此沉默下來，淚水奪眶而出，沿著臉頰流下來。

××

我碰上困難，也有時候會感傷，但妻呢，那簡直就像發瘋似的。淚漣漣地流，抽抽嗒嗒地哭，還不算

嚴重。超過這個限度的話，那就一踢糊塗了。對小孩子濫發脾氣，抓住一兩句把柄就得理不饒人扮出那種狂態，簡直叫人無可奈何。可是這一夜卻安靜得出奇，我就想，也許這回買賣不見得那麼壞，同時，這也是我最關心的事。我問她：

「賣了多少？……」

妻默默地從懷裡拿出錢包，嘩啦嘩啦地散出錢來。我一面算，一面等著，以為妻還會拿出鈔票來，可是妻就那樣把手放在懷裡不動。我覺得訝異，看著妻底臉問：

「只有這些？……」

「嗯……」回答後，妻仍陰沉著臉。

×

因為沒有被，我和妻圍著小爐子一直談到天亮，妻的話大體是這樣的。

從動身那天的下午起，就在T市的市場賣貨，卻只賣掉一件，得了二十錢。二十錢之中，市場使用費五錢，晚飯兩人十錢，買了三錢電石，晚上又試著擺夜攤，卻一錢也沒賣到。那夜就住在妹妹家，第二天又出去賣，但從上午、下午到夜晚，只賣出一件童服和一條圍裙，共三十錢，同樣由於市場使用費、伙食、電石費，就全部花光了。心裡以為也許是風太大的緣故，第三天起就出去挨家挨戶地賣，也有以前的學生（妻原來是學校教員）出於同情來買貨，好不容易才賣掉一圓左右。不過，據大家說，前幾天大阪的××加工廠剛派人來販賣，說是三天就賣了兩三千圓貨款。那麼是去得太晚了——我一說，妻便回答道：那邊有人說，比他們早去的話也許還好，可是一碰上的話，還是不行的。問他什麼原因，他就說：他自己開雜

貨店，爲了生意，常常向這家××加工廠買貨，所以很清楚那裡的情況，說那邊是非常便宜的。我回答他說：我們技術相當好，裁布一點也不浪費布頭，縫紉機也配上各種新配件……價錢也公道，差不多是市面上的價格，是靠技術節省的布料來賺手工錢的。而他告訴我說：就算那樣，也很難和××加工廠競爭的。在××加工廠裁布全都用機器，不用說不會浪費布頭。他們有電動縫紉機兩百台，兩班人員輪流，共雇用了五百名左右的員工，一切都是分工，談到效率是不能比的，材料也向織布工廠直接購買，所以價格就有很大的差距。我聽到這個話，就想：原來如此。我們的布是從零售店買的，從工廠到我們手中至少經過三次手，所以材料費貴上兩三成，是無法避免的，據他說，工作效率也有很大的差距，這也是我能清楚理解的，所以我就想：這樣的生意再也不能問津，就想早點回家啦。由於我妹妹也有困難，不能借錢，因而就想，至少也要賣出車費來好回家，於是背著孩子在鄉下四處賣貨。但每天不能不吃，一吃就一天剩不了二、三十錢。有時賣不了，反而就減少了儲蓄，所以焦躁不安，但今天好不容易才湊出車費，所以就回來了。妻是連馬克斯、恩格斯都不懂的，所以妻談得好像發現了什麼了不起的真理似的。但我念過一些馬克斯，曾在讀書會和研究會講授過馬克斯的ABC，這個道理是耳熟能詳的常識，可是現在我被逼到這步田地，幾乎把這個常識忘了。但現在自己一嚐到苦頭，就算理論並沒有什麼改變，卻讓我另有一番感受。

X

聽著妻的話，我體會到一個真理。那就是在高度發展的資本主義社會裡，手工業者的慘狀。讀馬克斯時，每句話都覺得很有道理，但那時的理解是沒有根據的，並沒有切膚之感，可是自己一嚐到苦頭，就感到這個真理有可怕的吸引力。也許由於我頭腦簡單的緣故，對我來說，腦袋中的理論和由體驗學到的理論，

就吸引力和震撼力而言，簡直不可同日而語。武田氏好像說過，這種事是主觀幼稚的，不錯，幼稚是幼稚，但我却從這裡掌握到一些踏實的東西。於是我自覺到，我這次寫的「收穫」，無論有多少缺點，卻蘊含了更深層的東西。

最近五、六年間，我幾乎沒有看書的機會，根據以前看過的普羅小說的印象，雖然作品要說什麼很清楚，卻覺得有些不足，例如覺得缺少真實感和震撼力，可是我覺得我自己的作品補充了那些缺點。這麼一來，我就喜不自勝，彷彿有一種心情：我的身體裡面有一直被壓抑著的無限力量。

我讓妻看看剛寫的原稿。妻默默地看著。此時，我注視著妻的臉，但妻底臉隨著翻頁數漸漸顯出緊張的表情，呼吸急促起來似的。連在一旁看的我也著迷了，覺得臉的模樣在變，我低下了眼睛。但有時被某種衝動驅使，抬眼看了妻底臉，看看她，我就又感覺顏面肌肉繃緊起來。

×

「聽故事時並不那麼感動，可是讀起來卻會叫人淚水盈眶哩！」

看完的妻一面折著稿紙，一面這樣說。我一看，她的眼眶發紅呢。

——也許這就叫藝術的力量吧——

我想道。

「怎樣？……有意思嗎？……」我問。

妻稍為側了一下頭：

「並不覺得特別有意思，但好像有什麼觸動了心弦似的……塞滿了胸口……」

妻一面摸索著自己的心理，一面慢慢地回答。

藝術真正的目的就是這個！我在心中叫喊著。

「這個……能賺錢吧？……我想你也不妨寫這個來賣！人家不是說一張要值幾圓嗎？」

妻邊思索邊說。

「我……在什麼雜誌看過哩，聽說如果出名了，一張就要二、三十圓吶……」

這麼說著，一看到我一點也不回答，妻就害羞地沉默了。我以為不回答是不對的，所以就把我的想法照說給她聽。

「我會努力去寫的，可是是否賣得出去……連自己都不知道。我認為自己寫的東西比別人好，可是一般人的標準不一定和我的一樣，所以我認為好，卻很難說會不會受一般人歡迎……」

「說的也是……」這樣說著，妻子沮喪起來。

我想：我掃興了……。然而，與其讓她期待沒有把握的事情，倒不如今後尋找一個踏實的出路。我這樣想著，自己安慰自己。

「無論如何，首先非找到一個踏實的出路不可。好像到處都提供徵文獎金，寫一寫碰碰運氣倒是可以，可是沒有把握，如果過分期待，說不定反而會為難……」我不願過分讓她失望，就改口這麼說。我真正的心情是：我是爲了要向人控訴才寫小說的，並不是爲了要讓人高興，讓人覺得有趣才寫的，這樣的東西能賺錢，我認為那是如意算盤打得太好啦。所以，我只希望我寫的東西能讓人看到，多一個人也好……至於賣稿子，我覺得這個理想簡直幾近妄想。

我的想法，也可以這樣說：這幾年來，我爲了生活操勞，賺得勉強糊口的錢維生，胸中的不平不滿無法吐露。就像嘴被塞住了一樣。如果我的小說能賣的話，就等於是發牢騷本身也能賺錢……這和我的現實生活離得太遠，簡直是南轅北轍，反其道而行。

因此，我們倆一方面認爲固然應該寫小說，還是要找一個一般所謂的從事生產的工作，以便維生。說來說去，我們還是回到原點。不須要本錢就能做的工作，想了半天都是這五、六年來曾做過的，而且都是吃不了飯的工作。

(四)

一談到這個難題，妻就逐漸沉默下來。我也絞盡腦汁落得頭昏腦脹，卻想不出能吃飯的好主意。就這樣話都說盡了，但還是想不出辦法來，擺脫兩三天內即將面臨的饑餓，以及現在正面臨著的寒冷，也許是由於疲倦吧……妻就前仰後合地打起盹來了。我很想叫她休息，但是不能那樣說，因為小爐子放進毛毯中會危險，所以現在把兩條毛毯疊小了，給兩個孩子蓋著。所以我越發感到焦躁。

不久牆壁的縫隙透進光線來。我受不了這沉鬱的房間裡的空氣，走出外面。雨已停住了。縱貫道路的樹木給雨水洗過，閃著綠油油的光芒，清冷的空氣使沉重的腦袋輕鬆起來。沿路的稻田有些地方開始割稻了。稻子垂著結實飽滿的稻穗，在清晨的微風裡顫抖著。農夫們沙沙地割下稻子，挾在勒稻機上。這樣收集起來的稻穀裝在袋子裡，一袋袋地越來越多。今年好像又是豐年呢。忘記什麼時候看過報上說：稻子收成太多，議會不得不出來米穀管理案什麼的。然而三天前離這裡一里的村子裡，有一個農夫沒飯吃上了吊，不只我這種生手的小商人，連相當老手的小商人們也落得沒飯吃，人人都戰戰兢兢的。

大自然仍然是美好的。人類正在各個領域發揮所長，以無比的雄心壯志，企圖利用和征服大自然。如果正常的話，人應該越來越快樂，活得更好，但事實上由於扭曲的制度和扭曲的人性，卻被迫過著原始人不如的、比原始人更悲慘的生活，這就是現狀。而我的朋友們想把這個不人道的社會改造成像人的社會，在現實上卻遭受到更不人道的懲罰。

有多少次我提起筆桿，想將這些現況逐一彙集整理起來，要向大眾控訴！然而連這小小的真誠都被暴風雨摧折，一而再，再而三地難產。爲要使我的小小的真誠活下去，首先是必須挺得住這個暴風雨——我想到這時，我又碰上要如何解決現在面臨著的飢寒的難題了。這時，雖然清晨空氣新鮮，微風涼爽，卻鬆懈不了我沉重的腦袋。我和出來時一樣，不能不抱著沉重的頭回家了。

×

當我開門進去，妻像蝦子一樣躺在小爐子邊，只穿著兩三件衣服。

「喂！會著涼的！」

我搖醒她，妻朦朧著眼睛起來，但抱著雙手挺起肩膀顫抖著。

我扒下小爐子的灰。炭火燒盡也要熄滅了。

我添上木炭，用嘴呼呼地吹著。木炭叭地彈裂著，著起火來。

「不行吶！那樣著了涼怎麼辦！」

我以激越的口氣說。事實上，現在如果再讓妻子著涼臥病……一想，我就覺得可怕。妻默然低著頭。我的恐怖變成了憤怒。我定定地睨視著她，可是想來卻也難怪的。這十幾天來背著孩子奔走，不知有多累哩。而妻不知多麼渴望回來，能享受一天舒暢的休息。

我把怒氣變成風，不斷地呼呼地吹著火。叭噦叭噦火花迸飛，木炭火紅起來，黑色的木炭終於全染紅了。我把燒得順暢的火爐子推給妻。妻木然地挪向小爐子，抱著它似地烤著火。

×

我也坐在火爐前面邊烤著手邊思索。我想：首先比什麼都要緊的是得從當舖贖出被子。那就需要當來的二圓和利息三錢。要湊這二圓大錢，就是現在最迫切的問題。而因為要想辦法湊出這二圓，理想、藝術、甚至人生都從我的腦子裡豁地飛走了。反正冬天的衣料將無法買入……若是這樣，眼前就不需要縫紉機。如把這台縫紉機當掉，便可以湊出一筆錢來，第一可以贖出被子，第二可以渡過當前的難關……。不久就會船到橋頭自然直吧。不過，當初契約上用印說明，還沒付清分期付款之前縫紉機的所有權是屬於公司的。因此我擔心，典當的事如果曝光，我就會落得一個「侵占」的罪名。

此外還有什麼……我打量了一下房間。我唯一的好衣服已經拿去當了，皮鞋也拿去啦……對！我相中了妻的皮鞋。我把它拿起來看，但這十幾天裡鞋底磨損了不少。我想：這雙和我以前拿去的我底皮鞋一比，連三十錢都借不到吧。我放下妻的皮鞋繼續打量房間。床的角落裡堆著前些日子做好的夏天的董服。我想妻也賣剩了不少回來，把它也一併拿去當。我先計算家裡的部分，大中小共有五十三件。估計能借到售價的三分之一，一件約七錢。嗯……在家中的部分大約三圓五十錢是錯不了的，我想。

「賣剩的有多少？……」

我問妻。

「差不多兩百件吧……」

妻顯出詫異的臉色看著我回答。

「兩百件……二七十四……總共可以得到十七、八圓……」

我自言自語。

「那……那兩百件放在哪裡？……」我問。

「我作爲隨身行李放在車站……。」

「把牌子給我！我現在就去拿出來……。」

我一面接著牌子，一面說：

「還有家中的部分也用大毛巾包起來！」說著，我趕緊跑向車站。

×

我領出隨身行李就徑往當舖去。當舖的門還沒開。我把東西放在隔壁雜貨店裡面不妨礙人家的地方。買了早餐的味噌和醃菜後，拜託看管一下行李，然後回家把包好的拿來。當舖還關著，我就在前面來回走著，等開門，卻遲遲不開門。我走了一會兒就探視一次附近店舖的時鐘。九點半……四十分……四十五分……五十分……五十三分……到十點過五分，當舖的鐵格子門才嘖嘖地響著打開。一開門，就不知從哪裡來了三、四個人，比我搶先鑽進了門簾。

第一個人取出包在報紙裡的皮鞋，借二十錢回去了。第二個人拿出金手鐲，三十圓、二十五圓地討價還價，結果借了二十三圓回去了。

我撿起第一個人包皮鞋留下的報紙，一面看報一面等。我漫不經心地看著報，在心裡盤算著會借到多少錢。

第三個人拿出襪襪的大衣，開始說要借一圓被拒絕，但最後讓步說，十錢也行，無論如何一定要借給他，不過，終於被拒絕，說那件大衣連一錢也不值。就發牢騷，嘟嘟著回去了。要回去的樣子好像快要倒

下去似的，我看不過去，就追上去，給他十錢，他一面說：

「神呀！神呀」一面要跪下來，令我驚慌失措，逃進當舖裡去了。這時大家走了，輪到我了。

我拿出東西來，說：

「大約有兩百五十件……」掌櫃的人歪著頭說；「商品規定是不行的……」我擔心起來：

「無論如何，請拜託……」好像手足無措地說了似的。我記得那時實在慌張得沒頭沒腦，自己事後每回想起來，總要臉紅。那姑且不說，我那樣拚命的哀求，彷彿連掌櫃的都感動了，他拿一件到裡面去跟上司商量之後，說：「平常規定是不可以的，不過，嗯……一件五錢的話就借給你吧。」

「一定會贖回來的……所以，八錢不行嗎？因為一件賣二十錢的……」

「不，不行，就算五錢也已經是特別的……。」他說著就要離開，因而我又嚇了一跳，就以不自然的聲音叫他說：「那麼……拜託您……」

這樣計算的結果，兩百五十件裁定為十二圓。我於那二圓添上三錢贖出被子回家。

從今晚起就可以伸直腳睡，再加上擁有現金十圓，所以心情稍為輕鬆起來。爲了要讓這種輕鬆的心情盡量維持久一點，我在路上竭力不去想布店的債務。

「阿爸！吃飯！」

在門口等的女兒叫道。我把背著的被子放在床上，抱起女兒。

「小弟回來了吶！阿爸！」

女兒挺高興的樣子。

「噢噢！回來啦。要疼愛弟弟呀，好嗎？」

「我……要照顧小弟呢！」

「要照顧？噢！好偉大！」

「小弟好愛睡吶，還在睡哩……」

「好愛睡吶！……」

我看了一下睡著的小弟那邊，但房間陰暗而看不清楚。我用手指摸了一下他的臉頰，似乎消瘦了許多。

「來……先來吃飯，不要吵小弟，睡得舒服呢。——」

我們給飯澆上好久沒吃到的熱騰騰的味噌湯，開始吃飯。有烤沙丁魚，也有醃菜，女兒非常高興。我也心情舒暢起來，妻聽到借了十二圓，開始時似乎有點擔心地說：「借那麼多要怎麼還呢……」但終於受女兒的心情感染：「有沒有可以一起做的工作？……前些日子很寂寞，沒有安全感，又賣不出去，叫人擔心……簡直是……」她說著擦著眼角。

「好，我來想想看。」我邊往嘴裡扒飯邊回答。

x

「阿爸！阿爸！」

睡醒的兒子叫了。我跑去把他抱起來。

「愛睡鬼！醒啦！」

我把他抱起來，打開了門。

房間裡倏然亮起來，孩子顫動著眼瞼又閉上了。

「怎麼啦？睜不開眼睛嗎？……」

「眼睛裡進了砂子，眼睛裡進了砂子——」

說著用手遮眼想要勉強張開眼睛，可是似乎睜不開。妻接下來說明：

「從兩三天前就總是說眼睛裡進了砂子。其實並不是眼睛裡有砂子，好像眼睛有點毛病……。」

「是嗎？來吃飯呀！等一下就去買眼藥來。」

我把孩子交給妻。妻用湯匙餵他吃飯，可是這時，孩子還是一面吃飯，一面反復說著「眼睛裡進了砂子。」我扒著飯注視著孩子的臉，消瘦得怕人，臉色也變得壞極了。

「咳嗽好像好些了？……」

「是！」

「怎麼會瘦得那樣呢？……」

「不知爲什麼……」

妻也端詳著孩子的臉，說：

「去了那邊以後就漸漸變得沒有精神了……」

「沒看醫生嗎？」

「可是……」說著，妻俯下臉。

好像要說：可是沒錢吧。一波未平，一波又起！我沉重地嘆口氣，巴咚地躺到床上。

X

等大家吃完飯，我把從當舖借來的十圓鈔票擲給妻，說：「帶去看醫生！」

「把這個花掉了，要怎麼辦？……」

「什麼怎麼嘛！能不管衰弱成那樣的孩子嗎！」

「可是……」

「可是什麼嘛！」

妻又沉默起來，不知如何是好。

「馬上帶去！」

「……」

「沒聽見嗎！」

「可是……」

「混蛋！」

我氣勢洶洶，孩子們嚇得哭起來。

我也不明所以。我到底向誰發怒呢？妻抽抽嗒嗒地哭著，變成這樣，不是妻的過錯，也不是她的罪。然而……我竟對妻大發雷霆，讓她哭了。我又大大地嘆了一口氣。我想：如果能用拳頭一下子敲破自己的腦袋該多好。沒想到我竟然是個這麼無聊的人，我對人生感到深惡痛絕，不禁哭了起來。此時，妻帶著孩子出去了。

道歉啓事：

我本來打算把「難產」寫成三部曲，第一部是「新社會的難產」，第二部是「新藝術的難產」，第三部是「新底人的難產」。一直寫到現在的是第二部。這第二部也由於我個人的私事，不得已在此暫時打住，這弄得不倫不類的。

我想各位是想從「難產」發現一絲光明而跟來的吧？……實在抱歉之至。我也很想早點告別難產，渴望能看到平安生產的時代來臨。

「你不保重，一定會患上肺結核的！」一位朋友勸告我。

「如果你那樣長期地繼續寫『難產』，一定會沒命吶！」一位親密的讀者這樣勸告我。

「患上肺病，要是沒命，怎麼行！」我這麼想。我這個人對未來滿懷期待，一心想要活於未來，這樣威脅我就足夠了。

我說是個人的私事，說是我怕死、沒志氣，也可以。

頭昏昏然，渾身倦怠，一天不折不扣地拚命寫十四個小時，也寫不了一千字。所以如果再繼續下去，就不能不又「吊鼎」(註①)了，如此一來，必然會縮短生命。從「難產」的標題來看，也許是我命該如此吧。不過，如我身體好起來的話，一定要把它寫好的，敬請原諒。爲表示歉意，我把第二部待續的綱要寫在左邊。

孩子的病診斷結果是眼球腐爛，是營養不良引起的，說要給孩子吃大比目魚 (Halibut) 和雞的肝臟。於是十圓在三、四天裡就花光了。我受雇於一家西服店，以很高的利息借支十圓寄去給妻。休息時間大家都在「講古」作樂，所以我也把我的「收穫」講給大家聽，來自自我安慰。反應非常良好。不久，妻來信說「××報有徵文廣告」，於是把「收穫」寄去，如果選上就可以得到三十圓。幾天後，妻轉來××報社T的信。T是中學時的男同學，在該報社工作著，信的概要是這樣的：「我看了原稿。這樣的文稿是不受新聞界歡迎的。如要投稿，一言以蔽之：要寫甜一點的東西。」我把原稿要回來，再寄去××雜誌社。其間藉口耳相傳，我的「收穫」傳佈得相當廣。然而××雜誌社也把我的原稿退回來，附帶寫著「與本雜誌的性質不合，不能刊載」。

孩子的病好了不少，但卻變成獨目了，妻的信這樣說。「收穫」結果哪裡都不肯刊載。只是在勞動者間口傳，得到若干反應，雖然微不足道，但至少令人欣慰，因為星星之火如果活絡地散播，也可以燎原的。

——葉笛、清水賢一郎譯

——黃英哲、彭小妍校訂

註①「吊鼎」為台語，意謂把飯鍋吊起來，即沒飯吃。

死^①

一

雖然是再受了主人嚴重的命令到了門限外、寬意全然沒有勇氣可再去催促阿達叔了。他在頭腦中、想起阿達叔家中的窮狀、一步一步在與阿達叔的住家對反的路上。往北走了

三月的天空很清、沒有一點의 雲霧、路邊的樹木盡發出新芽顯出更生的意氣、除了幾區收獲了未久的甘蔗園、一面都是清綠的光景。

從這中間傳出的虫聲唧唧、加以鳥聲叫得、好像在讚美春天的快活。

在三月早晨青年寬意獨自很陰鬱地低著頭默默在大路上走向北方走著……確實是表示與這春的早晨、完全相反情景。

……敢勞貧窮無——

在學校裏常聽先生由口裡說出這句話、到現在、阿達叔看起算是例外的、似乎全然不得通用了……寬

意一路走著傾著頭凝想、終於這個問題是使他愈想愈不得了解的。

寬意的頭腦中、盡充滿著每天受主人命令去催討田租時候、直接看到像貧農阿達叔們的家中慘狀。這群窮民的淒慘狀況、時々不絕地纏著他的腦裏現到他的眼前、使他加倍困苦。

老實！阿達叔的勞働可以說是達到極步的。受主人的命令、天々催討去的寬意、也未會看見他們有休息的工夫。

阿達叔在田中有閑暇的時候、手中是未曾放落稻草的。他不分晝夜做著他的副業……編織草包的——在他家中、這樣的拖磨、不單是他一個人、他的老婆和兩小孩子都是總動員之下勞働。

他與寬意說話的時候嘴在講，手依然是在活動的。然而他和他的家族已經是不得更加勞働的力量了。他的勞働已經是達到極點、

自年頭到年尾、天々は這樣拖磨、他們依然不得脫出這樣淒慘、這樣的窮迫的情況。壁土脫落而開空的地方、冷風吹破糊在空洞上的新聞紙無時或斷地々吹的「卑利拍々」是建在無遮無阻的田中央的孤軒等屋襲擊她的風是更厲害的

自年頭至年尾、天々所食是無米的蕃薯簽粥罕有的鹽魚便講是有點奢侈了。

這樣的他們從何去得到十分的營養呢？

一身所穿是破了又補幾十重的衫褲、青黑色而消瘦的營養不良的身軀……這樣的衣食與其通風過奢的破厝、像是人類世界最大淒慘的標本。

對這樣淒慘的阿達叔寬意受頭家的命令、天々要去催討其已經沒有返却能力的滯納小作料這確實是純

情的寬意、有良心的寬意背不得起的重荷。

這個早晨的寬意、他就是因他的忍耐力已經達到極步、沒有一點再耐的餘地、所以纔反了頭家的命令、走向與阿達叔的厝對反的路來

一一

他走到庄外的神社裡走上石階、就坐在其奢華的、發出白光的頂高層的石階上。

聳在他後面的茨紅銅的神社厝頂、以精選白石造成的、他所坐下的幾十層白石階、映著朝日發出光輝。照顧得真齊整的庭園滿開的花草、青々綠々十花五色。

這樣醒目的光景與從神社後龍眼林中响來的小鳥鳴聲……

平常時真歡喜這樣景緻的寬意、今日卻不感到半點興趣。

平常時他所誇感的、他的頭々の豪富（這神社也是他所寄附的）這個早晨因為提起這樣的奢華來比較所執念的窮々迫々[△]淒慘的阿達叔們誇感都變了悲傷。

他低著頭想到頭痛。

……這豈不是我的迷夢……

寬意時常想以這等事實當屬眠夢、去打消這個捉他不放的印象。但他親目所看過的件々現實、刻在他的腦底極深使他一點都不得去磨滅時時要顯現到寬意的目矚前、使他困惑至極了

寬意的頭家姓陳名寶

他是全臺灣十指在內的富豪。又是××的評議會會員。他所有的土地達到一千餘甲。他又是十幾個會社的社長。

他這樣廣闊的土地，大部分是在領臺時候當世人的紛亂中去插札搜集的。

屢在他的本居地S庄管內的，只是一小部分十分之八九是屬在別庄連々相接到幾郡下。S莊周圍的A庄C庄P庄G庄M庄Y庄等等管內的土地，大部分都還是他的所有。

這樣跨在幾郡下的大土地所有，單以一個專任收租的當然是收不來所以，在S庄及附近幾庄纔叫寬意（寬意是受他雇去當雜差的）去代收。

寬意自當這位富豪的雜差，已經過了五年久今年二十歲，算起來是自十六歲就來的。

早年的寬意對這類窮人的慘狀是不會提來和陳寶富豪這樣潤△潤△比較過。

那時候，他的單純頭腦，只會誇感本身的頭家的潤△潤△富貴威風，賤視窮民。

雖有時亦生起同情心結局總是被他的優越觀念打消去。以前，他常以自己是陳寶富豪的雇人這件事為光榮的。

早年這樣心理狀態△，在現在的寬意已經不復存在了。這是受到淒慘窮人的末路所影響。

……舊年在田邊苦煉樹叢吊死的羅漢叔，想起來是我親自所看過的最初的犧牲，他是受我的催迫小作料，催迫到難堪，纔去自盡的最初的窮農民。

是！我的心理狀態，自這個時就已有變動我不以當富豪雜差為光榮，而把這慘不忍視的窮人來比較

潤綽富貴的頭家、是自這個時候就漸々陪養起來的呀……

回想這四年間的經驗寬意明明白白發見了這樣窮民的增加及慘狀的加倍沉重。

在其反面、他又發見了頭家厝內的豪奢加了幾倍的重大事實。

這般窮民的小作料不易收、使寬意總要多行幾回、所以寬意對這等窮民是更有接近的機會他們的勞動及生活狀態寬意都是更詳細地觀察到、他們大多數都是真拖磨、又是真節儉。

想到不得了解的寬意竟要懷疑起這等窮民的潔白啦。

……他們豈不是賭博輸去？……或是嫖妓亂費去？……

想東想西、想到像要發狂的寬意、忽抬起頭看見太陽已經昇起得太高了。

——太遲了——

一面念著阿達叔們的慘狀不忍再去催迫、一面又恐回去要再受頭家的責罵、他雖然即時立起、他的樣子是真厭倦的。

他向天衝出兩手、吐一口的大氣、纔慢慢行下石階。

……在這裏費了的時間、是受頭家命令要去對阿達叔通達最後命令的、不是可以讓我在這裏替窮農們傷心而自由消費的。

傳達命令應費的時間已經過了幾倍久。

傳達頭家的命令給阿達叔、應當是不上半點鐘、我在這裏費去的想不只二點鐘了。

回到頭家面前我要怎樣報告好呢？……

寬意雖然不忽再去催迫阿達叔走來這裏逃避的，但是一要回去，想無什麼妥當的話可以報告頭家，他就覺得困惑懊悔了。

對貧農阿達叔的窮困想到錯雜無序的頭腦，又要加上這點的煩惱，使寬意心意更亂了。

……騙頭家講阿達叔不在厝內……

寬意這樣想，又感覺着費了的時間又複太久若這樣對頭家報告，頭家一定會再問。

「不在可以即時回來，然後再去。因何要去白々費了這半日？」

照前的經驗，要受頭家這樣訊問，是不可疑的事。

不曾講過虛詞的寬意思起若受頭家這樣訊問就全然不曉得要怎樣應答好。

……若不得講給頭家相信，若不得十分安心去掩飾，若被頭家看破，再受頭家在面前以

「白賊鬼！」

責罵，我要如何應付才好呢？我的信用豈不是一時就要墮地呢？……

想來想去，想無妥當的話好去對頭家講的時寬意竟不覺冷汗滋出額頭。

想起凄慘的現實起了憂鬱的寬意，再想起幾分鐘後就要對頭家講白賊話，又感覺所要講的這套假造的話恐不得使頭家相信，寬意分外恐懼起來。

想是講這樣好，或是講那樣好而慌了心的寬意，已行到離他的頭家邸宅不遠之地，擡起頭忽然看見附近住民多聚集在大門外，像在議論什麼事件似的，人々都真興奮的樣子。

看了這群人在議論，寬意又要起疑心，想起這群人不知是在議論關於他的事……他又再加一項的煩惱，

心臟鼓動得酸又痛。

他行到頭家邱宅的大門前，又覺得要講的話還是想無一句妥當，他狼狽極了。

……因爲阿達叔不在厝內，去田裡尋他……

寬意又想若受頭家再問的時候這樣應他，又恐頭家向來知道阿達叔是罕到別處去的，這樣應他了後，要講找不到是不得使頭家相信，若講找到，當然要講頭家的命令傳達了，在這阿達叔不得完納小作料的時候，結局是要惹起對阿達叔起耕及抄封阿達叔的破厝……

四

踏入大門內，寬意還是想不到一句話好講。門外大路上，緊集的人像是更多來了。

……豈不是頭家已經明白了我不去阿達叔的厝而叫人出來找我的嗎？這些人像真注意我行動來……寬意的錯雜頭腦意要使他亂想到這一點。

總是、他這樣的想像也不是全無根據的。

……近來我對佃人有點客氣，頭家怎樣嚴厲的命令，我常是不照他的口氣對佃人講。頭家對這點已經有些明白……

寬意想起來，感覺件々都是頭家不信用他，而用心監視他的證據。

他想起昨日的經驗，錯覺了自己的豫想是既定的事實，覺得面上熱紅起來。

……昨日頭家對我講「你要對他講得清楚我再寬限他三日間、這三日間若無完納一定要照契約履行。因為他是同鄉的可憐人、我纔這樣寬讓了再寬讓的。對別庄的人、已經一箇月前就全部解決了。求乞乞々想要來贖五分一甲的人是眞多、田面不足若不趕快來完納清楚、我是不得再容情的、要照契約履行！」

這樣嚴厲的口氣叫我去催促阿達叔、又叫我一定要得到是橫是直的②

我因未學講虛詞、走回到頭家的面前、受他一問、我就照經過的情形講給頭家聽。

我在復述的時候、替阿達叔悲傷的心還未消息、覺得話聲帶有點悲咽、但、頭家不是我那樣的咽聲得衝動其情感的、聽我不遵守了他的命令的報告、就氣到要逆上一般的咬牙切齒、大聲嚷

「不中用！明天再去！我對你叮嚀了幾十回、你還是這樣白々回來……明天設若再沒有得到確實的回來、是不行的。你這不中用的東西、我講的話全不致意受佃人一點一滴的眼淚就要感動到不知天地。」

在昨日這段話、已是表示十二分的不信用我的。今早看我出來了後再用人來偵探我的去向像這樣庄人們的聚集議論、打算是頭家對我的逃避大々地發了波氣、被庄裡的人知道的我還有什麼講虛詞的餘地呢？

……從何以去瞞騙頭家呢？……我只有收拾行李回家去同父兄掘田土的好？……

想到這點、寬意髻髻像主人在他的面前大聲嚷、

「害虫！畜生！滾出去！我一刻都不容你在我這裏！」

似的。他愈覺得面紅也有點氣憤、富戶人怎樣殘忍？……

他一面替阿達叔不平在心裡、又對自己這樣職務的討厭、似乎有點決心的樣子。

寬意已行到戶碇前。

三層的洋樓巍然聳在他的面前，好像以頭家的威嚴瞋著他的。

寬意在這裏停立，一面想要緊入去，一面又不愿入去，覺得頭腦混亂到無餘地。

這時從洋樓中曳々地響出皮拖聲音，明々は寬意日常聽慣的，他的頭家——陳寶富戶的腳步聲。

因恐懼頭家出來發見他在這裏躊躇，寬意覺到一刻都不得再停在那裏了。

他促急地大步就走入厝內去。

但是，要對頭家怎樣報告，或是對頭家的質問要怎樣應答，寬意都失去了注意。

寬意手握一把汗，咬死了他的戰慄的神經，低著頭踏入第一步的時他噓々眼看見頭家無有生氣的面色，意外地現着憂愁的面容。

「斷了氣嗎？……」

從頭家嘴中發出的這句平順的問話，又是寬意所料不到的。

五

「噢！」

看見頭家意外的面容又聽着頭家料不到的質問，寬意吃了一驚，不曉得怎樣應答好。

寬意每次受到頭家的命令出外去，若是時間費了過久，常是受到氣忿々的頭家以

「死了嗎！」

的責罵的。

這回頭家那樣憂愁面容答與那麼時候不同、所講的、

「氣斷了嗎？」

又不是責罵的口氣

恐々懼々而帶有疑惑的寬意、傾頭想不知要怎樣去應他的時、頭家又再問、

「是轢着什麼所在？」

這話依然是真無元氣的聲音。

這樣打擊了頭家的感情、一定不是普通事。不知是什麼人受什麼東西轢着什麼所在？……

咬死戰慄的神經、期待見面就要受他以猛惡的面容瞋著、受他氣忿々毒罵的寬意、反看見這樣的狀況、茫然視着頭家的面、不得應出半句話。

他只在心裏亂々想像一場了。

這時、頭家有頭家的煩惱、所以、雖然遇着寬意這樣的茫然、也一點都不致疑、倒想爲寬意是看了被轢死人的慘狀起了驚恐的。

所以、徹頭徹尾、他以溫順的調子再問、「你要回來的時收拾了好嗎？」

這句忽然擊醒了寬意的精神。

寬意察知了事件的內容了。

寬意的眼淚滴下來。

……昨日我看阿達叔流了眼淚、不忍視再問將要走開的時候、所聽見的阿達叔的一句獨語「死去是多麼快活！」

這明夕是表示他的決意。他是自昨日就決意的！……

寬意想起這點、昨日去訪阿達叔的印象忽然真明顯地再現到他的目瞞前。

……他獨語之後、放落手裏的稻草、完全失了希望一般的、顏色帶蒼呀！他明夕自那個時候就決意的。我真無神經了。因何至今不想到這一點！……

寬意低下了頭、眼淚無停的流下、鼻穴也覺得閉塞起來。

在陳寶富豪、他連問了幾句、雖然總不得到寬意半句的應答、因為他自早就明白了寬意的心情軟弱、再看寬意滴下了眼淚、就解釋為寬意是看了現場驚得不能講話，以這個沈默的態度表示應了答。

他現出安心了的面容默々走入他的房內。

在寬意一面、他由頭家那幾句的實問、推察了阿達叔的受難已經是無半點可疑的餘地、雖然因此他免去了搜羅虛詞、來回復對頭家的困難、但是他完全沒有歡喜這回偶然好運的心意。他看頭家走入房裏即時越頭就向阿達叔的厝那方面走去。

寬意在路上走的時、第一關心的就是阿達叔的受傷不知是否致命。

他腳在走路、心裡又回想到頭家的態度去。

……阿達叔的遭難因何也要使頭家那樣的憂愁？他昨日纔罵我看見阿叔[△]達[△]流下幾滴眼淚就感動到不知天地、他豈不是也有人的感情？

但是，他要走入房去的時候，怎會便像消盡了憂愁，現出很安心了般的面容？豈不是十分鎮靜了的款式？……

或者，他那樣的態度不是傷感阿達叔的遭難是有什麼別項事故使他煩惱的？……

六

寬意的憶惻一時想起頭家的憂愁無一定是關連阿達叔身上收未完的小作料，忽而他又感覺自己這以小人之心度君子的憶惻的罪惡。

所以他又隨時從他的頭腦裏打消了這對頭家的疑念、寬意雖然十二分不相信頭家也有人的感情、但是，他也不敢斷言頭家對阿達叔的遭難全無同情、而且也只在利己的見地、

……設使頭家對阿達叔的遭難有十分同情來講、頭家的罪仍也是不得償還的、

阿達叔的遭難若是已定的事實、他明夕是覺悟的自殺、決不是什麼錯誤或是過失、照昨日所看的阿達叔的表情及口氣、這是一點都不容懷疑的、若想他現在的狀況、實在誰也難再去維持老命的。……

想起來、寬意對陳寶家豪的痛恨愈深、也感覺自己的責任不淺。

……阿達叔會去想死明明是因我去催迫了他太厲害的。我會去催迫他、總是受了頭家強迫的……

寬意愈深想、竟要討厭自己就的這種職務起來（向來他常以自誇的當富豪的雜差）又感到了自己像是犯了殺人罪或是殺人共犯一般的不安。

……舊年中在田邊苦煉樹叢吊死的羅漢叔也是因爲我追迫去太凶、舊年末被少爺打了負傷致死的江龍伯又是我引導少爺去的、阿達叔的生死雖然未可以斷定、結局亦是受我追迫所致的。

咳！我的罪太深了。不知要再害死幾多人的生命呢？……

——呀！這種職務、我一日都不得再忍耐去苦楚！傷心！我須趕緊向別途去尋覓生計呀……寬意想到完全失去感覺一般的了後、這樣獨言。

他茫然自失、眼睛像沒有看見東西。耳孔又沒有聽見聲音。

當他彎一彎進入狹小巷路之時、遇了由對面疾走來的自轉車鈴聲响得像是雷响寬意竟也聽不見、也不曉得避開、到被自轉車碰倒在地纔覺醒起來。

這時候、纔覺得要向阿達叔的厝、他已經走過頭了、應該是要在前一條的小巷轉彎去的。

他用手去撲々受自轉車擦到脫皮的腳脰、看見傍人向着他大笑、真覺得慚愧、越過頭、忍着痛、腳步一拐々々走回去轉入前條小巷路。

七

行到阿達叔的厝邊、寬意已經都忘卻了他碰倒自轉車所擦過的傷、行路也就照原了。

看到阿達叔的厝、寬意的心臟就躍動起來。

隔幾區田、孤立在田中的阿達叔的破厝、像是棄掉在荒野中的鳥巢一般、完全看不見有點生氣像、使

人覺得寂寞

寬意跳過幾區田、趕緊就走入去探々厝內。

編未完的草包這裏一領、那裏一領、雜亂地放在廳內、探視了房裡廚下也看不到人影。

阿達叔的厝內在農閑期是未曾這樣蕭靜過的在寬意來的時所常見的都是四個老人囤仔編草包編到草勢々地叫。雖不是鬧熱的聲音、也不是像現在這樣靜々の。那時候還有活氣的騷亂草聲。

放在廳中的編未完的草包、一個明是昨日阿達叔放下的……像是照昨日他放下的位置、沒有一分的移動。

這幾領編未完的草包以外、廳角還有疊一堆已編完了的和幾捆稻草排在廳內有極粗笨的編草包器具。這是他們唯一的生產器具。

以外還有一塊三腳棹一腳是以竹柄着的。棹頂排著幾尊的佛像、神主和一個毀了一角的土製香爐。又有一支壁虎仔燈火。占據在棹的前面有二個破飯碗、二個裂隙的小碇和幾双竹箸

房內只有一臺傾々倒々の竹眠床、眠床上安置一領齷齪了的破被單眠床邊一個石油箱疊了一堆的破衣裳以外、還是不得看出什麼。

——打算還在現場？——

從厝中找不到一個人影的寬意、即時走出門來、向南方一眺望、纔看見離厝約有二百步南方田畔有很多的人在過來走去。

這條稍大的田畔向南走了半里、是與製糖會社的原料線成辻的所在

——由這裏去——

寬意再覺得心臟的鼓動愈烈，他已經是沒有傍視的心情，眼睛直注着阿達叔被轆的所在，雜入人群之中，在田畔上走着。

寬意在走的時候，他的神經全集在阿達叔身上，過了幾個親友，像遇着不相識的人般，有人和他相動問他，他也像是不聽見似的只是走。

他很拚命的走，趕不得早一刻到當場去看阿達叔的生命可救不可救雖他對醫學上的常識一點都沒有，他是總不管只切望阿達叔再多活一刻等待他趕到當場。

走々到喘不過氣來，他纔把脚步放慢一點，這時，他又起了空想，期待着有什麼仙人在他趕到當場以前，賜給他一服回魂丹。

……不管阿達叔的肉受火車轆到怎樣碎，只以一粒仙丹使他吞下他即時就可以回魂來……寬意因他的頭腦紛亂了，一時鬚鬢像是有什麼仙人已經拿着有靈効的仙丹在路上等待他，他就窮盡眼力，一路上東看西望，但、總不能發見着一個像仙人的樣子。

他又想，神通的仙人是可以不必現出身來，無一定已經把仙丹置在他的懷中，便就伸出手去摸他的衫袋、褲袋、想去尋出一服吞下就可以即時回魂的仙丹。

走到將近現場寬意的腳的速度就再慢一點來一面極力想去抑壓鼓動的心臟。

集在當場的約有三四十人。個々都現出很悲傷的面容，有的蹲着，有的立着，有的跛來跛去地行着。附近火車路到處都染着血。在鐵軌的傍邊，蓋着一領草包倒在地上的，明々是阿達叔的身屍。

寬意這時候看見人面總感覺到人們是含着敵意在瞞他、個々人都在責備他、抱恨他。他愈想愈把自己痛恨起來、且也怕看見別人的面。

看到這現場的慘狀、在路上所幻想的什麼仙丹、回魂丹、他已沒有再去思想的餘地了。

他兩手插在褲袋裡、有時掩手在身後、低着頭目矚注視着地面、靜々地立着、像失了神去一般、沒有一點移動。

在草包的傍邊、一個穿一身襤褸的老婆坐在地上、雙手抱住頭、伏在兩膝上、像是在哭、卻哭不出聲來、只以口唇振動。

這個老婆的身邊、二個榮養不良的囡仔也坐在地上哭。雖在哭、卻沒有一般人哭的聲調。

「噢！」

突然感覺有人搖他肩胛的寬意、回過頭去一看、是與他在公學校同窓的明徹君悄然立在他的身後。

明徹與寬意雖然是同年輩、因為明徹自畢業了公學校後進去農林學校未上一年就失了他的父親、即時退學回來掌管家事、勞煩極了、所以他比較自畢業就去當陳寶富豪雜差的寬意、從面貌看來、可像是差得十多歲的光景。

他搖了寬意的肩頭之後、就講起關於阿達叔遭難很詳細的情景、最明確的考察。

他講。

「我在那裏除草的時……大概是八點外鐘……忽聽見火車異常的氣笛聲……趕緊走來一看……火車停在那裏、阿達叔的身屍被車輪轆斷做三四塊……真是不忍目視的慘樣子」

一個頭殼滾去到那裏兩腳從腹部轆斷拋在這裏，你看！……手指被車輪轆到這樣的碎，一手是從這個所在（他指他本身的手掌中央）轆斷看來真會傷心！」

在明徹講給寬意聽的時，傍邊的人也一齊走來，圍攏着，明徹的手一指，人々の眼睛就跟他的手所指的地方移動着。

大家聽來都現着憂愁悲慘的面容，有人切齒也有人吐氣。

九

寬意聽了明徹的說明便再迴轉頭去看蓋着阿達叔的草包。

阿達叔的散亂身屍，雖然掩蓋在草包底下不得看見，以明徹簡潔的說明，又看見糊在軌道上的鮮血及肉塊，浸入土裡的血痕，其慘狀就顯然現出在寬意的眼前了。

寬意愈想愈悲傷，覺得心頭像要閉塞起來一般呼吸有點困難。

「在我想，阿達叔是在這裏等待火車來，趕緊爬來臥在這軌道上的。

若不是，一定不得轆到這樣的整齊。」

他今早雖曾對我講厭世的話，但是態度還很從容，我完全沒有想到他已有這樣的決心。

那時候，我勸他不可煩惱，我給他說明「艱苦是大家相同的事，這世界不久一定會變更，我們不會長久艱苦下去的」的時，他傾著頭，像在思索什麼，再沒有講半句的話，走向他的田裡去。我看他去了，也

才去我的田裡除草。

他聽我講「一定不會長久艱苦」的話、在思索、我那時想是他已有領悟了的、現在想起來、他那時候已有悟得「世界變更不知在何時艱難日子現在已經不得渡」的樣子。

這樣明徹又向寬意說明阿達叔臨死幾分前的行動。

在明徹這幾句話、雖然沒有明白講起、在寬意也能得推察出來明徹明々以阿達叔的變死是因為受到陳寶富豪的催迫小作料、迫到難堪、纔走來尋死路而自殺的意思。

……迫々！催々！……

寬意想起這句話、即時悚然起來。他在口裡念、

——明々如我所料！我的責任？啊！

對阿達叔催迫、使他跳落到這樣慘死的當事者、陳寶富豪的脚手……啊！我的責任！——
寬意強忍住的眼淚、到這時候也竟流了下來

十

「公醫和大人來了。」

寬意聽到傍人的報告回頭一看、在他的後面帶着微笑從自動車下來的是當在的井上公醫及警察分室的主任——佐藤警部補。有一個隨在後面的是林巡查。

「在那裏？……死人？」

「在那邊用草包蓋着……」

傍邊的人用手在指點

從自動車跳下來的佐藤警部補，由人群中行到草包邊去。用劍鞘掀開草包，看見阿達叔的頭殼置在兩腿的中央，胸胎、胴、放在腳下，竟起了大笑、

「嘻！排覺得真湊巧！頭殼走來在××的下面」

「蓋起來。」他命令着傍邊的人，回過頭去像要向井上公醫說話。這時坐在地上、悲痛到要發狂的阿達嬌，突然迅速地爬到草包邊滾倒在地上、

「噯！你死……這……慘……這樣慘……噯噯……放我……噯……慘……」

用那無明無亮已經嘎了去的聲音亂哭起來，剛纔哭到不能哭的二個囡仔也再放出咽喉底、枯渴的聲。

將要開口的佐藤警部補，忽聽着這樣騷亂的哭喊、很感到不快、用着滿含着怒意的語調、對着老婆囡仔大聲讓：「靜々好啦、不許哭！」

無意中、忽然聽着佐藤警部補這樣的一喝、又看見他那樣含怒的面容、阿達嬌吃了一驚、即時靜默去、只在咽喉底「噯々」地叫、不敢再哭一聲來。

二個囡仔也驚到立起來要走、但是看見沒有要打他們的樣子、纔驚々怯々去蹲在他們母親的身後、不敢再哭了。

看佐藤警部補這樣態度、井上公醫也跟他笑着、隨後就去檢阿達叔的屍身。

「腳手這樣的細小、真是貧弱的人呀！看起來怕一日食無一頓飯、營養纔這樣不良。這樣人還是死了干淨。既不能做工、活着空穢地面。」

過了一刻、佐藤警部補纔問井上公醫、「井上君、你看這是故意的自殺或是失注意以致的？」

「哈々！佐藤君、看來明々是失注意的。麼虫也都愛命、雖然他與麼虫是無大差異的人、想是沒有自殺的道理。因爲自殺也要一點勇氣、這個人一定是失注意的」

公醫完全不去查察身屍及參酌被轢當時是實況、簡々單々就這樣斷定着、使明徹咬呀切齒地憤慨。

明徹憤慨之餘、幾次想向他們責問、但一經反省、他便失盡了勇氣他想：對這些無人的理論、只有自討沒趣而已，就走去立在眾人的後面、寬意聽着公醫對事件的斷定、搖動不絕的、鼓々動々の心臟一時鎮靜下去。因爲他直覺到阿達叔的死、已不是他的責任、是阿達叔自己的過失。

但、他再回想昨日所看見阿達叔的態度、又參酌早一刻所聽明徹的簡單的說明及實證、再考察目前所看的阿達叔的身屍、他的責任感依然不得放下。心理又自煩悶起來。

若照公醫的斷定、雖然可以避免了責任、無奈現實很明顯地證明阿達叔的自殺、傍邊的人一庄的百姓、也是一樣認爲自殺。

寬意雖然想欲以公醫的話去自慰他的苦惱、但他的理智却教他不得相信公醫的話。

……明徹的話是講得真徹理的。

偶然豈會得轢到這樣整齊……

佐藤警部補再向阿達嬸大聲說

「緊收々去埋葬、應該是要罰金咧！這回恩典你、今後須要注意！」

講了後便跨乘上自動車

「都々々」

捲起一股塵埃、自動走向來的路去。

人々像是受了這陣怪物驚了破膽、髻髻像忘却了當場的慘案、注視着漸遠漸小去的自動車

不知是何時來的、四個壯丁有的扛麥酒箱、有的擔知頭糞箕、也有擔水槽的。來在鐵軌道邊的樹下等待。

佐藤警剖補與井上公醫搭車回去了、人々在茫然自失的中間、巡查一舉手發出命令、四個壯丁即時走來。

「緊收々起來？一個人緊々去擔水來洗々清淨」

巡查再下命令、二個扛麥酒箱的壯丁憂着面目矚越看傍邊、表出真討厭的樣子、收了阿達叔的片斷死屍、用釘隨時釘下去了。

傷心哭到疲倦、又煩惱此後的生活問題、像要失神的阿達嬸、聽着噹々响着的釘聲、忽然又醒了、看她的丈夫已經被收在麥酒箱裏、將要扛走去、趕緊四脚爬去抱着麥酒箱、

「夫啊！夫：你枉死啊：你慘死啊！」

擡頭去打麥酒箱亂哭「夫啊：夫啊：你放這二個小子……」

她雖然全失了聲音、但愈哭愈利害

「我……我要怎樣死……」

她的聲尾是全然聽不得明瞭的。

元氣盡了。握着麥酒箱的手脫落，再哭也哭不出，双手支着地，手不耐力了，全身就倒下去，只在咽喉底

「噫……噫……噫……」

地哭。

二隻眼睛一時展黑、展白、默々瞧着簡々單々受壯丁們扛走去的丈夫。

看阿達孀這樣慘狀一時哭停了的二個孩子就也再大哭起來。

當年纔上了三十歲的阿達孀，因為營養不良又過於勞働，再看了今日這樣慘死的丈夫，煩惱又傷心，消瘦了好像是五六十歲的老婆一般

這樣貧弱而穿一身襤褸的老婆，與她這二個發育不良的孩子，伏在一堆喂々哭！這是寬意不得忍視的光景。這樣的慘酷，不只是寬意在當場個々人都是十分同情，十分替她傷心而流眼淚的。但是，個々都覺得不可白白空費了一日，所以看着明徹與寬意去扶她們將要回家去庄衆只講幾句的勸慰口頭禪，漸々就四散去。

在扶助阿達孀回家的途中，突然明徹問寬意「公醫講阿達叔不是故意的自殺，你想如何？」

在寬意的理智中，他早就明白了公醫的話是沒有體統的，他回想昨日所看的事實，他也不得不要認定明徹的話是有理的，但是，他因為惱於自己的責任感，受良心的譴責終歸難得卒直對明徹應答，阿達叔是

故意自殺的。

「……啞……」

他只得發出這無意識的聲音。

回想公醫的話覺得十分激動在興奮不已的明徹、全然也不察覺到寬意的心情、再以憤慨的口氣說：「詳細是照我在當場對你所說的、那一點都沒有錯誤、若有眼睛的人我想誰都不得否認這個事實！」

「狗奴才！做什麼公醫！對身屍、對轉過後的狀況、一點都無去考察還要講這逆理的話
檢什麼證呢？」

「好笑話！又要講什麼虫也愛生命！」

生命！這是誰都愛惜的但是個人若全失了人生的目標被人壓迫得全然沒有伸張的餘地之時：雖是所愛的生命、還有什麼法子可以去顧呢？欺人太甚的小子呀！

明徹停了一刻、以慢々の口調再說：

「阿達叔的生計你一定會比我更詳細一點的。他幾分田至去年已經賣盡了。連厝也給人家做擔保品了。家內已存不着一件值錢的東西了。他這樣賣盡一切去還陳仔寶、還不足三塊錢的。」

昨日他纔對我說「因欠了這三塊銀、陳仔寶將要起呆面、要來起佃及抄封的樣子」

他是一個極小心的老人。

決不會漠然為三塊銀的緣故去自殺的、這話恐使人難以相信、但、你若想他現在的境遇、考察他現在的心理、三塊銀來收他這條生命、是十分顯然的事實、確是理路整然的話。

最近我買藥種、以一張的舊新聞紙包着、那不知是什麼新聞、有報K市一個工人因紛失了二角銀致到自殺的記事

聽明徹的話、寬意真的更動情起來了。

他又憤慨、這樣激烈講的明徹、再進一步、好像要對面攻擊他的樣子、暗中祈願明徹的話早一刻變了口調、

明徹又說：

「收了阿達叔那條生命的凶犯明夕是陳仔寶這個人、因為他對阿達叔催迫那三塊銀過於無理嚴緊緣故、這是無容疑問的！」

寬意漸漸的覺得不安起來了、又聽明徹這樣的斷定、心理起了一場恐怖好像立在公判廷、受判官判為殺人犯一般的。抖顫不已。

「真是令人討厭、可恨的世間喲！想像起來真是可怕至極、這樣下去不久我也將要跟阿達叔去的……啊！」明徹的聲音低下了一點、寬意的心情也漸鬆快起來。但是、他對自己所就的職業。真的覺得討厭！

一四

「我的一生運命一片夕顯現在我的目前也似的早年的阿達叔、豈不是有七八分田、二分的厝地、尚可以安居樂業的這筆田逐年減去二分三分……到了現時田沒有了、厝地也去了、其他的農具、家具雖不值得一毫

錢也一件一件的賣去了、如今又死的這樣的淒慘、唉！家破人亡！人生遭此境地有何法子呢？阿達叔的運命和我目下的處境一點都沒有差異。由五十塊銀的負債增到一百二十五再變爲二百、舊年已經是達到二百八十塊、今年已經是三百五十塊咧！

這樣的負債一年積多一年、積到超過我的全財產的時候、——信用組合所評價只值得八百塊——豈不是只有再四五年的餘地嗎？……到了那個時候、慘死的番豈不是輪到我的身上來了嗎？

明徹這樣的自言自語不覺起了一場的恐怖。沈默下去。

在明徹憤慨說話的時候、寬意動了情不敢再想下去了、聽得明徹說話的口氣點兒寬來、說這理路整然的話、他也就想用心去考察這個問題的全貌了。他以前對貧的農民們的生活貧赤的原因所抱的疑惑——以爲是賭博輸去或是嫖妓費去——。等情懷念一々打消了。

寬意想不得了解、他所苦悶的是什麼？他非爲貧窮人數的日增一日而苦悶、在寬意的見解、若是不堪勞働、只想放蕩的人、這種人若陷到怎樣的窮苦、那是應該的報應、有什麼冤枉可申呢？

貧窮的人、自暴自棄的浪費可說是極其小數的、十之八九都是以勞働爲主體的、尙且節儉。

常言「留得青山在、不怕無柴燒」人若肯耐勞忍苦、怎能陷入貧窮之境呢？在來信這句名言的寬意、又聽了這等事實、似乎有點覺誤了雖未得顯然立論、對這句名言已有抱了懷疑、使他不相信了。

明徹將他要說的話說了後、他也覺得他身上好像有一陣的恐怖將臨也似的。

在途中、二人各閉下口唇、默々的扶助着四肢無力、全失了元氣的阿達嬸回家來。

到了家裡的時候、扶她入了房間、輕々使她躺在竹床上、將要回家的時候、聽見兩個孩子坐在門邊、

雙手抱着肚子地哭餓，明徹到厝內查了一查，想要取些食物給他們吃，但是室內空々如也，使他覺得有說不出的悲哀，米甕無半粒米，只在廚房壁邊發見幾條的蕃薯而已。

明徹走到附近的店舖買了幾包糕仔給他們充饑，叫寬意一同出來，這時這兩個孩子好像從監獄裡放出來的餓鬼一般的，相爭奪取，一包做一嘴的，吞到眼睛黑白展轉不已。

寬意離阿達嬭的厝與明徹分路之時，已經過了中午。

這日的寬意因受了這樣大的衝擊，精神錯亂異常，所以來到頭家厝內的時候，他也不像以前，無受頭家的承諾外出過久那樣的畏縮和煩惱。

寬意前思後想，終不得理解的，為阿達叔們的貧窮原因惱得鬱悶難堪，像要忘卻了平時佔領他全神經的陳寶富豪的存在。

寬意行到頭家的房間前，被頭家叫了幾聲，起初纔聽着，擡頭起來看見頭家倚在安樂床

「收了好勢嗎？」

他問。

頭家好像等待着寬意的回來，等得太久，也似的為要早一刻打聽阿達叔死後的消息，心裡有多少雜亂的樣子，在寬意未踏入戶碇內時就發出這話問他，除了賺錢以外，好像沒有一項可以動他感情的陳寶富豪，這日也對阿達叔的死這樣的關心，表示好像真鬱悶的樣子，這點也是寬意豫想不到的事情。

寬意對陳寶富豪還沒有應答出來的時候，他又再連續問下：

「公醫去看的時候你有在那裏嗎？」

「有」

「公醫有講他不是自殺是失錯被轆死否？」

「有」

「大家有相信他的話嗎？」

「啞」

「有人講他是故意去自殺的嗎？」

「啞」

寬意只得應「有」與「啞」、心情不許他多言而頭家以這個「啞……」解為「有」的意思、表出安心的樣子。寬意追出後想着、

……看頭家的態度、又聽頭家的話、他明々也是真鬱悶阿達叔的自殺。頭家假若聽了人家說阿達叔是故意跳下去自殺的話，那是受他催討那三塊銀才去死的、當然覺得很不爽快。頭家經△△已是與我同樣的感想……

寬意竟也要對陳寶富豪起同情的心理、

他想、看這欵頭家是比我更辛苦也未可定、這時再對他講明徹的見解及考察、是會越愈使他苦惱的。

雖然明徹所講的眞有理、結論也是眞明白、所以聽着明徹的話、的庄衆一定是會信他的……但這樣狀況假若使頭家知道、他不知道要多加幾倍的苦悶……

恰好、寬意因這樣的心裡不得明々否定、以這句「啞」糊塗應他而頭家自以好的意思解為肯定、頭家

得安心自慰、寬意也免再受頭家的追究來責備自己的良心。

陳寶富豪放了心、眼睛閉會起來、再倚着安樂床、就無再開嘴了、

一六

陳寶去睡了寬意他覺到這靜寂光景反省無窮不覺再煩惱起來。

他想雖然我全無用積極的意志去對頭家講虛詞、我這句糊々塗々的「啞」給頭家誤解爲對反的意思、這是明々的事實。

我自早就明白他能以這樣解釋的、然而無對他訂正、放他自瞞過了在頭家、日後若被他知道這個事實、定能說我瞞騙他的事實也未可知喂！他一定是要說我是瞞騙他的。結果、和我對他說虛詞有何差異呢？

寬意對這事實覺得着急的時候、一心想要去喚醒陳寶、對他訂正自己所應那句「啞」的意思而對他報告明徹所講的話及庄衆對這話所表示的態度、

一心又不忍去回想、或是言及到明徹的考察與結論。

以自己的嘴去說阿達叔的死因恐能受良心的責備這在寬意是做不得到的。

頭家好像陷在深眠、呼吸也平靜一點來。

寬意看他深睡的面容又想起自己的心裡、結々不得決心去喚醒頭家反想從此糊塗下去。

——待他醒起來的時候、若對我問的話、我纔對他說點清楚就是啦——

他這樣地自慰。

在這躊躇的中間、他注視着頭家的全身、又看着頭家腳手的微動、面皮的伸縮、總也要激動他的神經。……若頭家這時忽然醒起來、要怎樣去對他訂正呢？……

寬意雖然這樣的不安倚在軟綿綿的安樂床上的頭家、他的腳手、面皮的微動是在末梢神經全無意識着、他真正是睡得好像大豬豚一樣、假使下手把他投入海中大概他也不得醒來的。

寬意立在這裏等待了好久、看他總沒有醒起來、好像對自己再問的樣子、他纔思暫時走去庭中涼亭裏逃避這樣迫切的意識狀態。他像剛纔從監獄中、受監視緊々の狀態釋放出來的、緊快而且真小心、又不得十分安然、以手掌按着鼓動着心臟走向涼亭去。

他一坐下在涼亭內石椅上、他以双掌抱着頭殼、伏着石棹上、像在將要從頭殼裏清掃了錯雜及煩惱一般的、時々刻々振動着他的頭殼。

然而這日他所看過的印象、刻在他的頭腦裡刻得真深、雖有他這樣的努力、結局總是徒勞半點都不使得他的腦筋離開這個深刻的印象。他的一生、這個印象都是不得磨滅的。

整理得很完全的庭園果樹、花草穿着新衫一般的新葉、點々開着的花、靜寂、新鮮的空氣爽涼的微風……這樣的境地是越使他的精神清彩、鮮明、再現了今日所得的印象、強迫他更深一層去考察的。

……看頭家今日這樣的鬱意、雖然他第一是恐驚受人攻擊「阿達叔的死是爲他所迫、」的確也不得免對阿達叔多少的同情。至今、他的惡風評非只一項亦是二項、而已在那過去的時間、他却未曾這樣憂愁過。

墓地拂下問題、他當社長的S製糖會社的土地強制買收問題、他駛自家用的自動車去轆死人的問題、

強姦婢女的問題等々都被全庄的民衆譏議。

對這等風評、他也曾叫我去探聽過的、那個時候、我總是照事實報告了他、但是、我尙未曾看過他表出像今日的鬱意。

已然如此、此後他對佃人的態度是可以期待多少變更的。若得多少寬讓來的話……
寬意想起這點、早晨對這種職務所生的厭惡念頭、即時雲散了。而期待當這機會、頭家來變做好人、來顧佃人。他再空想着。

……我可以勸獎他施行我的理想也才可定。他的財富太多、若可以爲我的理想而爲他只以他的財產的千分之一給我、我就得做出偉大的事業呀！……

寬意在這裏沉思坐到不知時間的經過。

中午飯未食、他却也沒有感覺到肚餓。

他想起勸誘陳寶富豪出錢給他、造就他所切求的理想事業、他也就覺得心躍的歡喜。

他擡起頭、抱著頭的兩手掌放下、在嘴中念着

——第一要對教育着手——

因爲他在陳寶富豪這裏當雜差這四箇年間、他感覺該庄的風俗十分紊亂（其實他所看的只是該庄的一面）。

天々所看的、都是嫖賭飲的事實、這些的惡習是他想起要對教育着手的緣起、

——若沒有緊快除去這種惡習、該庄的人們定能踏到家破人亡的地步——

寬意再在嘴裡這樣念。

他找不到什麼理由來否認「堪勞貧窮無」這句名言，他達到「堪勞尙要貧窮、一定有什麼作用」的結論，而以日常在陳寶家裡所看的紊亂推斷到農民們貧赤的原因，想像農民們也在這樣的紊亂……以上的結論，在經驗淺薄的寬意可說也是當然的歸結。

……這等的的作用乃是秘密中的行爲。我總看得陳寶家內溺在這個紊亂，而未會看到小農們有這樣的紊亂，這是因爲我的生活對陳家比對小農們多有接觸所致的。他們那樣勞動尙且這樣的貧赤，除了是背後有人在剝削以外不得更有明的確證，在寬意的推理以爲是理路整然的！

他的幻想再進行下去！

——第二須要設個慈善病院——

他又在嘴裡念。

在寬意的頭腦中，他想要以教育教這些農民不可腰妓、飲酒、賭博使人々可得識字、樂於讀書，一來使他們的生計生不致困難，二來可以促進該庄的文化、

他的第二想像要設慈善病院，是爲要救治因癆病而陷入不幸的人們又要圖謀保健衛生的發達。他以的這樣的辦法，可以造成一個極理想的鄉村，使全庄的民衆得以安居樂業，他這樣的癡思夢想，覺得不勝喜躍、

在這幻想中，他忽然聽了工場的汽笛聲音，他站立起來，看得夕陽將墜，霞雲紅染，纔感覺到時間不早了！

三月的日不甚長，寬意聽得這報五點的汽笛聲音，即時走去擔水，擔未上二十擔水，太陽經已西墜，大地籠罩着黑暗，

寬意恐懼日暗，工作做不得完（在這廣闊的大庭園、剪齊樹枝、清掃樹葉及沿路的穢怕擔水給花、擔浴槽水、擔廚房用的水……每日要做五點鐘以上的工作，總是他一個人要去做）剪樹枝及清掃的事他暫時擱下不做，真拚勢的對水先去擔，拚到在這三月中旬的稍冷的黃昏也汗水淋漓的流到滿面。

在這樣忙碌的時候，自早晨就掛在他的心中苦悶着，也就一時離開了他的頭腦，好像是混在汗中流出去了一般的，精神輕爽，感覺得真爽快。

他繼續拚勢在抽水、擔水走、擔到廚房所要的水擔完，浴槽水也擔完了，花園給了三分之一的時候，天已經暗到看得不得人面了。

不得已寬意纔將其器具收拾了完，走到井邊去洗々頭面脚手。

全然沒有雜念，很爽快洗了面，洗了身，將要洗脚之時，寬意忽聽見頭家的喚聲

「寬意！寬意！」

喚得很迫切的樣子。

寬意聽了這個喚聲，就也不敢待到洗完（頭家喚聲一响，不管什麼人在什麼工作都不得再遷遲半刻的。這是陳寶家內的威行）所至只穿一雙的木屐，衫穿在手趕緊沒路穿的，走去到頭家的房間前。

突然從暗中走來到電燈光輝的房前，走得氣喘急々茫然的站立着，而不敢開嘴去問頭家，喚他有何貴事？

「你在創什麼……創到這麼時刻！現在已經幾點鐘你知道嗎？」

看寬意這樣姿態、陳寶就再發怒了、

「畜生沒用的東西！緊去去洗完啦、衫穿好勢再來！」

一八

無意中受頭家（寬意是按算頭家已悔悟了的、料想他對佃人或是對自己所雇的人能以更親切相待）喝了這聲、寬意再懊惱、把他的理想又飛到九霄雲外。

他趕快的走到井邊洗他未洗完另一腳、覺得前一刻的爽快、又變成愁悶、寬意又自言自語的說、「看這樣頭家尚未悔悟的、他今日的憂愁、或者是別項的緣故」他這樣的想像、又再開始湧發起來。

他趕緊洗完、一刻都不敢遲遲的穿好了衫就再走到頭家的房間內。

頭家的嘴裏咬着一技高級的「葉卷煙」、躺在安樂椅上、他看寬意經已穿好了衫就指掉上的那封信命令的說：

「你緊去把這一封信去……」

在寬意料想這一封信是要去投郵便筒的、但沒有貼切手、將要開嘴對頭家討切手的時候、纔看到這一封信沒有寫受信人的住址、再詳細一看、始知一張是要給××警部補、另一張是要給××公醫的、他越頭將要出門的時候、

「要注意咧！不可失落！」頭家的再三叮嚀聲音。

這聲音、曠得寬意神不附體也似的、重把手裏的二封信、檢視一下慎重的收在懷中、起步便走、惘々行到大門外的時候、寬意的疑惑變爲好奇心的、推想、爲什麼這麼時刻還要拿信去給警部補與公醫？

他回想昨日的檢證、

不知是寫什麼事……或者從這信可以得到、可以理解這等問題的解答——

寬意雖是極小心的、但遇了這麼多難不得解答的問題、再想起前一刻、在花園中所想的頭家的悔悟是靠不住的、他不覺的生了鬼心。

決意要走到他自己的厝內、偷開了這二封信他果然把這二封信拆開了一封、又發出啾的聲音、那是他驚異的聲音

他先開了要給××警部補的信、他發見了五張的十圓票及說謝的文字。內云：

——真勞煩了你、薄々爲我謝你的意思。

收起來吧。××××××××××、

佃人的思想也有動搖的樣子、後事再重々拜托——

文面雖是這樣的簡單在率直的寬意、他申此也得推察其一端。

對阿達叔的自殺、陳寶富戶那樣的憂鬱、又關心、想要糊塗的過去。以曠庄衆的耳目。對這封信的內容可以明證了。

寬意趕緊照原的、封完了信。又收在懷中再走、料想給××公醫的。一定也是相同、想不必重開。

一九

××警部補是當庄的警察××的主任。

在這庄內、可說是個權力者、支配一切。

在這庄內的事件、無論大小、對他若有多少應酬、沒有一件不得解決的、到現在已經是公然秘密的行爲了、

在庄內已經是誰都知道的事實。

好像在庄衆裡對頭家那麼多的歹風評、尙有幾件是重大的刑事問題……

但在庄衆却未曾看到這個陳仔寶富豪被拘、亦是被處罰的現實、

已有講過的事件不必再翻、關連這個大人的手碗[△]、是難去講盡的！

有一件笑話、是兩三年前的故事。

陳寶富豪一日真高興的、到樓與三四個紳士賭博、在賭博開場中、被一個新來的巡查捕住巡查記了他們的住所姓名回去了後。這個事件結局進展到那裏？……庄衆知道的只是、捕住這場賭博奏功的是這個巡查、由那起隔了五天就被轉動到R庄之事其他却沒有人得到什麼別的消息、而陳寶們一步都沒有踏到分室也沒有受到取調的事實。

還有一件秘在寬意心中、至今未曾對人說過的、所以全然未受過庄衆的風評、

這件事是在舊年下季收穫了後發生的、

這季的收穫、因八月中起了風颳、全庄損失很多、被害最重的減收達到八割、最無受害的也收不上前年同季的七割、

住在當庄西端的貧農有一個名爲江龍伯、他家有二子當年一個三十另一個是二十五歲、江龍伯自己已經是超過六十歲的老人、

一日寬意受頭家的命令去要對他收租、他二個男子及息婦總出去在田裏、只江龍伯一個人很憂悶的蹲在門口、聽寬意說是要對他收租、他即時跪下去、哀々求々的叫寬意減收他多少

寬意看這個老人跪在他的面前、他就狼狽起來了、趕緊走開、伸手去牽他起來、勸他免煩惱到這樣、又約束自己回去一定要替他對陳寶求情。

寬意牽他起來後就不忍再往對別個佃人收租了、即時回去、對頭家告訴關於這樣的狀況。寬意入到頭家的房間將要對他告訴的時候、衝遇陳寶的長男陳清波也入房間來。

這個陳清波少爺聽見寬意的話、怒氣衝天、他是專門學法律的、開嘴說法律、大聲嚷。

「你這樣的心腸要收什麼租？若佃人哀求減多少就照他們的要求、這幾百人的佃人、你想要減去多少呢？只要照契約履行、若不得完納、只可起耕、只可差押！」

江龍伯是住在那裏的狗畜生？……你導我去教他們多少法律常識罷！我收一回給你看看罷！」

寬意想來對頭家替江龍伯哀求減收多少？使那個可憐的江龍伯歡喜那知倒受少爺這樣的責備、又說要親身去收一回給他看他真是覺得哭訴無門的惱到欲哭無淚

少爺導前的，

寬意也就不不得躊躇着了、他像期待着頭家出聲來阻止、清波少爺的所爲、但頭家似乎很歡喜他的孩子這樣的做去滿面春風的、躺在安樂椅、默々の吸着煙。

寬意不得已也就跟他出去。他雖很懊惱、不願同他步行、但受少爺一喚做前引導、他纔很厭倦地做前行到江龍伯的家裡、他就停步不忍入去恐怕少爺弄出多端。

在大門邊躊躇了一刻結果他不得不跟清波少爺入江龍伯的竹圍內去了。

「江龍！江龍！」

陳清波行到江龍伯的大門口、在寬意躊躇的中間、就大步做前走入去到廳門口、這樣的猜狂叫。

躺在房內眠床上的江龍伯、半眠半醒地打算寬意替他去對頭家求情的狀況不知如何、不知何時纔得以吉報來的這個時候忽然聽着這樣猜狂的叫聲、躍々然的走到廳裏頭來。

他忽然見到少爺立在他的廳門口、覺得很光榮般的行禮、在心裡就想

……少爺專工來到這裏、諒必無減三割也有二割……喜色滿面的

「呀！少爺……來坐……請入來坐……少爺啊……真罕行……」

連呼了幾十句。

「說什麼××！」

以少爺來訪爲大吉的江龍伯、忽聽着他開嘴就說這樣土頭土腦的話他不覺茫然望着他想本身或者對他失禮的態度、

「少爺……若有失禮……請少爺指教、不必這樣來憤慨……」

「什麼失禮不失禮！你這個食到好死的人還要講什麼歇話！我是來對你收租的！緊々備便來！我要來對你收租咧！你講什麼狂話！你亦想要減租嗎？噢！你用什麼理由要來減租呢？噢！我教你幾條法律罷！你沒有完納我的租、我就可以把你的家產抄封起來競賣咧！你無照契約履行、我就可以將你所耕的田起耕咧！」

看了形勢太歹、江龍伯只可縮々退々呀

「……少爺！這季犯風實在是收不上一半……」

「我管你收一半亦是一粒！我賺你幾塊銀就幾塊銀、賺你幾石就幾石我管你收一半亦是一粒！噢！奇怪！你食到好死的人尙要講這奇怪話……我管你收一半亦是一粒！」

陳清波少爺看江龍伯愈縮愈退去、他在日本東京所學的雄辯也就愈入神。

「因何寬意來收你無想要快々給他清楚……因何你要再勞煩這樣無閑的身軀來到你這豚寮！咳！」

江龍伯縮退到碰着壁△再退也無路好去、用那驚怕的聲調顫々的應少爺一句、

「少爺！不是要勞煩少爺你來的；是因爲收無一半、總給你都無夠！」

陳清波少爺再大怒起來了、他走進幾步、伸左手去掠江龍伯的衿、右手順勢的打下去。

「你現々勞煩我來立在這裏、你還要硬嘴、死鴨硬嘴！你尙要對我說你沒有勞煩我、我自前就說過、我不管你收有夠亦是無夠的、我不管你收一半亦是一粒、你若收無夠、把你的厝去賣好啦、兒子去賣也好、應該要賣來添到夠額！」

「少……爺……讓情咧啊……」

江龍伯的猜警[△]面變爲土色、愈顛愈厲害、舌也不得轉、說話也說不得圓滑。至到「少爺」被清波聽做江龍伯叫他瘋者、陳清波就不等他這句話說進[△]。

「你說什麼××話？你說什麼××怎樣叫我當瘋者……你看我做瘋人嗎？」

陳清波的怒氣衝天了！

陳清波促在江龍伯的衿胸隨手拖來、立不得定的江龍伯傾斜碰到門門一關去、江龍伯立時倒跌在地。

「你這廢人敢再叫我瘋者……你又敢叫我滅你的租……」

陳清波嘴在這裏嚷、又起脚把倒在地上的江龍伯、踢了幾下、威風凜凜的大發其少爺癡氣[△]！

倒跌在地的江龍伯、啜々哭的叫着救人、喚到再受陳清波少爺以脚再踢下又再「啜喂！」一聲、叫救人的聲也就停去了。眼睛展黑白的、只在咽喉底發出苦悶的「喂々」怪聲。

「讓你到明日！明日若無備辦清楚、是沒有再讓手咧！」

看江龍伯的「喂聲漸小來、近要消滅、陳清波少爺纔想讓他延期到隔日、放聲這幾句可怕的話、馬上踏出門外、寬意茫然立在門邊驚到全身冷汗直流的自己做前就回去了。

寬意被陳清波少爺促緊要回家之時、他對江龍伯被踢辱罵的可憐情景不能放懷的縷掛在心頭、替他抱着十分不安雖欲遵命回去、但行也不得的躊躇着、於是伸頭去探々、看見倒臥在地上的江龍伯、依然默々再也不振一動……苦叫着的聲音也停止了、

寬意想要入去看一點詳細、又想起少爺要回之時已有嚴重的催促、他又做前大步的回去了恐怕少爺回

去了後若有什麼事情要叫他定能再使他發怒，這個不經世故的少年脾氣是極其歹的萬一使他發怒，他就是
不管三七、二十一、定要被他亂打的。

看到江龍伯已被他踢倒在地，似乎十分危險的樣子，他就一面怕懼江龍伯或者能致到一命嗚呼！又怕
懼若不趕快回去重遭少爺這樣的打踢！

寬意不敢反逆少爺的命令，不得不也就跟他走回。

寬意在路上行着的時候連々越了幾十回頭，停了幾回腳，顧盼江龍伯的厝，神經惟有集中着生死問題，
想要再走回看看江龍伯再能發出呻吟的聲音否？

他自責着自己的所爲……想要給這個老人家歡喜，所以才替他對頭家求情，那知反弄到這個悽慘田地
呢？他想到是自己的錯罪，自推胸部數下，喂々作自言自語的聲音他又疑着不知龍江伯是可量神去否？……
若是的話，不知能得再蘇醒與否……

寬意雖是一心煩惱，但覺得失了自由可以開步走回看點清楚，是可救不可救，又覺得自己也不能去叫
個醫生來替他診察、救治，他心猿意馬的想不得一決，真是苦死了他的愁悶！

一一一③

寬意跟着陳清波少爺回到厝看少爺沒有再回顧到他，直々入去他的房間裏，將房門關起來寬意就回頭
走到江龍伯的厝前厝後想要探々江龍伯的動靜。

江龍伯的厝四邊是以竹圍々着的、離人家的住宅總有多少的距離。在這裏的動靜若不是特別的攪亂總是不能使宅外的人覺察到的。幾分鐘前陳清波少爺在他的家中所演的凶劇、也因距離太遠所以沒有人知道未判個是非、

寬意走到竹籬外邊環了一環、覺得裏面沒有動靜、他纔再走到大門口、從那裏仔細踏進一看、從大門到厝內、一面都是菜瓜金瓜之蔓棄成蔭滿在地上其中幾樣樣仔、龍眼古樹及芭蕉繁茂着一軒倭細的厝受這樹木及竹籬掩到像鬼宅一般的陰冷悽々可怕

寬意一面苦慮江龍伯的生命、如今又再入到這陰森的宅裏好像見了鬼怪的神經作用全身起了雞母皮、他的全神經緊張着、慢々地踏到廳門口、看見廳門仍舊一扉關着這更使他着急萬分！他那抑壓不已心臟的鼓動、這時又被風吹的竹發出一種怪聲「怪々！」作響的聲音使寬意的心臟××的跳起來了。

寬意不顧一切的奮勇直行入門內伸首探、看見倒在門後的江龍伯依然倒臥着、他曾聽過人說、死人全身變冷却他張起膽量伸手去摸々江龍伯的手、覺得冰冷異常、他怕得一跳起來三步做兩步的、奔跑出來、直走回到陳清波少爺的房前、吃驚的叫了一聲、

「少……少……少爺」

這聲似乎從喉底拖出的、竟也不得達到少爺的耳朵。

「少爺！」

等到少爺無應不耐煩的寬意再下力的叫了這聲、結果也得不到動靜寬意的心裏想着、諒必是不在這裡？

他就小心的偷窺的開其門扉、伸首探々門內纔看見陳清波少爺倒在鐵眠床上安眠着。

這個少爺因爲每夜都駛自家用的自動車到丁市嫖妓飲酒、大概總要經過夜裏二三點鐘纔得回來、所以他的起床是在午前十時鐘前後、食了午飯又要二三時間的午睡。這等是他最關重的日課、若有人不曉得他這個慣行而去亂醒了他的午睡、定能被他打罵一場的。寬意想起這點可怕的事情、他又猜驚起來、緊々小心閉上房門、不敢喘息也似的輕着步便走。

他一面走、一面越頭走到庭園裏纔伸手來按着自己的胸部。

……真好運啊！這回假若叫醒了他豈不是要大受虧的嗎？

因陳清波少爺的安眠險一點寬意就觸了他的大怒、他走到花園中的涼亭坐下、他又再想起江龍伯的事來了。

江龍伯的手冷到似水呼吸停止、面向着壁邊靜々倒臥着完全沒有微動定是死的無疑。

他的子息及息婦若從烟裏回來看見、不知要如何的驚愕、不知會怎樣想……

他再想到陳清波少爺

……他這樣的少年經驗毫無、說什麼要收一回給我看看、待他醒來的時候、他就要知苦啦！……

陳清波少爺似乎有點爽快也似的、比普通更遲起床。

當日到午後四點纔醒起來、當夜依然駛自動車去到丁市偷樂、至今他未曾受過這樣事件所覺不到苦惱的。

這日的少爺、因在江龍伯的厝演過這套拳、精神上肉體上總也覺得大疲倦、又空費了那一點鐘前後的

時間、到了午睡的時間也不得睡去所以一倒落床、安々の眠到四點外鐘纔醒。

他醒過來的時候、時間已經遲了、趕緊跳起來就走到浴室去給雇女修嘴鬚、修指甲、入浴等々趕到真無閑。

他備辦好、差不多是六點鐘、他從車庫駛出自家用的自動車、將要再去T市的時候、真猜狂走來的佐藤警部補、入去車裏與他相量了幾分鐘後、他叫在擔水中的寬意到車邊吩咐。

「若人問你我你到江龍伯的厝這件事、你要說沒有……不可說錯咧……」
說後、與佐藤警部補二人微微笑着、同乘在車上向T市以快速力就走了。使寬意張着目茫然的看他們走。

那一夜的少爺比平常更遲一點、與醉茫的々々警部補回來以外、一點都沒有異常。所異常的惟有××警部補與公醫連々醉了數日。受少爺踢死的江龍伯的死亡證明書大人命令江龍伯的子息去請公醫寫、拿五塊銀爲手數料去勞煩公醫寫其死因爲腦溢血。

更有一個異常的、是聰明的寬意忽然起狂了一般的、忘掉了他同少爺去對江龍伯討租這件事、至他在那裏所看見的事情、他只能以當爲幻夢。

寬意回想到這件事、他就感覺面都紅熱起來。

他每想到這件事、總要受良心責備而起懊惱苦悶的。所以他每次回想、總要努力想打消這個印象、有時不覺再想到總想到別處去。

受這個回想打擊了心腸的寬意、再回憶自己手裏現在所拿的二封信的意思、他就厭倦無比的。他幾次

想要回避、但、二封的信已在手裏結局總想不到什麼法子

躑躅之間、一步近了一步、已經從暗路行到××警部補的宿舍前。

混在無線電奏樂中傳來的聲音是

「酒！酒再一瓶來！」

明夕是××警部補已迷醉了的嚷聲。

寬意已踏在他的門口躊躇着、抑壓着苦惱的腦髓、叫開他的門。

「什麼人？啲！」

對這樣問他的××警部補、他只得把那封信遞給他、默々不言、伏着目不敢直視、回頭就走了。

同樣的再配達了給公醫之那封信的時候、心裏已經不得再堪去陳寶富豪家報告配達了的事情隨時走回
自宅潛入被窩裏去。

寬意像是受了什麼怪物追着的樣子、猜々狂々の走入這裏想去逃避也似的、總是、纏跟着他的怪物、是已經潛伏在他的腦神經不論他怎樣的努力、總不得解除他伏在床上、沒有雜念的這時、纏在他腦底的這個怪物是更要顯然、猛烈襲擊他的。

寬意想以睡眠來掃掉這個想念、把眼睛一合起來、綿被拖來掩在頭殼頂、禁止亂調的呼吸……結局總是徒勞、頭殼雖在綿被中黑暗裏、腦神經是愈明亮起來的。

他所不要去想的事情總是依然在他的腦海裏盤旋不已、

最明顯展在他眼底的唯有陳寶富豪給警部補那一信裏所寫的文句、

——真勞煩了——薄々爲我謝你的意思。收起來吧。後事重々拜托——
寬意以這個文句來解說在現場××警部補與井上公醫的言說、

——這明々是失注意所致的……什麼有自殺的道理——

及叫壯丁着急從其屍屍收去埋葬了這等事情寬意就達到一個很明顯的結論、而感心他們的用意周到、慚愧自己對陳寶富豪所抱的空想及對他的態度的愚笨解釋

——噢！看今日頭家的態度、看他對阿達叔的自殺和非自殺那樣的關心、對屍體的埋葬又那樣的注意看這二個大人硬證了阿達叔的自殺是失注意所致的……

得到這個整然的理路……寬意就覺得有些冷靜來、他在這時發見的真理就是

……事實可以用金錢掩瞞亦是改變的。

……爲保持風評轉好不得不取良好的手段、說陳寶至今的行動、看農民似禽獸、似虫的他、像少爺踢死江龍伯那個時候、或是頭家強姦雇女那個時候、又如在他的會社去強制買收土地那個時候、少爺駛自動車去轆死了人那時候……這樣的應酬卻是沒有可疑的餘地、但、今日卻不是這樣的大事……只是一個老窮的佃人被火車轆死而已……假以照實說不過是陳寶強々迫他才使他踏到這個地步的、結果豈不是與普通的自殺無差嗎？在今日這樣的法治國、陳寶對阿達叔的迫死那有什麼關係呢？有什麼責任呢？若是說到道德問題或是在衆對他的風評、這個事件比前那幾回的亂來是不成問題的。是他年老了、對這等雜碎小問題也要用心煩悶的嗎？……

若說迫人去自殺、就要苦悶舊年在田邊的苦煉叢吊死的羅漢叔、豈不是？……

那時候受他迫去自殺是明々顯々沒有一點可以掩瞞的總是陳寶也沒有想去隱瞞、泰然自若羅漢叔的死達到他的耳朵、他比聽見一隻螞蟻的死更自然、沒有一點的改容變色、

受這騷雜的想念纏着的寬意、在眠床中翻一身過來一身過去、翻到更深、心身疲倦了……不知不覺之中纔睡下去

但、因他的掛念太深雖說睡去却不是熟睡在半眠半醒的境地、不知受了幾十回的惡夢驚醒。有時眼夢見滿身血的阿達叔在對他求寬讓有時夢見七顛八倒的阿達嬭在他的面前哭苦、更有時夢見幽靈般的江龍伯對蹲在地上對他哀訴枉死、吊在樹上、舌吐到下顎、眼睛不見得黑瞳的羅漢叔等々の場面使他流到滿身冷汗。

「寬意！寬意！」

寬意看見一個在一望無際的草埔上全面紅撥々の在旋轉着不成鬼不成人的頭殼開嘴在喚他轉向暗界而去、終而消滅了、再看二枝赤裸々的手浮在空中招呼他、漸々の向黑暗的地方飛去終又消滅了、他立時愕然驚醒起來了。

從半壁的小々一個窗上透照過來的太陽光線已經照在寬意的面上、眼睛中而越向他邊、一時覺得全房裏的漆黑、不得看出什麼影跡。

停了一刻纔看見他的母親哭在眠床頭、一手掛在他的肩胛上地叫他

「呀！阿母、幾點鐘？……」

「幾點鐘？……你今早爲什麼睡得這樣的舒服呢？八點外鐘了咧！我料想你已經是去了、一入來看、你還

在深睡着、又不知是在驚什麼發出恐怖似的聲音、流這滿身的汗……」

「八點外鐘過時間了！我昨夜太好睡呀」

寬意即時跳起來、緊夕把衫穿下。

「你豈不是有什麼異狀？身軀有什麼不好嗎？」

他的母親帶着煩惱的面容問他。寬意默々不應、假無聽着、衫穿將要完的時、他的母親看他的面容沒有清彩。

「是因阿達叔的死而使你權煩了嗎？」

「……」

寬意再假無聽着、他感覺十分的倦怠、頭殼非常的沈重。

「阿達叔實在真可憐！聽說是你對他討租迫得太嚴？……」

這句話衝擊了寬意的心大厲害、他重々嘆了一嘆向他的母親問：

「什……什麼人說的？呀？」

「很多的人說咧。文瑞也說、江西也說、明達也說……很多的人都說咧。」

寬意默着、不敢再開嘴了。他轉身的時候又受窗外的太陽光線照着面、顯出十分可怕憔悴的面孔、使她的母親更覺可慮。

「寬意！你的面爲何變到這樣色嫩呢？」

「豈有？……」

「沒有？你去照鏡看々……一個面青損々咧！」

寬意又不堪應她。他也沒有想去照鏡看、匆匆穿完了衫就要跑出去。

「寬意……你是身軀有什麼異狀是莫？……你沒有感覺那一部份艱苦嗎？」

「……」

寬意還是不應她、一步一步將要踏出去。

「寬意！」

寬意雖想要緊走、看了她這樣煩惱的樣子、再聽她喚了這聲、就不得直々跑去、默々停立着戶錠外。

「你身軀若有異狀、是不可放置咧！要緊々去請醫生看々以便服藥、」

「沒有怎樣啦……」

寬意無元氣的聲應她

「沒有怎樣……若沒有怎樣因何會變到這樣的面色……」

「……」

寬意再默着、覺得眼淚要滴下來……

「呵呵！你昨夜豈不是亂嚷一場嗎？你所嚷的是什麼？……你是受什麼驚着？……」

「不知呀……」

「你不是感着？你昨夜有踢被沒有？……你的被蓋有好勢沒有？……」

「沒有踢被……」

「你的頭部痛嗎？」

「……」

「假若艱苦今日可以免去。我去對頭家說好嗎？」

寬意老早就有不要去的打算、惟有不得說出嘴、被他的母親說這句他就也作那應諾的表示、退過來立在戶院。在他的心裏、不只是今日、若可以、他是想永久不要再去踏入陳寶的厝的、

但、他想起家內的生計、非本身這雙手去那裏賺那每月八塊銀來幫助是不得維持的爲了這個愈使他苦惱了。從眼裏湧出的眼淚、從鼻邊流到嘴角、滴落去了。看這樣子、他的母親伸手拉住寬意的手、牽到房間裏、使他坐下、

「寬意！寬意！你不可去啦！再倒着、我去叫個醫生來。你這個孩子……艱苦也不要說、偏々說沒有々々……你是那裏艱苦、要緊々對我說咧。」

「實在沒有艱苦……阿母實在沒有艱苦啦！你不必憂愁、也不可去叫醫生來！」

「你這個孩子真變常了……至今若艱苦總要去請醫生來看……今日面色這樣々你還要講沒有艱苦……你真變常了！」

她也就以手去拭他頰上的眼淚。

「阿母……我實在說來、只是頭部的可痛而已。」

「頭部痛！是咯！一定是感着風的。你若不肯叫醫生來、我煎一碗薑母茶給你服好嗎？……亦是請醫生來看更妥當？……」

她想起生計的困難、她就想若是感着而已就可以用薑母茶使他服之、可免請醫生的六角銀。

在寬意、他因不堪率直吐露他的心情、他也就想以這個機會一時瞞過去、又想在家一日想之將來的出路、他隨嘴就應一句

「好啦……」

他即時再潛入綿被裏

二八

再潛入綿被裏的寬意雖想在這裏計畫將來的方針、但錯亂不堪的頭腦、維極盡努力欲使之雜會打消還是不得統一他消靜的神經、雖決心不肯再入陳寶富豪之處但一想到自己的前途、後顧茫。不知從何而進。

尤其是阿達叔的面影及他們的慘死狀況使他不得打消。他又恐怕陳寶用人來叫他、幾次因母親的腳步聲誤會是陳寶店內的人來使他吃了跳。

「明徹仔來坐。寬意說頭痛、今日無去、他在房中請人去坐啦！」

寬意忽聽見母親這句話、一時再鼓動了心臟是在恐怕明徹來講起阿達叔慘死這件事的然而沈鬱的明徹一入來床邊好像很同情看他的樣子問他。

「現在精神怎樣？」

這一句話、寬意的緊張也纔被鬆了。

「來坐……」

寬意請他坐下、自己也起來坐着、看他這樣沈靜着、覺得要將自己的心情告訴他、與他相量自己的行路。寬意先問說

「阿達孀與她的兒子如何呢？」

「他們真的過於悲傷、實在令人不忍默視。連夕哭到今早的樣子、一點元氣都沒有、我今早去替他煮些粥纔來的。」

寬意聽他這麼說覺得一陣心酸、似乎要滴下眼淚的。

「我實在對她真無面目……」

「你？……你有什麼責任？……」

「是的。說無雖也可以的總是、我覺得我的責任確實是難免的。阿達叔的決意自殺事實是因為我對他的追討債務！」

寬意說了後、不覺頷々戾下、双手抱着頭、疾心痛首的、自責着自己而不該！明徹安慰他說：

「假若你不去對阿達叔追討陳仔寶一定也是會使別個人去追迫他、或者能追迫更不可堪的、也未可知；你對這點不必去想牠、這樣的大問題、不是你一個人可以去阻止的。」

寬意再沉思了一刻、明徹的話說得不差、但是他的責任心一點都不得放鬆他的！」

「以外還有什麼方法可以去阻止呢？」

寬意似乎對自己這樣的口氣問明徹、也覺得自己說的口氣有着含着調刺對明徹有點不好意思也似的双手

須要堅決萬衆一心的團結，以我們的勇敢、見義而爲的自信與他對抗，△必有重見天日的一天！

他對明徹這樣的雄辯寬意覺得是在少年時候對他的母親所聽過的架空的故事，一時陷入茫然的狀態，像離了這個現實的世間，在天界遊玩的樣子。至到明徹要回去，對他辭行的時候他纔再回到現實，總是……明徹的話在他是全沒有現實的感覺！

明徹走後，寬意再倚在床上，以他稍安靜的頭腦檢討一件一件的現實一段一段的想像下去。這時忽然覺得有一物件在窗外搖動反射了一閃光，照到房裏一瞬間的光亮，恰好這時，寬意腦裏也有點光明閃過，他双手打雙股。

……是的！我要一點勇氣……我可以取這條進路……

他是回想到少年時讀過的米國一個大富翁的出世譚。

……我到大都市去罷！那裏纔有活動的餘地成功的機會待[△]在待著我呢，我到那裏去拚命努力罷！我若得造成 百分之[△]的財富，回來臺灣各地建設工場、建設慈善事業、貧民們一時就可以消滅、也就可免踏到與陳仔寶抵抗那樣的危險。這纔是十分妥當的辦法、是！我是將要成個立志傳中的人物咯？……

斯夜對很高興的寬意聽了他將要立志的話，明徹也表示十分的贊意明徹因日夕受工作束縛在田中裏，未能得一此經濟學或一般社會普遍的知識，在一個人發財裏面、有幾萬個人的窮迫、及爲發財而無恐不作等情、他全然不曉得爲的是什麼？他纔拍手歡呼、對寬意約束要以十二分的力助他。

三〇

寬意自立了志、對明徹告訴他的決心、而受他推獎及約束要援助他這將好像見了明星一般的勇躍。他像感覺光明一時遍照了他的鄉村一般的、農民們的窮迫時被他打消了一般的歡喜自見了阿達叔的慘死鬱在心上的憂愁、受頭家去討租所經驗的痛心、一時雨過天晴了他跳々躍々、喜色滿面、忘卻了頭痛、跳起來就從箱底取出一冊便箋及一枝的鉛筆、寫一張的信給在東京留學的同窓鄉友李克常。這時他想李克常是可以爲他引導的唯一的導星。李克常是他的同窓友中最着實勉勵的青年。他在庄裏的風評頗好。除去他在師範三年之時、憤慨教師蔑視×××、與同級朋友相謀、喚起罷學要求當教諭的辭職以致被退學以外、他至今是未曾受過庄衆指斥或是給庄衆惡感的。他在東京苦學一年餘就合格專檢、舊年春已入物理學校的夜間部的一個秀才。

克常兄；

慶祝你的努力及進步你寄來幾張信、勸我上京苦學、我因受了迷夢捉住、躊躇至今。自昨日再見了阿達叔的鐵道自殺、一件事使我從迷夢醒了。陳寶是個極無天良的人物、待我們比禽獸更賤、只曉得守錢全無人道、我慚愧我至今對他的信賴。明徹君等、計畫要×××××因阿達叔的死、得庄衆頗大的共鳴。

我因很明白陳寶與×××的密接關係、恐令鬧到大事、十分煩惱、但庄民的決心似有點不可遷延的樣子。

我已有點決心、想要往東京去苦學、粉骨碎身、期望穿錦衣歸鄉、來救農民們。明徹已也有表示十分的贊意[△]。我現在抱着這個理想心裏十分歡喜。我想越早出發是越好的。希望你替我立個案。我自被陳賣家所雇以來、每月貯蓄一塊銀、現在已有五十外塊銀、不知夠做路費否？希望速々回音是荷……

寬意寫了、再清書一張、連々讀了幾遍、好像作了一篇極滿意的名文一般的興奮、立起來要封的時忽從母親爲他所煎的姜母茶捧[△]倒、他也不管、信封了就走到郵便局去投入郵便筒裏、表示很滿足的樣子

他順路再走去前日他在那裏苦悶的庄北神社石階上。蒼々の天、青綠々の樹木、清靜的境裏、鳥虫們的奏樂、花的香……總是布置得很快適。

這是與前日在寬意的感覺是天地般的變化。像昨日那樣的憂愁、恐怖的心、已經像這個蒼天般的掃清了黑雲、一點却沒有污點。(完)

——《台灣新民報》(一九三五年四月二日至五月二日；昭和十年)

註①

1. 於《台灣新民報》刊登時有許多節號編錯之處，而且刊出之序號亦有誤。例如節號缺第八節，但第七節刊載於四月九日、十日，第九節刊載於四月十一日，應是序號編錯。手稿資料中有謄抄稿，題目爲「佃農的死」，篇末註明：「台灣新民報，昭和十年，四月二日至五月二日。」亦有同樣的節號錯誤。本篇節號缺第三、八、十一、十二、十三、十五、十七、二〇、二二、二三、二四、二五、二六、二七。而刊出之序號，四月二日應是(一)、四月三日應是(二)，但皆未標明。四月五日應是(三)，《台灣新民報》刊登時誤植爲(二)，以下刊出之序號(三)(四)；等皆延續此錯誤，並且有重複序號者，例如：四月九日刊出序號(五)，四月十日重複刊出序號(五)，四月二十八刊出序號(四)，五月一日重複刊出序號(四)。除此外，分段處與句讀亦有誤漏之處，例如分段處，段落首行未空二格；又例如，第一節

第一段末：「往北走了」，漏標句號等。

2. 手稿〈貧農的變死〉與〈死〉內容幾乎相同，但前者主要是以台灣話文書寫，〈全集〉列為附錄。〈死〉內容中亦有少許台灣話文，例如：賤（承租或租借）、知頭（鋤頭）、憂著面目闕越看傍邊（愁著臉眼睛看旁邊）、猜狂（着狂）、備便（準備好）、厝（房屋）、猜驚（驚嚇、害怕）、相量（商量）等。

註② 四月五日刊出之文末，「一定要得到是橫是直的」，以下遺漏，無法還原。

註③ 〈台灣新民報〉四月十三日刊登時，節號位置誤排於前一段末。

附錄：

貧農的變死^①

一

雖然是再受了頭家嚴重的命令出來到戶碇外，寬意全然沒有勇氣可再去催促阿達叔。他在頭殼中想起阿達叔家中的窮狀，一步／＼在與阿達叔的厝對反的路上走向北方去。

三月的天眞晴光，路邊的樹木盡發出新芽，除外幾區收穫未久的甘蔗畑，一面盡是青々青綠々の醒目光景。

從道中間發出的虫聲鳥聲响得眞亮，像是在讚美春天的快活。

在這宇宙萬物盡呈出活氣的三月早晨，獨一個青年寬意陰々鬱々低着頭默默々在大路上走向北方去：這確實是與春天早晨全無調和的情景。

……敢勞貧窮無……

在学校中常由先生口裡聽到的這句名言，對阿達叔像是例外的，似乎全然不可通用……

寬意一路行來傾頭凝想，結局他愈想是愈不得了解的。

寬意的頭殼中被每天受到頭家命令去催促小作料所看到的，像貧農阿達叔們的家中慘狀所充滿着。這群窮民的淒慘狀況時時不絕地纏着他的頭腦，現到他的目矚前，使他困苦。

老實！阿達叔的勞働可講是達到極步的。受頭家的命令天々往訪的寬意，也是未曾看過他在休息的。阿達叔在田中有閒暇的時候，手中是未曾放落稻草的，他無暇無日守着他的副業——編草包的。

這樣的拖磨不止是他一個人，連他的老嫗及二個幼少的罔仔也是總動員在這副業裡。

他與寬意講話的時間，他嘴講手依然是在振動着，明々他及他的家族是不得更加多少勞働的，他的勞働已經是達到極步——

自年頭到年尾，天々は這樣拖磨，他們依然不得脫出這樣淒慘、這樣窮々迫々。

從壁土落下所開的穴，冷風吹破糊在其穴上的新聞無時停地吹到「卑里拍々」。

是建在無遮無阻的田中央的孤軒厝，襲擊她的風更是厲害的。

自年頭至年尾，天々所食是無米的蕃薯簽飯，罕有的監免便講是有点奢侈了。

這樣的他們從何去得到十分的營養呢!?

一身所穿是破又補幾十重的衫褲，青黑色而消瘦的營養不良的身軀：這等與其通風過着的破厝，像是人類世界最大淒慘的標本。

對這樣淒慘的阿達叔，寬意受頭家的命令天々要去催討其已經沒有返却能力的小作料，這確實是純情的寬意，有良心的寬意背不得起的重荷。

這個早晨的寬意就是因為他的忍耐已經達到極步，一點都不得再耐着，所以纔反離了頭家的命令走向與阿達叔的厝對反的路來。

他走到厝外的神社內，走上石階就坐在其奢華的，發出白光的頂高層的石階上。

聳在他后面的淡紅銅的神社厝頂，以精選白石造成的，他所坐下的幾十層白石階，映着朝日發出光輝。照顯得真齊整的庭園，滿開的花草，青々綠々十光五色。

這樣醒目的光景與從神社后龍眼林中响來的小鳥鳴聲！

平常時真歡喜這樣景緻的寬意，今日却不感到半點興趣。

平常時他所誇感他的頭家的豪富（這神社也是他寄附的）今日因為提起這樣的奢華來比較他所執念的窮々迫々、淒々慘々の阿達叔們，誇感都變了悲傷：

他低着頭想到頭痛。

……這豈不是我的迷夢……

寬意時常想以這等事實當屬眠夢，去打消這個握他不放的印象。但是，他親目所看的件々現實，刻在他的腦底極深，使他一點都不得去磨滅。時々要顯現到寬意的目矧前，使他困惑極了。

寬意的頭家姓陳名寶。

他是全台灣十指在內的富豪。他又是台灣總督府的評議會員。

他所有的土地約有一千甲，他又是十幾個會社的社長。

他這麼廣闊的土地大部分是在領台時當世人的紛亂中去插牌搜集的。

屬在他的本居地S庄[△]內的只是一小部分，十分之八九是屬在別庄，連々相接到幾郡下。S庄周圍的A庄[△]C庄[△]P庄[△]G庄[△]M庄[△]Y庄[△]等々[△]內的土地，大部分都還是他所有的。

這樣跨在幾郡下的大土地所有，單以一個專任收租的當然是收不來。所以，在S庄[△]及附近幾庄[△]纔叫寬意（寬意是受他雇去當雜差的）去代收。

寬意自當這位富豪的雜差，已經過了五年久，今年二十歲，算起來是自十六歲就來的。

早年的寬意對這類窮人的慘狀是不會提來和陳寶富豪這樣闊綽相比較過。

那時候，他的單純頭腦只會誇感本身的頭家的闊綽富貴，賤視窮民。

雖有時亦生起同情心，結局總是被他的優越觀念打消去，以前他常以自己是陳寶富豪的雇人這件事為光榮的。

早年這樣的心理狀態在現在的寬意已經不復存在了。這是受到凄慘窮人的末路所影響。

……舊年在田邊苦煉樹叢吊死的羅漢叔，想起來是自己親目所看最初的犧牲，他是受我的追迫小作料，追迫到難堪纔去自盡的最初的窮農民。

是！我的心理狀態已有了變動，我不以當富豪雜差為光榮，而把這慘不忍視的窮人來比較闊綽富貴的頭家，是自這時就暗中陪養起來的呀！……

回想這四年間的經驗，寬意明々白々發見了這樣窮民的增加及慘狀的加倍沉重。

在其反面，他又發見了頭家厝內的豪奢加了幾十倍的重大事實。

這般窮民的小作料不易收，使寬意總要多行幾番，所以寬意對這等窮民是更有接近的機會。

他們的勞働及生活狀態，寬意却是更詳細地觀察到，他們大多數都是真拖磨又真節儉的。想到不得了解的寬意，竟要懷疑起這等窮民的潔白啦！

……他們豈不是賭博輸去？或是嫖妓亂費去？……

三二

想東想西，想到像要發狂的寬意，忽抬起頭看見太陽已經起得太高了。

……太遲了……

一面念着阿達叔們的慘狀，不忍再去催迫，一面又恐回去要再受頭家的責罵，他雖然即時立起，他的樣子是真厭倦的。

他向天衝出兩手，吐一口大氣，纔慢々行下石階下去。

……在這裏費了的時間是受頭家命令要去對阿達叔通達最后命令的，不是可以讓我在這裏替窮農們傷心而自由有費的。

傳達命令應費的時間已經過去好久了。

傳達頭家的命令給阿達叔，應當是不上十點鐘，我在這裏費的想不只二點鐘了。

回到頭家面前我要怎樣報告好呢？……

寬意雖然不忍再去催迫阿達叔走來這裏逃避的，但是要回去，想無什麼妥當的話可以報告頭家，他就

覺得困惑懊悔了。

對貧農阿達叔[△]的窮因想到錯雜無序的頭腦，又要加上這點的煩惱，使寬意心意更亂了。

……騙頭家講阿達叔不在厝內……

寬意想到這點，又感覺着費了時間又復太久。

若這樣對頭家報告，頭家一定會再問「不在可以即時回來，然後再去。因何要去白白費了這半日？」眼前的經驗，要受頭家這樣訊問是不可疑的事。

不會講過虛詞的寬意，想起若受頭家這樣訊問，就全然不曉得要怎樣應答好。

……若不得講給頭家相信，若不得十分安全去掩飾，若被頭家看破，再受頭家在面前以「撒謊鬼！」責罵，我要如何應付才好呢？我的信用豈不是一時要失去了呢？

想來想去，想無妥當的話好去對頭家講的時，寬意竟不覺冷汗滋出額頭。

想起淒慘的現實起了憂鬱的寬意，再想起幾分鐘后要對頭家撒謊，又感覺所要講這套假造的話恐不得使頭家相信，寬意分外恐懼起來。

想是講這樣好，或是講那樣好而慌了心的寬意，忽然看着家々戶々の門口有多數人聚集着，像在議論什麼事件似的，人々都真興奮。

看了這群人在議論，寬意又要神經過敏去想這群人是在議論關於他的事，他又再加添一項的煩惱，心臟敲得酸又痛。[△]

再看頭家的住宅已經現到眼前，要講的話還是想無一句妥當，寬意狼狽極了。

……因爲阿達叔不在厝內，去田裡尋他……

寬意又想若受頭家再問的時這樣答應，又恐頭家若向來知道阿達叔是空到別處去的，講找不到是不得使頭家相信，若講找到，阿達叔的回復要怎樣去捏造呢？……

四

頭家的厝一步／＼迫近到了，寬意還是想不到一句話好講。

家々戶々の門口，人的聚集像更多來了。

……豈不是頭家已經明白了我不去訪阿達叔，叫人出來找我的嗎？這些人像真注意我行動來……寬意的錯雜頭腦竟要使他亂想到這點。

總是，他這樣的想像也不是全無根據的。

……近來我對佃人有臭客氣，頭家怎樣嚴重的命令，我常是不照他的口氣對佃人講。

頭家對這桌已經有些明白的……

寬意想起來，感覺件々都是頭家不信用他，用心監視他的証據啦。

他想起昨日的經驗，錯寬了自己的予想是既定的事實，覺得面上熱紅起來。

……昨日頭家對我講「你去要對他講得清楚，我再寬限他三日間，這三日間若無完納一定要照契約履行，因爲想他是同鄉的可憐人我纔這樣寬讓了再寬讓的。對別庄的人已經一個月前全部解決了。求々乞々

想要來贖五分一甲的人是真多。若不趕快來完納清楚，我是不得再容情的？」這樣嚴重的口氣叫我去催促阿達叔，又叫我一定要得到正確的回答……

……受這嚴重的命令，我去對阿達叔講主人所講的話，講未上一半，阿達叔聽着照契約履行（照契約履行就是要起佃的意思）忽滴落眼淚。那個時候，雖有頭家那麼嚴重的命令，我是再也沒有再講下去的氣力，勿論也不能再開嘴去對他確實的回答就走出阿達叔的家來。

……我因不慣於講虛詞，走回到頭家的面前，受他一問，我就照經過的情形講給頭家聽。

我在復述的時候替阿達叔悲傷的心還未消釋，自覺語聲帶有點悲咽，但是，頭家不是我的哭聲可以衝動情感的，聽我不守他的命令，他就氣得要逆上一般的咬牙切齒……

……他大聲對我嚷「不中用！明天再去！我對你丁寧了幾十番，你又這樣白々回來。」

明天若沒有得到確實的回答來，是不行的，你這不中用的東西！我講的話全不致意，受佃人一滴的眼淚就要感動到不知天地！……

……在昨日這段話，他已經對我表示十二分的不信用了。今早看我出來了后，再用人來偵探我的去向，像這樣壓人們的聚集議論，打算是頭家對我的逃避大々地發了皮氣被壓裡的人知道的……

……我還有什麼講虛詞的余地呢？從何處去瞞騙頭家呢？我只有收拾行裝回家去同父兄掘田土的好？

……

想到這處，寬意鬚髻像主人在他的面前大聲嚷「害虫！畜生！滾出去！我一刻都不許你在我這裏！」似的，他覺得面紅，也有臭氣憤。

「富戶人怎這樣殘忍？」他替阿達叔不平在心裡。

寬意已行到頭家的厝前了。

三層的洋樓巍然聳在他的面前，好像以頭家的威嚴瞋着他的。

寬意在門口停立，一面想要緊入去，一面又不愿入去，覺得頭腦混亂到無余地。

這時從洋樓中曳々地響出皮拖聲音，明々は寬意日常聽慣的，他的頭家的脚步聲。

因恐懼頭家出來發見他在這裡躊躇就更不好意思，寬意感覺到一刻都不得再停在那裏了。

他促急地大步走入厝內去。

但是，要對頭家怎樣報告，或是對頭家的質問要怎樣應答，寬意都失去了主意。

寬意手握一把汗，咬死了他的戰悚神經，低着頭踏入为一步的時，他喻々眼兒看見頭家無有生氣的面色，意外地現着憂愁面容。

——斷了氣嗎？——

這句平順的詞話又是寬意所料不到的。

五

——噢！——

看見頭家意外的面容，又聽着頭家料不到的質問，寬意吃了二驚不曉得怎樣應答好。

寬意每次受到頭家的命令出外去，若是時間費了過久，常是受到氣忿忿的頭家以「死了嗎？」的責罵的。

這回頭家那樣憂愁面容與那麼時候不同，所講的「氣斷了嗎？」也不是責罵的口氣。恐々懼々而帶有疑惑的寬意，傾頭擬想不知要怎樣去應答之時，頭家又再問

——是轆着什麼地方？——

這話依然是真無元氣的聲音。

這樣打擊了頭家的感情，一定不是普通事。

……不知是什麼人受什麼東西轆着什麼所在？……

咬死戰慄的神經，期待見頭家的面就要受他以猛惡面容瞋着，受他氣忿忿毒罵的寬意，反看見這樣的狀況，茫然視着頭家的面，不得應出半句。

他只在心裏亂々想像一場了。

這時，頭家有頭家的煩惱，所以，雖然遇着寬意這樣的茫然，也一点不致疑，倒想爲寬意是看了被轆死人的慘狀，起了驚恐的。

所以，他徹頭徹尾以溫順的調子再問：

——你要回來的時收好了呢？——

這句忽然擊醒了寬意的精神。

寬意察知了事件的內容了。

寬意的眼淚滴下來。

……昨日我看阿達叔流了眼淚，不忍再問，將要走開之時，所聽見的阿達叔的一句獨語「死去是多麼快活呢！」：這明々は表示他的決意。他是自昨日就決意了的！……

寬意想起這點，昨日去訪阿達叔的印象忽然很明顯地再現到他的目矚前。

……他獨語之后，放落手裏的稻草，完全失了希望一般的面色蒼白，呀！他明々自這時就決意了的。我真無神經了，因何不想到這點！……

寬意低下了頭，眼淚無停的流，鼻穴也覺得閉塞起來。

在頭家一面，他連問了幾句，雖然總不得到寬意半句的應答，因為他自早就明白了寬意的心情，再看寬意滴下了眼淚，低下了頭，就解為寬意驚得不能說話，以這個表示應了答。

他現出安心了的面容，默々走入他的房內。

在寬意一面，他由頭家那幾句的質問，推察了阿達叔的受難已經是無半點可疑的余地，雖然因此他免去了捏造虛詞，來回復對頭家的困難，但是他也完全沒有歡喜這回遇然好運的心意。

他看頭家走入房裏，即時就向阿達叔的厝那方面走去。

寬意在路上走的時，第一関心的就是阿達叔的受傷不知是否致命。

他脚在走路，心裡又回想到頭家的態度去。

……阿達叔的遭難因何也要使頭家那樣的憂愁呢？他昨日纔罵我看見阿達叔流了幾滴眼淚就感動到不知天地，他豈不是也有人的感情？

但是，他要走入房去的時候，怎會便像消盡了憂愁，現出很安心了般的面容，真是十分鎮靜的款式。或者，他那樣的態度不是傷感阿達叔的遭難，是有什麼別項事故使他煩的？……

六

寬意的憶測一時想到頭家的憂愁無一定是關連阿達叔身上收未完的小作料，忽而他又感覺自己這種以小人之心度君子的憶測的罪惡。

所以他又隨時從他頭腦裏打消了這對頭家的疑念。寬意雖然十二分不相信頭家也有人的感情，但是，他也不敢斷定頭家對阿達叔的遭遇全無同情，而且也只在利己的見地。

……設使頭家對阿達叔的遭難有十分同情來講，頭家的罪仍也是不得償還的。

阿達叔的遭難若是已定的事實，他明夕是有覺悟的自殺，決不是什麼錯誤過失，照昨日所看的阿達叔的表情及口氣，這是一点都不容懷疑的。若想到他現在的立場，實在，誰也難再去維持老命的……

想起來，寬意對陳寶富豪的痛恨愈深，也感覺自己的責任不淺。

……阿達叔會去想死，明明是因我去催迫他的。我會去催迫他，總是受了頭家強迫……

寬意愈深想，竟要討厭自己就的這種職務起來（向來他常以自誇的當富豪雜差），又感到了自己像是犯了殺人罪或殺人共犯一般的不安。

……舊年中在田邊苦煉樹叢吊死的羅漢叔也是因為我的追迫去太山，舊年末被少爺打了負傷致死的江

龍伯又是我引導少爺去的，阿達叔的生死雖然未可以斷言，結局亦是受我追迫所致的。

噫！我的罪太深了。不知要再害死幾多人呢！……

……呀！這種職務我一日都不得再忍耐去。苦楚！傷心！我須趕緊向別途去尋覓生計呀！……

寬意想到完全失去感覺一般。

他茫然自失，眼睛睛像沒有看見東西，耳孔又沒有聽見聲音。當他彎一彎進入狹小巷路之時，遇了由對面疾走來的自轉車，鈴聲响得像是雷响，寬意竟也聽不見，也不曉得避開到被自轉車碰倒在地纔覺醒起來。

這時候纔覺得要向阿達叔的厝，他已經走過頭了，應該他是要在前一條巷轉彎的。他用手去摸々受自轉車擦到脫皮的脚脰，看見傍人向着他大笑，真覺得慚愧，越過頭忍着痛，脚步一拐一拐，走回去轉入前條巷。

七

行到阿達叔的厝邊，寬意已經忘却了他碰倒自轉車所擦的傷，行路也就照原了。

看到阿達的厝，寬意的心臟就躍動起來。

隔幾區田，孤立在中田中的阿達叔的破厝，像是棄掉在荒野中的鳥巢一般，完全看不見有臭生命氣像，使人覺得寂寞。

寬意跳過幾區田，趕緊走入去探々厝內：

編未完的草包這裏一領那裏一領雜亂地放在廳內，探視了房裡廚下也不看到一個人影。

阿達叔的厝內在農閑期是未嘗這樣蕭靜過的。在寬意來時，所常見的都是四個老人团仔編草包編到草勢々地叫。雖不是鬧熱的聲音，也不是像現在這樣死靜靜的。那時候還有活氣的騷亂草聲。

放在廳中的編未完的草包，一個明々は昨日阿達叔放下的：像是照昨日他放下的位置一点沒有移動。這幾領編未完的草包以外，廳角還有疊一堆已編完了的和幾捆稻草，排在廳內有以樹技釘起來的極粗笨的編草包的器具。這是他們唯一的生產器具！

以外還有一塊三脚卓，棹頂排着幾尊佛像和一個毀了一角的土製香爐，一支壁虎燈火，占據在棹前面有二個破飯碗，二個裂隙的小砵和幾双箸。

房內只有一台傾々倒々的竹眠床上安置一領踴踴了的破被單。眠床邊一個石油箱疊了一堆的破衣裳以外，還是不得看出什麼。

……打算還在現場咧……

從厝中找不到一個人影的寬意，即時走出門來向南方眺望，纔看見離厝約有二百步南方的田畔有很多的人在辻來走去。

這條稍大的田畔向南走了一里，是與丁製糖會社的原料線成辻的所在。

……由這裏去……

寬意再覺得心臟的鼓動愈烈，他已經是沒有傍視的心情，眼睛直注着阿達叔被轆的所在，雜入人群之

中在田畔上走着。

寬意在走的時候，他的神經全集中在阿達叔身上，過了幾個親友，像遇着不相識的人一般，有人和他相動問，他也像是不聽見似的只管走。

他很拼命的走，趕不得早一刻到當場去看阿達叔的生命救不可救，雖然他對醫學上的常識一點都沒有，他總不管，只是切望阿達叔再多活一刻等待他趕到當場。

走走到喘不過氣來，他纔把脚步放慢一點，這時他又起了空想、期待着有什麼仙人在他趕到當場以前賜給他一服回魂丹。

……不管阿達叔的肉體受火車轆到怎樣碎，只以一粒仙丹使他吞下，他即時就可以回魂來……寬意因他的頭腦紛亂了，一時髣髴像什麼仙人已經拿着有靈効的仙丹在路上等他，他就窮盡目力，一路上東看西望，總不能發見着一個像仙人的樣子，他又想神通的仙人是不必現出身來，無一定已經把仙丹置在他的懷中，便就伸出手去摸他的衫袋，褲袋，想去尋出一服吞下可以即時回魂的仙丹。

八

走到將近現場，寬意的脚的速力就再慢一點來，一面極力想去抑壓他鼓動的心臟。

集在當場約有三四十人，個々都現出很悲傷的面容，有的蹲着，有的立着，有的來回地走着。

附近火車路，到處都染着血。在鉄軌的傍邊，蓋着一領草包倒在地上的，明々是阿達叔的身屍。

寬意這時候看見人面，總感覺到人們是含着敵意在瞋他，個々人都在責備他，抱恨他。他愈想，愈把自己痛恨起來，且也怕看見別人的面孔。

看到這現場的慘狀，在路上所幻想的什麼仙丹回魂藥，他已沒有再去思想的余地了。

他兩手插在褲袋裡，低着頭，眼注視着地面，靜々地立着像失了神去一般，沒有一點搖動。

在草包的傍邊，一個穿一身襤褸的老婆坐在地上，雙手抱住頭，伏在兩膝上，像是在哭却哭不出聲來。

這個老婆的身邊，二個營養不良的囚仔也坐在地上哭，雖在哭却沒有一般人哭的聲調。

——噢——

突然感覺有人搖他肩胛的寬意，回過頭去一看，是與他在公學校同窗的明徹君悄然立在他的身后。

明徹與寬意雖然是同年輩的，因為明徹自畢業了公學校後進去農林學校未上一年就失了他的父親，即時退學回來掌管家事，勞煩極了，所以他比較自畢業就去當富豪雜差的寬意，從面貌看來可像是差得七八歲的光景。

他搖了寬意的肩頭之后，就講起關於阿達叔的遭難最明確的考察。他講

——我在那裏除草的時：大概是八點外鐘……忽聽見火車異常的笛聲：趕緊走來一看，火車停在那裏，阿達叔的身屍被車轆斷做三塊：真是不忍目視的慘樣子。

一個頭殼滾去到那裏，兩腳從腹部轆斷拋在這裏，你看：手指被車輪轆到這樣的碎，一手是從這地方

(他指他本身的手掌中央) 轆斷。

腸及肚統流出來：你看：，這肉碎：這腸碎：！看來真會傷心！——

在明徹講給寬意聽的時，傍邊的人也一齊圍攏來，明徹的手一指人々の眼睛就跟他的手，所指的地方移動着。

大家聽來都現着憂愁悲慘的面容，有人切齒，也有人吐氣。

九

寬意聽了明徹的說明，便再迴轉頭去看蓋着阿達叔的草包。

阿達叔的散亂身屍，雖然掩蓋在草包底下不得看見，以明徹簡潔的說明，又看見糊在軌道上的鮮血及肉碎，浸入土裡的血痕，其慘狀就顯然現出在寬意的眼前了。

寬意愈想愈悲傷，感覺得心頭像要閉塞起來一般，呼吸有点困難。

——在我想，阿達叔是在這裡等待火車來，趕緊爬來臥在這軌道上的。

若不是，一定不得轉到這樣整齊。

他今早雖曾對我講起厭世的話，但是態度還很從容。

我完全沒有想到他會有這樣的決心。

那時我勸他不可煩惱，我給他說明艱苦是大家相同的事，這世界不久一定会變更，我們不会長久艱苦下去的。他傾着頭，像在思索什麼，再無講半句話，走向他的田裡去。我看他去了，也才去我的田裡除草的——。

明徹又向寬意說明阿達叔死前的行動。

在明徹這幾句雖沒有講起，在寬意也能夠推察出，明徹明々以阿達叔的變死是因為受到陳富豪的催迫小作料，迫到難堪纔走來自殺的意思。

……迫々！催々！……

寬意想起這句話即時悚然起來了。

——明々如我所料——我的責任？啊！……

對阿達叔催迫，使他跳落到這慘死的當事者，陳寶富豪的脚手……呀！我的責任！——

寬意強自忍住的眼淚，到這時候也竟流了下來。

——医生及大人來了。——

寬意聽到傍人的報告，回頭一看，在他的后面帶着微笑從自動車下來的，是當庄的井上公医及警察分室的主任、佐藤警部補。還有一個隨在后面的，是林巡查。

——在那裡？死人？——

在那辺用草包蓋着，傍辺的人用手指點。

從自動車跳下來的佐藤警部補，由人群中行到草包邊，用劍鞘挑開草包，看見阿達叔的頭殼置在兩腿的中央，胸膈放在脚下，竟起了大笑——

——哈哈！排疊得真奇巧！頭殼走來在卵胞的下面，打算真好滋味咯！哈！哈！——再大笑着。

蓋起來！他命令着傍辺的人，回過頭去像要向井上公医說話，這時坐在地上，悲痛到要發狂的阿達叔

的老阿婆，突然迅速地爬到草包邊，滾倒在地上；

——嘍！你死：這：慘樣：這：……嘍嘍：放我：嘍：嘍……

用那無明無亮已經嘎了去聲音亂哭起來，剛纔哭到不能哭的二個囡仔也再發出咽喉底枯未盡的聲。

將要開嘴的佐藤警部補，忽聽着這樣騷亂的哭喊，很感到不快，用着滿含有怒意語調，對着老婆囡仔

大聲說

——默去，靜默去！不許哭！

畜生！這是他無注意應當的刑罰啦！——

無意中！忽然聽着佐藤警部補這樣一喝，又看見他那樣含怒的面容，阿達嬌吃了一驚，即時靜默去，只在咽喉底噫噫地叫，不敢再哭出一聲來。

二個囡仔也驚到立起來要走，但是看見沒有要打他樣子，纔驚々怯々，去蹲在他們母親的身后，不敢再哭了。

看這光景，佐藤警部補又再大笑起來，

哈哈！驚死又要哭！

十一

看佐藤警部補這樣愉悅，井上公医也就跟他笑着，隨後就去檢驗阿達叔的屍身。

——腳手這樣的細小！真是貧弱的人呀！看起來，怕一日食無一頓飯，營養纔這樣不良，這樣人還是死了乾淨，既不能做工，活着空穢地面。

他們這樣毫無人情的笑謔，使圍着的群眾個個都不平起來，但是，雖在不平，全群眾中、沒有一個敢去責備他們，讓他們自說自笑，過了一刻，佐藤警部補纔問井上公医。

——井上君！你看這是故意的自殺或是失注意以致的？

——哈哈！佐藤君！看來明々是失注意的。么虫都也愛命，雖然他與么虫是無大差異的人，想是沒有自殺的道理！因為自殺也要一莫勇氣，這勇氣這人一定不會有的——明々是失注意的——

公医完全不去查察身屍及參酌被轢當時的實況，簡々單々就這樣地斷定着，使明徹咬牙切齒地憤慨。明徹憤慨之餘，幾次想向他們責問，但一經反省，他便失盡了勇氣，他想，對這些無人道的理論，只有自討沒趣而已，就走去立在衆人的后面。寬意聽着公医對這事件的斷定，搖動不絕的，鼓々鼓動々的心臟一時鎮靜下去。因為他直覺到阿達叔的死，已不是他的責任，是阿達叔自己的過失。

但他再回想昨日所看見阿達叔的態度，又參酌早刻所聽明徹的簡單的說明及實証，再考察前所看的阿達叔的身屍，他的責任感依然不得放下。心裡又自煩悶起來。

若照公医的斷定，雖避免了責任。無奈現實很明顯地証明阿達叔的自殺，傍刃的人，一庄的百姓也是一樣認是自殺。

寬意雖然想以公医的話去自慰他的苦惱，他的理智却教他不得相信公医。

……明徹的話是講得真徹理的。

偶然豈會得轍到這樣整齊，……

——是！失注意！他也不好？機□□□不好！這二隻害虫失了注意，不知要累到製糖会社損失幾多呢！又勞動我們多一次忙！——

佐藤警部補這樣宣言着，便算盡了他的職務，隨邀同井上公医將要乘上自動車去的時，再向阿達燻大聲地說，

——緊收收去埋葬！緊收去！應該是要罰金咧！這回恩典你。將來須要注意咧！——

說后便跨乘上自動車，

「都々々」捲起一股塵埃，自動走向來的路去。

人々像是受了這車怪物驚了肢體，鬚髻像忘却了當場的慘案，注視着漸遠漸小去的自動車。

十二

不知是何時來的，四個壯丁有的扛麥酒箱，有的擔知頭糞箕，也有擔水槽的來在鉄軌道邊的樹下等待。佐藤警部補與井上公医搭車回去了，人々在茫然自失的中間，巡查一舉手發出命令，四個壯丁即時走來。

——緊收收起來！一個人緊去擔水來洗々清淨——

巡查再下命令，二個扛麥酒箱的壯丁憂着面，目眺越向傍邊，像真討厭一般去收了阿達叔的屍片，用

釘快々就釘下去了。

傷心哭到疲倦又煩惱，再受佐藤警部補的威喝，像要失神的阿達嬪，聽着啞々响的釘聲，忽然又醒了，看她的丈夫已經被收在麥酒箱裏，將要扛走去，趕緊四脚爬去牽着麥酒箱。

——夫啊！夫：你枉死啊：你慘死啊……——

她抬頭去敲着麥酒箱亂哭了。

——夫啊：你放這二個小囡……——

她雖然全失了聲音，愈哭愈下力，

——你叫△我怎樣：怎樣死……——

她的聲尾已經聽△不得明瞭了。

元氣失了，牽着麥酒箱的手脫落，再哭也哭不出了。雙手插在地，手又不耐了，全身就倒下去，只在咽喉底：

——噫：噫：噫……——

地哭。

二朵目瞬一時展黑，又一時展白，默々瞧着簡々單々受壯丁扛走去的丈夫。

看阿達嬪△這△款△樣子，一時哭停了的二個囡仔就再起了大哭來啦。

只是三十一二歲的阿達嬪△，因為營養不良又過勞，再看今日這樣慘死的丈夫，消瘦了好像是五六十歲的老婆啦！

這樣貧弱而穿一身襤褸的老婆，與她這二個發育不良的囡仔伏在一堆喂々哭：這是寬意不得忍視的光景。這樣的慘狀，不只是寬意，個々の庄衆都是十分同情，十分悲傷的。但是個々都覺得不可白白空過了一日的，所以，看明徹與寬意去扶他們，庄衆只可以講幾句的勸慰話，漸々就四散去了。

十三

在扶阿達嬌回家之途中，突然明徹問寬意講

——公医講阿達叔不是自殺，你想是真的嗎？——

在寬意的理智，他自早就明白了公医所講的話一点沒有体統，只想起昨日所看的事實，他也不得不認定明徹的話有理。但是，他因爲惱於自己的責任感，受良心的責備，結局都不得率直對明徹答應阿達叔是故意自殺的。——

——啞——

他只可以發出這無意思的聲音。

真興奮的明徹，全然不覺察到寬意的心裏，再以真激裂的口氣講：

——詳細是照在當場我對你所講的。若有眼睛的人，我想誰都不得否認這個事實！

狗奴才！做什麼公医！對身屍，對轆過后的狀況一桌都無考察，還要講這句逆理的話。

檢什麼証呢！

好笑話！又要講什麼么虫也愛生命啦！

生命：這勿論是逐人都愛的。但是，全失了希望的生命，還有什麼法子可以去顧呢？

——
 瞞先！——

他停了一瞬間，以稍慢的口氣再講：

——阿達叔的生計你一定比我更詳細的。他幾分田至舊年已經賣盡了，連厝也已經拿去當做擔保品了。家內已經不存一件值得一錢五厘的物件。這樣賣盡了，他還要缺欠頭家三塊銀。

昨日他纔對我講，他缺欠頭家這三塊銀，已經受頭家不知追窮了幾十回了。

他是一個極小心的老人。

若講為三塊銀去自殺，這話是難使人相信的，但是，你想起他現在的境遇看，考察他現在的心理，三塊銀收他這條生命不是不可能的。

最近我買菜種的一張紙袋——不知是什麼新聞——有報K市一個工人因□了二角銀不得去買藥就去自殺的

聽明徹的話，寬意是愈動情起來的。

他又煩惱這樣激發憤慨的明徹，再進一步不知是否要對面攻擊他，暗中祈願明徹的話緊々換方向去。

——收拾阿達叔那條生命，明々是那三塊銀！這是一桌不容疑問的！——

漸起了不安的寬意，再聽明徹這樣的斷定，心裏就起恐怖來了，像是立在公判庭，受判官判決為殺人犯一般的悚然起來。

——實在真討厭恨的世間。想起來會起猜警：看這款式，不久我也就要跟阿達叔去的！——

明徹聲勢低下了一点這樣自嘲之時，寬意之心也纔漸寬來。但是，他對自己所就的職務是愈討厭起來的。

——我的最后像真明瞭展在我的目前的。

早年的阿達叔有七八分田，也有一分外的厝地。更有一軒可以隱居的厝。這筆田逐年減二分減三分：田沒有去了，厝地去了，年々不得修理的破厝也要去做擔保品了。

再來就是賣農具、賣家具：這些雜碎物件全部賣完，再到的就是這樣悲慘的死法——

你看我本身：一点都無差。五十塊銀的負責增到一百貳拾五，再變二百，舊年已經達到二百八十，今年已經是三百五十元咧！

這負責一年積一年多，積到超過評價值有八百元的我的全財產，那時就要輪到我的番——

明徹講了后，像是起了恐怖一般沉默去了。

在明徹激烈說話之時，寬意動了情不得去想，聽到明徹的口氣漸寬來，寬意也就有用心去考察的余地了。他一時對貧農們的生活所抱的疑惑——賭博、嫖妓——像是釋然而散去了。

寬意想不得了解的，使寬意這樣苦悶的，更不是貧窮人增加這一点，在寬意的見解，若是不堪勞磨只想放蕩的人，他們怎樣窮迫結局是無話好講的，應該講是當然的報應。

……在我看，貧窮的人十人中占九人半是真堪勞働的。……

……堪勞貧窮無……

從前找不到一個可以否認這句名言的理由，理路透徹的寬意現在可就大不相信。

明徹將他要講的話講了，他也苦惱於將要到的恐怖。

自半路二人再沒有開嘴，扶全失了元氣的阿達[△]嬌去到厝。

輕々助老婆倒在床上，二個囡仔哭餓，二人將要回去之時，明徹在厝內巡了一巡，看她真正到底的空虛，覺得心酸不堪。

米甕無半粒米，只在壁邊發見幾條的蕃薯。

明徹走到店仔買幾包糕仔來給他們，纔邀寬意將要退出之時，二個囡仔好像從監獄裡放出來的餓鬼一般的，相爭奪取，一包做一嘴，吞到目矚展目展黑。

十五

寬意在阿達[△]嬌的厝，與明徹分開的時已經過了中午了。

今日的寬意因受了這樣大的衝擊，精神錯亂去了，所以入到頭家厝內的時，他也不起像以前，無受頭家的承諾出去過久的時要起的，恐驚和煩惱。

寬意受他所執念而想不得理解的，貧窮的原因及阿達[△]叔的死因，惱到真鬱悶，像要忘却了平常時占領他全神經系統的陳寶富豪的存在。

寬意行到頭家的房間前，受頭家叫幾聲纔醒，提頭起來，看見頭家倚在安樂床上，

——收好勢了呢？——

頭家像等待了太久、抓扒々要早一刻去聽其消息的款，寬意未踏入戶碇內，他就發出這話來問他。金錢以外像無一項可以動他感情的陳寶富豪，今日對阿達叔的死這樣關心，又表出像真鬱意的款，這點也是寬意意想不到的事情。

寬意對阿寶富豪應未出，他就連續問——

——公医去看的時，你有在那裏？——

——有。——

——公医有講他不是自殺？——

——有。——

——大家有信他講的話？——

——啞。——

——有人講他是故意跳落去自殺的？——

——啞。——

……看頭家的態度，又聽頭家的話，他明々也是真意阿達叔的自殺。頭家若聽人講阿達叔是故意跳落去自殺的，是受他追窮那三塊銀才去死的，當然是不快。頭家已經是與我相同的感情……

寬意想到這桌，結局就要對陳寶富豪起了同情心的。

……頭家的心裏，看這款，比我更辛苦也未可定。這時，再對他講明徹的見解，是越愈使他苦惱的。

雖然明徹所講的真有理氣，結論也是真明白，所以庄衆若聽着明徹的話，一定是信他的；但是，這狀況若使頭家明白，他一定不忍。再要加倍苦悶的……

他放心了，目矚合起來，再倚着安樂床無再開嘴了。

十六

得到這靜寂的反省的時間，寬意就要起煩惱來。

——雖然我全無積極的意志對頭家講虛詞，我這個糊塗的「啞」、明々給頭家解做與事實對反的意思了。

……我也是真明白他這樣解釋着，而無對他訂正，放他自瞞過了；在頭家要講是我瞞他的也未可定；……實質上與我講虛詞無差的。——

寬意想起這處的時，一心想去叫醒頭家，對他訂正自己所應那句「啞」是一時應不出所講的。真實是有聽着明徹所講的話。

但，在他的心裏，他是更不耐去回想明徹的結論，以本身的嘴去表白阿達叔是受他們迫迫去死這個事實。

頭家好像睡下了，呼吸也平靜來了。

寬意看他的睡面，又想自己的心裏，結局不得決心叫頭家醒對他訂正。

……若醒起來，再對我問的時，我纔對他講照實就好啦。……

這樣自慰着。

在這躊躇的中間，他視着頭家全身、看頭家腳手的微動，面皮的伸縮，總也要激動他的神經。

……頭家若醒起來，案怎對他訂正呢？……

倚在軟綿々の安樂床上睏的頭家，雖有腳手的微動及面皮的伸縮，那是極微少的，又是全無意識的，他已經是睏得真深眠了。

寬意等待了好久，看他總沒有醒起來對自己再問的款式、纔想暫時去逃避這切迫的意識。他像剛纔從監獄中受釋放出來的，緊快而且真細膩，又不得十分安心地走向庭園內的涼亭去。

寬意走到涼亭內，坐下石椅，双掌抱頭殼，二個手彎屈突着石卓上，想去清掃纏着他頭殼內的錯雜及煩惱一般的，時々刻々振動他的頭殼。

然，這日他所看過的印象，刻在他的頭腦內刻得真深，雖有他這種的努力，結局也半點都不得除開這等△△△印象。

真清靜的花園一帶的空氣，是越使他對今日所得來的印象更深去考察的。

——看頭家今日這樣的鬱意，雖然他為一是恐驚受人攻擊阿達叔是他迫死的，的確也不得免對阿達叔△△△多少的同情。至今，對他的歹風評不是一項亦是二項，他却也未會這款憂愁的。

像墓地拂工問題，他當社長的S製糖會社的土地強制買收問題，他駛自動車去轆死人的問題，他強姦他的雇女的問題等々，總是最近捲起全压△△△的譏議。

對這等風評他△△△也曾叫我去探聽過的，我也是照事實對他報告了。所以，他當然也是真明白他的歹事受

庄衆傳到這樣廣闊的。那麼時候，我尙未曾看他現出一點憂愁的面容。所以，的確他是有多少對阿達叔的死同情，纔會到這樣鬱意的。

已然如此，爾后他對佃人會採取多少寬讓的態度也未可知。——

寬意想起這點，早晨對這種職務厭惡之感即時雲散去了。反要期待，頭家順這機會來變做好人，來顧佃人。又想起，

……無一定可以勸獎他施行我的理想。他的財富太多，若可以爲我的理想去利用，實在可以做出偉大的事業……

一七

寬意在這裏耽想坐到不知時間的經過。

中午飯未食，他都沒有感覺到肚餓。

他想起勸獎陳寶富豪出錢給他，造就他所切望的理想事業，就心躍的歡喜。

……第一要對教育着手……

寬意這樣想。

因爲寬意在陳寶富豪家內當雜差這四年間，他感覺當庄的風俗真壞了（老實他所看的只是當庄的一面）。

天々所看的，都是嫖妓啦！飲酒啦！賭博啦！所以他纔想起沒有對教育着手不可。

……若沒有緊快除去這種惡習，當庄△一定要踏到滅亡的地步……

寬意這樣想。

因爲寬意想無理由來否認「堪勞貧窮無」這句名言，他結論以「堪勞尙要貧窮，一定有什麼破穴的」也可講是當然的歸結。

……這等破穴總是在祕密中的行爲。我雖然未嘗看着小農們溺於這裏。看他們這樣勞磨尙且要這樣的□累，亦未可定。……

寬意的推理這樣的理路□照。

……第二要設個滋善病院……

寬意又這樣想。

在寬意的頭殼中，他想以教育來教人々不可嫖妓、飲酒、賭博，結局就會得使一般壓衆△的生計有充裕，又可以促進當庄△的文化。

他又想以滋善病院來救治病人，使壓衆△不因病倒了不能勞動更要多費，以致生計的窮迫，又可以圖望保健衛生的發達△。

……以這樣的辦法，豈不是會得造成一個極理想的鄉村呢！……

想起來，寬意一再心躍的歡喜。

……五點鐘了嗎？……

忽聽了丁工場的水笛聲，他立起來看着太陽紅潑潑已經傾斜在西山，纔感覺時間不早了。

三月的日還未是長，寬意自聽見報五點鐘的丁工場水笛聲即時走去擔水，擔未上二十擔水，太陽就要沒落於西山去啦。

寬意恐懼日暗工作做未完（在這廣闊的大庭園，剪齊樹枝、清掃樹腳的枯葉及糞掃、擔水給花，擔沿槽水，擔爛房用的水：每日差不多要三四點鐘久的工作，總是他一個人要去做的），剪樹枝及清掃枯葉糞掃，他就暫時按下，真拼勢對水先去擔，拼到在這三月中旬的冷氣的黃昏也要汗水淋漓落下來。

在這忙碌的中間，自早晨掛在他心中的苦悶，也就一時離開他的身，好像是混在汗中流出來了一般的，頭殼怪爽感覺真快活。

他再真拼勢去抽水，擔水走，擔到爛房所要的水擔完，浴槽水也擔完了，花園給了三分之一之時，天就暗了，不得看見人面了。

不得已寬意纔將其器具收々了完，走到井邊去洗頭面脚手。

真爽快洗了面，洗了身，將要洗腳之時，寬意忽聽見頭家的叫聲：

——寬意！寬意！——

叫得真迫。

寬意聽了他的叫聲，就不待洗完（頭家叫聲一响，不管什麼人都不得再遲遲半刻的。這是陳寶富豪家內的慣行。）只穿一脚的木履，衫拿在手趕緊沿路穿就走去到頭家的房間前。

突然從暗中走來到電燈這樣光輝的房前，走了氣又喘得太急，只茫然立着，而不得開嘴去問頭家叫他

的要件。

——你創什麼創到這麼時刻！現在已經幾點鐘你曉得嗎？——

看寬意這樣姿態，頭家就再發怒了。

——緊去去洗完，衫穿好勢再來！——

十八

無意中受頭家（寬意是案算他已經悔悞了的。予想他對佃人或是對自己這般雇人会以更親切對待的）喝了這聲，寬意就再起了憂鬱，理想好像要雲散去的。

他趕緊再走到井邊去洗那未洗的另一腳之時，前一刻的輕爽已經消盡去了。

——看這款頭家不是悔悞的。他今日的憂愁或者是有別項緣故的——

這樣的想像就再湧發於寬意心中。

他趕緊洗々，一刻都不再遲遲，穿了衫就再走到頭家房間內去。

頭家嘴中咬一技高級的葉卷煙，躺在安樂椅上。他看寬意再穿好勢來了，伸手指卓上二張封信給寬意

看：

——你緊々把這二封信去——

寬意起初想他這二封信是要去投下於郵便筒的，看無貼切手，將要開嘴對頭家討切手之時，纔看二封

總是沒有寫受信人的住址的。

寬意明白了這二封信是要自己去配達的，拿起來看，一張是寫佐藤樣，另一張是寫井上樣的，越頭將要出門之時；

——要細膩咧！不可失落！——

再聽頭家嚷這聲。

寬意不覺躍起來。趕緊捏起來手中央仔細看是二張無錯，真細膩收在懷中纔再起步。

……因何這麼時刻要拿信去給佐藤警部補及井上公医……

寬意又想不得了解。

……不知是寫什麼事？……

真小心的寬意，遇了今日這麼連續的想不得了解，再看前一刻在花園中所想的頭家的悔悟覺得不是可以靠的，他就起了鬼心了。

……喻看這二封信，可以做理解這等問題的參考也未可知……

寬意想起早晨這二個人在阿達叔遭難當場的樣子，就這樣想，決意走到他的厝（他的厝之在路邊）去喻開了封信。

——噢！——

寬意無意中又發出驚愕的聲音了。

他先開了要給佐藤警部補的信，所發見的是五張的十票及說謝的文字咧。

——真感謝，薄々爲我謝你的意思，收起來吧！——近來個人的思想十分搖動，后事十分拜托。

文面這樣簡單，在寬意也沒有能力可以去推察的。

但，寬意竟要糊々摸々這封應酬去閔連今日的事件。

寬意趕緊照原封完了信，收在懷中再走了。

……給井上公医的一定相同可免再開……

佐藤警部補是當压的警察分室的主任。

在這压內他是最高的權力者。

在這压內的事件，無管大小，對他若有相當的報應，是沒有一件不得好々解決的。

這到現在已經是公然秘密。

這压內已經是逐個人都知道的事實。

像压衆對頭家那麼多的風評，幾件不是閔連刑事問題的呢？

但，閔連那麼件的事件，压衆也未會有一個看見頭家被縛去到衛門，亦是受處罰的。

前有提起的問題不必再翻，閔連這個佐藤警部補的手腕，是難去講盡的！

有一件笑話，這是兩三年前的故事。

這位富豪一日真高興，出陣去到××樓與外來的三個富豪在賭博開場中，被一個新來的巡查掠着。

這件事的結局如何？……压衆知道的只是自當日隔五天，掠他們的巡查被轉動到別压去以外，至今却沒

有什麼別的消息。

還有一件秘在寬意心中，至今他未嘗對人講過，所以全然不上到庄衆風評的一件事。

這件事是在舊年下季收獲了后發生的。

這季的收獲，因八月中起了風颳，全庄損失真多，被害最重的減收達到六割，最無受害的也收不上前年的八割。

位在當庄西端的貧農有一個叫做江龍伯。他有二男，一個三十，另一個是二十五歲的，江龍伯本身已經是超過六拾歲的老人。

一日寬意受頭家的命令去要對他收租，他二個男子及媳婦總出去在田裡，只他一個憂悶踞在門口，聽寬意講是要去收租的，他即時跪落在地，哀々求々叫寬意減收他淡薄。

寬意看這老人跪在他的面前，他就狼狽起來了，趕緊伸手去牽他起來，勸告他免煩悶到這樣厲害，又約束本身回去一定要替他老人對頭家求情。

寬意牽他起來，就不堪再度去對別個佃人收，即時走回去對頭家告訴這狀況。

寬意回去對他的頭家將要訴言之時，衝遇陳寶富豪的長男（他名做陳清波，當時在日本東京留學。現在去在美國）恰好入房間來。

這個少年鷄陳清波少爺聽見寬意的話，怒氣衝天，大聲就嚷：

——你這款式要收什麼租！若佃人哀求減淡薄就照他們的要求減，這幾百人的佃人你想要減去多少呢！不只是這款，見求見有減，使他們成了習慣，後來要害到什麼地步呢！

江龍是住在那裏的狗畜生？……你做前行，導我去！我本身去收一個給你怎樣吧！——

寬意想來對頭家求乞減多少，去使那個可憐的江龍伯歡喜，不知倒要受少爺這樣的責備，而講要去收一回給本身做樣，他若惱到要哭出來。

當少爺已經做前行出去了，講出嘴就不收回的少爺，去到江龍伯的厝不知要弄出什麼多端又是寬意當時的不安。

躊躇々結局寬意也就引導少爺向江龍伯的厝去。

一〇

——江龍！江龍！——

少年鷄陳清波少爺，行到江龍伯的大門口就大步走做寬意的頭前去，停着廳門口這樣的猜狂叫。

躺在房內眠床上的江龍伯，半眠半醒地想寬意不知何時纔要再來報可以減多少的時，忽然聽着這樣猜狂的叫聲，躍々然就走出廳來。看見少爺在他的廳門口的光榮，又想少爺專工來到這裏，打算減無三割也有二割，喜色滿面，一個頭伏過去腳膝；

——呀！少爺……來坐，來坐，少爺啊……真罕行——

連呼了幾十聲。

——講什麼□鳥！——

以少爺來訪爲大聲的江龍伯，忽聽見陳清其少爺講這句意外的土話，他茫茫然望着；

——少爺：我有什麼点失你的禮：[△]拜托……[△]拜托你指教！不可這樣的憤慨吧！——

——什麼講做有失禮無失禮：你老人要講什麼□鳥話：我要來對你收租咧：緊々搬出來：我要對你收租咧：你講什麼□鳥話：一技□鳥減給你好莫？……咦！你什麼嘴來講要減租：咦！——

看了形勢太歹了，江龍伯只可以縮々退々：

——哦！少爺！實在是收不上一半——

——我管你收一半亦是一粒。我賤你幾塊銀就是幾塊銀、賤你幾石就是幾石，我管你收一半亦是收一粒！咦！奇怪：你老到好死尙要講這奇怪話：我管你收一半也是收一粒！——

陳少其少爺看江龍伯愈退愈縮去，他在東京所學的雄辯也就愈入神。

——因何寬意來收你無想要快々給他清楚：因何你要再勞煩我這真無閑的身軀……咳！——

江龍伯縮退到碰着壁，再退也無路好去，是々顛應少爺一句：

——少爺：不是要勞煩少爺的啊：是因爲收無一半，總給你都無夠……

陳清其少爺憤慨起來了。他伸左手去掠江龍伯的衿，右手伸去就向頭打下去。

——你現勞煩我來立在這裏：你要硬嘴：死鴨硬嘴：你尙要對我講你沒有勞煩我：我自前講過：我不管你收有夠亦是無夠的，我不管你收一半也是一粒，你若收無夠，厝去賣好！厝地去賣好！囡仔去賣好！該要賣來添到夠額，——

——少爺：讓情咧啊！——

江龍伯的猜驚面愈顛愈利害，舌也不得円滑，至到「少爺」響爲「瘋的^{シヤウエア}啊②、陳清其就不等他這句話

講完；

——你講什麼？……你講什麼□鳥！案怎叫我瘋的啊……你看我做瘋人是莫？……——
陳清波少爺的怒氣衝天了！

一一一

他將捉在江龍伯衿胸的左手拖來，立不得定的江龍伯傾去碰着門，門闕去，江龍伯就倒落在地了。

——你這癡人堪再叫我瘋的啊……你堪叫我減租——

少爺在嘴這樣嚷，將倒在地上的江龍伯以腳踢了幾回纔放下。

倒落在地的江龍伯嘵嘵哭々，哭到再受陳清其少爺以腳踢，哭聲也就停去了。只在喉底發出苦悶的怪聲。

——讓你到明日！明日若無備辦清楚，是沒有再讓手咧——

看江龍伯的聲漸小來，少爺纔想恩典他到隔日，放這幾句話就踏出門外，督促茫然立在門邊的寬意，做前就回去了。

寬意受少爺督促回家之時，他雖然對江龍伯容体十分不安，脚總行不得離開。

倒落在地的江龍伯，依然默々再也不振一動。苦悶的聲也停了。

但，已經受少爺這樣的督促了，少爺又做前行回去了，不堪去反逆少爺這個命令的寬意，不得不也就

跟他走。

他沿路行沿路越頭去看江龍伯的厝，神經集於耳穴，想去再聽看江龍伯有再嘍嗚出聲否。

想使江龍伯歡喜的寬意，倒要看少爺來鬧到這款，又不知江龍伯的生命有失去與否，本身沒有一點自由去看々，想到心懸了。

一一一

跟陳清其少爺回去到厝的寬意，看少爺沒有再回顧他直々入去他的房間裏，房門也闔起來了，他即時就回頭再走到江龍伯的厝前厝后去想探江龍伯的狀況。

江龍伯的厝四邊是以竹困困着的，離別人的厝總有相當的距離。所以在他厝內的攪亂若不至到特別的騷鬧是沒会被厝邊頭尾覺察的。

幾分前陳清其少爺在他家中所演出的攪亂，也是因此，總沒有人感到的。

寬意走來在竹困外邊環了一輪，感覺總沒有聽着人的聲音，他纔再走到正面眞仔細從大門入去。

從大門到厝脚，一面菜爪，金爪遍滿在地，其中幾叢的樣仔、龍眼、芭蕉繁茂着，一軒不大的厝受這樹木及竹叢掩到眞陰氣。

寬意因爲眞恐懼受陳清其少爺拖倒再用脚踢的江龍伯的生命，他入到這陰氣的宅內竟要感覺全身起雞母皮起來。

寬意真緊張集中着全身的神經，慢慢地進去，在庭尾彎一彎直向厝的廳門之時，他看正門仍舊一扉半開闔（這扉門是在陳清其少爺拖倒江龍伯，江龍伯要倒落之時押闔來的。江龍伯是倒在這扉門的后面）寬意的煩惱就要再加倍了。

這時受風壓彎的竹偶然發出一聲特別響亮的「怪！」聲
使寬意心卜卜的跳起來了。

寬意一面努力去抑壓在他的騷亂的心，行到門前伸首入去探，看見倒在半開門后的江龍伯依然倒着，靜々閑々沒有聽到一個人聲，他的心臟就再鼓動起來，沒有法子可以再去抑壓着。

寬意雖然會聽過人講人死了全身會變冷却去，在這時，他已經沒有膽子再伸手去摸倒在地上沒有微動的江龍伯了。

他越頭起脚就大步小步走回去，他一個面驚到青綠，走到少爺房前啞了幾分鐘纔叫出一聲：

——少爺——

這聲是他拚力從喉底發出來的顫聲，他拚力叫的這聲，竟也不得達到少爺的耳朵。

——少：爺——

寬意等待了無應，再努力叫這聲極響亮的。結局也不得到少爺的答應。

「是不在這裏？……」

寬意真仔細噲開其房門伸首去探房內，他纔發見陳清其少爺倒在鉄眠床上靜々寂々安着眠。這個少爺因爲每夜總要駛自家用的自動車去到丁市嫖妓飲酒，大概都要經過二桌三桌纔回來，所以每早晨是未曾十

桌鐘以前起床的。食午飯后又要午睡二三点鐘久。

這等是他最闊重的日課，所以若有人不曉得去攪亂他這幾桌鐘的午睡，是要與他講不得條直的。寬意想起這桌，一時猜狂了。

他緊々將門闔照原，無聲無說就走開了。

一一一

……這是天的保佑呀……

他一面走一面越頭，走開到相當的隔離纔伸手來摸摸心肝！

……真好運呀：這回若叫醒了△他，我就要大受虧的。……

受陳清其少爺的安眠拍猜驚了的寬意，他去到花園中涼亭坐落，就再想起江龍伯的事來了。

……雖然沒勇氣伸手去摸他，雖然他是倒在暗々の門后，對他的面色如何不得看到十分清楚：他若還有氣絲，的確沒有在那裏倒這麼久沒有微動的。

他倒的位置、狀況，明々與前一点無差。

他的子息及息婦從烟中回來看這狀況不知要怎樣驚愕的？……

江龍伯案怎会這樣軟弱：拖倒只用脚踢二回就倒着不得再起……

陳清其少爺這樣的少年鷄氣：他講是要收一回給我看樣的：睏醒起來他就要知苦咧……

二四

寬意回想到這件事，他就覺得面熱紅起來。——
他每想起這點總要受良心責備心起懊惱苦悶的。

所以他每遇着這個回想，他總拚命努力去拍消這個記憶，努力想對別項去的。

回想到這些事件的寬意，再想起現在要拿這二封信去給佐藤警部補與井上公医，他感覺眞苦痛△。
他幾回想要回避，但，二封信已在手中，結局總想沒有法子。

在寬意低頭凝想的中間，他已經是一步／＼迫近到佐藤警部補的宿舍。

他已經從暗路行到受佐藤警部補的厝內燈照到眞光亮的路來了。

混在無線電話奏樂中響來的

「酒！酒再一技來……」

這等聲，明々是佐藤警部補半醉的嚷聲。

寬意行到他的門口了。

寬意在那裏停了一刻纔咬死神經忽々叫開他的門，伏目不得直視坐在食飯卓前△，

「什麼人？……什麼人？……啲……」

對發出這樣醉聲的佐藤警部補，默々給了那封信，回頭就走了。

他再去到井上公醫的厝前，照這樣的態度忽々叫開他的門，默々給了那封信，途中沒有越一回頭，就回去了。

他走了，沒有再到頭家那裏，報告配達了信的事情，隨時走入他的厝內，即時潛入被穴內。

寬意像是受了什麼怪物纏々跟々剝不得離的款，猜々狂々想潛入這裏逃避的。總是，纏跟在他的怪物却不是在外面的，是已經落入到他的腦底，他如何的努力都不得創效。

在他的肉体上的運動休息了的這時，在這無騷無亂的眼床中，這個怪物是更要顯然猛烈襲擊他的。

寬意想以睡眠來掃掉這想念，目調合起來，綿被拖起來掩過頭殼頂，半閉了亂調的呼吸、：結局也是徒勞，頭殼是愈明亮來，一刻都睡不下去。

他所努力不要去想的頭殼，總要在他至今所經驗的各種大小事件轉。

想來想去，倒在床上未上半點鐘久，他就要再想到一刻前他拿去給佐藤警部補與井上公醫的，裏中包紙票的那封信。

回想到這點，寬意就要再受一個想不得了解的疑問苦惱着。

他所偷見的，信內所寫的：「眞勞煩了，這是淡薄表示謝你的意思，近來佃人的思想十分搖動，后事十分拜托！這幾個字……」眞顯然再現到寬意的目前了。

這明々は對佐藤警部補們謝勞的信。對佃人有什麼期待他的勞力。

今日佐藤警部補及井上公醫對他有什麼勞煩呢？對阿達叔的死診斷書爲「不是故意自殺，是失注意致死：這句以外，再叫壯丁去速々埋葬了阿達叔的身屍以外：還有什麼事情勞煩了他們呢？

豈不是在我不知不覺之中再勞煩了他們的嗎？……不是！的確沒有另外事件發生的……若有發生什麼事件去勞煩到他們，雖沒有直接，間接我也一定可以覺察了的……

噢……看今日頭家的態度……看他對阿達叔的自殺非自殺那麼關心，看他那樣的憂愁，這應酬一定也是閔連在這點……閔連這二個大人硬証了阿達叔是失注意受轢的，不是故意跳落去自殺這件事的勞煩。

二五

寬意想到這處，他雖發見了一點的理路……但，苦惱他的根本問題，他想不得了解的疑問的中心處，還是離他太遠的。

……若是少爺踢死江龍伯那時候，亦是頭家強姦雇女那時候……更是在他要去強制買收土地那時候，亦是少爺駛自動車去轢死了人那時候……這樣的應酬却是當然沒有可起疑問的余地。

但，今日却不是這樣的大事……只是一個老窮人被火車轢死而已……準做照實講他是受頭家強々追窮他所欠那三塊銀迫到無奈何纔故意跳落去自殺的……結局豈不是與普通的自殺無差……在今日這樣法治國，頭家對那個窮農的變死豈有什麼關係？什麼責任可負？……

若講到人道問題……亦是庄衆的風聲……這等豈不是他未曾關心到的？……

是頭家年老了，對這等雜碎問題也要用心來的嗎？……

若講迫人去自殺他要起傷心，豈不是舊年在田邊苦煉叢吊豆死的羅漢叔也是受他追迫以致的。

那時候的自殺是更明顯，沒有一點可以起了疑問的。吊死：決沒有什麼失錯，亦是失注意的謠言可造

但，在我想起的那時候的頭家，他決不是像今日這樣的：他對那件事是全無關心的。羅漢叔的死達到他的耳穴，他比聽見一匹狗蟻的死更要自若泰然的：

若講因他老的關係，阿達叔的死纔使他這樣憂愁，只隔這一個年間，豈有這樣天地般的激變？……寬意的思想在這幾點轉環了幾十回……心愈迫、頭腦又騷雜起來了。但，他翻了幾十回身，結局總也不得從這轉環的思想中去尋出一個出路。

二一六

受這騷雜的想念纏着的寬意，在眠床中翻一身過來翻一身過去，翻到深更，心身總真疲倦了：不知不覺之中也就睏去了。

但，因他的掛心太深，雖睏去了却也不是熟睡，在半眠半醒的境地，不知受了幾十回的惡夢驚醒起來的。

有時受滿身血的阿達叔的幽靈驚醒起來，有時受七轉八倒的阿達嬸的哭聲騷亂到醒，更有時夢見與江龍伯談話的場面，等々……

——寬意！寬意！……

寬意看一個在一邊無界限的草埔上啞々輪的全面紅擦々的，不成鬼又不成人，頭殼開嘴叫他，輪向暗界入去消滅了，再看二技紅撥々的手浮在空中招他，也向暗界入去消滅了，他就愕然醒起來了。

從半壁上一個小々の窓照來的太陽，已經照到寬意的面上，他直受那光閃照了，忽然越向傍邊的目眇，一時覺得全房間內暗淡。

停了一瞬間，他的目眇慣了，他纔看見他的母親坐在他的眠床頭，一手掛在他的肩胛上搖醒了他的。

阿母！幾桌鐘了嗎？……

幾點鐘？……你今早因何這樣好睏呢？八點外鐘了咧！我想你已經是去了，一入來看，你還是睏到這款式

式——

……噢！八點外鐘了嗎？……我昨暝太好睏了！八點外鐘！太遲了。——

寬意聽他的母親講已經是八點外鐘，他即時跳起來，緊緊把衫褲就穿了。

——我看你昨暝那麼早就回來睏？……因何睏到這麼時刻還不知醒呢？……

……

寬意不堪應她，他覺得頭殼非常的沉重，總是假裝無聽着。

——是阿達叔死了太無閒呢？……

……

寬意還是裝無聽着，不應答她。

——阿達叔實在真可憐咧……聽講是因為你去對他迫租迫到太嚴……

這句衝擊了寬意真厲害了。他即時喘着氣問他的母親：

——什麼人講的呀？……什麼人這樣講？——

——真多人講咧……文瑞也講、江西也講、明達也講……真多人這樣講咧……

寬意默了，不堪再開嘴了。他在穿衫忽然一個面提到從窓照來的光線，他的母親明顯看着他這個面：

——寬意……你面色因何變這款式？……

——豈有？……

——沒有？……你去照鏡看々……一個面青損々咧……

……

二七

寬意又不堪應答。他也沒有想去照鏡看々面色，忽々穿完了衫就要跑出去。

——寬意……你是身軀有什麼異樣是莫？……你沒有感覺何處艱苦莫？……

……

寬意還是不堪應她。

——寬意！——

寬意雖然不耐應他的母親想要緊走，他看她那麼煩惱問他……再喚了這聲……就不得直々跑去，默々停立

着戶窗外。

——你身軀若有異狀，不可放置咧！要緊去請先生看看，把藥來服……

——沒有啦！沒有什麼異狀咧！……

——沒有異狀？……若沒有因何一日會變到這樣的面色？……

……

寬意再不得應了。

——啊々！你昨[△]暝豈不是亂嚷一場含眠嚷什麼？……你是在睡中驚着嗎？……

——不知道呀！——

——你不是感着風？你昨[△]暝有踢被沒有？你被掩有好勢沒有？……

——有有……掩得真好勢啦！——

——你有頭殼痛莫？——

……

寬意又不得應她了。

——你若艱苦今日免去好啦……我去對頭家講啦……

……

寬意雖然也是不堪應她，但他對這句是十分意向，感覺心動的。

在寬意的心裏，他不只是今日，若會得好勢，他是想永久不要再去到陳寶富豪那裏的。

但，他想起家內的生計若沒有自己這技手，在陳寶富豪家裏每月領八塊銀來幫助不得維持，就使他愈苦惱了。

不知不覺之中他就滴下了眼淚來了。

——寬意寬意！你不可去啦！再去倒着。我去叫個醫生來……你這個囤仔……艱苦不愛講，硬々講沒有艱苦……你是那裏艱苦要緊々對我講咧！——

——實在沒有艱苦啦，阿母……實在沒有艱苦啦……你不可急心，也不可去叫醫生來……——
你這個囤仔真變常呵！你至今若艱苦總要叫我去叫醫生……今日面色這樣歹……你還講沒有艱苦……你真變常了……——

寬意的老母逆到也就眼淚流下來了。

——阿母……你不可哭呀……我照實對阿母講的。我只是頭殼少可庸而已……——
頭殼庸……是啦！一定是感着風的。你若不肯叫醫生來看，我煎姜母茶給你服好莫？亦是去請醫生看……更妥當？……——

想起生計的困難，再去請一個醫生就要費去幾角銀的，她就想若只是感着風而已，就免去多費這幾角銀，想自己去煎一碗姜母茶來治療寬意的。

寬意因不堪卒直吐出他的心情，他也就想以這個機會一時瞞過去，又想在這裏倒直一日想々將來的計畫，他隨嘴就應一句

——好啦……——

即時再走去潛入被穴內。

二八

再潛入被穴內的寬意，雖在這裏計畫計畫將來的方針，錯亂到極的頭腦，以他的努力是不得統一的，他雖有決心不肯再入陳寶富戶之處，然，一想到自己要行的路，像是在海底摸針，不知從何而進，思想低迷，只在黑暗的現實，悲傷的現實徘徊，尤其是阿達叔的面影及他的慘死捉他不放。

寬意一面又恐陳寶富戶再來捉他去當這樣討厭的職務，恐怕陳寶富戶用人來叫，幾次因他母親在廚房備辦姜母茶的聲音而跳起，鼓動了他的心臟。

——明徹仔，來座。寬意今日無去，現在房中睏，像是感風：入去座啦：——

他聽了他母親這幾句，一時再鼓動了心臟，恐怕明徹入來，直追窮他害死阿達叔一事，然至到看着沈鬱的明徹入來床邊，像同情不堪的神氣看他，問他氣分如何，他的緊張纔寬了。又覺得對自己的將來像可以求他指教的。這時他就決心將自己的心情訴他：

——來座啦！——

他跳起來，將綿被撥入床后，開一位座席給明徹，就對他問起阿達叔及她的兒子如何。

——他們惱得太悲傷，實在不忍視。哭到一臭氣力都無，我今早去替她備辦了些粥纔來的。——
寬意覺得一陣心酸，似乎要淌下眼淚

——我實在對她真無面目……

——你？……你有什麼責任？……

——是……講無就無，總是我覺得我的責任是難免的，阿達叔的決意自殺是因我追窮的……

——寬意講了，頰上流出二條的眼淚，雙手抱他的頭額，也無公去拭落，放他流到嘴邊，滴落蓆上。

——準你無去追窮阿達叔，陳仔寶也用他人去追迫他……要追得更利害也未可知的……你對這桌不得惱啊！這樣的大問題不是你個人可以阻止的……

——寬意傾想了一刻，雖覺這話確是無錯，但他心內的重擔依然一桌也不得放輕。

——以外還有什麼法子可以阻止呢？……

——他以這句似乎詰問的口氣說了，一面又覺這樣口氣對明徹太不好意思，雙手放下兩眼凝視着床下太陽光線所照的一桌。

——有！我們貧農群結為一體抗他……這就是唯一的可以阻止這樣悲慘的辦法……

——明徹的口氣充滿着自信，而且是決斷的。

——抗他？……

——是！抗他！貧農群結為一體，要求他不可起耕，要求他不可昇租，要求他不可將我們做牛馬看待

二九

寬意聽了明徹這句，他所偷看的陳寶富戶給警察分室主任佐藤警部補的信就顯然再現到目前了。寬意再以受少爺踢死還只曉得哀求的江龍伯來比目前的明徹。

——佃人思想十分搖動，后事十分拜托——這幾個字就一個字一個字明々顯々現到目前了。他一時覺得痛快，然而一到冷靜，他再又感覺陳寶富戶所交結的權力，這樣權力是會將唯吧哞全压燒了、殺了幾万生命的。

——他的后面有絕大權力：如何可以抗他呢？——

寬意說出這句，再對陳寶富戶與佐藤警部補的交結他所喻見的信及紙票，至今陳寶富戶依這個權力所做的罪過至到當庄貧農民抗他的危險一條一條講給明徹聽——豈沒有較妥當的法子呢？……

再以這句結束。

——是：你所講的危險我也所予料的。但，在貧農群的大團結，那麼權力是不在眼中的。我有個朋友在台灣農民組合活動，他時常寫信給我這樣說。他說台灣農民組合已經有數万的組合員二十幾個的支部，一旦起了爭議，數万的兄弟是會應援我們的。他又說日本內地也有數十万的同志，這樣同志是通世界共有的……

寬意聽明徹這樣的話，覺得回到六七歲當時對母親所聽見的架空的故事，一時陷入失神狀態。至到明

徹要回去對他說一句

——失禮——

他纔回來現實。但，他總不得感覺這話是現實的。他感覺這是個現想的故事。

明徹走后，寬意再倚床上，以他稍安靜的頭腦檢討一個一個的現實，一段一段的思想。

這時有一個人從小々の半壁的窗前過，他身所反射的日光照到房內分外光亮，恰好這時，他頭腦也有一桌光明閃過。

……是！我可以取此進路！……

寬意是回想到少時讀過的米國一個大富翁的出世譚。

……我到大都市去罷！粉骨碎身努力罷！我若造就他十分的財富，回來台灣各地建設工場，建設慈善事業，貧民們一時就可以消滅啦！這纔是十分妥當的辦法。是！我將要成個立志傳中的人物！……

當夜，對十分高興的寬意聽了他的立志的明徹，因日夜縛在田中，所得的現代空氣只是從台灣農民組合[△]開士的朋友所得的「抗」[△]「聞」[△]名詞，未有經濟學的知識，所以在一個大發財裏面的幾萬個窮迫全然不曉，所以他也拍手歡呼，對寬意約束他要以十二分的助力。

三〇

寬意自立了志，對明徹訴他的心意，再受明徹推獎他的志氣及約束要援助，像見了明星一般的勇躍[△]，

他像感覺光明一時遍照了他的鄉村一般的，同鄉農民的窮迫一時被他打消了一般的歡喜。自昨日見了阿達叔的慘死以後捉他不放的憂愁，受頭家命令去討租的酸痛，一時雲消霧散去了。他跳々躍々喜色滿面走回他的厝，從箱底翻出一冊的便箋及鉛筆，想寫一封信去給他的同窓友，克常君。李克常是他心裏想爲可以引導他的唯一的導星，林克良是他同窓的一個着實的青年。他在厝裏的風評頗好。除去他在師死之年，與同級朋友要求主任教諭的辭職起了罷學以致被退學，數人相謀走上東京，而他在學中所受的給費掛到他的父親肩上，使他父親受虧以外，他至今的行爲對厝衆頗得好感。他到東京苦學二年余，說已經合格了專門學校入學資格的檢定試驗。現在說是在準備中等教員的檢定試驗奪鬪。

——克常君，慶祝你的努力及進步。你寄來數信，勸我上京苦學，我因受了迷夢捉住，躊躇至今。自昨日再見了阿達叔的鐵道自殺，我已經從迷夢醒了。陳寶富戶是一個極無天良，看我們窮人不做人的人物。我侮我至今對他的信賴。明徹君們通謀台灣農民組合，計畫要對他抗爭。因阿達叔的死，厝衆大都共鳴。我因明通陳寶富戶與警察的密接關係，我恐這事會鬧到像嗷吧嗷的慘。我對明徹說明了詳細，又說起我要立志上京，粉骨碎身，穿錦衣歸鄉來救窮民兄弟。他對我的說很贊成。我真勸喜。我想早一日出發才好。希望你替我立案。我自就職至今每月所貯的一元，現在已有五十多元，不知夠做路費否。千希速日回音。——

寬意寫了，再清書一張，連々讀了幾十遍，像作了一編極滿意的名文一般的興奮。他從此信封了，走到郵便筒去投下，順路就走去他前日座在那裏苦悶的庄北神社石階上。一樣是清靜的神社裏，今日與昨日是天地般的變。今日他的心躍是愉快的，是勸喜的，一桌沒有昨日那樣的憂愁、恐怖的心躍。

寬意走上頂高層的階上，深々吸了幾吸氣，在心裏高呼「我庄万歲」，向陳寶富戶三層洋樓方向吓一口痰，在嘴內唸，

——人面獸心！我立了志，不許你再來虐待我們庄衆——

他像發羽可以飛舞，不踏在地上的輕爽，想起他向后的——一路光輝滿照。他想像他到東京的狀況，覺得在那裏一定美滿，一點沒有像他庄裏的腐敗、窮迫。他所想像的東京是黃金世界！光明天地！

他再像到他穿錦衣回鄉的狀況，覺得像是狀元回鄉的榮譽、鬧熱。

他從神社裏回到他的厝，他的感覺是這樣的光輝，所以在路上遇着穿破了又補幾十重的農民，營養不良的小孩子，總不映到他的眼中。

——寬意，你走去那裏給我們等待這麼久？——

寬意入了他的厝，從他的暗淡房中響來的是明徹的聲音。

——啊！你在這裏等待我嗎？我去寄一封信給克常君！我對他說起我的立志。我對他說了我要上京去！……

寬意在這樣空前的雄辯。但，他的眼精漸慣於房中的暗淡，他發見明徹的身邊還有一個頭髮掩到衫領的青年座着，微々笑着他，他就忽然停了他的雄辯，以不得解的神氣看明徹。

——寬意！這位是台灣農民組合的王鉄君。他看我的信，寫阿達叔再被陳仔寶追迫去鉄道自殺，隨時走來要指導我們……——

明徹對寬意講未完，在寬意狼狽的中間，王鉄伸來握寬意的手，振了兩三回，說

——我是台灣農民組合的王鉄……拜托……——

看這樣活潑的王鉄，說話明亮又一桌沒有客氣的行動，寬意直覺被他壓服着的。寬意一面見羞本身在他面前那樣誇說了話，另一面又不知要與他怎樣應待。他在這樣躊躇的中間，王鉄座下再說，

——我對明徹君已經有聽了你的立志，感激之至，但，在我想，你這樣的做法恐不得達到你所想的目的。救窮農斷然不是你一個人做得到的。講些失禮話，你到東京，若顧你一身顧得到就可以講是慶事，你不可想東京有黃金可掃。若是想去東京研究富人與窮人的對抗爭鬪，來應用於這庄，那是極有意義的事。窮人的救濟是要使窮人們本身的自覺，使他們理解團結的力量，引導他們與富者鬪爭纔有效果可見的！——寬意雖極感服了他的言說，但，他所說的東京的現實第一使寬意難信，他講只以鬪爭纔會得對救窮人有效果可見，使寬意就悚然起來了。

——爭鬪？……若惹到噍吧哞的慘……——

寬意努力要問這句未完，王鉄哈哈笑了又說

——噍吧哞？……我們所謂爭鬪不是叫窮人們即時武裝鋒起的。爭鬪有臨機應變的手段及方式。這桌我們可以漸々研究。起初我們要取的，絕不是這樣……——

這時寬意聽了門口有人以細膩聲音叫「王様」。寬意越頭一看，那聲音都是從個沒有面熟的日本人發

出。寬意帶疑越頭之時，他聽王鉄再說：

——那是走狗，□負介意：——

王鉄又向門外大聲嚷：

——整死！叫什麼！——

看他這樣大膽，寬意起了不安，再愉見了王鉄君所謂走狗的面容，但他還是很溫柔的敬禮，溫順的說、

——王様，不知你還要去那裏？我想要回去，去叫當地的人來交替，拜托暫時在這裏等待：——

對這樣的哀求王鉄只看他一看，他就再對寬意說起他在別庄所指導的農民與地主的閥爭，努力想要引起寬意的決意。

（長篇小說「立志」第一章了）

——手稿

註①

1. 貧農的變死 是楊遠擬創作之長篇小說《立志》六章中之第一章手稿，以臺灣話文書寫，許多修改的部分將台灣話文改為北京話文，可能是賴和的筆跡。《全集》按修改後之定稿排版。手稿之節號順序有些混亂，例如第八節寫為「九」、第九節寫為「十一」：等。

2. 內容和《死》大同小異，最大的差異是結尾呼籲農民起而鬥爭的部份，在《死》中全部刪除。

3. 手稿《佃農的死》是《死》之謄抄本，為楊翠筆跡。

註②

「瘋的啊」，以日文片假名シャウエア標音，為臺灣話文之讀音。

水牛

町から東の方へ五町ばかり行きますと、山の麓に大きな池がありました。その奥の方が相思樹の茂つた山で、手前の堤には、青々と草が茂つてゐました。堤の稍々廣いところには、大きな櫛仔きしこの木が四本、廣い涼しい蔭を造へてゐました。草原には、水牛や黄牛がのそりくと草を喰ひながら歩いてゐました。その水牛の頭に烏秋が飛んで来て止つたりするし、山の方の木には、數百の白さが休んでゐて、遠くから見ると、白い花が満開してゐるやうでした。のんびりとする靜かな景色です。東京の學校で緊張し切つた神経を、暫く此處で休ませることが出来たのを、私は大變に幸福だと思ひました。

それに水が綺麗で冷かつたので、この夏休み中を、私は殆んど毎日此處で過しました。始めは十米も泳げなかつたものでしたが、一箇月の後には、百米を悠々と泳げるやうになりました。青白い顔色が、黒坊のやうに變つて、大變元氣になりました。

毎日此處に来て暑さを避けてゐる中に私は阿玉さんとお友達になりました。これはこの自然の景色にもまして、私が一番嬉しかつたことでした。

阿玉さんは大變綺麗な百姓娘で、殊に水牛の背中に乗つた姿は、天使のやうでした。それに何時も本

を手から離さない感心な娘さんでした。水牛の背中に乗つてこの池ばたに来る時も本を手から離さないし、横仔の木の蔭で、外の牛飼ひの子供達が、瓦を銅貨のやうに丸くしたもので、ばくちの眞似をして遊ぶ時も、阿玉さんは、一人で隅の方に皆から離れて本を讀むのでした。

或る日私は、横仔の根本に隠れて本讀んでゐたこの感心な娘さんに聲をかけました。

「娘さん！感心な娘さん」

と私が言ひますと、娘さんは恥しがつて、本を懷の中にねぢ込んで、一目散に逃げてしまひました。それから草原の方へ行つて呑氣さうに草を喰つてゐる水牛の背中によぢ上つて、雜木林の向ふの原つぱへ行きました。如何にも天真爛漫でしたので、私は笑ひ出しました。

私は又池にとび込んで泳ぎましたが、珍らしく感心な娘さんだと思ひながら、向ふ岸に上つて見ますと、のそり／＼草を喰ひながら歩き廻つてゐる水牛の背中で、彼女は一心不亂に本を讀んでゐました。

その後毎日顔を合せる度に、私は色々と親切に聲を掛けましたので、彼女も段々に慣れて来て、逃げないやうになりました。さうして彼女の名前や、公學校三年生の二學期「學校をよして牛を世話せよ」とお父さんに言はれた時、あんまりの悲しさに泣いたことなどを教へて呉れました。

「どうして學校をよせなど言つたでせう？お父さんも仲々のわからず屋ですな……………」

と私が慰めるつもりで言ひますと、彼女は眼をうるませて、

「いゝえ、お父さんはわからず屋ではありませんわ！學校をよせと言つた時、お父さんも泣きましたわ、でも、お母さんが死んで、牛を世話する人がなくなつたんですもの……………」

「お母さんがなくなられたんですつて？それは大變ですね！大變ですね！」

私は繰返しました。阿玉さんは今にも泣き出しさうでしたので、私は彼女の顔を見るのが悲しくて、そつぽを向きました。

それから一週間ばかりの間、私達は、毎日皆から離れた木の蔭で色々の話しをしました。彼女は未だ十二でしたがよく家の出来事を憶えて居て、大人のやうな口振りで話して呉れました。彼女の父が、小作田を取上げられまいとする爲めに、小作仲間と小作料をせり上げたのでに、今年は大損をして、收穫全部を地主にやつても未だ二石ばかり不足したことや、その二石を返せない爲めに今では却つて地主が小作田を取上げやうとしてゐることや、自動車會社の乗合が通るやうになつた時の道路修繕や……………を造る爲めの……………の苦しきなどを話しました。

「これがその時に戴いたものですわ！」

と彼女は溜息をついて股のあたりの傷あとを私に見せました。が恥しさうに、直ぐつぎだらけのスポンで隠してしまひました。彼女は、一生懸命に勉強して可憐さうなお父さんを樂しませたいなどどけなげなことを言ひましたので、其の後、私は彼女の勉強の邪魔をしないやうに努め、自分も本をもつて來て讀み、彼女の判らないところには念入りに教へてやりました。彼女は學校をやめてから未だ一年位なものです、今は五年生の讀本を讀んで居ました。學校では何時も首席だつたさうで、よく判り、よく憶える娘さんでした。本は隣りのお友達から借りたさうですが、帳面と鉛筆が買へないので書取や算術の計算は、堅い地面を選んで木の小枝で書いて居りました。私は私の弟が讀んだ小學四年生や五年生の古

雑誌を以て來てやりましたら、大變樂しさうにぺらくめくつて、私を淋しがらせた位、私のことを忘れて一生懸命に読み耽りました。

その中に突然阿玉さんは來なくなりました。二日もつゞいて見えないと私は大變心配になつて、歸る時彼女の家を訪れました。彼女の家は小部落の左寄りにありました。竹やぶに寄りかゝつてゐるかのやうに傾いてゐました。草葺屋根には、今度の嵐に荒された跡が残つてゐました。仕事の合間々に修繕したのでせう。三分の一ばかりは甘蔗の葉をかぶせて、竹割で押へてゐました。表の方には誰も見えませんでしたので、裏の方に廻つて見ますと、軒下で、阿玉さんは主婦のやうに、かひなくしく薩摩薯のお粥を造つたり、豚に飼料をやつたりして立ち働いてゐました。私を見ると一寸笑顔を造りましたが、直ぐ悲しさうになつて「いらつしやい」と言ひながら、壊れかゝつた腰掛を出して呉れました。

「お父さんは？」

「去造道」キツヨロ

と答へながら、フーフー火を吹き起したり、フム／＼鳴いてゐる小豚のところへ驅けて行つて飼料をやつたりしました。

「去造路」と言ふのは道路修繕の………に行つたと言ふことです。豚小屋の次ぎが牛小屋になつてゐるやうでしたが水牛は見えませんでした。私は豚小屋に近寄りながら、「この頃どうして池ばたへ牛飼ひに行かない？」と聞いた。

「水牛は賣つちやつたの」

「どうして水牛迄賣つたの？」

「小作料を拂ふことが出来ないから……でも拂はないと小作田を取上げられるので……」

「ふむ！」

私は悲しかった。私は数日前に見た「水牛の進出」と言ふ新聞記事を思ひ起した。豚にかはつて、何千とかの水牛が南支に輸出されたことを産業の發展だと新聞が書き立てゝゐましたが、耕作用としてのみ水牛を飼つてゐる臺灣から、そんなに多くの水牛が輸出されると言ふことは、産業の發展どころか、疲弊し切つた農村の有様を如實に物語るものに過ぎないと私は始めて理解することが出来ました。

この時「アーく」とい太い息を吐いて、阿玉さんのお父さんが入つて来て鋤を投げ出しました。

今にも倒れさうな有様でした。阿玉さんは急いで洗面器にお湯を入れて父の前に持つて行つてやりました。日はとつぷり暮れて居た。私は暗然としました。父は不思議さうにちろくくと私を見てゐましたので、私は彼等にわかれを告げて、自分の家に歸りました。歩きながら、私はこのどぶに打ち込まれた若芽を、如何にして伸ばすべきかについて、深い想ひに耽りました。

翌日から私は池へ水泳に行きませんでした。阿玉さんやそのお父さんのことを考へると、好きな水泳も一寸も面白くないやうに考へられました。綺麗な山も、美しい池も一寸も私を楽しませなくなりました。私は一日中床の中から起きないで、色々考へましたけれども、どうすることも出来ませんでした。晝過ぎになりますと、退屈で寝て居られなくなつて、起き出て庭をぐるぐる廻りましたが、それでも一

寸も落ちつけませんでした。

私はタオルを首にまきつけて池ばたへ行きました。綺麗な山も、美しい池も昨日の通りで一寸も變つてはゐりませんでした。何時もの氣持のいゝ静けさは、この日は、私には身を切られるやうに淋しく感じられました。私は堤の上を行つたり來たりしましたが、どうしても水に入る氣になれませんでした。その中に頭が痛くなるのを感じましたので、私は首にまきつけたタオルで鉢巻をして、牛飼ひの子供達の休んで居る様仔の木の蔭に歩いて行きました。何時もばくちの眞似ばかりして、やいゝ騒いでゐた子供達の間にも、今日は淋しさうだつた。腕白大將の阿明は芝生の上に長くなつて寝込んでゐたし、その他にも二三の顔が見えませんでした。他の子供達はばくちの眞似なんか忘れてしまつたやうに、ぼんやりと座つてゐたり寝込んで居たりしてゐました。

私は自分の淋しさをまぎらす爲めに、腕白大將阿明をゆり起した。

「よう！今日は仲々温しいね！」

と言ひますと、阿明はパチリと目を開けて私を見たが、直ぐ又目を閉ぢてごろりと横になつてしまひました。私は一層の淋しさを感じてぶらりと立ち上り、さうしてむちやくちやに歩き廻りましたが、草原の方を見ると水牛迄が大變淋しさうに草を喰つて居るやうに感じられました。これは可笑しいと思つてよく見てゐる中に、私は水牛の淋しさうな譯を發見して「ほう」と驚きました。何時もは黄牛より多い水牛が、今日は大變少くなつて居るのです。のそり／＼と歩く水牛でも、數さへ多ければ、何だか賑やかな感じを與へるのですが、急に減つてしまふと、その動きに變りはないけれども、それで見える人に

は淋しい感じを與へるのです。

「この子供達もいゝ遊び相手の水牛を奪はれた組だなー」と私は直覺しました。「これでは村は大變なことになるぞ!」と私は感じました。私はいゝ友達を一時に澤山亡く(マ)なしたやうな、身を切られるやうな淋しさに襲はれました。

私はとうとう居たまらず(マ)なつて逃げて歸りました。が、家で私を待つてゐるものは、私を慰めることではありませんでした。それは私の心に反抗を植えつけた。併し、はげ口を見つけ出すことの出来ないこの反抗心は一層私を淋しくし、苦しめました。私は居ても立つても居られずに自分の部屋に駆けこみました。悩みは一層増して行くばかりでした。私は、人さうひによつて愛する人々から引き離されて、嵐の中の山小屋に閉ぢ込められた時のやうに、不安と淋しさと憤りとを一緒に経験しました。と言ふのは、阿玉を私の父が嬖媒嬖として質どつて來たんです。阿玉の父は地主に返す二石の小作料と、小作を續けて行く爲めの其他色々の準備に五十圓のままとまつた金がなくてはならなかつたのださうです。それだけならいゝですが、父は何時もこうした小娘を買つて置いて、十五六にでもなると、貞操を奪つてそして自分の妾にしてしまふのです。現に家にある三人の妾は皆こうして出來たものです。私は齒を食ひしばつて床の中でもがき苦しみました。阿玉の父には到底五十圓とまとまつた金を造へて娘を自由にする日があらうとは思はれないからです。とすると阿玉は父の妾に買はれたも同然です。

(十月二十日)

水牛

距離鎮上約莫五百公尺的東邊山腳下，有口大池塘。朝裏去是一座長滿了相思樹的小山，這一邊的堤岸上，則爬滿了綠油油的青草。堤岸稍稍寬廣一點的地方，四株高大的芒果樹，給四周造出一片寬闊而涼快的蔭涼地。草原上，有幾隻水牛和黃牛，啃著草慢吞吞的走動著。不時有烏秋停歇到水牛頭上來，山上的樹林裏則棲息著數百隻白鷺，遠遠的望過去，彷彿開滿了一樹樹的白花。那是一片靜謐而悠然自得的景色。我對於短時間內能夠在這個地方鬆弛一下在東京的學校裏繃得太緊的神經，深感幸福。

同時，這口池塘的水又涼又乾淨，因而我整個的暑假，幾乎可以說天天都在這裏消磨過去。一開始我連十公尺也游不到，但一個月以後，竟也可以從容容的游完一百公尺了。蒼白的面色也變得如同一個黑鬼，身體也強壯了起來。

我每天都到這兒避暑，不覺間同阿玉交上了朋友。這是比這大自然的美景益加令我高興的一件事。

阿玉是個漂亮的農家女孩，尤其騎在牛背上的那副模樣兒，簡直就是天使一個。同時，她又是一個手不釋卷的可佩的姑娘。騎著牛到這兒來的時候，她那雙手始終離不開書本，當其他放牛的孩子窩在芒果樹下，用磨成銅板大的瓦片學著賭博玩耍的時候，阿玉也總是離開大夥兒，一個人躲到角落裏看書。

一天，我對著躲在芒果樹下看書的這個可佩的少女搭訕道：「小姑娘，可佩的姑娘。」聽到我的呼喚，那女孩就害羞的把書本塞入懷裏，一溜煙兒的跑掉了。她跑往草原那邊，攀到正在悠悠哉的啃著青草的牛背上，走向雜樹林那邊的草原上去了。她那副天真爛漫的樣子，不由得令我笑將出來。

我再度跳進池塘裏游泳，心想，難得有這麼孜孜不倦的女孩，一面爬上對岸，只見她騎在一面吃草，一面漫步的牛背上，一心一意的看書。

那以後，每天碰面的時候，我總是親切的同她攀談，她於是逐漸習慣下來，也就不再跑開了。後來她告訴了她的名字，又說小學三年級下學期，當她父親要她停學在家照管水牛的時候，她曾經悲傷的哭過。

「爲什麼要妳停學呢？妳父親也未免太不明事理了……。」

我說這話原是想安慰她的，她卻噙起眼淚說：「不，我父親才不是不明事理呢。他要我停學的時候，他自己也哭了。是因爲我媽死了，沒有人照管牛了嘛。」

「妳母親過世了？那可真慘了，那可真慘了！」我重複著說。

由於阿玉眼看著就要哭出來，看著她那張臉龐，我也禁不住感到悲傷，只得別過臉去。

之後的一個多禮拜當中，我們每天都離開大夥兒，在樹底下天南地北的閒聊。她雖然只有十二歲，卻很能記得家裏發生過的大小事情，且儼然以一副大人的口氣敘述給我聽。她告訴我，她父親爲了避免地主收回佃耕地，只好被迫和其他的佃農競相哄抬地租，使得今年吃了個大虧損，把全部的收成統統繳給地主之後還差上兩石的稻穀，而爲了無法繳納那兩石稻穀，地主反而要收回佃耕地，她也告訴了我當客運公司

的公共汽車通車之後的道路修補工作，以及建造××××工程時候的××××的苦況①。

「這個就是那時候留下來的！」她歎口氣，給我看了看大腿上的傷痕，但緊接著又羞怯的用滿是補釘的褲筒遮住。她精神可嘉的表示，她準備努力讀書，以安慰她可憐的父親，因而那以後我便盡可能不去打擾她讀書，同時，自己也把書本帶來閱讀。遇到她有不懂的地方，就替她詳加解釋。她輟學以後也不過只過了一年的樣子，如今的卻是五年級的課本。據她說，在校時候每學期都拿第一名，而她的確也是個領悟力強而又記性好的女孩子。書本是從鄰家的小朋友那裏借來的，因為買不起筆記簿和鉛筆，只得撿些堅硬的地面，用小樹枝默寫或演算算術。我把弟弟看過的小學四五年級的舊雜誌拿來送給她，她也不知有多快樂的翻閱著，然後把我寂寞的撇在一邊，沉迷的讀下去。

不久，阿玉忽然不再到山腳下來了。接連兩天不見她的人，令我非常擔心，便於歸途中造訪她的家。她家座落於小部落靠左的地方。整幢屋子就像要倚靠到竹叢上去一般的傾斜著。茅草屋頂上殘留著這次的颱風肆虐過的痕跡。想是抽空整修的吧，屋頂的三分之一覆蓋著甘蔗葉，上面用竹劈子鎮壓著。前院不見一個人，我於是繞到後院去，發現阿玉在屋簷下像個家庭主婦那樣，一會兒煮煮地瓜稀飯，一會兒餵豬的忙碌著。看到了我，她笑笑，但緊接著又現出悲傷的樣子：「您來了。」說著遞過來一張已經開始搖幌的椅子。

「爸爸呢？」

「築路去了。」她一面回答，一面忙著呼呼的吹火，接著又奔到嗚嗚嗚嗚叫的小豬那邊去餵牠們。

她所謂的「築路去了」，乃是指著整修道路的××××而言。豬圈隔壁好像就是牛欄，却不見水牛的影

子。我走近豬圈，問道：「這幾天怎麼沒有到水塘那邊去放牛？」

「水牛賣掉了。」

「怎麼連水牛也賣掉了？」

「因為我們繳不出佃租，不繳的話，放租地就會給收回去……。」說著說著，她終於哭了出來。

「唔！」

我很感悲哀。想起了幾天前在報紙上看到的標題「水牛的輸出」那篇報導。報上說，數以千計的水牛替代毛豬往華南輸出，代表了產業的發展，但直到此刻，我才明白過來，要從一向只把水牛當作耕牛飼養的臺灣輸出那麼多的水牛，不僅談不上產業的發展，反而只把疲敝已極的農村情況，真實的反映出來罷了。

這時，阿玉的父親大喘著氣走了進來，把手裏的鋤頭扔到一邊去。

他眼看著就要倒下去的樣子。阿玉連忙用臉盆打來熱水，送到父親跟前去。天已經完全黑了下來。我的內心一片暗然。她父親帶著納悶的神情不住的打量我，我只好告辭而歸。我走在路上，不由得陷入深思裏，尋思著如何幫助被打入溝渠的這棵幼芽，獲得一個茁長的機會。

第二天起，我不再到水塘去游泳。一想到那父女倆的慘況，再喜愛的游泳，也變毫無樂趣，那片幽美秀麗的池光山色，也不再令我感到快樂了。我一整天躺在床上左思右想，卻絲毫想不出辦法來。到了下午，由於躺著很無聊，便起來在院子裏轉來轉去，人就是沒辦法安靜下來。

我把毛巾纏上脖頸走向水塘。山光水色優美如昨，但那份怡人的幽靜，這天卻令我感到深沉的寂寞。

我在堤岸上來回徬徨：始終打不起下水游泳的興頭。不一會兒我覺得頭痛起來了，便取下纏在脖頸上的毛

巾，箍著綁在頭上，走向放牛的孩童們正在歇息的芒果樹下。平時總是學著賭博，聾鬧個不停的村童們，今天似也顯得有幾分落寞。淘氣大王阿明直挺挺的躺在草地上，也有兩三張熟面孔不見在場，其他的孩童則壓根兒忘了賭博那回事那樣，有的傻愣愣的坐著，有的則歪躺在那裏。

爲了排遣自己內心的寂寞，我搖醒了淘氣大王阿明：「喲，你們今天可真老實啊。」

阿明張開眼睛望了望我，但立刻又閉上眼睛躺了下去。我益感寂寞的站了起來，胡亂的走來走去，望望草原那邊，就連水牛都彷彿不勝寂寞的在那裏吃著草。這真是奇怪了，我納悶的看著，終於驚訝的發現了那些水牛顯得落寞的原因。原來平時比黃牛的數目多得多的水牛，這天變得少多了。悠遊漫步的水牛，只要數量多，總會給人一種很熱鬧的感覺，如今突然減少，儘管牠們的活動並沒有變化，卻給人一絲落寞的悵。

「這些孩子也算是被搶走了他們的好玩伴水牛了。」我直覺的感覺著：「這麼一來，村子裏可就慘啦。」陡然之間，同眾多的知心好友死別了的那種劇心的寂寞，從心底裏侵襲上來。

我無法再待下去，連忙逃回家裏。然而，等候在家裏的，並不是可以安慰我的事物。這樁事在我的內心種下了反抗的種子。而無以排遣的我這份反抗心，又使得我更加的寂寞，更加的痛苦。我坐立難安的奔回自己的房裏，但內心的苦惱卻只有越來越甚。正如被拐子硬逼著同所愛的人們生離了的人，被關在暴風雨中的山上小屋那樣，我同時經歷了不安、寂寞、和憤怒。原來，我父親把阿玉弄到家裏來當作丫環，作爲抵押，阿玉的父親爲張羅要償還給地主的兩石稻穀錢，和爲了能夠繼續承租下去而作的其他種種準備，需要一筆五十圓的整錢。單是這樣的話，倒沒什麼，壞就壞在父親經常把這一類的小姑娘買回家裏來，到

了那些女孩長大到十五六歲的時候，便奪去她們的貞操，使她們變成他自己的小妾。家裏現有的三個小妾就是這麼來的。我咬緊牙關，在床上輾轉的忍受著痛苦的煎熬。因為我曉得阿玉的父親不太可能有張羅到五十圓這筆整錢，叫自己的女兒恢復自由的一天。那末，阿玉已經就等於被我父親買回來做小妾了。

——《羊頭集》（臺北：輝煌出版社，一九七六年十月）

——劉慕沙譯

——清水賢一郎、彭小妍校訂

註① 日文版兩處各刪了四個字，此處以××表示之。以下亦同。

蕃仔鷄

晝休みのポーが鳴つても誰も騒がなかつた。

TW 鐵工場の職工連の顔は、冬の基隆のやうに陰鬱だつた。

「誰も彼も、全工場の職工が、残つたピールのやうに氣が抜けてゐた。知覺神經を失つたものゝやに、
たゞ茫然としてゐた。お晝の辨當も、今日は砂を噛むやうな苦み走しつた顔付で呑み込んでゐた。食事中にきまつて出るわい談もきり出すものはなかつた。講古（講談）グループもちり／＼ばらく／＼になつて、今日の語り手は何處へ行つたのやら見えなかつた。

曾つてはいやががつて便所に隠れるものを迄、皆でわいわい騒いで、構はずに猫をつかまへる時のやうに耳をひつぱつてつれて來るのであつたが、今日は誰もそれを忘れたやうにむつつりしてゐた。

數ヶ月前の×××××のピラ事件後より、職工達に對する優遇として會社が特に身を入れて獎勵したテニスや將棋俱樂部やその他色んな勝負事も、昨日迄は大變盛んだつたが、今日の晝休みに人は人の子一人現れなかつた。テニスコートには鳩が呑氣さうにたはむれてゐるし、將棋俱樂部にはバンバン駒を打つ者や、「君！」と言ふ叫びや、應援する者の騒ぎのかはりに、蚊のブン／＼言ふうなり聲や、横になつ

た大男のため息ばかりが聞えた。ゴバンは隅の方に片づけられた儘、誰も手をつけやうとはしなかつた。この暑い南國の晝ざかりに、誰も窓を開けやうとはしないで大きく汗をかいて横になつてゐた。その汗の滴が額からこめかみを通つて耳の裏から首に流れても誰もそれを拭きとらうとはしなかつた。皆の衆は長年の疲労が一時に來たやうに凋れかゝつてゐた。

さうして就業のサイレンが鳴つたのであるが、誰もこの休みに未練を残すやうなことはなかつた。勿論元氣よく職場につくものもなかつた。皆はゾロリくと、屠殺場に迫はれる羊のやうに、ボンヤリ動いて行つた。

旋盤部の明達も此の空氣から脱れることは出来なかつた。

彼はテニスの選手で、何時かの試合には××鐵道工場を散々負かしてTW鐵工場の意氣を示したゞけに、テニスは大好きで、何時もだと二分間位で辨當を平げて、ラケットを手にして意氣揚々とコートに姿を見せるのであつたが、今日は晝休みの辨當も食はないで工場の軒下に腰かけ、工場の壁にもたれて目を閉ぢて沈思黙想に耽つてゐた。就業のサイレンを聞いても暫く目を開けないでゐたが、皆が工場に入るゾロリゾロリとした足音が聞えなくなつた時、始めて大きな溜息と共に立ち上つて運動家には凡そ不似合のノツソリとした足どりで自分の持場に歩いて行つたのである。

旋盤にベルトをかける時も、彼は夢を見てゐるやうなウツロの目をしてゐたが、ピシヤツとベルトがかゝつて機械が廻轉し始めた時は、ハツとして飛び上つたのであつた。

曾つて臺灣人職工ばかりが三十八名解雇された時にも數日間こんな空氣に支配されたことがあつたが、その時は少數の日本人職工が凱戰兵士のやうな氣持で、寧ろ平常以上に騒ぎ廻つてテニスコートや將棋俱樂部を賑はしたのであつたが、今度と言ふ今度は、昨日の發表で、日本人職工も臺灣人職工も平等に半失業を宣告されたものだから、皆が皆豆鐵砲を食つた鳩のやうにポカンとしてしまつたのであつた。

最もいゝところで日本人職工の二圓、臺灣人職工の一圓三十錢、最低では日本人七十錢、臺灣人三十錢の日給でもつて今迄だつて時たまの夜業でうめ合して不足勝ちな生活をして來たのであつた彼等にして見れば、來月一日から毎週の日曜、火曜、木曜を休まされると言ふ昨日の發表は、確かに恐しいことに違ひなかつた。それに夜業もなくなるので、全職工の収入は、三分の一に減らされるわけになるのであるから、彼等の生活にとつては大恐慌である。直ちに飯の問題だ。親に飯を食はして貰つてゐる少年工達には、注文した靴のことで煩悶して居るものもありポロクになつた作業服で悩んでゐる呑氣者もあつたが、彼等に飯を食はず親達に、「ナベと碗をやるから自分で飯を食へ」と言ひ渡されて泣き出すものもあつた。親が子を愛し子が親を愛する爲めには、抱き合つて餓えなければならぬのであつた。

ピシヤツとベルトがかゝつた時明達ははつとしたが、機械のリズムが平常に歸ると、彼は又昨夜の夢を見つゞけた。妻が早速腹の子供を墮胎して、早く又蕃仔鷄（日本人の女中）になつて呉れるといゝが

な—と考へるのであつたが、その後から直ぐ子供が可憐さうに思はれて胸をさいなまれるのであつた。何時もは樂々と持ち上げた車輪を、明達は旋盤に取付けやうとして幾度も取り落した。彼は手が顫え出して、どうしてもうまい工合にそれを旋盤臺に取付けることが出来なかつた。終には眞黒によごれた顔を、額から汗が眉毛を越して目に入つたので彼は膝で車輪を支へなければならなかつた。この時「兄さん大變だ——」と言ふ弟の聲が耳に入つたので、彼は車輪を下して大きな吐息をしながら振り返つた。弟は彼の裾をひつぱつて「大變だ——兄さん」と繰り返した。彼は首にまきつけた眞黒に汚れたタオルで顔を拭いて、弟に引張られながら、「どうした——？」と聞いた。

「嫂が首を吊つたんだ！わーん」

と十二になつた弟は叫んで泣き出した。これを聞くと機械を止めるのも忘れて、明達は裾をつかまへてゐる弟を振り切つて驅け出した。弟がわーん／＼泣いて追つ驅けて來るのも構はずに彼は走つた。驅けながら、

「あゝ！ あゝ！」

と言つて息を吐いた。彼は自責の念に驅られて泣くにも泣けなかつた。助かるものなら助けてやりたと言ふのが彼の心からの氣持だつた。いや助けると言ふ生易しい氣持からではなくて愛して居る妻を死なした彼は自分の身體の半分を切り落されたやうに痛かつた。それを喰ひ止めたかつたのだ。溺れかゝつたものゝやうに彼は走りながら心のなかでもがいた。この氣持が焦慮となり、彼は門衛も構はず、韋駄天走りに家に向つて突つ走つた。

明達の妻素珠は蕃仔鶏である。と言ふのは内地人（日本人）の女中である。彼女は十三の時から雇はれて行つて今年十八。足かけ五ヶ年間に務め上げた譯であつた。彼女が明達と一緒にやつたのは昨年のこと、それも臺灣の労働者には非常に珍らしい結婚形式であつた。素珠が菓子屋の旦那である主人と一緒に明達等のテニス試合を見てゐて、その勇姿に惚れ込んだと言ふのである。

それから一週間後には彼女は明達の妻となつてゐた。勿論この間には色々通俗戀愛小説に見られるやうなラブシーンがあつたが、それを彼女は活動寫眞で習つたと言ふから、私が下手に言ひ廻すよりも、諸君が映畫で見たラブ・シーンを想像した方が手取り早くもあり、正確でもあらう。

たゞ此處で言つておかなければならぬことは、彼女が明達と結婚した時は、已に一と月月經を見なかつたと言ふことである。

彼等が結婚した後も彼女は以前と同じやうにその菓子屋に通勤した。彼女は度々菓子屋をやめると言つたが、明達は何時もまあくもう一寸我慢して呉れと言つた。彼が彼女と結婚する時に明達は素珠の親に聘金三百圓也をやらなければならず、それだけの金はどうしても出来なかつたので、百圓だけ先によつて、あと二百圓は月賦にすると言ふことに決めたので、素珠が働かなくては、聘金の月賦は拂へなくなるのであつた。こんな譯で、素珠は蕃仔鶏をよすことが出来なかつたが、時々工合が悪いと言つては菓子屋を休んだ。が、休むと必ず菓子屋の小僧がやつて来て、主人に用があるから、夕方からでもいゝが一寸顔を出せと言ふ命令を傳へるのであつた。菓子屋の旦那に、言ふことを聞かなければ總べてを

曝露するとおどかさされてゐるので、いや／＼ながら、素珠は夕食が済むと菓子屋に顔を出すのであつた。さうして一時間後には歸されるが、何時も疲れ切つて元氣がなかつた。家に歸つて来て、明達が居る時は、非常に苦しきさうな微笑で應待するが、明達が夜業でもしてゐて未だ歸つて來ない時などは、何時もその儘部屋に入つて、大きな溜息と共にボタンと竹の寢床に身を投げるのであつた。「身投げの眞似はよせ！」と隣りの爺さんにその度毎に怒鳴られるのであつたが、彼女には一寸も聞えなかつた。

この場合、明達が夜業を終へて九時十時たまには十二時を過ぎて歸つて來ても、彼女は涙のにじんだ空の目を見開いた儘ボンヤリと寝入りもしないで横になつてゐるのであつた。

「どうしたんだ?……」

いくら聞いてもじつとした儘で、見向きもしなければ動かうともしないのであつた。

明達は疲れも作業服を脱ぐことも忘れて、彼女を抱き起して唇を押しつけ、それから無理に笑つて、

「務めるマユのがそんなに苦しかつたらもう一と月だけ我慢して呉れよ。さうすれば、残りを私の手で何とかするから——な!いゝでせう?……」と言ふ。残りと言ふのは無論聘金の残りと言ふのだ。それから眞黒なタオルで素珠の涙を拭いて、もう一度唇を押しつけて、立ち上りながら、

「ハハハ……」と笑ふのであつた。誰にも聞きわけられる空虚な笑聲であつた。少しばかり機械に關係する自然科学を噛ちつたお蔭で來世に希望をつなぐことも出來なければ架空の夢を抱くことも出來ず、一歩々々攻め立てられて來た彼は、こうしてでも胸に溜つた空氣を吐き出さずには我慢が出來なかつたのであつた。それから思ひついたやうに作業服を脱ぎかけて、再び素珠の前に來て、彼女の大きな

腹をなでながら「大丈夫でせう?……もう一と月……ハツハツハ……」とその顔をのぞきながら笑ふのであつた。

夫のこのスポーツ・マン的な愚直な様子を見ると、素珠は自責で胸を痛めたが、一方ではこれで却つていゝとも考へて「でも危ないわ!」と消え入るやうに笑ふのみであつた。

この約束の一ヶ月が三日後に迫つて来た時、つまり昨日の夜のことであるが、明達は工場で半失業を言ひ渡されて、凋げ切つて歸つて来たのであつた。彼は素珠に言はうか言ふまいかと散々頭を悩ましたが、自分の半失業の上に、妻が約束通り三日後から菓子屋を止めてしまふと言ふことは、何と言つても容易ならぬ問題だつたので竹の寢床にフウ／＼息を吐いて横たはりながら思案に暮れた。

九時頃素珠が歸つて来た。彼女は家に入る前に一寸立ち止つて、ペツ／＼と唾を吐いてから袖口で口唇を亂暴に拭きながら——もう三日であの蕃仔から脱れられる——と考へると悲しい中にも喜びがこみ上げて来るのであつた。が、やがて世に出る子供があひの子で、それを愚直な夫が自分の子と思ひ込んで居るのを考へると苦痛がひし／＼と迫つて来た。

……仕方ないわ! 無理に押さへつけられたもの……誰が好んで蕃仔鶏などになるものか! これから正しく生きればいゝわ……

と言分(ツマ)で言ひ譯もし、更生の意氣で無理に痛める胸を押へて部屋に入つた。

足音を聞きつけると明達はつと立ち上がつて来て素珠を抱きついた。あれやこれやの考へでボンヤリ

してゐた素珠は、

「アレツ！」と悲鳴をあげたが、相手が明達と知ると

「まあ！ いやだわ！ 驚かして！」と睨みつけた。

「ホラ！ こんなにドキ／＼してるわ！」

と明達の手を自分の胸に持つて來た。何時もだと明達は序にそのふわ／＼とふくらんだ乳房をギユツと握つて

「ワツハツハ……」と蠻聲を張り上げて笑ふのであるが、この時はだるさうに素珠が手を離すと、パタリと彼の手も胸から落ちた。

何時もと違ふことに感づいて、素珠はげ／＼んな顔して彼の顔を見つめながら、「どうしたの？……」と聞いた。

明達は両手をだらりと下げて、首をうなだれた儘答へることが出来なかつた。

「どうしたのよ！……」

素珠は両手で彼の顔を持ち上げて、

「ねえ！ 心配だから教へてよ！ ねえ！」と繰返した。實際素珠には多くの心配があつた。菓子屋の主人との關係の曝れることも怖いし、又それから脱れられなくなりはないかと言ふことも心配だつた。

「大變だよ——」

明達は力なくつぶやいた。

素珠はハツとして、

「何が大變？ ねえ！ 何が？……」

とせき込んだ。

「工場だよ。來月から毎週三日間の休みになるのだよ。これ迄夜業を入れて一ヶ月四十圓のところ、これから十七八圓位になつてしまふのだよ。」

明達は素珠の顔を見ることが出来なくて下を向かうとしたが、素珠の両手で押へられてゐるので、その儘目をつむつてこう言つた。

これだけ聞くと、素珠は兩手を明達の顔から離してバタンと寢床に身を投げた。明達がその大きい腹の中の子供の胎動が止りはしないかと心配して早速手を當て、見た位、彼女は亂暴に身を投げた。

それから翌朝迄明達は時々立つて素珠の涙を拭いたり大きいお腹に手を當て、見たりしてはホツとして再び横になるのであるが、とう／＼朝迄一睡もしなかつた。

愈々出勤の時間になつて、明達が

「さあ——心配するなよ！ なんとかいゝ考へも出るからな——安心しなよ！」

と慰めて、朝飯も食はず、お辨當も持たずに工場に出たのであつたが、仲々いゝ考へは浮ばなかつた。晝休みの沈思黙想もこの續きであつた。旋盤に手をかけて見る夢も二（マ）の續きであつた。さうして總べての夢は弟に呼び醒されたのであつた。

流石のスポーツ・マンも家近く迄驅けて來た時には息が切れさうになつてハ―ハ―言つた。

家の前には人が一杯たかつてゐた。彼は夢中で後の家の中を覗いてゐる人々を押しつけて、子供の足を踏んで泣かしたのも分らずに家の中にとび込んだ。彼の部屋の戸は中から閉されて、その戸をこじ開けやうと隣りの人達が汗だくくで騒いでゐた。明達の母は、素珠が自分の孫を道連れにしたことを罵つたり泣きわめいたりしてゐたが、明達が歸つて來たのを見ると言ひ譯がましく

「今朝起さうとしたらさ、苦しいから休まして呉れと言つてさ！」などと言つたが、明達は聞かうともせずに

「除け！ 除け！」

と人々を追ひ散らして、ドン／＼と足で戸を踏み壞して驅け込んだ。その爲めに足に傷つけて血がタラリ／＼と落ちて居るのも知らずに、梁にぶらさがつた妻に抱きつき、繩をほどこいて屍體を床に移した。妻の身體は已に冷くなつてゐた。舌を噛んで目を吊り上げたその顔は、今にも敵に躍りかゝらうとする形相であつた。暫くして思ひ出したやうに明達は手をその大きな腹に當てゝ見た。彼は妻の屍體の横に腰掛けてフヌフヌ子供やうに泣いた。却仔婆さんが手まねで戸外の人達にこの様子を傳へたので見物人は皆自分の目に手をやつて涙を押へた。或るものは今にも泣き出しさうな顔をして急いで自分の家に逃げ歸つて行くのであつた。淫賣の腰仔は、コツテリと塗つた顔を臺なしに泣いてゐた。(了)

——〔文學案内〕第二卷第六號（一九三六年六月；昭和十一年，東京）

蕃仔雞

午間休息的汽笛聲雖然響了，然而卻不見騷動。

TW鐵工廠員工們的臉，好比冬天基隆的天氣般地陰霾。

整個工廠的員工都像是洩了氣的杯底啤酒，失去知覺般地，只是茫茫然。中午的飯盒，吃起來一臉苦楚的模樣，像是嚼食砂礫般地難以下嚥。連平日吃飯時一定出現的淫猥之談也聽不到了，講古的一羣也只剩三三兩兩，講故事的人，今天也不見蹤影。

平常因厭惡講古而逃到廁所裏去的人，大家一定吵嚷著，不管三七二十一地有如抓小貓般，揪著他們的耳朵出來；但是，今天無論是誰都像忘了似的，緊繃著臉。

從幾個月前發生的×××××傳單事件以來，爲了員工們的福利，公司特別熱衷於獎勵網球及象棋俱樂部，或是其他各種比賽。昨天爲止這些活動還非常盛行，然而今天的午間休息裏，卻連一個人影也看不見。網球場上，鴿子悠閒地嬉戲著，往常象棋俱樂部裏傳來的「邦——」打出象棋的聲音，與「將軍！」的吶喊聲，還有作壁上觀者的嘈雜，如今都被蚊子「嗡嗡——」的聲音與橫臥着的大男人的歎息取代了。此刻，棋盤原封不動地置於角落上，誰也不想要去碰它。在南國，這夏日炎炎的正午裏，誰也不想去打鬧

窗戶，滿頭大汗地橫臥著，汗水從額頭流到鬢角，從耳邊流到頸子上，但是誰也不想擦拭它，大家像是長年累積的疲勞一時湧到似地，癱瘓了下來。

動工的汽笛響了，可是誰也沒有對午間休息存有絲毫的眷念，當然也並非很樂意地去上工。大夥陸續地有如被趕入屠宰場內待宰的羔羊般，心不在焉地向前移動。

車床部門的明達也不能擺脫這般沈悶的氣氛。

他是網球選手，曾在比賽中把××鐵路工廠打得落花流水，表現了TW鐵工廠的神氣，難怪他酷愛網球，平常只需二分鐘就把便當吃光，拿著球拍得意揚揚地出現在球場上。但是，今天中午的便當卻也沒吃，就坐在工廠的屋簷下，靠在工廠的牆壁上閉著眼睛，陷入在沈思中。雖然聽到動工的汽笛聲，卻連眼睛也沒睜開，到了大家魚貫走入工廠的腳步聲聽不到時，才大嘆一口氣站了起來，完全不像運動家似的，蹣跚慢騰騰的腳步走向自己的工作崗位。

把傳動帶掛上旋轉盤時，他露出如作夢般空洞的眼神。「嘎——」一聲掛上傳動帶的機械開始轉動時，他吃驚地跳了起來。

先前只有三十八個臺灣員工被解雇時，這種氣氛持續了幾天。那時，少數的日本員工就像凱旋的戰士，比平常更喧囂地使網球場及象棋俱樂部熱鬧起來。然而，這一次，據昨天的發表，日本員工也和臺灣員工一樣被宣告半失業。因此大家像被彈弓打中的鴿子般地愣住了。

在最佳的情況下，日本員工一天可拿二圓新餉，台灣員工一圓三角，最差的時候，日本人七角，臺灣人三角。可是對於一直到目前偶而以打夜工來彌補，却仍常感不足家計的他們來說，昨日發表的從下個月

一日開始，每個禮拜的星期日、星期二、四公休的消息，的確是使他們惶恐的。因為如果連夜班也做不成的話，全體員工的收入就要減少三分之一。對於他們的生活是一大恐慌，直接關係到吃飯問題，在靠著雙親吃飯的少年員工裡，有人因訂做了鞋子而發愁，有人雖苦於工作服已破爛不堪，倒也還算樂天。但也有人哭了，因為向來扶養他們的雙親們吩咐說：「給你鍋子和碗，靠自己吃飯去吧！」爲了雙親要疼愛子女，子女也要孝順雙親，就不得不相擁在一起接餓。

「嘎——」一聲裝上皮帶時，明達嚇了一跳，但是機器的節奏一恢復平常，他就又繼續著昨夜的夢。他想要是妻子馬上打掉孩子，早點再去當蕃仔雞（日本人的下女）該多好。但馬上又覺得孩子可憐而於心不忍。明達將平素毫不費力就提上來的車輪，要安裝到旋轉盤上，卻幾次都掉落下來。他的手顫抖著，始終無法順利地把車輪安裝到旋盤臺上。最後搞得黝黑的髒臉上，由額角冒出的汗水經眉毛流入眼睛裏，所以他不得不用膝蓋來支撐著車輪。就在這時，「阿兄！不好了！」弟弟的聲音傳入耳朵，所以他就把車輪放了下來，邊大大地吐着氣回過頭來看。弟弟扯著他的衣角，反覆地嚷：「不好了！阿兄！」他用纏在脖子上的烏黑毛巾抹著臉，一邊被弟弟拖著問道：「怎麼啦！」

「阿嫂上吊了！哇」

十二歲的弟弟哭叫了起來。明達一聽，連機器也忘了關，把抓著他衣擺的弟弟甩開，奔了出去。他不顧在後面哇哇地啼哭着追趕過來的弟弟。他一面奔跑一面「啊——啊——」地喘息著。他被自疚的意念所驅使，想哭，卻哭不出來。他衷心感到若能救活她，就得儘力拯救她。不，說要救活，其實心情並不是那麼簡單。讓愛妻尋死的他，就像自己的半個身子被砍掉似的心痛。他要阻止那悲劇。心急得像將要溺斃的人似地，

他不顧看門的守衛，飛也似的往回家的路上狂奔。

明達的妻子——素珠是蕃仔雞，所謂蕃仔雞就是日本人的下女。她十三歲開始受雇，今年十八已工作了五年。她與明達在一起，是去年的事，那也是在臺灣的勞工中非常少有的結婚形式。據說是素珠與餅店的老闆一起看明達他們的網球比賽，而迷上他那種英姿的。

一個禮拜後，她就成了明達的妻子。當然，這當中有著各種通俗戀愛小說裏所能看到的戀愛場面，據她說是從電影上學來的，所以，與其讓我拙劣地描繪，不如讓諸位去想像在電影上看過的戀愛鏡頭，比較直截了當，也正確吧。

在這裡必須一提的是，她跟明達結婚時，已有一個月不見月事啦。

他們結婚後，她也和往常一樣地，在那家餅店工作，她老是說要辭掉工作，但是明達卻一直要求她再忍耐一段時間。明達要跟她結婚時，必須付給素珠雙親三百元聘金。如此龐大的數目，說什麼也湊不上來，所以只先付了一百塊，爾後的二百塊，說定按月付給，因此，素珠不工作的話，就無法按月繳付聘金。所以，素珠不能辭去下女的工作，常藉故身體不舒服而不去餅店。但是每一告假，餅店的小伙計就來轉達老板的命令：說是老板有事，即使傍晚才來也無所謂，要露一下臉。因為被威脅着如不聽從餅店老板的話，就要暴露一切；所以雖然心不甘情不願，素珠也就在吃過晚飯後出現在餅店裏。在一小時後就讓她回去，但是老是筋疲力盡，沒精打采。而回到家裏，明達在的時候，就以非常痛苦般的笑臉陪着他，假如碰到明達上夜班尚未回來的時候，就老是逕自進入房裏，隨著長長的歎息！叭——地撲身竹床上。「別模仿那跳水自殺的樣子吧！」每次都被隔壁的老伯斥責，但是她一點也聽不到。

這樣的時候，明達上完夜工後，即使在九點或十點，偶而過十二點左右回來，她仍舊睜著哭乾了的淚眼，恍恍惚惚地沒有一點睡意地橫躺在那兒。

「怎麼啦——」

儘管問了幾次，她依然發楞著，既不回過頭來看，也不想動一下。

明達忘了勞累也忘了脫工作服，抱起她，把嘴唇壓上去，然後牽強地笑著說：

「如果工作真是那麼苦，請再忍耐一個月吧！這麼一來，剩下的就讓我來想辦法吧！好嗎？……」

所謂剩下的，當然說的是聘金的不足數。之後，用烏黑的毛巾拭去素珠的淚水，再一度吻她，邊站起來邊笑：

「哈——哈——哈」誰都可以聽出是空虛的笑聲。既然啃了一點關於機械的自然科學，反而不能對未來抱任何希望，不能懷抱烏有的夢想，他承受的壓力越來越沉重，如果不這樣吐出憋在心胸的氣，實在沒法子再忍耐下去了。然後遽然想起似的，邊脫着工作服，又來到素珠身邊，撫摸著鼓起的肚皮，一面窺視著她的臉，邊笑著說：「不要緊吧？再一個月……哈——哈——哈——」。

看到丈夫運動家般愚直的樣子，素珠雖因自責而痛心，一方面卻也往好處想，惟有頹然地嗔笑著說：「可是危險哪——」

在約定好的一個月即將到來的三天前，也就是昨天晚上發生的事。明達在工場被宣告即將半失業而垂頭喪氣回來。他不知道該不該對素珠提起，正為此苦惱著，想起自己半失業，加上妻子照約定在三天後就辭去餅店的工作，說什麼也不是件簡單的問題，所以他橫躺在竹床上「吁——吁——」地嘆息著，沈思起來。

九點左右，素珠回來了，她在進門前，佇立了一會兒，「吓——吓——」地吐過唾液後，以袖口在嘴唇上亂揩一陣——再三天就可擺脫那蕃仔了——這麼一想，在悲感之餘，卻有一絲喜悅湧上心頭，但一想起憨直的丈夫把那不久即將出世的混血兒，一直認為是自己的孩子時，就深深地感到苦不堪言。

迫不得已的呀，硬是被逼迫的呀！……誰願意去幹下女呢！……從此能夠正當地活下去就行了……她這樣自我辯護着，懷着更生的意念，硬是壓抑心痛，進入了房間內。

一聽到腳步聲，明達一躍而起，抱住素珠，心事重重發愣着的素珠「唉呀——」地驚叫了起來，一看到是明達，就瞪了他一眼！

「啲——討厭！嚇我一跳！」

「你看——這麼撲通撲通地跳著呢！」說着把明達的手拉到自己的胸脯上。要是往常，明達就趁機抓住那酥軟鼓起的乳房：「哇——哈！哈哈——」揚起粗獷聲音笑著，但這時，素珠慵懶地一放手，他的手也吧嗒地從胸脯上落了下來。

素珠感到跟平時大不相同，露出詭異的神色，邊凝視著他問：「怎麼回事？」
明達雙手無力地垂著，儘是低著頭答不上話來。

「到底是怎麼一回事？」

素珠以雙手捧起他的頭問。

「告訴我好不好？我好擔心呢！好嗎？」

再三地追問着。事實上素珠有著許多的憂慮，惟恐跟餅店老板的關係被揭露出來，更擔心今後是否能

擺脫得了。

「不好了呀！」明達無力地嘟囔著。

「什麼不好了？噯呀！什麼嘛？……」

素珠焦急地說。

「是工廠啊！從下個月開始，每個禮拜公休三天啊！目前加上打夜工，本來一個月賺四十圓的，今後可要變成十七、八圓左右啦！」

明達不敢面對着素珠的臉，想低下頭，但因為被素珠的雙手按著，所以就閉著眼睛說話。

一聽到這裏，素珠把雙手從明達的臉龐移開，叭地撲身到床上。她如此狂暴地投身到床上，讓明達擔心她肚子裏的小孩會不會停止胎動，馬上用手試探了一下。

從那時起，一直到隔天早上，明達時常爬起來，或拭去素珠的淚水，或用手觸摸著那大肚子，之後，才鬆一口氣躺了下去，終於徹夜未眠。

終於到了要上班的時候。

「喂——不要擔心哪，總會想個好辦法的——放心好了！」

明達這般地安慰她，早飯也沒吃，連便當也沒帶，就到工廠去了，但是辦法可卻不容易想出來。午間休息時，也一直思索著這個問題。連手按在車床上做夢時也還是思索著，而一切的夢都被弟弟給喚醒了。

即使運動家的他跑到家附近時，也上氣不接下氣地呼呼地喘着。

家裏門前圍滿着人。他不顧一切地從後面推開窺視家裡的人羣，也沒察覺到踏著了小孩的腳把他弄哭

了，就衝了進去。他的房間門從裡面鎖起來，鄰居的人羣硬要撬開那扇門，而滿頭大汗地喧嚷著。明達的母親正一面謾罵著素珠把她的孫兒也一起帶走，一面不停地號淘大哭，但一看到明達回來，就分辯地說：「今早要叫她起床，她就說不舒服，讓她休息！」

但明達卻一點都不想聽似地，「走開！走開！」驅散人羣，咚咚地用腳蹬壞門戶衝了進去。連傷了腳，血流如注，他也沒有察覺，抱著懸在樑上的妻子，解開了繩子，把屍體移到床上去。妻子的身體已經變得僵冷了，咬著舌頭，白眼上翻的臉，好像就要撲向敵人的可怕神色。過了一會兒，倏然想起來似地，明達伸手按在那大肚子上試探了一下。他坐在妻子的屍體邊，嗚——嗚——地有若小孩般地哭泣著，由於卻仔婆打手勢給屋外圍觀的人羣，傳達了這個情況，圍觀的人也都拿手壓住眼淚，有的甚至臉色盎然欲泣地逃回家去。賣春的腰仔也哭得弄壞了濃粧艷抹的臉蛋啦。

——手稿，蕭寧譯①

——清水賢一郎、彭小妍校訂

註① 楊逵手稿資料中有〈番仔雞〉之中文譯稿，譯者為蕭寧，從未發表過。